



# ジョージ・エリオットのリアリズムと道德観——シンパシーに乏しい人間の描写からの考察——

石井, 昌子

---

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2024-03-25

(Date of Publication)

2025-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8796号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100490021>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



# 博士論文

ジョージ・エリオットのリアリズムと道德観  
——シンパシーに乏しい人間の描写からの考察——

令和6年1月

神戸大学大学院国際文化学研究科

石井昌子

## 目次

### 序論

1. 本論文の目的と方法 ..... 1
2. エリオットの道德観とリアリズムの関係に関する先行研究と本論文の意義 ..... 3
3. 本論文の構成 ..... 6

### 第1章 エリオットのリアリズム

1. 小説の起源と「形式的リアリズム」 ..... 9
  2. リアリズムと写実 ..... 11
  3. 19世紀イギリスのリアリズム小説の特色 ..... 13
  4. エリオットの小説とポスト構造主義批評 ..... 21
- 結論 ..... 29

### 第2章 エリオットの道德観とシンパシー

——「ジャネットの悔悟」における比喩表現を例として

1. エリオットの道德観とシンパシー ..... 32
  2. 道德とシンパシーの一般的関係 ..... 35
  3. 「ジャネットの悔悟」に見るエリオットの比喩表現を用いたリアリズムによる  
シンパシーの描き方 ..... 40
- 結論 ..... 51

### 第3章 語り手の心の鏡に映らないヘティ

——『アダム・ビード』のリアリズム再考

- 序論 ..... 53
1. ホール・ファーム時代のヘティの心理描写 ..... 61
  2. 放浪中のヘティの心理描写 ..... 69
  3. 法廷と監獄でのヘティの心理描写 ..... 77
- 結論 ..... 81

#### 第4章 洪水の結末とシンパセティックなトム

——『フロス河畔の水車場』におけるリアリズムの進展

序論.....	83
1. 洪水の場面におけるリアリズムからの逸脱.....	90
2. トムの性格描写に現れたリアリズム——シンパセティックなトム .....	103
3. トムの変貌に現れたリアリズムの進展とリアリズムからの逸脱.....	125
結論.....	132

#### 第5章 シンパシーとシンパシーの欠如の交差

——『ミドルマーチ』における道徳観の成熟とリアリズムの進展

序論.....	135
1. 中期小説におけるリアリズムの後退と進展.....	136
2. 『ミドルマーチ』のリアリズムに関する先行研究と本章の立場 .....	147
3. カゾボンの道徳的墮落 .....	152
4. ロザモンドのリドゲイトの幸福への貢献 .....	170
結論.....	187
結論 .....	192
引用文献.....	200

## 序論

### 1. 本論文の目的と方法

ジョージ・エリオット (George Eliot, 1819–80)、本名メアリ・アン・エヴァンス (Mary Anne Evans)<sup>1</sup>は、19世紀イギリスの最も完成度の高いリアリズム小説家の1人とみなされている (Morris 10)。トルストイ (Lev Nikolaevich Tolstoy, 1828–1910) は、35歳から50歳までの間に読んだ中で最も印象深かった作家のリストにエリオットを挙げている。この間に彼は、リアリズム小説の傑作である『戦争と平和』(1863–39)と『アンナ・カレーニナ』(1873–77)を書いた (Rignall, “George Eliot” 241)。

文学様式としてのリアリズムの詳しい考察は第1章で行うが、登場人物の心理や外部事情を詳細に描くことにより、物語のリアリティを生み出す手法である。登場人物の詳細な心理描写、物の詳細な描写が豊富にあることは、人生の生き生きした感覚を生み出す (Karlín, 34–35)。またリアリズム小説では、出来事が起きた年代順に記され、その因果関係が合理的に描かれる。またリアリズムは英雄ではなく平凡な人間を描く。エリオットが小説を書き始めたのは1856年9月であったが、同年7月に出版されたエッセイ「ドイツ人の生活の博物誌」 (“The Natural History of German Life,” 1856)において、「私たちは、英雄的な職人や感傷的な小作人でなく、粗野で無関心な小作人、疑い深い利己主義に凝り固まった職人に同情することを教わりたい」 (“We want to be taught to feel not for the heroic artisan or the sentimental peasant, but for the peasant in all his coarse apathy, and the artisan in all his suspicious selfishness”) (Essays 271)と述べ、むしろ短所とも思えるような性格を備えた平凡な人間の描写への志向を示している<sup>2</sup>。

小説を書き始める数週間前に書いたエッセイ「愚かな小説と女性小説家たち」 (“Silly Novels and Lady Novelists,” 1856)においても、「普通の単調な日常生活」 (the “working-day business of the world”)を描くべきことを主張した (Essays 302)。エリオ

---

<sup>1</sup> チルヴァース・コトン教区登録 (the Chilvers Coton Parish Register) はエリオットの洗礼名をメアリ・アン (Mary Anne) として記録し、エリオットの最初の手紙の署名もそうである。1837年に Mary Ann と署名し始め、1850年にマリアン (Marian) に変え、1880年に Mary Ann に戻った (Haight, *Biography* 3)。本論文でエリオットの本名が必要なときは、それぞれの時代にエリオットが好んだものを使用する。

<sup>2</sup> 本論文中の和訳は拙訳であり、()内の数字は頁、巻、章の順に並んでいる。

ットの最初の長編小説『アダム・ビード』（*Adam Bede*, 1859）の語り手は、「素朴な話を実際よりも良く見せようとせずに語ること」（“to tell my simple story without trying to make things seem better than they were”）という決意を述べている（160; bk. 2, ch. 17）<sup>3</sup>。

このようにエリオットは小説の様式としてリアリズムを採用しているが、他方、小説の内容に関して言えば、読者の登場人物に対するシンパシーを高めることを目的としている。エリオットの考えるシンパシーとは、「もがき、過ちを犯す人間であるという幅広い事実以外は、すべての点で自分と異なっている人々の痛みと喜びを想像し感じること」（“to *imagine* and to *feel* the pains and joys of those who differ from themselves in everything but the broad fact of being struggling, erring, human creatures”）である（Eliot, *Letters* 3: 111; Eliot’s emphasis）。エリオットは、前述のエッセイ「ドイツ人の生活の博物誌」の中で、「芸術は人生に最も近い。芸術は経験を広げ、私たちの仲間の人間との接触を、個人的運命の限界を超えて拡張してくれる様式である」（“Art is the nearest thing to life; it is a mode of amplifying experience and extending our contact with our fellow-men beyond the bounds of our personal lot.”）（*Essays* 271）と記している。この「我々の仲間」というのが、エリオットにおけるシンパシーを考察するうえで重要なキーワードとなる。道徳とシンパシーの関係は、18世紀にすでにアダム・スミス（Adam Smith, 1723–90）が論じているが<sup>4</sup>、エリオットは1859年7月5日付の書簡の中で、「もし芸術が人間の共感を広げないのであれば、道徳的には何もしていないことになる」（“If art does not enlarge men’s sympathies, it does nothing morally.”）と宣言している（*Letters* 3: 111）。ジョン・リグナル（John Rignall）の言葉を借りれば、エリオットにとって創作におけるリアリズムとは、多様な人々との社会的紐帯とシンパシーを強めるための「人類団結の道具」（“an instrument of human solidarity”）なのである（“Realism” 325）。

本論文「ジョージ・エリオットのリアリズムと道徳観——シンパシーに乏しい人間の描写からの考察——」は、エリオットのリアリズムの進展と道徳観の成熟を検証する方法

---

<sup>3</sup> 理想的人物や理想的状況はリアリズム小説を逸脱するという批評がある。しかし第1章第2節で説明する通り、リアリズムは現実との一致を意味しない。理想的人物や理想的状況もリアリティが感じられればリアリズム小説の範疇にある。

<sup>4</sup> 本論文は第2章第2節で、シンパシーと道徳の一般的関係をスミスの『道徳感情論』（*The Theory of Moral Sentiments*, 1759）に沿って説明する。

としてシンパシーに欠ける登場人物の描き方に焦点を当てる。エリオットのリアリズムの目的は登場人物に対する読者の理解を深めシンパシーを向上させることであるが、他方、作者の道德観のリアリズムへの影響は、シンパシーに乏しい人物の描き方に最もよく反映されると思われるからである。ここで言う道德観の成熟とは、エリオットの道德においてシンパシーを重視する態度が緩むということではなく、シンパシーを重視しつつシンパシーに乏しい人物も「我々の仲間」として包摂することを意味する。作者のシンパシーがシンパシーを感じる能力の薄い人物にも拡大される中で、リアリズムが通時的に進展することである。シンパシーに欠ける人物のシンパセティックな側面が描かれていなかったり、描かれていてもその評価がなされていなかったりする時、あるいはシンパシーに欠ける人物の精神的苦悩が描かれない時、さらにシンパシーに乏しい人物を改心させるために蓋然性の低いプロットが使われている時は、作者の道德感情がリアリズムを妨げている、換言すればリアリズムの適用される範囲が狭められていると考えられる。逆に、シンパシーに乏しい人物がシンパシーに乏しいままでも周囲の人々の幸福に役立つ場合が描かれている時には、現実らしさにおいてリアリズムは最高度に進展していると言えるであろう。そこで本論文は、エリオットのリアリズムの進展と道德観の成熟の度合いを調べる手段として、シンパシーに欠ける人物の心理描写、外部描写、及び出来事の蓋然性を分析する。

## 2. エリオットの道德観とリアリズムの関係に関する先行研究と本論文の意義

エリオットが小説を執筆したのは1856年から1876年までである。そのうちで1861年に出版された『サイラス・マーナー』(*Silas Marner*, 1861)までがリアリズム小説で、それ以降の作品は、『ミドルマーチ』(*Middlemarch*, 1871-72)も含めてリアリズム小説とは言えないという批評が、出版当初から20世紀半ばまで定説であった。例えば、レズリー・スティーブソン (Leslie Stephen, 1832-1904) は、エリオットが1880年12月に亡くなったとき、『コーンヒル・マガジン』(*The Cornhill Magazine*, 1860-1975) 1881年2月号の追悼論文において、エリオットを生存しているイギリス人の中で最も偉大な小説家と称えたが (“Obituary Article” 464)、同時に『サイラス・マーナー』までの初期作品は疑いなく天才を示しているが、その後の作品は「直接的表象から手の込んだ分析に変わっている」と言って、エリオットの良さを、彼女が若い頃慣れ親しんだ静かなイギリスの田舎の生活を描くことに限定している (“Obituary Article” 478)。こうして、エリオットの初期作品とそれ以降の作品を区別し、後者は現実世界に密着することなく分析が多すぎて、リ

アリティに欠けているという批評が、『ミドルマーチ』と『ダニエル・デロンダ』(*Daniel Deronda*, 1876)の高い人気にもかかわらず、出版当初から続く批評の主流であった(D. Carroll, “Introduction,” *Critical Heritage* 40)。

ヘンリー・ジェイムズ(Henry James, 1843–1916)は、1885年5月の『アトランティック・マンスリー』(*The Atlantic Monthly*, 1857–)に載せたジョン・ウォルター・クロス(John Walter Cross)の『エリオットの生涯』(*George Eliot’s Life: as Related in Her Letters and Journals*, 1885)の書評において、エリオットの作り出した「人間の多方面の生活の豊かで深い、巨匠の絵」を賞賛しつつも(“Cross’s *Life*” 504)、「[エリオットの]登場人物も状況も彼女の道德意識から作られたもので、観察の産物であると言うのは間接的にすぎないと我々は常に感じている」とけなしている(“Cross’s *Life*” 498)。『アダム・ビード』(1859)や『サイラス・マーナー』(1861)といった初期の作品は「自然な観察に満ちている」(“Cross’s *Life*” 500)が、『ロモラ』(*Romola*, 1862–63)、『ミドルマーチ』(1871–72)、『ダニエル・デロンダ』(1876)について、ある程度のリアリティは賞賛するが、エリオットの小説は「道德的寓話」(“a moralized fable”)であって「自由な美的感覚のある人生の欠如」、つまりリアリティの欠如があるとした(“Cross’s *Life*” 497–98)。ジェイムズのこの批判が、エリオットの小説に対する批判の定番となった(Rignall, “Realism” 332)。たとえばデイヴィッド・セシル卿(Lord David Cecil)は、エリオットの評判の壊滅的下落の原因は、彼女の荒涼とした道德観と彼女が掲げる美德の退屈さであるとしている(318–19)。セシル卿はまた、エリオットの想像力はディケンズに劣り、トルストイと比べて視野が狭いと述べている(322)。

エリオットに対する評価が明らかに回復に向かったきっかけは、1948年に出版されたF・R・リーヴィス(F. R. Leavis)の『偉大な伝統』(*The Great Tradition*)である<sup>5</sup>。リーヴィスは、小説は道德的ヴィジョンと切り離せないことを確認し、エリオットはトルストイほど超越的存在ではないが、同種の偉大さを有していると述べた(146)。リーヴィ

---

<sup>5</sup> 1919年11月20日の『タイムズ文学付録』(*The Times Literary Supplement*)のエリオット生誕100年を記念する論文において、ヴァージニア・ウルフ(Virginia Woolf, 1882–1941)(レズリー・スティーブンの娘)は、後期作品は初期作品に比べて見劣りすることなく、『ミドルマーチ』を「大人のために書かれた数少ないイギリス小説の1つ」と呼んだ(Haight, *Criticism*, 187)。しかしエリオットの評価は上がらず、1930年代前半に最低になった(Rignall, “Realism” 333)。

スは、それまで初期作品に比べてリアリズムの点で劣るとされた後期作品『ダニエル・デロンダ』の主人公の1人グウェンドレン・ハーレス (Gwendolen Harleth) の物語に、トルストイの『アンナ・カレーニナ』と同じく人間性に対する真剣な道徳的興味から生じる並外れたリアリティを見出し、道徳と芸術的知性が協同する成熟度において「トルストイの深さとリアリティ」を達成しているとした(146)<sup>6</sup>。『ミドルマーチ』に関しては、個々の登場人物の醸し出すリアリティを具体的に指摘し、「[エリオットの]天才が個人の奥深い分析に現れている」と賞賛している(77)。

それ以来、20世紀後半のポスト構造主義からの批判を除くと<sup>7</sup>、エリオットの初期作品と後期作品に同様にリアリズムを認めるのが一般的であり<sup>8</sup>、とくに『ミドルマーチ』は19世紀イギリスのリアリズム小説の傑作とみなされている。しかしどの先行研究も、シンパシーに欠ける人物は他者にとって一律に有害であると考え、作者の道徳観が彼らの心理描写や彼らの個人もしくは社会に対する影響の描写にどのように影響するかにつき、詳細に吟味することは試みなかった。

本論文は従来の見方とは異なり、シンパシーに乏しい人物が、家族や社会にとって有害で追放されるか改悔させられねばならない存在から、後期作品においてはシンパシーに乏しいままで家族をより大きな絶望から救うという肯定的価値を有する存在へ、その被害者の心理も描かれる存在へと変化していることをテキストの描写および物語の時代背景から探る。このことは初期作品から後期作品に向けてリアリズムが進展していることを意味するが、これまで見逃されてきた点である。またシンパシーに乏しい登場人物の性格の多面性や、他の人間への結果的にポジティブな影響を認めることは、シンパシーに欠ける人間も「我々の仲間」とみなすというエリオットの道徳観の理想の実現、言い換えればシンパシーの多寡により人間を明確に区別する道徳観からの脱却を意味するが、このことも指摘されたことがない。本論文は、登場人物の心理や外部事実の詳細な記述と出来事の蓋然性の高さというリアリズムの基本的要件に立ち返ってエリオット作品のリアリズムのあり

---

<sup>6</sup> リーヴィスはしかし、『ダニエル・デロンダ』のユダヤ人に関する物語は酷評している(97-102)。

<sup>7</sup> ポスト構造主義による『ミドルマーチ』のリアリズム批判とそれに対する反論、それをきっかけとしたエリオットのリアリズムの理解の深化については第1章第4節で詳しく述べる。

<sup>8</sup> エリオットの最後の小説『ダニエル・デロンダ』に関しては本章註9参照。

方を検証することにより、エリオットの道德観が次第に成熟の方向に変化していることを明らかにするという新たな試みである。シンパシーに乏しい人物に対する作者の見方を通して、エリオットの小説におけるリアリズムと道德観の密接な関係、および両者の進展を示すところに本論文の意義がある。

### 3. 本論文の構成

本論文では、以上のような観点からエリオットのリアリズムを論じるために、次のような構成をとる。

論じる作品は、短編小説「ジャネットの悔悟」(“Janet’s Repentance,” 1858)、エリオットの6編の長編小説のうち『アダム・ビード』(*Adam Bede*, 1859)、『フロス河畔の水車場』(*The Mill on the Floss*, 1860)、『ミドルマーチ』(*Middlemarch*, 1871–72)である。最後の長編小説である『ダニエル・デロンダ』(*Daniel Deronda*, 1876)は、先行研究によっても、シンパシーに乏しい登場人物に注目する本論文の立場からもリアリズムの範囲を逸脱するため、本論文では扱わない<sup>9</sup>。また中期の長編小説『ロモラ』(*Romola*, 1862–

---

<sup>9</sup> たとえば、ジリアン・ビア (Gillian Beer) は、『ダニエル・デロンダ』でエリオットは、新しい語りの構造を作り出す実験をしていると述べている (*George Eliot* 214)。ジョン・リグナルは、『ダニエル・デロンダ』の冒頭で、年代順に語るというリアリズムの常道から外れてフラッシュバックから始まる点、まだ特定されていない人物の心理を語り手が述べる点、第11章のエピグラフは「人であれ物であれ、知ることの始まりは、自分の無知の明確な概要を手に入れることである」(“The beginning of an acquaintance whether with persons or thing is definite outline for our ignorance.”) (91; bk. 2, ch. 11) と述べ、シンパシーに乏しい人物ヘンリー・グランドコート (Henligh Grandcourt) の性格は究極的に計り知れないと考えており、リアリズム小説の現実把握力に疑問符が付いている点、シンパセティックな主人公ダニエルの性格が個性に欠ける点を挙げている (“*Daniel Deronda*” 81–82)。最後の点はジョージ・レヴァイン (George Levine) も、アダム・ビードなどと異なる個性の希薄さを指摘している (*Realistic Imagination* 273)。また G・レヴァインは物語の最後でダニエルがユダヤ人国家設立を自分の使命と信じて中東に旅立つことにつき、『ダニエル・デロンダ』はリアリズムが重要視する因果関係を度外視し、「旧約聖書の理

63) と『急進主義者フィーリクス・ホルト』(*Felix Holt: The Radical*, 1866) におけるリアリズムの進展度については、『ミドルマーチ』を論じる第5章で説明する。

第1章では、まず文学におけるリアリズムとは何かを説明し、19世紀イギリス小説のリアリズムの特徴とエリオットの位置づけを確認する。次いでエリオットのリアリズム全般を否定するポスト構造主義批評とそれに対する反論、ポスト構造主義批評の克服をきっかけとしたエリオットのリアリズムに関する理解の深化を紹介する。

第2章では、エリオットのシンパシーを基礎に据えた道徳観について説明するとともに、シンパシーと道徳の一般的関係について論じる。さらに作品論の最初として、比喩を用いたリアリズムにより、いかに効果的に登場人物の苦難とシンパシーが描かれているかを、エリオットの最初の短編集所収の「ジャネットの悔悟」(1858)を取り上げて説明する。

第3章では『アダム・ビード』(1860)の主人公の1人でシンパシーに乏しいヘティ(Hetty)の心理と性格の描き方を検討する。語り手はヘティの利己的な側面は詳細に描くが、改悛やシンパシーの芽生えといったポジティブな側面の描写には消極的であることを、自由間接話法(思考)の使用などテキストの詳細な分析から新たに見出す。リアリズムが利己的な側面の描写においてのみ実現されているという不完全さは、シンパセティックな人物とそうでない人物を固定的に色分けした作者の道徳的不寛容さの結果である。

第4章では、『フロス河畔の水車場』(1860)の主人公マギー・タリヴァー(Maggie Tulliver)の兄でシンパシーに乏しいトム(Tom)の描写のリアリズムを吟味する。まず

---

想的仮説を確認することを試みている」と述べている(“Hypothesis of Reality” 27-28)。

『ダニエル・デロンダ』の2人の主人公の1人ダニエルに関する物語は、神秘主義に基づいているとして、F・R・リーヴィスらからリアリズムに疑問が呈されてきた(Shuttleworth 176)。本論文も先行研究が指摘した以上の点につき同様に考える。さらに本論文はシンパシーに乏しい人物に注目して、作者の道徳観とリアリズムの関係を論じているが、『ダニエル・デロンダ』のもう1人の主人公グウェンドレン(Gwendolen)の夫グランドコートに着目すると、彼が妻の心境を理解することは、常に彼女への冷酷な仕打ちに繋がる。本論文の扱う作品におけるエリオットの道徳観は、相手を理解することが相手に対するシンパシーを生むことを前提としている。エリオットのこの道徳観とリアリズムの関係を論じる本論文の範疇からは、『ダニエル・デロンダ』は逸脱しているのである。

先行研究の一部がリアリズムからの逸脱があるとみなす洪水の場面に着目し、これまで疑問視されてこなかったマギーの辿った航跡を具体的に検証し、かつ救出された後のトムの行動を検討することによって、プロットの蓋然性を再検討してその理由を探る。次いでこれまで大方の批評家によってシンパシーに乏しい人間とのみ考えられてきたトムの人物描写を再検討し、そのシンパセティックな側面を明らかにする。

第5章では『ミドルマーチ』(1871-72)のリアリズムを検証し、19世紀イギリスのリアリズム小説の最高傑作の1つとされる『ミドルマーチ』で見落とされてきたリアリズムについて論じる。しかし、その分析に入る前に、エリオットの中期作品である『ロモラ』(1862-63)と『急進主義者フィーリクス・ホルト』(1866)におけるリアリズムの進展度に言及する。『ロモラ』も『フィーリクス・ホルト』も、『フロス河畔の水車場』よりリアリズムにおいて後退しているが、『フィーリクス・ホルト』には『ミドルマーチ』の先駆と言える点がある。

続く第5章第2節から第4節では、『ミドルマーチ』のシンパシーに乏しいエドワード・カズボン (Edward Casaubon) とシンパセティックなドロシア (Dorothea)、シンパシーに乏しいロザモンド (Rosamond) とシンパセティックなターシャス・リドゲイト (Tertius Lydgate) の2組の夫婦に注目する。『ミドルマーチ』では、この2組の夫婦のあり方を通して、シンパシーは幸福実現のために万能ではないことが描かれていることを証明する。これは現実世界に近い出来事が描かれ、リアリティが増していることを意味する。また『アダム・ビード』や『フロス河畔の水車場』では無視されていた、シンパシーに欠ける人物が孤独や疎外感に苦しんでいる心理状態が、語り手の同情とともに詳細に描かれているという点にもリアリズムの進展が見られることを指摘する。その背後には作者の道德観の成熟がある。

このように本論文は、心理や外部事実の詳細な記述と出来事の蓋然性の高さというリアリズムの基本的要件に忠実にエリオット作品の通時的なリアリズムの進展を検証し、その背後にあるエリオットの道德観の成熟を指摘するものである。

## 第1章 エリオットのリアリズム

第1章では、まず小説の起源について述べ、リアリズムと写実の関係を説明する。次に19世紀イギリスのリアリズムの特徴を説明し、その中にエリオットを位置づける。最後にエリオットの小説のリアリズム全般を否定するポスト構造主義批評を紹介し、その克服によりエリオットの小説のリアリズムの理解が深まったことを説明する。

### 1. 小説の起源と「形式的リアリズム」

イギリスの文学史では、ダニエル・デフォー (Daniel Defoe, 1660–1731) の『ロビンソン・クルーソー』 (*Robinson Crusoe*, 1719) が最初の小説とされている。これは、主人公が無人島での28年間の生活を生き延びたという物語である。アレグザンダー・セルカーク (Alexander Selkirk, 1676–21) というスペインの商船を狙った私掠船の船員が、船長と争って無人島に置き去りにされ、そこで4年半生活した後、島に立ち寄った船に救われるという出来事が実在した。セルカークの話は、定期刊行雑誌『イングリッシュマン』 (*The Englishman*) に1713–14年に掲載された。セルカークは、自分の野性的で孤独な孤島生活を美化したが、デフォーは、語り手(クルーソー)が島で生き延びる術を詳細に記述し、社会から疎外されたきわめて危険な孤独の中で、心理的、宗教的に成長していく複雑な過程を描いた (Richetti xiv–xv)。イアン・ワット (Ian Watt) は、デフォー以外に、サミュエル・リチャードソン (Samuel Richardson, 1689–1761)、ヘンリー・フィールディング (Henry Fielding, 1707–54) を含めて近代小説の祖とし、同時にこの3人の作品は、「形式的リアリズム」 (“formal realism”) (32)、すなわちジャンルとしての19世紀のリアリズム小説の属性を、完全ではないが持っていると主張しており、そのことに異論はないように思われる。そこでワットに従って、これら初期(リアリズム)小説がそれ以前の文学作品と異なる点を説明する。

まずワットは次のように説明している。小説以前の文学の諸形式は、その時代の文化の一般的傾向を反映して、伝統的な慣行に一致させることを真実の主要な試金石としていた。たとえば、古典時代とルネッサンス期の叙事詩のプロットは過去の歴史や寓話に基づいていた。そして著者に関する価値判断は、作品の表現方法がそのジャンルの模範的作品の文学的作法に従っているか否かによってなされたのだった。この文学的な伝統主義が、初めてそして全面的に小説からの挑戦を受けたのである。小説の判断基準は、何よりもま

ず個人的経験——それは常にユニークであり新しいのであるが——に忠実であるかどうかであって、オリジナリティが重視された (Watt 13)。それまでの文学が普遍化を好み、「いつであれ、どこであれ、さらにまた誰にでも同意され得るもの」(Watt 16) を好むのに対して、小説は「特定の環境に置かれた特定の人間の行動」(Watt 15) を描く。

ワットは、文学におけるリアリズム的特徴として性格描写と背景の提示に注目し、登場人物の命名の仕方と、空間と時間の取り扱い方を取りあげている。まず登場人物の命名法については、古典派やルネッサンス期の文学形式においては、「歴史上の名前かあるいは類型的な名前が好まれ」(Watt 18)、登場人物は名と姓の両方を持つこともなかった。それに対して初期の小説は、ありふれた固有名詞を登場人物に与えることにより、その人物を「その時代の社会環境の中の特定の個人とみなす」意図を示し、18世紀の小説家に例外はあるが、後に小説形式の慣行の一部として確立された (Watt 19)<sup>10</sup>。

空間と時間の取り扱い方におけるリアリズム的特徴とは、「小説の作中人物は、彼らが個別化された時間と場所という背景に置かれた場合にのみ個性化され得る」ことの自覚である (Watt 21)。ジョン・ロック (John Locke, 1632–1704) は、個人はその過去の思考と行動の記憶を通じて自身のアイデンティティを保持できるとし (212–13)、デイヴィッド・ヒューム (David Hume, 1711–76) も、「記憶がなければ、我々は原因という概念も、したがって因果関係の概念も持つことがない。因果関係はアイデンティティの源である」(170) と考えた。ギリシアとローマの哲学と文学においては、プラトンのイデア論に深く影響され、変わりゆくこの世界の具体的な物体の背後にある究極的実在はイデアであり、「時の流れによってその根本的な意味が変わるようなことは何一つ起こらないし、起こりえない」と考えられたのである (Watt 21)。その後も、ギリシアの三大悲劇詩人の一人アイスキュロス (B.C. 525–456) からシェイクスピアまで、大多数の作家に、時の流れについての無関心が見られるとして、ワットは、コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772–1834) の言葉、『『妖精の女王』[1590]におけるすべての特定の空間や時間が、驚くほど関連性がないことと想像力に任せて欠如していること」(“marvelous independence and true imaginative absence of all particular space or time in the ‘Faerie Queene.’”) を引用している (Watt 23)。しかし 17 世紀末になると、客観的な歴史研究やロック、ニュー

---

<sup>10</sup> フィールディングは、デフォーとリチャードソンが始めた、作中人物に現代的な名前を与える慣行を、後期作品になって実行した。

トンの影響で、時間は「よりゆっくりと、そして機械的に進む持続体」とみなされるようになった (Watt 24)。時間の経過による因果関係が物語に首尾一貫した構造を与え、性格描写を複雑で現実に即したものにした。デフォーの小説では、「歴史的な歩みとしての個人の生活」と「束の間の思想や行動を背景にしたその歩み」が描かれている (Watt 24)。われわれの時間に関する概念は、「常に空間の概念と溶け合っている」(Coleridge, *Biographia Literaria* 87)。われわれは「その瞬間を、空間と関連付けなければ、容易には心に思い描くことはできない」(Watt 26)。しかしシェイクスピアは、「時や場所の区別に関して全く注意を払っていなかった」(Johnson, “Preface” 21-22)。それに対して、話全体をまるでそれが現実の自然環境の中で起こったかのように視覚化したのはデフォーであり、ワットはそこにリアリズムの萌芽が見出せると考えた (Watt 26)。

文体については、小説以前の伝統は、事物と言葉を一致させるよりも「修辞の使用によって描写と作用に副次的な美を付与することに関心があった」(Watt 28)。しかし17世紀末に、明晰で分かりやすい散文を目指した運動が起こり、比喩を排除するロック派の言語観が文学理論にも影響を与え始めていた (Watt 29)。デフォーとリチャードソンは「対象に対するテキストの直接性と近似性」を求めて、リアリスティックな視点を容赦なく適用し、そのために比喩的言語など他の文学的価値を犠牲にしている (Watt 30)。「言語の機能は、他の文学形式においてよりも小説においてはるかに指示性が高い」のは、写実的意図による (Watt 30)。このように「人生を状況的に捉えるという見方を具体化するために小説が採用した物語形式の手法」を、ワットは「小説の形式的リアリズム」(“formal realism”) (32) と呼ぶのである。

## 2. リアリズムと写実

『ロビンソン・クルーソー』の序文には、「編者はこれが全くの事実であることを信じる。そこには作り話のようなところは、みじんもない」(The editor believes the thing to be a just history of fact; neither is there any appearance of fiction in it.) と書かれている (Defoe, *Robinson Crusoe*, “The Preface”)。デフォーは、クルーソー自身が語る形で旅行記を作成し、自分は編者として物語の真実性を読者に保証しているのである。文学におけるリアリズムが主張する写実性は、現実世界を忠実に写し取ることであるが、現実起きた事である必要はない。『ロビンソン・クルーソー』のような特異な状況を描いた冒険談に限らず、小説はもともと、作者が自らの経験をもとに創造した世界であることは明らか

かである。ヤン・ムカロフスキー (Jan Mukařovský) は、ドストエフスキー (Fyodor Mikhailovich Dostoevsky, 1821–81) の『罪と罰』(1866) を例に引いて、小説を読むことにより、読者は小説の外に存在する様々なリアリティを認識することを認めている。

Imagine a reader of Dostoevsky's *Crime and Punishment*. The question of whether the story about the student, Raskolnikov, actually happened is in addition to what we have already stated outside the pale of the reader's interests. Nevertheless, the reader feels the strong relationship of the novel to reality, and not only to that reality which is described in the novel—the events set in Russia in a certain year of the nineteenth century—but to the reality which the reader himself is familiar with, to situations which he might experience, to feelings and unrestrained emotions which might—or actually did—accompany the situations, to actions on the part of the reader which might have been caused by the situations. About the novel which has absorbed the reader, there have accumulated not one but many realities. (15)

ドストエフスキーの『罪と罰』の読者を想像してごらんください。ラスコーリニコフという学生に関する物語が本当に起こったかどうかという問題は、我々がすでに述べた事に加えて、読者の興味の範囲外である。それでも読者は、小説とリアリティの強い関係を感じる。小説に描かれたリアリティ、つまり 19 世紀のある年にロシアで起こった出来事との関係だけでなく、読者自身にとって身近なリアリティとの関係、読者が経験するかもしれない状況との関係、その状況に付随するかもしれない、もしくは実際に付随した感情や抑えきれない情緒との関係、その状況により引き起こされたかもしれない読者の行動との関係である。読者を夢中にさせた小説の周りには 1 つでなく多くのリアリティが集積している。

このようにリアリズム小説は、実際の出来事を描くとは限らないが、作者が現実的と信じる事柄を詳細に描く。エリオットは、『ウェストミンスター・レビュー』 (*The*

*Westminster Review*)<sup>11</sup>1856年4月号掲載のジョン・ラスキン(John Ruskin, 1819–1900)の『モダン・ペインターズ』(*Modern Painters*)第3巻の書評で、ラスキンのリアリズムに賛成している。

The truth of infinite value that he teaches is *realism*—the doctrine that all truth and beauty are to be attained by a humble and faithful study of nature, and not by substituting vague forms, bred by imagination on the mists of feeling, in place of definite, substantial reality. (*Selected Essays* 368; Eliot’s emphasis)

彼 [ラスキン]が教える無限の価値のある真実は、リアリズムである——すなわち、あらゆる真実と美は、自然を謙虚に誠実に研究することによって得られるのであって、明確な輪郭と実体を持った現実の代わりに、霧のようにおぼろげな感情に基づいた想像力が生み出す曖昧な形象を使っても到達はできない、という教義である。

このようにエリオットは小説を書き始める前から、写実を芸術の目的と見做していたのである<sup>12</sup>。しかしエリオットが、語り手の描写はあくまでも1つの視点から描いたものであり様々な視点があることを認めていることは本章第4節で述べる。

### 3. 19世紀イギリスのリアリズム小説の特色

本格的なリアリズム小説が始まったのはジェイン・オースティン(Jane Austen, 1775–1817)からとされる (G. Levine, *Realistic Imagination* 35)。19世紀のイギリス作家では、

---

<sup>11</sup> 19世紀イギリスの定評ある書評誌の一つで、エリオットは寄稿者として(1851–56)、また事実上の編集者として(1851–54)貢献した。1824年にジェイムズ・ミル (James Mill, 1773–1836) とジェレミー・ベンサム (Jeremy Bentham, 1748–1832) によって創刊され、その寄稿者及び編集者には、ジェイムズ・ミルの息子ジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill, 1806–73) など、19世紀イギリスの一流の進歩的な思想家が含まれる。イギリスの上流階級、上層中流階級のリベラルな読者を対象とした (Turner, “*The Westminster Review*” 438)。

<sup>12</sup> エリオットが小説を書き始めたのは1856年9月で、彼女が36歳の時であった。最初の作品は、『牧師たちの物語』(*Scenes of Clerical Life*, 1858)に収録された短編小説「エイモス・バートン氏の不幸」(“*The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton*”)である。

エリオット以外に、チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1814–70)、ブロンテ姉妹 (Charlotte Brontë, 1816–55; Emily Brontë, 1818–48; Anne Brontë, 1820–49)、アンソニー・トロロープ (Anthony Trollope, 1815–82)、エリザベス・ギaskell (Elizabeth Gaskell, 1810–65)、ウィリアム・メイクピース・サッカレイ (William Makepeace Thackeray, 1811–63)、トーマス・ハーディ (Thomas Hardy, 1840–1928)<sup>13</sup>が、代表的なリアリズム小説家として挙げられる。

キャロライン・レヴァイン (Caroline Levine) によれば、19 世紀イギリスのリアリズム小説は、「中産階級、現在、歴史的意識、工業化、都市、国家」といった題材や、「全知の語り、自由間接話法、方言、場面を超えた記述、結論のない語り、全景的、そして細部」といった表現技法と結び付けられてきた (84)。リアリズムは、登場人物の心理や物の状態を詳細に描くが、他方、「透明性」(写実) の信仰を批判されている (C. Levine 84)。しかし、リアリズム小説の核心的性質については研究者の間で意見の一致がないので、上記のすべての要素を満たさなくても、リアリズム小説と見なすことができる (C. Levine 85)。

#### (1) リアリズム小説の題材

まず題材については、叙事詩が英雄を描くのとは異なり、リアリズム小説は普通の個人を描く。リアリズムのおかげで、従来無視されてきた「お針子、質屋、工場労働者、酔っ払い、売春婦、乞食」に光が当てられるようになった (C. Levine 89)。

---

<sup>13</sup> ハーディ自身は 1890 年 8 月 5 日の日記において、リアリズムを否定している。

Art is a disproportioning—(i.e., distorting, throwing out of proportion)—of realities, to show more clearly the features that matter in those realities, which, if merely copied or reported inventorially, might possibly be observed, but would more probably be overlooked. Hence “realism” is not Art. (*Life and Work* 239)

芸術とは、リアリティの均衡を破ること——(すなわち歪ませ、均衡から投げ出すこと)——である。それはリアリティにおいて重要となる特徴を際立たせることであり、そうした特徴は、単に写したり明細目録を報告したりするだけでは、観察されるかもしれないが、それよりは見逃される可能性が高い。したがって「リアリズム」は芸術ではない。

リアリズム小説のうち最もよく知られているのは、主人公がさまざまな体験を通して内面的に成長していく過程を描く、ビルドゥングスroman (Bildungsroman, 教養小説) である。シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』 (*Jane Eyre*, 1848) のジェイン、ディケンズの『デイヴィッド・コパーフィールド』 (*David Copperfield*, 1849) のデイヴィッド、エリオットの『フロス河畔の水車場』 (*The Mill on the Floss*, 1860) のマギー (Maggie) は、いずれも彼らの孤独な子供時代から物語が始まる。ビルドゥングスromanは、リアリズム小説が始まる以前から存在したが、イングランドのリアリズム小説は工業化したイギリスにおいて成功する方法を考えるために子供時代に執着した (C. Levine 89)。家庭教師の地位からロチェスター (Rochester) と結婚してジェントリ階級に入る自立した努力家であるジェイン・エアは、1970年代のフェミニスト批評家にとっては完璧な個人主義として称賛の的であったが、後の批評では、ジャマイカにおける奴隷労働と、ジャマイカからロチェスターの妻として連れてこられたバーサ・メイスン・ロチェスター (Bertha Mason Rochester) の死といった暗い面に目が向けられるようになった<sup>14</sup>。

社会の描き方には、少数の登場人物に社会のグループを代表させる場合と、個性的な多数の登場人物とその関係を描く場合がある。ディケンズの『ハード・タイムズ』 (*Hard Times*, 1854) は前者であり、正直な労働者、墮落した貴族、功利主義のビジネスマンを

---

<sup>14</sup> ガヤトリ・スピヴァーク (Gayatri Spivak) は、『ジェイン・エア』は、ジェインが白人クレオールであるバーサを人間と動物の境界が判別しない存在として扱うことにより、イギリスの帝国主義の暴力を支持していると論じている (247-48)。ジェインはバーサを次のように見ている。

In the deep shade, at the further end of the room, a figure ran backwards and forwards. What it was, whether beast or human being, one could not, at first sight, tell: it grovelled, seemingly, on all fours; it snatched and growled like some strange wild animal: but it was covered with clothing, and a quantity of dark, grizzled hair, wild as a mane, hid its head and face. (*Jane Eyre*, 327-28; bk. 2, ch. 26)

部屋の向こう端の暗がり、何かが行ったり来たりして走っていた。それが何なのか、獣か人間か、一見したところでは判別できない。どうやら四つ足で這っているようだ。何か奇妙な野生動物のように、物をひたたくったり唸ったりした。それは服を着ていたが、その顔は、たてがみのようにふさふさした黒く白髪混じった乱れ髪に隠れていた。

それぞれ代表する人物が主要人物として登場する。これに対して、同じくディケンズの『荒涼館』(*Bleak House*, 1852-53)には、70人以上の個性的な人物が登場し、準男爵から道路掃除人の貧しい男の子まで、慈善家、兵士、ダンス教師、医者、弁護士などが、複雑な網の目のような関係を持って生きている。エリオットの『ミドルマーチ』(1871-72)は、後者に属する。個性を描くこと、代表させること、関連性を描くことは、互いに排除するものではなく、リアリズム小説の多くはこの3つを使っているとされるが(C. Levine 93)、本論文では少数の人間に、あるグループを代表させることは個性の一面的描写につながり、その点ではリアリズムを逸脱すると考える。

## (2)リアリズム小説の描く物

リアリズム小説家は、社会生活の詳細な描写のために物を重んじた。物質的な物は、人生経験の不可欠な要素である。物は商品として流通し、家族に伝えられ、失われたり盗まれたりする。物は社会関係を、人物と同じく、また人物以上に表している。シンシア・ウォール(Cynthia Wall)によると、家具や織物といった家庭内のものは、18世紀後半に初めて格式高い詩や散文で丁寧に描写されるようになり、19世紀の小説と詩では描くのが当然になった。そしてこの変化は、「英国市場の拡大」や「信用経済の発達」による消費者文化の成長によってもたらされた(11)。これに対してエイミー・M・キング(Amy M. King)は、リアリズム小説が物を盛んに描くのは、新しい技術や消費文化よりも価値観のせいであるとする。キングによると、小説が物を詳細に描写するのは、神に関する知識は自然界の最も小さいものに現れるという自然神学から来るのであって、物に敬意を払うことは19世紀イギリス小説の常道である(460-66)。

エレイン・フリードグッド(Elaine Freedgood)は、小説がごく簡単にしか触れていない物が、重要な事実のメトニミー(換喩)になっていることがあると言う。テキストの向こうに生産、流通、消費の現実の歴史があるからである。例えば、ディケンズの『大いなる遺産』(*Great Expectations*, 1861)では、オーストラリアのニュー・サウス・ウェールズに流刑になり、今や裕福な養羊家として帰国したマグウィッチ(Magwitch)の煙草について軽く言及される。テキストには3回、タバコを「ニグロの頭」("Negro head")と呼ぶ以上の事は記述されていない。しかし「ニグロの頭」は、「ヴィクトリア朝のオーストラリアにおけるアボリジニの大量虐殺」という恐怖を思い出させる(Freedgood 82)。タバコは合衆国で奴隷によって摘まれ、オーストラリアに輸出された。オーストラリアの

植民者は、タバコを通貨としてまた商品として用い、アボリジニの住んでいた土地を「無主の土地」(“terra nullius”)とみなしてアボリジニを駆逐した。ヴィクトリア朝の人々の多くはこのことを、新聞や雑誌を通じて知っていたのである。こうしてタバコには、ごくわずかの言及しかなくとも、世界貿易やアボリジニの大虐殺や奴隷についての膨大な話が凝縮されている (Freedgood 86)。

ヴィクトリア朝のリアリズム小説家は、18世紀の先駆者たちより物の描写に熱心で、また彼らに続くモダニズム小説家は、物の詳細な描写に批判的である<sup>15</sup>。したがって、物に対する興味というのは19世紀イギリスのリアリズム小説の特徴と言える。

### (3) リアリズム小説の視点

社会の全体像を表すためにリアリズム小説で用いられる、語りの形式上の特徴について述べる。社会全体を統一的に眺める鳥瞰を得るためには、三人称の全知の語り手が便利である。全知の語り手は、様々な場所や人の心の中を自由に覗くことができるからである (エリオットの小説、とくに『ミドルマーチ』においては、語り手は全知とは言えず、1つの視点を提供しているに過ぎないことは本章第4節で説明する)。他方、社会における人間関係を注視し、社会を包括的に眺める全知の語り手に対して、登場人物の1人の視点から眺める一人称の語りがある。前述した『ジェイン・エア』、『デイヴィッド・コッパフィールド』などがその例である。この場合は、限られた不確かな視点に頼ることになる。このように、リアリズム小説と言っても、様々な視点があり得る。

リアリズム小説において、三人称の語りと各登場人物の心の両方を眺める手段が「自由間接話法」(Free Indirect Discourse)<sup>16</sup>である。三人称の語りの中で、語り手の語りの

<sup>15</sup> Cf. Virginia Woolf, “Mr. Bennett and Mrs. Brown.”

<sup>16</sup> 自由間接話法 (Free Indirect Discourse) は、イギリスではジェイン・オースティンが最初に確立し、19世紀イギリスのリアリズムと20世紀のモダニズム小説で盛んに用いられた。自由間接話法には、自由間接話法 (Free Indirect Speech) と自由間接思考 (Free Indirect Thought) がある。フランス語で le style indirect libre (自由間接体) と呼ばれ、ドイツ語で erlebte Rede (体験話法) と呼ばれるものと同じ形式であるが、英語の自由間接話法には、フランス語やドイツ語に比べ統語上の明白な特徴が乏しい (中川 8)。ランドルフ・カークら (Randolph Quark et al.) は、“Free Indirect Speech”で話法と思考の両方を表し、(a) 伝達動詞が削除されていること、(b) 直接話法の文構造が潜在的に残され

形式とある特定の登場人物の話し方と視点が結合される。次の引用は、エリオットの最初の短編小説の1つ、「ジャネットの悔悟」(1858)からである。ジャネットは夫の暴力のせいでアルコール中毒に陥っている。ある晩、夫に逆らったジャネットは家から追い出され友人宅に身を寄せる。そこでアルコール中毒から立ち直るために頼れる人を思いつく。それは最近赴任した福音派牧師トライアン (Tryan) で、それまでジャネットは夫に従い、トライアンを排斥する運動に加わっていた。

No! She suddenly thought—and the thought was like an electric shock—there was one spot in her memory which seemed to promise her an untried spring, where the waters might be sweet. That short interview with Mr. Tryan had come back upon her—his voice, his words, his look, which told her that he knew sorrow . . . . If she could pour out her heart to him! If she could for the first time in her life unlock all the chambers of her soul! (278-79; ch. 16)

---

ていること (たとえば、疑問文や感嘆文の形、呼格、付加疑問文、間投詞など) という文法的特徴を挙げている。伝達文であることは、動詞の時制、人称代名詞、指示詞、時と場所の言及などに現れるとする (1032-33)。この統語法中心の考え方に対して、ジョフリー・リーチとミック・ショート (Geoffrey Leech and Mick Short) は、統語法だけでなく語彙や書記法を含めた3つのレベルのどの特徴も、自由間接話法を特定すると考えている。例を挙げる。

- (1) He said that the bloody train had been late.
- (2) He told her to leave him alone!

例文(1)は *bloody* という口語があるため、例文(2)は感嘆符があるため、話し手の言葉とされるのである。

直接話法 (Direct Speech) が普通である話し言葉に自由間接話法を使って距離を置くことは、しばしば皮肉のために使われる (Leech and Short 268-70)。これに対して、思考は本来間接的にしか表せないものであるが、自由間接思考を使うと読者は登場人物の心を直接覗くことになる。そこで小説家は、読者のシンパシーをコントロールするために自由間接思考を使う (Leech and Short 270-79)。但し自由間接思考が当該人物に対する読者の感情移入を導くというこの考え方に疑問を投げかける実験結果もある (Cf. Fletcher and Monterosso)。

否！ 突然彼女は思った——電気ショックのようであった——彼女の記憶の中に、まだ汲んだことのない泉、甘い水が湧いている泉が見つかりそうな場所が1つあった。トライアン師とのあの短い面談が、彼女の心に蘇った——彼の声、言葉、眼差しは、彼が悲しみを知っていることを物語っていた……もし、この心をすっかり打ち明けることができたなら！ もし、生まれて初めて自分の魂の全ての部屋のカギを開けることができたなら！

語り手は、「突然彼女は思った」と、ジャネットが自分の心中を語る枠組みを三人称で語っているが、ジャネットが彼女自身の視点と言葉で報告していることが、感嘆符号から分かる（“No!”）。こうして自由間接話法は、語り手の語りのスタイルと特定の登場人物の視点を結び付ける役割をする。

#### (4) リアリズム小説のプロット

リアリズム小説は因果関係を重んじる。多くの19世紀の小説は長期にわたって出版された。たとえばディケンズの『荒涼館』は1852年3月から1853年9月まで20回に分けて、エリオットの『ミドルマーチ』は1871年12月から1872年12月まで8回に分けて分冊発行されたので、エンディングよりむしろ中ほどの話が読者を引き付けるためには重要であった。読者は読み終えた部分をもとに仮説を立て、次に読む時に検証する。リアリズム小説のプロットは読者に真剣に因果関係を考えさせるものになっている（C. Levine 103）<sup>17</sup>。

文学のリアリズムにおいては、写実以外にプロットの蓋然性も必要である。エリオットは『ウェストミンスター・レビュー』1856年10月号に掲載されたエッセイ「女性小説家の書く愚かな小説」（“Silly Novels by Lady Novelists, 1856”）において、女性小説家の小説の蓋然性の低さや一律性、女主人公の現実的でないパターンを次のように批判してい

---

<sup>17</sup> ただし、リアリズム小説には偶然の出来事も多い。『フロス河畔の水車場』では、物語の最後に突如洪水が起こり、ボートで兄トムを救出に行ったマギーは、川上から流れてきた波止場の機械の大きな破片にぶつかってトムとともに溺死する。

る<sup>18</sup>。

The heroine is usually an heiress, probably a peeress in her own right, with perhaps a vicious baronet, and amiable duke, and an irresistible younger son of a marquis as lovers in the foreground, a clergyman and a poet sighing for her in the middle distance, and a crowd of undefined adorers dimly indicated beyond. Her eyes and her wit are both dazzling; her nose and her morals are alike free from a tendency to irregularity;

---

<sup>18</sup> 19 世紀の女性作家に対する偏見一般については、エレイン・ショウォルター (Elaine Showalter) が、『彼女たち自身の文学』 (*A Literature of Their Own: British Women Writers, from Brontë to Lessing*, 2009) の中で指摘し、男性作家と女性作家に対するダブル・スタンダードの根拠として次の6項目を挙げている (61-75)。

- ① 出産や家事において女性の性質は最高に花開く代わりに、芸術における独創性には欠けると考えられていた。
- ② 女性の身体自体が、男性に比べて小さく弱く劣っており、失神したり、疲れたり、力を喪失したりしがちで、継続して反復する必要がある仕事には向かないとされた。
- ③ 女性の人生経験の少なさも不利である。男性に与えられる学校教育、大学、クラブ、スポーツ、ビジネス、政府、軍隊から女性は締め出されていた。「ヴィクトリア朝の人々は女性を情熱、怒り、野心、名誉を感じない天使のような存在と定義していたので、女性が人生の半分以上を描けるとは信じなかった」し、ヴィクトリア朝の女性は、出産や母親の心理などについて公に語らないように躰けられていた (66-67)。
- ④ 女性が書くとすれば、小説にすべきである。小説には感情と恋愛が必需品であるが、女性は、もともと些細な事が好きで鋭い観察眼を持っていると同時に、他人のことに首を突っ込むのを楽しむ傾向がある。つまり、女性の作品は「芸術性と努力に欠ける鳥の囀り」である (68)。「女性は、個人的な会話や良く知られた話をするのがうまく、これはしばしば社会の迷惑になるが、適切にコントロールされれば偉大な才能である」 (E. S. Dallas) (68)。
- ⑤ 女性作家を軽視する第5の理由は最も執拗なもので、不幸でストレスの溜まった女性だけが本を書くというものである。この考え方は、1892年になっても見つかる (70)。
- ⑥ 女性作家には知的訓練と教育が不足しているので、男性作家と異なり、ナラティブを統括する芸術的構造を支配する哲学がない。スコットの歴史小説の登場人物は、過去と現在の対比の視点から、サッカレイの『虚栄の市』 (*Vanity Fair*, 1847-48) のベッキー (Becky) は、皮肉の視点から描かれている。読者がリアリズムや心理分析を求めるようになって、女性作家は表面的なことの観察と描写しかできない。直接経験の幅が狭く、教育、特に一般化と理論化の能力を発達させる科学、経済学、哲学の知識に乏しいからである (74-75)。

she has a superb *contralto* and a superb intellect; she is perfectly well-dressed and perfectly religious; she dances like a sylph, and reads the Bible in the original tongues. . . . (*Essays* 301–02; Eliot’s emphasis)。

ヒロインはたいてい遺産相続人で、おそらくは生まれつきの貴族で、前景には、たぶん意地悪な準男爵や、愛想の良い侯爵や、侯爵の魅力的な若い息子が恋人として配置され、中景には彼女に憧れる牧師や詩人がいて、その向こうにたくさんの特定されない崇拜者の存在がおぼろげに示される。彼女は目もくらむほどの双眸とウイットの持ち主で、その鼻とモラルはまっすぐで、素晴らしいコントラルトの声と知性に恵まれ、服装と信仰は完璧で、妖精のように踊り、聖書は原語で読む……

以上、19 世紀イギリスのリアリズム小説の特徴について述べてきた。どの特徴にも、エリオット作品を例として挙げることができ、現在エリオットは、19 世紀イギリスのリアリズム小説家の代表の 1 人と考えられている。しかし序論で述べたように、そのリアリズムに対しては出版当時から批判があった。初期作品のイギリス中西部の田舎の生活の描写を称賛する一方で、中期作品以降は「道徳的寓話」と見なされたのである。20 世紀半ばにこの批判が克服されて後も、20 世紀後半にはポスト構造主義の立場から、19 世紀イギリス小説のリアリズムに対して疑問が投げかけられた。その他のエリオット作品のリアリズムに対する批判は当該作品に限ったものであり、第 3 章以降で紹介する。ここではエリオットのリアリズムを作品全般に亘って否定するポスト構造主義批評とそれに対する反論、その結果生じたエリオット作品のリアリズムの再評価につき説明する。

#### 4. エリオットの小説とポスト構造主義批評

20 世紀後半にポスト構造主義の立場から、19 世紀のリアリズム小説、とくに『ミドルマーチ』を「古典的リアリズム小説」(“classic realist text”) <sup>19</sup>と呼んでそのリアリズムに疑念を主張する批評が現れた。まず全知の語り手を前提とするリアリズムは不可能である

---

<sup>19</sup> 「古典的リアリズム小説」とは、コリン・マッケイブ (Colin MacCabe) が『ジェイムズ・ジョイスと言葉の革命』(*James Joyce and the Revolution of the Word*, 1978) で『ミドルマーチ』に与えた名前である。もともとはロラン・バルト (Roland Barthes, 1915–80) が『S/Z』(*S/Z*, 1970) で使った (Lodge 171)。

とするコリン・マッケイブ (Colin MacCabe) の批判について説明し、次に比喩表現に関して言葉の透明性を前提とするリアリズムは不毛であると主張する J・ヒリス・ミラー (J. Hillis Miller) の批判について述べる。

#### (1) イギリスのポスト構造主義からの批判

20 世紀後半のイギリスのポスト構造主義批評の特徴は、19 世紀のリアリズム一般、特にジョージ・エリオットに対して否定的な見方をすることにあった (Newton, *George Eliot* 5-7)。一番よく知られているのは、『ミドルマーチ』と『ダニエル・デロンダ』の全知の語り手を攻撃した、コリン・マッケイブの『ジェイムズ・ジョイスと言葉の革命』 (*James Joyce and the Revolution of the Word*, 1979) における批評である。マッケイブは「古典的リアリズム」は、真実は完璧に透明な言語によって正確に示すことができるといった誤った確信に裏打ちされているとする。マッケイブによると、ジョイスの小説と異なり、『ミドルマーチ』や『ダニエル・デロンダ』には引用符号があり登場人物の言葉 (ディスコース) を示している。その間を埋める語り手の言葉 (ディスコース) は、登場人物の言葉の解釈の仕方を示す「真実への窓」である (MacCabe in Newton, *George Eliot* 158)。つまりディスコースには階級があり、語り手のディスコースは、他のディスコースより上位にあって他のディスコースを支配し、解釈し、判断するメタ言語<sup>20</sup>であり、これのみが真実を語る。

これに対しデイヴィッド・ロッジ (David Lodge) は、自由間接話法に言及して反論した。つまり『ミドルマーチ』の自由間接話法が、語り手のディスコースを、マッケイブの言うメタ言語よりも複雑で捉えがたいものになっているというのである。登場人物たちのディスコースが自由間接話法に入り込むと、「作者[語り手]の声は必然的にある程度弱まり、読者の役割が増す」 (Lodge 177)。ロッジは『ミドルマーチ』の物語の始まりの部分、結婚に関するドロシアのナイーブな考えを示す個所を例に挙げて説明している。

She was open, ardent, and not in the least self-admiring; indeed, it was pretty to see

---

<sup>20</sup> メタ言語とは、もともとは言語学の用語で、「別の言語を論じるために使われる言語もしくはシンボルの体系」。

(<https://www.collinsdictionary.com/jp/dictionary/english/metalanguage>, accessed August 13, 2023)

how her imagination adorned her sister Celia with attractions altogether superior to her own, and if any gentleman appeared to come to the Grange from some other purpose than that of seeing Mr. Brooke, she concluded that he must be in love with Celia: Sir James Chettam, for example, whom she constantly considered from Celia's point of view, inwardly debating whether it would be good for Celia to accept him. That he should be regarded as a suitor for herself would have seemed to her a ridiculous irrelevance. (10; bk. 1, ch. 1)

ドロシアは飾らず、熱意があり、少しも自惚れがなかった。実際、ドロシアが想像力によって妹のシーリアの方を自分よりも優れた魅力で飾り立てている様子を見るのは微笑ましかった。もしブルック氏に会う以外の目的で屋敷に来る紳士がいれば、その紳士はシーリアに恋しているに違いないとドロシアは結論付けたのである。たとえばサー・ジェームズ・チェッタムについても、彼女はいつもシーリアの視点から考えていて、彼の求婚を受け入れることがシーリアのためになるかどうか、心中で熟考していた。チェッタムを自分の求婚者と見なすなんて、滑稽な的外れで、あり得ないわと思っていた。

ロッジによれば、この一節は語り手による説明である（ドロシア自身が自分は自惚れがないと思えば、彼女は自惚れていることになる）。しかし最後の2文にはドロシアの視点が混ざっている。この一節の次にドロシアが理想とする結婚が述べられた一節が続く。

She felt sure that she would have accepted the judicious Hooker, if she had been born in time to save him from that wretched mistake he made in matrimony: or John Milton when his blindness had come on; or any of the other great men whose odd habits it would have been glorious piety to endure; but an amiable handsome baronet, who said "Exactly" to her remarks even when she expressed uncertainty—how could he affect her as a lover? The really delightful marriage must be that where your husband was a sort of father, and could teach you even Hebrew, if you wished it. (10; bk. 1, ch. 1)

あの賢明なフッカーをあの惨めな結婚から救ってあげるのに間に合うように自分が生

まれていたら彼を受け入れていただろうに、とドロシアは感じる。あるいは盲目になってからのジョン・ミルトンでもいいわ。変わった癖のある誰かほかの偉大な人間の妻になって耐えることは、栄光ある敬虔な行為だったであろう。でも、愛想の良いハンサムな準男爵で、自分が分からないと言った時でも「その通り」としか言わない人が、自分の恋人になって何を教えてくれるのかしら？ 本当に喜ばしい結婚とは、夫が父親のような人で、望めばヘブライ語すら教えられる人でなければならないわ。

ロッジによると、「あの惨めな失敗」(“that wretched mistake”)や「盲目になってからの」(“when his blindness had come on”)は、口語体であるからドロシアの考えを表していると見ることができる。次の「変わった癖」(“odd habits”)は、口語体ではあるが、「偉大な人間」(“great men”)と連句になってドロシアに対する皮肉を構成しているので、この部分は語り手の言葉である。しかし次の「自分が分からないと言った時でも『その通り』としか言わない」(“who said ‘Exactly’ to her remarks even when she expressed uncertainty”)はドロシア自身の皮肉であり、この文とそれに続く部分は自由間接話法によりドロシアの考えを表している。こうしてロッジは「ポリフォニー」<sup>21</sup>の考えを応用して、引用符号で挟まれた模倣の部分(登場人物の言葉を直接話法でそのまま表した部分)の外のテキストは語り手が支配しているというマッケイブの主張は当たらないと述べる。

しかしドロシア・バレット(Dorothea Barrett)の考えるように、ロッジの反論は、語り手の視点がすべてのディスコースの上位にあるというマッケイブの主張を、むしろ補強しているように思われる。上述のドロシアの考えを示す自由間接話法は、ドロシアの声を使って語り手がドロシアを揶揄しているのである(Barrett 29)。同時にバレットは、『ミドルマーチ』の語り手はマッケイブやロッジが考えるほどに信頼できる誠実な存在ではないと考える。たとえば上述の「ドロシアは飾らず」で始まる引用は、ドロシアが「少しも自惚れがない」人間であるという主張と、彼女は自分にヘブライ語を教えることが出来るような学識のある人間しか相手にしないという主張が矛盾している。彼女は「偉大な人間」としか結婚したくないのである。その証拠にドロシアの妹のシーリア(Ceilia)は、「ド

---

<sup>21</sup> 文芸学者・美学者ミハイル・バフチン(Mikhail Bakhtin, 1895–1975)は「小説の重要な特性の一つは、様々なタイプのディスコースの使用が許されることである」と述べ、これを音楽用語を使って「ポリフォニー」と呼んだ(Lodge 176)。

ロシアはサー・ジェイムズ・チェッタムをとっても軽蔑しているわ。彼のプロポーズはきつと受け入れないでしょう」(“Dorothea quite despises Sir James Chettam; I believe she would not accept him”) (21; bk. 1, ch. 2) と思っている。シーリアはチェッタムのことを気の毒に思い、彼がドロシアを好きであることは衆目の一致するところであり、彼はドロシアも自分を気に入っていると考えている、とドロシアに告げる。しかしドロシアは、「私が彼を好きだとサー・ジェイムズが考えているなんて、嫌だわ」(“It is offensive to me to say that Sir James could think I was fond of him”) (34; bk. 1, ch. 4) と憤る。シーリアは常識的で(“knowing and worldly-wise”) (9; bk. 1, ch. 1)、伯父のブルック氏のテナント農家の人々の間ではドロシアより人気があった。シーリアはカゾボンの寡黙、黄ばんだ肌、スープを飲む時にスプーンで皿をこすって不快な音を立てたり、話す前に瞬きしたりする癖から、この高慢な学者の狭量な性格を本能的に感じ取っている。しかしドロシアはこれらのサインを、「平凡すぎる心根の人間だけが観察する」(“only the commonest minds observe”) ことだとして受け入れない (45; bk. 1, ch. 5)。ドロシアはカゾボンの心を覗きこみ、「自分自身が持ち込んだすべての特質を」(“every quality she herself brought”) そこに見る (22; bk. 1, ch. 3)。ドロシアは彼をシンパシーに富む偉大な魂を持つ偉大な学者であると信じて結婚するが、実際には才能がないだけでなく、高慢で狭量でドロシアの同情を拒否する人間である。ドロシアが不幸な結婚をしたのは、1つにはドロシアの自惚れが原因である。こうして前述の“*She felt sure*”で始まる引用において語り手の主張は一貫性に欠けるので、『ミドルマーチ』の語り手は全知であり、『ミドルマーチ』のディスコースを支配しているというマッケイブの主張は当たらないのである。

『アダム・ビード』第 17 章では語り手自身が、宣誓した証人として語ることを宣言した個所の前で、表象の難しさを指摘している。

The mirror is doubtless defective, the outlines will sometimes be disturbed, the reflection faint or confused; but I feel as much bound to tell you as precisely as I can what that reflection is, as if I were in the witness-box narrating my experience on oath. (159; bk. 2, ch. 17)

鏡には疑いもなく欠陥があり、輪郭は時々崩れ、鏡像はかすんだり混乱したりする。

しかし私は、自分の心の鏡が映すところを、できるだけ正確に読者にお伝えしなければならぬと感じている。あたかも証言台で、宣誓の上、自分の経験を語るかのよう

に。

このエリオットの鏡の比喻は、目と置き換えられる。作者は自分の目に映る方法でしか描くことができない。たとえばグリフィン(Griffin)は想像上の生き物であるから、好きなように描くことができる。しかし「本物の誇張のないライオン」(“a true unexaggerated lion”)は、本来誰が描いても変わりがない筈であるが、ライオンを眺める角度や、ライオンとの距離、ライオンに対してどんな感情を持っているかなどがその描写に影響を及ぼすので、ライオンを描く方法は唯一ではない (*Adam Bede*, 160; bk. 2, ch. 17)。言い換えれば、小説の描写は現実との一対一対応をしない。リアリズム小説は人間心理と背景描写の詳細で断定的な描写を特徴とするが、その描写が真実と一致する保証はないのである。すなわち、エリオットの小説の語り手は全知ではない。Yohko Nagai (永井容子) の指摘する通り、「語り手の視点はエリオットの小説を形作る多くの視点の1つに過ぎない」(48)。K・M・ニュートン (K. M. Newton) も、この立場から『ミドルマーチ』第1章の冒頭部分を引用している (“Narration” 281)。

Miss Brooke [Dorothea] had that kind of beauty which seems to be thrown into relief by poor dress. Her hand and wrist were so finely formed that she would wear sleeves not less bare of style than those in which the Blessed Virgin appeared to Italian painters. (7; bk. 1, ch. 1)

ミス・ブルックの美貌は、質素な衣服によって際立つ種類のものであった。彼女の手と手首はとても華奢なので、イタリアの画家たちの描いた処女マリアのようにシンプルな袖の衣服も着こなすであろう。

これはドロシヤに対する語り手の印象もしくは解釈を示しているのもであって、客観的な描写ではない。ドロシヤは、普通は女性を美しく見せない質素な衣服でも美しく見え、ルネッサンス絵画の処女マリアに劣らないという感想は、語り手しか持たないかもしれないのである。

エリオット作品の語り手はしばしば作品に介入して読者に直接語りかける。このことはしばしば批判の対象になってきたが (e.g., Lubbock 110–20)、この批判に対しても「語り手の視点はエリオットの小説を形作る多くの視点の 1 つに過ぎない」(48) というナガイの主張は有効である。エリオットは、そのエッセイ「芸術の形に関する覚書」(“Notes on Form in Art,” 1868) の中で、芸術の形とは「構造もしくは組み立て」(“structure or composition”) であり、「構造とは、作者の一連の精神状態、作者の進化してきた精神全体の持つ先入観にしたがって選択され結びつけられた一連の関係でなくて何であろうか？」

(“And what is structure but a set of relations selected and combined in accordance with the sequence of mental states in the constructor, or with the preconception of a whole which he has inwardly evolved?”) (*Essays* 433) と述べて、非個人的な語り手を認めていない。このことはエリオットが、語り手の視点とは、読者を含む多くの視点の 1 つであると考えていることの現れと思われる。さらにエリオットは、チャールズ・キングズリー (Charles Kingsley, 1819–75) の小説『ウェストワード・ホー!』(*Westward Ho!* 1855) の書評において、語り手が読者に説教することを非難している<sup>22</sup>。こうしてエリオットの小説の語り手は全知ではなく、語り手の視点は多くの視点の 1 つを示すに過ぎず、とくに『ミドルマーチ』においては、ある出来事に対して様々な見方が示されていると言えるのである。

## (2) アメリカのポスト構造主義からの批判

アメリカのポスト構造主義からの批判の代表は、比喩表現とリアリズムの関係を問題にする J・ヒリス・ミラー (J. Hillis Miller) の主張である。ミラーは「見ることは、解釈である。見られるものは常に何か別の物を示す標識、象徴、象形文字、寓話として解釈できる」(*Reading* 68) と述べ、「感情や意思や決意を存在させるのは比喩を使った発話行為

---

<sup>22</sup> キングズリーの『ウェストワード・ホー!』の書評を、エリオットは 2 度行っている。最初の書評は 1955 年 5 月『リーダー』(*the Leader*) 474–75 頁に、2 度目の書評はさらに非難の調子を強めて 1955 年 7 月『ウェストミンスター・レビュー』(*The Westminster Review*) 288–96 頁に掲載された。エリオットは最初の書評で、「私たちは、細い棒を持って観客の周りをうろつき説教する人間は望まない。芸術は芸術であり、それ自身の物語を語るのである」(“We don’t want a man with a wand, going about the gallery and haranguing us. Art it art, and tells its own story.”) と述べている (*Essays* 123)。

である」(*Reading* 80) とする。目に見えないものは目に見える具体的なもので表すしかない。ミラーは『ミドルマーチ』の重要な比喩として「網」(“web”)、「流れ」(“stream”)、「見ること」(“vision”)を挙げ、「比喩の各グループは、他のグループと関連し、比喩を充実させるが、同時に他のグループと矛盾し、打消し、あるいはその妥当性を減じる」と考えている(“Optic and Semiotic” 128-33)。比喩は読者のイメージもしくは解釈によって成り立っているから、言葉と現実の一対一対応による現実世界の忠実な描写は成り立たないとするのである。エリオットも『フロス河畔の水車場』の中で、ミラーが指摘する比喩の伝達内容の多義性を認めている。

It is astonishing what a different result one gets by changing the metaphor ! Once call the brain an intellectual stomach, and one’s ingenious conception of the classics and geometry as ploughs and harrows seems to settle nothing. But then it is open to some one else to follow great authorities, and call the mind a sheet of white paper or a mirror, in which case one’s knowledge of the digestive process becomes quite irrelevant. It was doubtless an ingenious idea to call the camel the ship of the desert, but it would hardly lead one far in training that useful beast. O Aristotle! If you had had the advantage of being “the freshest modern” instead of the greatest ancient, would you not have mingled your praise of metaphorical speech, as a sign of high intelligence, with a lamentation that intelligence so rarely shows itself in speech without metaphor—that we can so seldom declare what a thing is, except by saying it is something else? (147; bk. 2, chap. 1)

比喩を変えることでいかに異なる結果が得られるかは驚愕すべきほどである！ 脳を知的な胃袋と呼んでごらん下さい。そうすれば古典や幾何を[心を耕す]鋤や鋤と捉える独創的な考えは全く役に立たないように思える。しかし別の偉大な学者に従って、心を白紙もしくは鏡と呼んでみよう。その場合には消化のプロセスに関する知識は全く無関係になる。ラクダを砂漠の船と呼ぶのは疑いもなく巧妙な着想だが、この有用な動物の訓練に際しては、ほとんど無意味である。ああ、アリストテレスよ！ あなたがもし最も偉大な古代人でなく「最も新しい現代人」であるという恩恵に浴していたなら、比喩を使った表現を高い知性の表れとして賞賛する際に、比喩なくしては話

に知性が現れないと嘆くことはなかったであろう——むしろ、ある物が何であるかを言うためには、それが他の何かであると言わずにいられないことを嘆いているのではないだろうか？

『ミドルマーチ』の語り手も「私たちは皆、深刻な態度の人間も陽気な人間も、自分の思考を比喩に絡ませ、比喩の力に決定的に頼っている」(“we all of us, grave or light, get our thoughts entangled in metaphors and act fatally on the strength of them”)と述べている(79; bk. 1, ch. 10)。確かに比喩を変えることにより、言葉の指示対象のイメージは決定的に変わる。また同じ比喩が真逆の事柄を示すために使われている場合もある。例えば『ミドルマーチ』では、ドロシアはカゾボンと結婚する前は、彼の心と仕事を「うっとりするほど入り組んだ迷路のような」(“attractively labyrinthine extent”) (22; bk. 1, ch. 3)ものと考え、彼の心に「大きな視野と広々とした新鮮な大気」(“the large vistas and wide fresh air”) (183; bk. 2, ch. 20)を見つけることを期待していた。つまり「迷路」は、「広がりのある、前途有望な、可能性を広げる」(Ashton, “Introduction” xxi)というポジティブなイメージを持っていた。ところが結婚後に彼女が夫の心の中に見つけたのは、「控えの間とどこにも通じない曲がりくねった通路」(“ante-rooms and winding passages which seemed to lead nowhither”) (183; bk. 2, ch. 20)であった。「迷路」には「閉じ込める、囲まれた、行き詰りに満ちた、方向が分からない」(Ashton, “Introduction” xxi)というネガティブなイメージもある。こうして確かに比喩は曖昧さを含む。しかし、言語とそれが示す対象が厳密に一致しないことは比喩以外にも起こり得る。比喩表現にとって重要なのは漠たるイメージである。とくに抽象的な概念を共有するために比喩は有効である。例えばシンパシーを、牢獄に差し込んだ日の光や、渴きを癒してくれる清水の湧いている泉によって、また西方にあると信じる来世のシンパシーに満ちた幸せな国を茜雲によってイメージするなどである。このように比喩はリアリズムにとって不可欠であり、リアリズムに貢献している。実際にエリオットの小説中で使われている比喩が登場人物の心理を読者が理解することに大いに役立っていることは、第2章でエリオットの短編小説を1つ取り上げて詳しく説明する。

## 結論

ポスト構造主義批評は作品の解釈に当たって作品の外の事情を考慮に入れないので、ポスト構造主義批評を推し進めると、エリオットの芸術の道徳的目的が無視されることになる (Rignall, “Realism” 326)。しかしポスト構造主義批評をきっかけにして『ミドルマーチ』のリアリズム批評は、全知の語り手と言葉の透明性 (言葉と事実の一対一対応) というドグマから解放された。『アダム・ビード』第 17 章において「鏡には疑いもなく欠陥がある」と言及され『ミドルマーチ』に遍在する、言葉の意味の多様性に目を開かせたのである (Rignall, “Realism” 336)。バレットが述べるように、「語り手に対する苛立ちは、語り手が完全に支配しているという確信に根差している。我々がその語りの一見なめらかな表面に傷があるのを発見するや否や、語り手は我々にとってもっと興味深く定義の難しい存在になるだろう」(29-30)。

エリオットのリアリズムの目的は、読者の「経験を広げ」、「我々の仲間の人間との接触を、個人的運命の限界を超えて拡張すること」にあった。しかしエリオットが語りの限界を認識している以上、読者に完全な絵を提供することや唯一の結論に辿り着くことを、エリオットは予期していない。このことはエリオットの匿名の書評「トーマス・カーライル」 (“Thomas Carlyle,” 1855) に現れている<sup>23</sup>。

On the same ground it may be said that the most effective writer is not he who announces a particular discovery, who convinces men of a particular conclusion, who demonstrates that this measure is right and that measure is wrong; but he who rouses in others the activities that must issue in discovery, who awakes men from their indifference to the right and the wrong, who nerves their energies to seek for the truth and live up to it at whatever cost. The influence of such a writer is dynamic. (*Selected Essays* 343)

同じ理由で次のように言えるかもしれない。最も感銘を与える作家は、ある特定の発見を発表する人ではなく、ある特定の結論を人々に納得させる人でもなく、この方法

---

<sup>23</sup> これは、トーマス・バランタイン (Thomas Ballantyne, 1806-71) の『トーマス・カーライルの言葉——回顧録とともに』 (*Passages Selected from the Writings of Thomas Carlyle: With a Biographical Memoir*, 1855) に対するエリオットの書評である。

は正しくあの方法は間違っていると証明する人でもなく、発見に至る活動を他者に行わせる人であり、人々を正邪への無関心から目覚めさせる人であり、どんな犠牲を払っても真実を追い求め、真実に従って生きるエネルギーに刺激を与える人である。そのような作家の影響は活力に満ちている。

エリオットにとってリアリズムの追及とは、唯一の結論や真実に至ることではなく、「蓋然性」もしくは「近似値」を求めることである (Nagai 47)。エリオットにとって、全知の語り手や真実を表す唯一の表現はあり得ない。こうして語り手は単に多様な視点を提供する存在であり、比喩表現は表現客体を、厳密には一致しないかもしれないイメージによって読者の心に浮かび上がらせるのである、というエリオットの小説のリアリズムの「洗練された性質」(Rignall, "Realism" 326) が明らかになった。なお、出来事や個人の性格に対して複数の見方を示す例については、とくに『ミドルマーチ』において顕著な特徴として第5章で述べる。

## 第2章 エリオットの道德観とシンパシー ——「ジャネットの悔悟」における比喩表現を例として

第2章はエリオットの道德観においてシンパシーの果たす役割と、シンパシーと道德の一般的關係を明らかにし、次いで、エリオットが作品中でリアリズムの手法を用いてシンパシーを描いている具体例を示すことを目的とする。そのためにまず、エリオットの道德観におけるシンパシーの役割を、エリオットが共鳴したルートヴィッヒ・フォイエルバッハ (Ludwig Feuerbach, 1804–72) とオーギュスト・コント (August Comte, 1798–1857) の考え方から明らかにする。次いでシンパシーと似た概念であるエンパシーを取り上げ、両者の相違から、シンパシーと道德のつながりを説明する。最後に、エリオットがシンパシーの重要性を読者に理解させるためのリアリズムの手法として比喩を効果的に用いている例を、エリオットの最初の短編集から「ジャネットの悔悟」 (“Janet’s Repentance,” 1858) を取り上げて示す。

### 1. エリオットの道德観とシンパシー

エリオットの伝記 (Ashton, *Life*; Height, *Biography*) によると、エリオットは、9歳でナニートン (Nuneaton) にある寄宿学校に入った。そこで教師のミス・マリア・ルイス (Miss Maria Lewis) の影響を受けて、イギリス国教会の中の福音派に従った。この頃のエリオットはカルヴァン主義を奉じ、小説を読むのも観劇も天国での幸福の妨げになるというほど徹底した熱狂的な福音主義者だった。ミス・マリア・ルイスとの文通は、エリオットが1832年にコヴェントリ (Coventry) の寄宿学校に移り、16歳の時に母親の死により家に戻って家事をするようになってからも続いた。しかし、兄アイザック・エヴァンス (Isaac Evans) が父親ロバート・エヴァンス (Robert Evans) から土地差配人の仕事と家を引き継ぎ、エリオットが父親と2人で1841年11月にコヴェントリ郊外に引っ越した頃から、エリオットはキリスト教に疑義を抱き始める。エリオットは引っ越し先で、ユニテリアンのブレイ夫妻 (Mr. and Mrs. Bray) のサークルに入り、ブレイ夫人の弟チャールズ・ヘネル (Charles Hennell, 1809–50) の書いた『キリスト教の起源に関する質問』 (*An Inquiry Concerning the Origin of Christianity*, 1838) を読み、キリストは自身を神と錯覚したのであってキリスト教は実践的道德の標榜である、という主張に影響された。

エリオットは高等批評 (The Higher Criticism)<sup>24</sup>に染まり、1842年に教会に行くことを一時止めただけでなく、フリードリヒ・シュトラウス (Friedrich Strauss, 1808-74) の『イエスの生涯』 (*Das Leben Jesu*, 1835; trans. 1846) や、フォイエルバッハの『キリスト教の本質』 (*Das Wesen des Christenthums*, 1841; trans. 1854) を翻訳・出版する。スピノザ (Baruch Spinoza, 1632-77) の『エチカ』 (*Ethics*, 1675 成立) を中世ラテン語から英語に翻訳したが、これは出版されなかった。シュトラウスの『イエスの生涯』は、4つの福音書に記述されたキリストの事績を、歴史的事跡とユダヤ人の歴史・文化に根差した神話とに分類したもので、無神論ではないがキリストの神性を否定する。フォイエルバッハの『キリスト教の本質』は、キリスト教における神は人間の善なる性質の投影に過ぎないとし、シンパシーを道德の基礎とする。ヘネルもシュトラウスもイエス・キリストの神性を否定して歴史上の人物とみなし、スピノザの汎神論は神と人間を区別できないとしたが (Dolin 169-79)、フォイエルバッハはさらに進んで、キリスト教の本質は「人間の性質そのものの本質」であると考えたのである (270)。フォイエルバッハによれば、「宗教の実質も目的も、全く人間的であり」「神の知恵は人間の知恵である」(270)。神と人間の関係は、「人間自身の精神的善との関係にほかならない」(185)。エリオットはフォイエルバッハに共鳴し<sup>25</sup>、『ウェスト・ミンスター・レビュー』(1855年10月)に発表した、福音派牧師カミングを批判したエッセイ「福音主義の教え——ドクター・カミング」 (“Evangelical Teaching: Dr. Cumming”) で、次のように述べている<sup>26</sup>。

The idea of God is really moral in its influence—it really cherishes all that is best and loveliest in man—only when God is contemplated as sympathizing with the pure

<sup>24</sup> ドイツにおける聖書の歴史的批評に与えられた名前。エリオットは、フォイエルバッハやスピノザの翻訳者として、キリストを人間と考え聖書の中の出来事を歴史的事実として検証するこの歴史的批評について知っていた (Rignall, “The Higher Criticism” 155)。

<sup>25</sup> エリオットは、1854年の友人宛ての手紙で、「フォイエルバッハの考えには隅々まで同意します」 (“With the ideas of Feuerbach I everywhere agree.”) と言っている (*Letters 2*: 153)。

<sup>26</sup> F・R・リーヴィス (F. R. Leavis) は、エリオットを福音主義から離れさせたのは「人生に対する根本的に敬虔な態度であり、真の知性の第一の条件の1つとなる真剣さであり、エリオットを偉大な心理学者にした人間の性質に対する関心である」と言っている (24)。

elements of human feeling, as possessing infinitely all those attributes which we recognize to be moral in humanity. (*Essays* 187)

神という概念がその影響において真に道徳的であるのは——つまり神という概念が人間の最善で最も美しい物をすべて真に愛するのは——神が人間の感情の純粋な要素にシンパシーを抱いていると考えられるときのみであり、我々が人間性における道徳であると認識するすべての属性を神が無限に所有していると思なされるときのみである。

このようにエリオットは、人間のシンパシーを道徳の基本としている。エリオットの考えるシンパシーとは、「もがき、過ちを犯す人間であるという幅広い事実以外は、すべての点で自分と異なっている人々の痛みと喜びを想像し感じること」(“to *imagine* and to *feel* the pains and joys of those who differ from themselves in everything but the broad fact of being struggling, erring, human creatures”)である (*Letters* 3: 111; Eliot’s emphasis)。エリオットもフォイエルバッハと同じく、人間の愛は「最も深く、最も真実の感情」(Feuerbach 274)であり、フォイエルバッハの言う「良心」(270)の最高の形であると考えていた (Dolin 176)。エリオットの2番目の長編小説『フロス河畔の水車場』(1860)では、「仲間意識」(“fellow-feeling”)と言い換えられている (498; bk. 7, ch. 2)。

エリオットの道徳観がフォイエルバッハ以外から受けた影響として、オーギュスト・コント (August Comte, 1798-1857) の実証主義 (“positivism”) が挙げられる。エリオットはコントの弟子ではないが、「コントの考えを非常に丁寧に勉強し、その宣伝に大きな役割を果たした」<sup>27</sup> (Wright, *Religion* 173)。コントは社会学の創始者であり、その『実証哲学講義』(*Cours de philosophie positive en soixante-douze séances*) (1830-42)によると、西洋の思想史は3つの段階に分かれる。第1段階は宗教の時代、第2段階は抽象的思想の時代、第3段階は実証的時代である。中世の神学の支配する第1段階は神や精霊の存在を信じるのが特徴の未熟な時代である。続く抽象的な段階は、宗教改革からフランス革命の失敗までで、政治的、社会的、哲学的な抽象論を誤って信じていた時代であ

---

<sup>27</sup> エリオットの内縁の夫ジョージ・ヘンリー・ルイス (George Henry Lewes, 1817-78) は、実証哲学をイギリスに最初に広めた1人であった。彼は、実証主義の雑誌『フォートナイトリー・レビュー』(*The Fortnightly Review*) が1865年に創刊された時、編集に携わった (Dolin 260)。

る。最後の実証的な段階では、道徳はより純粋な理解の形に進化する。そこではすべての現象が証明可能であり計測可能である。実証主義の道徳は「エゴイズムを抑えること」と「利他主義を発達させること」にある (Wright, *Religion* 173; Dolin 174)。コントにとって人類という概念、すなわち「世界の秩序を完全にすることに喜んで協力する人間、過去、未来そして現在から成り立つ偉大な存在」は、「人間の宗教的必要性を満たし神に取って代わるために」デザインされた (Wright, *Religion* 23)。

エリオットが人間性の善を信じる基礎となる2つの基本的な利他的本能は、愛と尊敬である。「人間の善の第1の条件は何かを愛することであり、第2の条件は何かを尊敬することである (“The first condition of human goodness is something to love; the second, something to reverence.”) (“Janet’s Repentance” 252; ch. 10)。利他主義の基本は、「[相手]にも自分と同じく自我という中心があり、そこから発する光と影は、いつも自分のものとは違うのだということ」 (“that he had an equivalent centre of self, whence the lights and shadows must always fall with a certain difference”) に気づくことである (*Middlemarch* 198; bk. 2, ch. 11)。そして実証主義によれば、利他的本能は家族関係を通じて最もよく発達する (Wright, *Religion* 193)。「ジャネットの悔悟」に登場する非情な弁護士デンプスター (Dempster) も、母親に対してだけは優しい感情を保持している。『フロス河畔の水車場』の主人公マギー (Maggie) に対してスティーブン (Stephen) は、互いの自然な恋愛感情を根拠にして、「僕たちのお互いに対する権利を無効にするものは過去には何もない……」 (“There is nothing in the past that can annul our right to each other. . .”) (497; bk. 6, ch. 14) と主張して、それまで婚約者同然に付き合っていたルーシー (Lucy) を捨てるが、マギーは「もし過去が私たちに縛るのでなければ、義務なんてどこにもないわ」 (“If the past is not to bind us, where can duty lie?”) (496; bk. 6, ch. 14) と反語疑問文で言ってスティーブンと別れる。マギーはスティーブンよりも兄トム (Tom) や従妹ルーシー、とくにトムとの関係を重視している。

## 2. 道徳とシンパシーの一般的関係

この節では、シンパシーと道徳の一般的関係を考えたい。現代におけるシンパシーとは、オックスフォード英語辞典 (*Oxford English Dictionary*) で次のように定義されている通りであろう。

3c. The quality or state of being thus affected by the suffering or sorrow of another; a feeling of compassion or commiseration.

他人の苦しみや悲しみにこのように[3b の定義のように]影響を受ける性質もしくは状態。同情あるいはあわれみの感情。

しかし 19 世紀においては、シンパシーは他人の喜びを共有することも含んでおり、エリオットは前述のように、「もがき、過ちを犯す人間であるという幅広い事実以外は、すべての点で自分と異なっている人々の痛みと喜びを想像し感じること」と定義している。エリオットの考えるシンパシーの定義は、オックスフォード英語辞典の以下の定義に該当する。

3b. The quality or state of being affected by the condition of another with a feeling similar or corresponding to that of the other; the fact or capacity of entering into or sharing the feelings of another or others; fellow-feeling. Also, a feeling or frame of mind evoked by and responsive to some external influence.

他人の感情に似た、もしくは対応する感情を持つことで、その人の状況に影響されるという特質もしくは状態。他人の感情に入り込むもしくは他人の感情を共有するという事実もしくは能力。仲間意識。また、何らかの外部の影響により引き起こされ、反応する感情あるいは心の在り様。

エリオットの定義する“sympathy”の意味で、現在は“empathy”が使われることが多い<sup>28</sup>。スタンフォード哲学百科事典 (*Stanford Encyclopedia of Philosophy Online*, s. v.

---

<sup>28</sup> オバマ大統領は小説家マリリン・ロビンソン (Marilynne Robinson) との対談で、エンパシーを次のように使っている。

When I think about how I understand my role as citizen, setting aside being president, and the most important set of understandings that I bring to that position of citizen,

“empathy”)によれば、“empathy”という語が公にイギリスで紹介されたのは、1909年に心理学者エドワード・ティチェナー (Edward Titchener, 1867–1927) が講演で、ドイツ語の“Einfühlung”の訳語として紹介した時である。“Einfühlung”は、1870年代からすでに美学にとって重要な概念として、ロベルト・フィッシャー (Robert Vischer, 1847–1933) やテオドール・リップス (Theodor Lipps, 1851–1914) が確立していた。フィッシャーによれば、我々が美的対象に感情を投影する時は、想像によって自分を対象と「置き換える」 (“transpose”) (692)。リップスは、“Einfühlung”は主体と客体との間の境界を崩壊させて他人の美的経験を包含すると考えた (372)。リップスは、感情だけでなくすべての精神的活動の認識は、その活動が人間の努力を要するものである限り、エンパシーもしくは心的模倣に基づくと見なしている (Stueber 28)。20世紀に入り、“empathy”は心理学と哲学においても使われるようになったが、その場合、“empathy”と“sympathy”は以下のように区別される。

Empathy:

I feel what you feel.

*I feel your pain.*

Sympathy:

I feel a supportive emotion about your feelings.

*I feel pity for your pain.* (Keen 5; Keen’s emphasis)

18世紀にシンパシーと道徳の関係を論じたアダム・スミス (Adam Smith, 1723–90) は、「仲間意識」 (“fellow-feeling”) とは「何らかの対象から、主に関係している人間に生じる情熱、その人間の事を考えると、注意深い見物人ならだれの胸にも沸き上がる類似の感情」であると述べる (15)。しかしスミスはエンパシーと異なり、自分の感情と他人のその交換可能性ではなく近似性を強調した。スミスは次のように述べている。

---

the most important stuff I’ve learned I think I’ve learned from novels. It has to do with empathy. . . . And the notion that it’s possible to connect with some[one] else even though they’re very different from you.

大統領であることを別にしても、社会の一員としての自分の役割をどう理解するか、社会の一員である自分にとってどういうものの見方が大事なのか、といった問題を考慮するにあたって、一番大事な点を小説から学んだと思います。それは共感と関係しています……自分とは非常に異なっている人とでもつながることができる、という考え方でした (6)

As we have no immediate experience of what other men feel, we can form no idea of the manner in which they are affected, but by conceiving what we ourselves should feel in the like situation. Though our brother is upon the rack, as long as we ourselves are at our ease, our senses will never inform us of what he suffers. They never did, and never can, carry us beyond our own person, and it is by the imagination only that we can form any conception of what are his sensations. . . . It is the impression of our own senses only, not those of his, which our imaginations copy. (13)

我々は、他の人間が感じることを直接経験する訳ではないので、同様の状況で自分がどう感じるかを想像することによってしか、彼らの気持ちが分からない。兄弟が拷問台の上にも、自分が安楽でいる限り、我々の感覚は彼の苦しみについて教えてくれない。我々の感覚は、自分自身を超えることは決してなかったし、できもしないのである。拷問台にいる兄弟の感覚をいくらかでも理解できるとしたら、それは想像による他ないのである……我々の想像力がなぞれるのは、自分の感覚の印象だけであって、兄弟のそれではない。

フィッシャーが、我々が美的対象を見る時には「自分のいわば複写、自分自身の感情の写真が見えるのだ」(691)と述べるのとは異なり、スミスにとって他人は他人であり、我々はシンパシーを、感情ではなく知的能力を働かせて感じる。このことをスミスは他人と「一緒に行く」と表現し(36)、「我々は死人に対しても同情する」と述べている(17)。シンパシーは「空想上のもの」(Smith 25)であるから、スミスによれば、シンパシーを感じる相手と同じ強さで感じることは決してない(de Bolla 75)。

また、スミスにとってシンパシーが生じるには、それを引き起こす場面に遭遇することが必要である。スミスは「誰か他人の脚や腕が殴られかけているのを見ると、われわれは自然に縮こまって、自分自身の脚や腕を引っ込める。そして実際に殴られた時、犠牲者と一緒に痛みを感じる」と言う(14)。「そのようなシンパセティックな反応は、第一に我々が見ていることに支配される……視覚資料はシンパシーのシステムを決定するにあたって必須である」(de Bolla 75)。他人の経験は、見物人が自分に当てはめたイメージを媒体として理解される。シンパシーの対象は、事実上、見物人のアイデンティティの空想が

投影されたものである。マイケル・マッキーオン (Michael McKeon) は、スミスの想像する社会は「ヴァーチャル・リアリティ」であると述べている (377)。

オードリー・ジャッフェ (Audrey Jaffe) は上述の“As we have”で始まるスミスからの引用とともにカージャ・シルヴァーマン (Kaja Silverman) の小説『目に見える世界の敷居』 (*The Threshold of the Visible World*, 1995) の一場面を引用している。

Several times a week I must negotiate my way past the crowds of homeless people on Telegraph Avenue in Berkeley. Every time I do so, I am overcome with irrational panic. . . . Then, one day, I realized that I always studiously avoided looking at the homeless people, whom, with ruthless arbitrariness, I either help or don't help. And I began to understand that my panic on these occasions is not just economic but specular. What I feel myself being asked to do, and what I resist with every fiber of my being, is to locate myself within bodies which would, quite simply, be ruinous of my middle-class self—within bodies that are calloused from sleeping on the pavement, chapped from their exposure to sun and rain, and grimy from weeks without access to a shower, and which can consequently make no claim to what, within our culture, passes for “ideality.” (26)

週に数回、私はバークレーのテレグラフ通りにいるホームレスの人々のそばを、やっとの思いで通り過ぎなければならない。そうするたびに、私は不合理なパニックに襲われる……ある日私は、自分が常に一生懸命ホームレスの人々を見ないようにしていることに気づいた。そして私が彼らに金を恵んだり恵まなかったりするの、無慈悲にもまったく恣意的である。そして私は、この場合の自分のパニックが単に経済的なものであるだけでなく、鏡の反射によるものであることを理解し始めた。私がすべきと感ずること、そして全身全霊で抵抗していることは、端的に言えば、中流階級にある自分を破壊しそうな体の中に自分を入れることである——歩道で寝ることでタコのできた体、太陽と雨に晒されてひび割れた体、何週間もシャワーを浴びないので垢で汚れた体、だからわれわれの文化で「理想」として通るものは何も要求できない体に。

スミスにおいてもシルヴァーマンにおいても、安楽な状態にある見物人は、想像によって

自分を苦しんでいる相手の立場に置き換える。スミスの公式ではシンパシーの場面は、第一義的なシンパシーの場面であると同時に、見る側と見られる側に階級差がある時には階級と文化のアイデンティティの目に見える象徴として眺めることができる (Jaffe 5)。シルヴァーマンからの引用においては、まさしく中流階級の観察者のアイデンティティが脅威に晒されている。苦しむ人は、シンパシーを抱く人の想像上の存在で、いわば架空のものである。このことをジャッフェは、「スミスのシナリオにおいて、苦しむ人は現実の存在ではなく、シンパシーが対象を生み出す」と述べている (7) したがって我々は架空の人物に対してもシンパシーを感じられるのであり、「小説の登場人物に対するシンパシーと現実の人びとに対するシンパシーの相違」は、「小説が誘う楽しい感情と現実の人間との出会いが持つ潜在的脅威の違い」である (Jaffe 7)。

シンパシーは感情ではなく複雑な過程であり、精神力の行使である。シンパシーはエンパシーが最も重視する自己と他者の融合を否定する (Greiner, "Thinking" 419)。シンパシーはエンパシーから連想される一体性や親密さを要求しない。スミスが述べたように、他者と「一緒に行く」のであり、他者は他者である。感じる側のアイデンティティを必要し、前述のようにエンパシーとは異なり、死者や架空の人物もシンパシーの対象となる。また、シンパシーは社会や文化の影響を受ける。19 世紀イギリス小説の作者、語り手、登場人物のシンパシーは、19 世紀イギリスの文化、主にヴィクトリア朝文化の影響を受ける。とくに中流階級の意識が影響する。なぜならヴィクトリア朝の小説の作者も登場人物も、中流階級が中心をなすからである。ヴィクトリア朝のシンパシーの表象は鏡の反射であり、資本主義社会を反映している (Jaffe 8)。福音主義もしくはその残光も影響するであろう。こうしてシンパシーを感じる人間はエンパシーを感じる人間と異なり、文化的背景を含む自らのアイデンティティを維持し、それに基づいてシンパシーの対象に対する道徳的判断をする。そして道徳観によってシンパシーを感じる対象が広がったり狭まったりすることが、対象の描写の仕方に影響してリアリズムの進展度に影響するのである。

### 3. 「ジャネットの悔悟」に見る比喩表現を用いたリアリズムによるシンパシーの描き方

第 1 章で、17 世紀末に明晰で分かりやすい散文を目指した運動が起こり、比喩を排除するロック派の言語観が文学理論にも影響を与え、デフォーとリチャードソンは、「対象に対するテキストの直接性と近似性」を求めてリアリティックな視点を適用し、そのために比喩的言語など他の文学的価値を犠牲にしていることに言及した (Watt 30)。またアメ

リカのポスト構造主義の代表である J・ヒリス・ミラーは、比喩は解釈を伴うからリアリズムに適さないと主張しているが、比喩を使って抽象的事実を表すことはリアリズムに沿っていることを一般的に述べた。

そこでこの節においては、「ジャネットの悔悟」(1858)を例に挙げて、エリオットの作品における比喩表現を使ったリアリズムが、読者の登場人物の苦難に対する理解を深め、登場人物へのシンパシーを高める効果を持つことを示す。具体的にはこの短編において金色の日光がシンパシーを、海の水が試練もしくは苦難を実にリアルに象徴していることを、エリオットが同じ頃に書いた旅行記と照らし合わせて論じる<sup>29</sup>。

#### (1) 「ジャネットの悔悟」の概要

物語の舞台は、エリオットがその郊外で生まれ 21 歳までを過ごした町ナニートン (Nuneaton) をモデルにした町ミルビー (Milby) である。時は 1830 年頃。ミルビーに福音派副牧師トライアン (Tryan) が赴任して来る。町の弁護士デンプスター (Dempster) はトライアン排斥運動の先頭に立つ。デンプスターには美しい妻ジャネット (Janet) がいて、彼の家庭内暴力のためアルコール中毒になっていた。ある 3 月の寒い晩、デンプスターに家を追い出されたジャネットは友人宅に身を寄せ、アルコール中毒から抜け出したいと、トライアンに助けを求める。他方、お抱えの御者を怒らせたため、自家用馬車を自分で操ることになったデンプスターは、馬に滅茶苦茶に鞭を当てた結果、馬車から放り出されて瀕死の重傷を負う。ジャネットは偶然それを知り、デンプスターを看護する。しかしデンプスターはアルコール中毒性譫妄症にかかっており、ジャネットが蛇になって暗い水の中に引きずり込もうとしていると信じている。デンプスターの死後、ジャネットは結核にかかっているトライアンを自分の家で世話する。トライアンはミルビーに来て 18 か月後、町の人々に惜しまれながら亡くなる。物語は、親戚の子供を養子にして孫もできたジャネットが慈善に生きた人生を振り返っているところで終わる。

#### (2) 「ジャネットの悔悟」執筆の背景

---

<sup>29</sup> 本節は、拙稿 “Sympathy, Morality and Metaphor: ‘Janet’s Repentance’ and the ‘Recollections,’” *The George Eliot Review Online*, no. 52, 2021, pp. 85–93 を和訳し、それに加筆したものである。

エリオットはその随筆「イルフラクームの回想、1856年」(“Recollections of Ilfracombe, 1856”)において、1856年5月8日から7月26日まで北デヴォン海岸にあるイルフラクームに内縁の夫ジョージ・ヘンリー・ルイス (George Henry Lewes, 1817-78) と滞在した時のことを記している。続いて「シリー諸島とジャージーの回想、1857年」(“Recollections of the Scilly Isles and Jersey, 1857”)においては、1857年3月26日から5月11日までコーンウォールの海岸から3キロ沖のシリー諸島の中のセント・メアリ島 (St. Mary) に、1857年5月15日から7月24日までジャージー島に、2人で滞在した時の思い出を綴っている。ジャージー島はルイスが学校時代を過ごした場所であった。エリオットはジャージー島滞在中の1857年5月30日に、彼女の3番目の短編小説で『牧師たちの物語』(*Scenes of Clerical Life*, 1858) に収録された、「ジャネットの悔悟」の第1部を書き終えた。全部書き終えたのは、ロンドンのリッチモンド (Richmond) に戻った後の1857年10月9日のことである。

この2つの旅行は、経済的理由とルイスの健康が勝れないことにもよるが、なかんずくルイスの調査のためであった。ルイスは、1854年にエリオットとドイツのワイマールに行き資料を集めた後に『ゲーテの生涯』(*Life of Goethe*, 1855) を出版し、好評であった。またルイスの『哲学の伝記的歴史』(*Biographical History of Philosophy*, 1857) は40,000部売れた。しかし、その時までにはルイスの興味の対象は哲学から自然界へと移っていた (Ashton, *G. H. Lewes* 173)。ルイスは、イルフラクームの副牧師で動物学愛好家のジョージ・タグウェル (George Tugwell) への手紙の中で、「形而上学は乾いたビスケットである——とりわけ動物学を渴望している人間にとってはそうである！」と言っている (Ashton, *G. H. Lewes* 173)。他方リン・バーバー (Lynn Barber) によれば、イギリスでは1820年代から1860年代にかけて、博物学に対する「国民的執着」があり、「博物学に関する本は、ディケンズの小説にほんの少ししか劣らない程の人気があった」(14)。たとえば、「ヴィクトリア朝の若い女性は、異なる種類のシダや菌類の名前を、20個はすらすらと言えたと思われる」(Barbar 13)。博物学者であるフィリップ・ヘンリー・ゴス (Philip Henry Gosse, 1810-88) の『水族館——深海の謎を解く』(*Aquarium: An Unveiling of the Wonders of the Deep Sea*, 1854) は、著者に900ポンドという巨額の利益をもたらした (Barbar 118)。ルイスもまた、海洋生物の本を出版するつもりであった。そこで海辺の生物、とくに軟体動物と食虫類 (たとえばイソギンチャク) の生態系を研究する必要が生じたのである。エリオットとルイスは旅の間多くの時間を、海岸の岩の間の

動物を集めたり、顕微鏡で観察して分類したりして過ごした。また2人はしばしば丘や野原を歩き、地勢や植物の特徴を書き留め、海や日没、澄み切った泉と小川、美しい野生の花を愛でた。「イルフラクーム」の中でエリオットは、自分が「土手に群生している野生の花の名前」を知らないことを嘆いている(272)。このルイスの仕事を手伝う中で経験した、海岸の生物の詳細な研究と周囲の自然界への愛情と観察が、同じ頃始まった彼女の小説執筆の過程に深く影響したことを、筆者は提示したい。

### (3) 希望の光としての金色の日光

この項では、シンパシーの重要性が金色に輝く日光の比喻を通じて表現されていることを指摘する。この小説で金色に輝く日光がシンパシーを表すために使われていること、また旅行記において幸せな来世と結びつけられていることは、第4章で取り上げる『フロス河畔の水車場』で、主人公マギーと兄トムの転覆したボートが金色に輝きながら浮かんでいる場面が天国を暗示する、という本論文の解釈にも影響する。

主人公ジャネットは夫デンプスターによって、家から3月の真夜中の寒さの中へと追い出される。彼女は玄関の外の階段の冷たい石の上に座って震え、「極度の孤独」(“utmost loneliness”)を味わいながら、しかし「一滴の涙も」(“no tears”)流さなかった(273; ch. 15)。「自分の過去の生活は遮断され、未来は黒く形がなく、まるで夜のようで」(“the door shut upon her past life, and the future black and unshapen before her as the night”)

(272; ch. 15)、彼女には自分が「幽霊」(“spectre”)に思えた(272; ch. 15)。ジャネットの完全な孤独は漆黒の闇夜に例えられている。漆黒の闇夜は、誰のシンパシーも期待できない、麻痺させるような状況を象徴している。ジャネットが立ち上がり、そして近隣の友人宅まで歩いて助けを求めることができたのは、ひとえに「苦痛と死の本能的な強い恐怖」(“strong instinctive dread of pain and death”)のおかげである(273; ch. 15)。彼女には「エネルギー」(“energy”)も「強さ」(“strength”)もあるが、孤独と自分への絶望とアルコール中毒から救われるためには、愛が必要だった(278; ch. 16)。こうしてジャネットは、それまで夫に倣って強い敵意を抱いていた、トライアンという名の福音派牧師に助けを求める。

トライアンはジャネットを絶望から救う明るい存在として提示されている。彼は決してハンサムでも印象的でもなく、「むしろ青白く、不健康と相手に思わせる」(“rather pallid, giving the idea of imperfect health”) (211; ch. 3) のであるが、シンパシーという暖かい

金色の日光をもたらす。例えば、ある日の夕刻、彼の女性支持者たちが待っている所へ彼が入ってくると、「金色の空から不思議な光が差して、彼の頭の周りに高くかき上げられた明るい茶色の髪に降り注ぎ、あたかも後光のように見える」 (“*the strange light from the golden sky falling on his light brown hair, which is brushed high up round his head, makes it look almost like an aureole*”) (211; ch. 3; my emphasis)。この個所は、エリオットの自然についてのコメントを反映している。セント・メアリ島ではエリオットとルイスは、明るく晴れた午後には座ったり寝転がったりして、波に映える銀色の日光を見ていた (“Scilly” 278)。エリオットは旅行記の中で、日光が金色に見えるのは朝と夕方だけであると述べ、そのような光には宗教的重要性があると考えている。

... we had before us the sharp fragments of rock ... standing black against *the orange and crimson* sky. How lovely to look into that brilliant distance and see the ship on the horizon seeming to sail away from the cold and dim world behind it right into *the golden glory!* I have always had that sort of feeling when I look at sunset; it always seems to me that there, in the west, lies *a land of light and warmth and love.* (“Ilfracombe” 272; my emphasis)

……私たちの目の前には、鋭くとがった岩の断片があり……オレンジ色と深紅の空に黒く映えて立っていた。光り輝く遠くを眺め、水平線上にある船が、背後の冷たくほの暗い世界から金色の輝かしい世界へ入って行くのを見るのは、なんと素晴らしいことであろう！ 私は日没を見るとき、常にそんな気持ちを抱いている。西の方には光とぬくもりと愛の国があると、私にはいつも思える。

ここでエリオットは日光を「金色の輝かしい世界」と呼び、それは存在の理想化された状態を暗示している。エリオットにとってシンパシーはすべての道徳の基本である。こうしてエリオットはオレンジ色の空にある金色の美しい世界に「光とぬくもりと愛の国」を見る (“Ilfracombe” 280)。エリオットはジャージー島でも、沈んでゆく太陽を隠している坂の裏にある、「ピンク色の東の雲に映える金色の輝き」 (“*the golden glory that is reflected in the pink eastern clouds*”) に気付いている (“Scilly” 280, my emphasis)。エリオットは日没の金色の美しさを、愛のある場所との繋がりゆえに深

く尊重しているのである。

トライアンのシンパシーと金色の日光との関係は、トライアンの死後、ジャネットを包む日光の中にも見出される。夫を失った後、ジャネットは結核で弱ったトライアンの世話をするが、この間に 2 人は恋に落ちる。トライアンの葬式から帰宅したジャネットは、「春の日光に輝く金色のクロッカスを眺めながら」(“looking at *the golden crocuses* bright in the spring sunshine”) 庭を歩く (333; ch. 28, my emphasis)。「イルフラクーム」の中でもエリオットは、春の陽光を浴びた植物を「金色の輝くもの」(“golden glory”)として描いている。「木々の葉が盛りになるのは、春のその瞬間である……そしてハリエニシダはすべて金色に輝いている」(“It was just that moment in Spring when the trees are in full leaf . . . And the furze was in all *its golden glory!*”) (“Ilfracombe” 267, my emphasis)。エリオットはまた、「丘は、ハリエニシダの花と一緒に輝いている」(“their sister hills were glowing with furze blossoms.”)とも言っている (“Ilfracombe” 267-68)。したがってジャネットがトライアンの死を嘆くときに彼女を包む柔らかい陽の光は、金色のクロッカスの成長を助ける金色の陽光と同じく、劇的で比喩的な役割を担っている。この日光は、トライアンがジャネットに、死後もジャネットが来るまでは「永遠の眠り」(“eternal repose”) (333; ch. 27) には就かないと約束した時の、ジャネットに対する深く穏やかな愛情 (シンパシー) を体現しているのである。

金色の日光はまた別の場面で、ジャネットに対するトライアンのシンパシーの象徴として用いられている。トライアンに自らの苦難を告白した後、ジャネットは自信を取り戻し、トライアンの説教を聞きに教会に行く。語り手は、「ジャネットの自身への絶望という冷たく暗い牢獄のドアが開き、朝の金色の光が祝福された戸口から斜めに注いでいる」(“a door ha[s] been opened in Janet’s cold dark prison of self-despair, and *the golden light of morning* was pouring in its slanting beams through the blessed opening.”)と言っている (297; ch. 21, my emphasis)。この引用が先に引用した水平線へと消える船の状況 (“Ilfracombe” 272) と非常に似通っていることに注目すべきである。

ジャネットが住んでいる醜いミルビーの町も、「沈んで行く太陽の光」(“descending sunlight”)の中で「色が昼寝から覚めた」(“colour has awakened its noonday sleep”)

時、美しい町へと変身する (328; ch. 26)。この歓迎すべき変身はイルフラクームでのエリオット自身の経験を思い起こさせる。エリオットはイルフラクームを魅力のまったくない場所と見なしていた。

... as the sun was setting over the sea behind us ... some peculiar arrangement of clouds threw a delicious evening light ... and merged the ugliness ... in *an exquisite flood of colour*—as a stupid person is made glorious by a noble deed. (“Ilfracombe” 264, my emphasis)

……太陽が私たちの背後の海の向こうに沈んで行く時……雲の、ある一風変わった配置が、素晴らしい夕べの光を投げかけた……そして醜い町を……極めて美しい色の洪水の中に吸収した——ちょうど愚かな人が高貴な行いによって光り輝くように。

イルフラクームでは、家は「このうえもなく薄いすすけた灰色」 (“palest dingiest grey”) で、単調な「長方形でみすぼらしく」 (“all rectangular and mean”) (“Ilfracombe” 264)、「藤壺」 (“a few barnacles”) のように丘の真ん中に群れている (“Ilfracombe” 265)。しかし金色の夕べの日光はそのような醜いものを消し去り、醜い町を美しい存在へと変えるのである。

日光による醜い町の変身は、シンパシーによる町の人びとの変身でもある。ミルビーの副牧師として新しく赴任したトライアンが、日曜日の夕べの説教のために初めて教会へ行ったとき、彼とその支持者たちは、敵意に満ちた群衆が「嘲りの目」 (“derisive glances”) で見、「不平を鳴らす声、喚き声、シッと追い払う声、馬鹿笑い」 (“groans, howls, hisses, and hee-haws”) が響く中を進んだ (247; ch. 9)。トライアンは外面的には穏やかであったが、これらの発言によって深く傷ついていた。しかし、18 か月後に同じ通りをトライアンの棺が通った時、「男も女も、友として亡き人を悼む長い行列をなして」 (“a long procession of mourning friends, women as well as men”) 棺に従った (332; ch. 28)。

冷酷非道なデンプスターも少なくとも自分の母親に対してはシンパシーを抱いており、そのことも日光に言及しながら描かれる。デンプスターが母親を庭の散歩に連れ出し、

「日陰から陽だまりへ、陽だまりから再び日陰へと」(“out of the shadow into the sunshine, and out of the sunshine into the shadow again”) 歩く時、「人間の心に深く根を下ろした愛と善良さ」(“the roots of human love and goodness”) がまだ生きていと語り手は言う (232; ch. 7)。しかし、デンプスターの母親の葬式に際し、「彼の守護天使は、墓の縁に翼を広げ立ち去りかねていた」が (“his good angel, lingering with outstretched wings on the edge of the grave”)、ついに彼を見捨て永遠に飛び去ってしまう (267; ch. 7)。

デンプスターは、無茶苦茶に馬に鞭を振ったせいで、馬車から投げ出される。彼が重体で家に運ばれる時、「半分沈んだ赤い太陽が……彼の家の突き出した2階の窓を真っ赤に染めた」 (“The red half-sunken sun . . . crimsoned the windows of Dempster’s projecting upper story.”) (298; ch. 21)。エリオットが、イルフラクーム沖の水平線上の船が「金色に輝く中へと」消えて行くのを見た時、その金色の美しく輝く世界は空のオレンジ色の部分の下にあった。デンプスターの家のドアを照らす赤い日光は何かもっと不気味なこと、つまり、彼が「光とぬくもりと愛の国」に向けて旅立つのではないことを暗示しているかもしれない。このようにデンプスターは、母親に対して以外は非道な人間として描かれ、死後の行先もシンパセティックな人間とは異なるのである。

#### (4) 水による試練

「ジャネットの悔悟」においてエリオットは、同情の源もしくはシンパセティックな人間を表すために、泉のイメージを用いている。ジャネットは夫に家から追い出された後、孤独と自分への絶望から救ってくれる人間を探しているうちに、トライアンを「まだ試したことの無い、水が甘いかもしれない泉」 (“an untried spring, where the waters might be sweet”) として思い出す (278; ch. 15)。この比喩的用法の由来となった泉は、ルイスとの散歩の回想録の中に見つかる。エリオットとルイスは散策するうちに、いくつかの泉に出会った。エリオットは、「それらの小道で最高に美しいものは泉であり」 (“the crowning beauty of the lanes is the springs”) (“Ilfracombe” 272)、そして「泉というものは、自然を愛し崇拝する者にとって未だに神聖な場所である」 (“Springs are sacred places still for those who love and reverence [sic] Nature”) (“Ilfracombe” 268) と言っている。このように泉はエリオットにとって神聖で役に立つ存在である。

これと対照的に、海の水は「ジャネットの悔悟」においては主人公の苦難を象徴するた

めに用いられている。デンプスターの家庭内暴力は、自身の影響力が法律事務所においてもトライアン排斥運動においても低下すると激しくなる。ジャネットの心理は、「前の波が落ちる前に、新たな嵐によって激しく揺さぶられる荒れた海」(“a vexed sea, by a new storm before the old waves have fallen”)に例えられている(265; ch. 13)。エリオットはまた、「シリー」の中で、風が強いときには波の「白い泡」(“white foam”)が岩にぶつかって、噴水のように岩の上方に舞い上がっていたことを思い出している(“Scilly” 277)。このことが比喩としてジャネットの苦境に適用されると、彼女の苦境は彼女の個人的落ち度ではなく、外部の力によることが暗示される。波の比喩は、デンプスターがついにジャネットを家から追い出す時に、再び使われている。語り手は読者に、ジャネットが「黒い洪水がカーテンのように落ちてくる時」(“when the dark flood has fallen like a curtain”)、その下にいると告げる(272; ch. 15)。ここではジャネットは、窒息死の苦しみを味わいながら死にかけている人に例えられているのである。

デンプスターによって家から追い出された後、ジャネットが最後の手段としてトライアンに助けを求めることは、すでに述べた。彼に縋っているジャネットは、「つるつる滑る岩のてっぺんにしがみついて」(“clinging to a slippery summit of rock”)「どんどん高まってゆく波の中で」(“while the waves are rising higher and higher”)海岸から救助ボートが来るのを見つめている人間に似ていると語り手は述べる(287; ch. 18)。エリオットはこの部分を、セント・メアリ島を去った後、そこでの経験を思い出しながら書いた。その島の南側には、有名な花崗岩の海岸がある。「特徴的な形」(“characteristic forms”)と様々な美しい色の巨石で満ちていて、その巨石にはフジツボがまったく付いておらず、カサガイもほとんど付いていなかった(“Scilly” 277)。海の水は「水晶のように透明で」(“clear as crystal”)水面下の岩がはっきりと見え、巨大な岩が砂地に散らばっている湾では、潮が引いた時だけ、巨石が姿を表す(“Scilly” 277)。ヒースとハリエニシダが続いて生えているこの海岸を散策することを、エリオットは非常に気に入っていた(“Scilly” 277)。ジャネットがアルコール中毒と自分への絶望から逃れようとする努力を、海で溺れまいとする努力に例えることには、エリオットがセント・メアリ島の南海岸を観察したことの影響がある。ジャネットの周りの水が透明であるというコメントは物語にはないが、エリオットは明らかに、セント・メアリ島の透明な水のヴィジョンを念頭に置いて書いている。ジャネットの絶望からの解放というヴィジョンは、彼女を攻撃する外部の力でなく、むしろトライアンに心を開き、神の慈悲だけでなくトライアンのシンパシーを受け入れることに

懸かっているのである。

これと対照的に、馬車から落ちた後、死の床に横たわっているデンプスターは、ジャネットの心の中では、地獄を想起させる「真っ黒な嵐の海」(“the black storm-waves”)の中に落ちて行く運命にある(312; ch. 14)。彼はジャネットの、彼を許し彼の世話をしたいという強い願いに気づくことができない。ジャネットは彼の顔を一生懸命に見つめるが、彼の顔は「意識は虚ろでやつれた動物的な表情」(“blank consciousness and emaciated animalism”)を浮かべているだけである(311; ch. 14)。したがって彼女は、自分が「なす術もなく岸辺に立っている」間に(“helpless on the shore”)、彼が「彼女の手の届かない遠い遠い所へ」(“far, far out of her reach”)落ちていくように感じる(311; ch. 14)。デンプスターの運命——彼に定められた水平線——は、エリオットがイルフラクームの日没で目撃した金色に輝く世界とは非常に異なっている。

そのうえデンプスターはアルコール中毒性譫妄症に苦しんでいる。その妄想の中で、彼は以前虐めた人たちから復讐のために攻撃される。彼の妄想には虱、ヒキガエル、蛇が登場し、ジャネットはその胸が黒い蛇となって「[彼に]絡みつこう」(“twine around [him]”)とし、また白蛇のような腕で「[彼を]冷たい水に引きずりこもう」(“drag [him] into the cold water”)としている(306; ch. 23)。ジャネットはデンプスターの回復を願っているのであるが、少なくとも彼の心の中では、彼女は自分の復讐に成功しそうな敵に過ぎない。デンプスターが妄想するジャネットの執念深さは、蛇に唆されて善悪についての知恵を得るイブを想起させると指摘する批評家もいる(Spilka 34)。あるいはジャネットはギリシア神話の復讐の女神ネメシスの代理人として働いているかもしれない。ネメシスの巨大な左手について、この小説の他の箇所では、デンプスターの影響力が低下するにつれ、彼の酒量が増すとともに彼の健康状態が悪化していることが述べられ、つぎのように説明されているからである(Gilbert and Gubar 489-90)。

Nemesis is lame, but she is of colossal stature, like the gods; and sometimes, while her sword is not yet unsheathed, she stretches out her huge left arm and grasps her victim. The mighty hand is invisible, but the victim totters under the dire clutch. (265; ch. 11)

応報天罰の女神ネメシスは、足が不自由であるが、他の神々と同様に、その姿は

巨大である。時にはまだ剣を抜かないうちに、その大きな左腕を伸ばして生贄をつかむ。その力強く恐ろしい手は目に見えないが、生贄は、これにしっかりとつかまれてよろめく。

語り手はメデューサにもクラゲにも言及していないが、「イルフラクーム」とルイスの『海辺の研究』は、エリオットが両方のイメージを抱いていることを強く暗示している<sup>30</sup>。彼女は、浜辺の生物を採集中、初めてアンテア・ケレウス（Antea Cereus、ポリープつまりイソギンチャク的一种）に出会ったことを、最大の喜びを持って記すとともに、その「淡黄褐色の触手」（“the pale fawn coloured tentacles”）を「小さな蛇のように荒々しく動く」（“viciously waving like little serpents”）と表現している（“Ilfracombe” 265-66）。さらにルイスはメデューサ（ルイスはクラゲをこう呼ぶ）とポリープ（イソギンチャク）の近似性を『海辺の研究』の中で断言している。彼はポリープ（イソギンチャク）は、有性生殖及び無性生殖により、ポリープ（イソギンチャク）だけでなくメデューサ（クラゲ）も生むと説明しているのである（311）。したがってエリオットはおそらく、アンテア・ケレウスの触手をクラゲのものと同一視しているのであり、この観察から蛇のような白い腕を思い付いたのではないか。そこからエリオットは当然メデューサを連想し、黒い蛇に変身するジャネットの胸を考案したに違いない。メデューサはうっかりそれを見た人間を直ちに石に変えてしまうほど強力な怪物なので、様々な事物を象徴してきた。例えば詩人にとっては「詩神」、フェミニストにとっては「強力な女性の印」、精神分析医にとっては「去勢の恐怖の象徴」、政治理論学者にとっては「反逆の人物」などである（Gaber and Vickers 1）。

ところで、第2項の終わりで述べたようにデンプスターは長らくジャネットを虐待してきたが、母親に対しては深い思いやりを示す。デンプスターの母親は、ヴィクトリア朝イングランドの理想的なタイプの妻及び母であり、常に夫と息子に従い、家庭の外の世界には興味を持たず、夫と息子を家庭で快適に過ごさせるために自分の人生を捧げてきた。彼女は息子の欠点もジャネットへの暴力も決して認めない。しかしな

---

<sup>30</sup> 矢野奈々は、クラゲの別名からギリシア神話のメデューサを導き、このメデューサは父権制の転覆を象徴すると主張している（113）。しかし、エリオットが生涯を通じて女性参政権運動と距離を置いていたことは、父権制の転覆という解釈を難しくする（Cf. Dolin 40-42）。また、白い蛇の説明がない。

がら、幸福に憧れ、献身し尽くした後、彼女には「墓場以外に希望は全くない」(“no hope remains but the grave.”) (229; ch. 7)。彼女と対照的に、ジャネットは「残酷さによって弱くなることはない」(“not to be made meek by cruelty”) (264; ch. 8)。デンプスターが無分別に彼女を殴るとき、彼女は鋭く言い返して「[彼の]憎悪の刃を研ぐ」(“whets [his] edge of hatred”) (264; ch. 8)。デンプスターは、その妄想の中でどんなに混乱していても、自分の母親の弱さと対照をなすジャネットの潜在的抵抗能力をはっきりと認識している。この点からもエリオットは、ジャネットが襲ってくるというデンプスターの讒言を描いていた時、メデューサのイメージを思い浮かべていたことが想像される。なぜなら、ジャネットの腕が白い蛇となり、胸が黒い蛇となって彼を冷たい水の中に引きずり込むというのはギリシア神話の怪物メデューサの特徴ではないが、クラゲのイメージから発展して、デンプスターのジャネットに対する恐怖を表すことができるからである。

## 結論

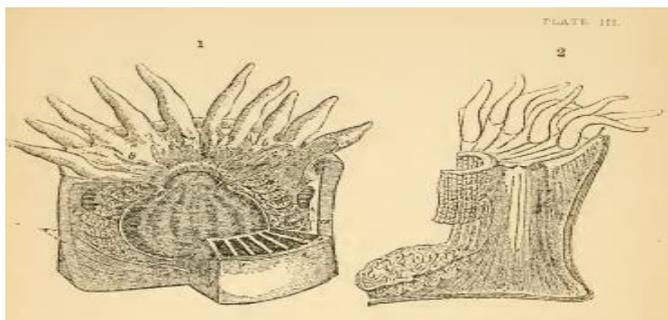
この章ではまず、シンパシーを基礎に据えたエリオットの道徳観について説明した。エリオットは、神は人間の善の投影であるとするフォイエルバッハに賛同している。そして道徳的判断は、宗教や世間的公理でなく、過ちを犯した人に寄り添うことによりなされるべきと考えている。

次いで、なぜ相手に対するシンパシーが道徳の基礎となり得るのかにつき説明した。道徳的判断にシンパシーを用いることは、18世紀にすでにアダム・スミスが主張している。本章ではシンパシーをスミスの『道徳感情論』に基づき、また近年シンパシーに変わって使用される事の多いエンパシーとの相違に言及して説明した。エンパシーが自己と他者の感情の融合を意味するのに対して、シンパシーは苦しんでいる人もしくは喜んでいる人を見ている人が、その状況に自分を当てはめてその時の自分の感情を想像することで成立する。いわばヴァーチャル・リアリティの世界である。したがって他者がフィクションの中の人物であっても成立する。また、シンパシーを抱く人間のアイデンティティは失われないので、シンパシーを感じる側の文化がシンパシーの持ち方に影響する。19世紀イギリス小説の場合は、登場人物も作家も中流階級の人間が中心であるから、その文化や見識、とくに福音主義や資本主義倫理が影響する。エリオットは、読者がシンパシーに乏しい平凡な人間も「我々の仲間」として受け入れることを望み、そのためにリアリズムの手

法を用いているが、エリオット自身がシンパシーに乏しい人間にシンパシーを抱いていない場合は、シンパシーに欠ける人間のポジティブな側面を描くことはできない。

この章の最後では、エリオットがイルフラクーム、セント・メアリ島、ジャージー島での自然観察から得た日光と水の比喻を使って、日光でシンパシーを泉でシンパシーへの憧れを、海の水で孤独と人生の苦闘を、いかに効果的に描いているかを示した。J・ヒリス・ミラーは、比喻は読者のイメージもしくは解釈によって成り立っているから、言葉と現実の一対一対応による現実世界の忠実な描写というリアリズムは成り立たないと考えるが、リアリズムにおいても、言葉と現実の一対一対応は必要でないことは第1章で説明した。読者が小説の言葉にリアリティを感じる事が重要なのである。迫真性のある適切な比喻表現には、読者の理解を深め、登場人物へのシンパシーを高める効果があると言える。

またエリオットはルイスとともに海辺の生態系の研究を経験した。『海辺の研究』には、海辺の生物の綿密な挿絵が載せられている。その中には、触手が蛇を想起させるポリープ（イソギンチャク）の一種もある（下図）。この博物学の記録の方法、すなわち自然



Illustrations of an Actinia from *Sea-Side Studies* (Plate III)

の物を注意深く正確に観察し、分類し、記録することは、エリオットが小説を書く方法に影響を与えた。すなわち、主人公ジャネットのシンパシーに欠ける夫デンプスターは、シンパセティックなジャネットや牧師トライアンとは明確に区別して描かれている。このシンパシーに欠ける人物とシンパセティックな人物を明確に分類する態度は、第3章で論じる『アダム・ビード』に引き継がれるのである。

### 第3章 語り手の心の鏡に映らないヘティ——『アダム・ビード』のリアリズム再考

『アダム・ビード』(*Adam Bede*, 1859)がリアリズム小説であることは、エリオットの時代から今日まで、ほとんどの批評家に当然のこととして受け入れられてきた(Miller, *Reading* 6)<sup>31</sup>。エリオット自身も、『アダム・ビード』第17章で語り手を通して、「ありふれた物の忠実な模写」(“the faithful representing of commonplace things”)を宣言している(162; bk. 2, ch. 17)。しかし同時にエリオットは、リアリズムの限界も承知しており、同じ章で、語り手を通して表象の難しさを鏡に喩えている。鏡は鏡像にゆがみや欠落を生じる(159; bk. 2, ch. 17)。つまり、リアリズム小説においてもその描写が真実と一致する保証はなく、何らかの理由で語り手の心の鏡に映らない事柄は描写から抜け落ちるのである。『アダム・ビード』の主人公の1人ヘティ・ソレル(Hetty Sorrel)の、ホール・ファーム(Hall Farm)を出てからの心理描写に注目すると、そこには描かれていない——いわば語り手の心の鏡には映っていない——事柄が多くある。本章では、『アダム・ビード』のリアリズムの限界について、ヘティの心理描写を手掛かりとして検討する<sup>32</sup>。

#### 序論

##### (1) 『アダム・ビード』の概要

『アダム・ビード』は、1799年6月から1807年6月までの主人公たちの8年間の歴史を描いている。タイトルとなっている主人公アダム・ビードは、エリオットの父親がモデルとされているが、ヘイスロープ村(Hayslope)の実直で保守的な若い大工で、仕事への献身と才覚が彼の道徳の基盤となっている。ヘティは、ヘイスロープで長年テナント農家として大いに尊敬されているポイザー家(the Poyzers)の当主の姪で、8歳の頃両親を亡くして引き取られ、ホール・ファームでポイザー夫人の手足として9年間働いている。アダムはヘティを愛しているのだが、彼女は、地主の跡継ぎで若くハンサムなアーサー・ドニソーン(Arthur Donnithorne)との結婚を夢見て、彼と関係を持つ。アーサーの子を妊娠したヘティは、アーサーに会いにヘイスロープを出る。しかし、ウィンザー

<sup>31</sup> ミラー自身は、比喩がリアリズムを妨げることを理由に、『アダム・ビード』のリアリズムを否定的に捉えていること(82)は前述した。

<sup>32</sup> 本章は、拙稿「語り手の心に映らないヘティ——『アダム・ビード』のリアリズム再考」、『ジョージ・エリオット研究』第24号, 2022年, pp. 65-81に大幅に加筆したものである。

(Winsor) にいると思ったアーサーは、アイルランドの民兵隊に配属されていた。恥を忍んで帰ることもできず自殺を考えながら放浪するうちに、ヘティは出産する。彼女は生まれたばかりの赤ん坊を森の中に捨てて死なせてしまう。彼女は裁判にかけられ死刑判決を受けるが、執行直前にアーサーが手に入れた減刑書により、オーストラリアへ7年間の流刑になり、刑を終えて帰国する途中に亡くなる。物語の終わりでは、アダムはヘティに同情したために寛大な人間に成長するとともに、大工の作業場の棟梁からオーナーに出世している。

ヘティと対照的な存在がダイナ・モリス (Dinah Morris) である。同じく孤児で彼女はポイザー夫人の姪だが、工場で働きながら、豊かな農村のヘイスロープから遠い貧しい鉾山の町スノーフィールド (Snowfield) でメソヂストとして説教師をしている。ヘティに牢獄で嬰兒殺しの経緯を告白させ、死刑場まで荷馬車に乗って付き添ったのも彼女である<sup>33</sup>。ヘティがアーサーの嘆願の結果、オーストラリアに流刑になって後、アダムはダイ

---

<sup>33</sup> エリオットは、『『アダム・ビード』の歴史』 (“History of *Adam Bede*”) を 1858 年 11 月 30 日の日記に書いている。彼女の父親の弟の妻サミュエル・エヴァンス (Samuel Evans) は、アルミニアン派のメソヂスト説教師で、生後 6 週間の自分の嬰兒をヒ素で毒殺し自白を拒否している女と監獄で一晩過ごし、一緒に祈って自白させたうえ、絞首刑場まで荷馬車に乗ってついて行った。ダイナのモデルはこの叔母であるが、容貌も性格も異なる。またアダムの性格の一部は、エリオットの父親の若い頃から取られている (Eliot, *Journals* 296–98; Haight, *Biography* 28–29)。当時の新聞によると、嬰兒殺しのモデルとなったメアリ・ヴォーチェ (Mary Voce) は、夫がありながら不倫を重ね、そのことで夫から折檻され、夫への報復として子供を殺した。1802 年 3 月 11 日に起訴され、同 16 日に処刑された (*Adam Bede*, “Appendices 1, 2” 490–95)。サリー・ミッチェル (Sally Mitchell) は、エリオットが『アダム・ビード』の参考にしたその他の資料として、エリオットが「墮落した」女性という社会的にタブー視される人物に焦点を当てた先行する小説を読んだかもしくは知っていたであろうと述べ、エリザベス・ギヤスケル (Elizabeth Gaskell, 1810–65) の『ルース』 (*Ruth*, 1853)、ナサニエル・ホーソン (Nathaniel Hawthorne, 1804–64) の『緋文字』 (*The Scarlet Letter*, 1850) などを挙げている (66)。またエリオットは、『アダム・ビード』を書き始めた頃、ワーズワース (William Wordsworth, 1770–1850) を再読しており、『抒情歌謡集』 (*Lyrical Ballads*, 1800, 1802) に収録された「茨」 (“The Thorn”) も影響したと思われる (Gribble 105)。エリオットは、

ナに恋をして、2人は結婚する。物語の終末は、始まりと同じくアダムの仕事場で、同じく夕日に照らされており、アダムに似た男の子とダイナに似た女の子がいる。ダイナはメソヂスト会議の決定で説教を禁じられ「家庭の天使」<sup>34</sup>を思わせる主婦になっている。

## (2) 『アダム・ビード』のリアリズムに関する先行研究と本章の目的

U・C・クネプフルマッヘル (U. C. Knoepfelmacher) は、田園小説の定義を寓話的に捉え、『アダム・ビード』をミルトンの『失樂園』と読み替え、小説の目的が通常の生活を描くことにあるにしては、『アダム・ビード』の登場人物は理想化されすぎていると考えている (*Early Novels* 89–127)。しかし、第1章において説明したとおり、リアリズムは読者にリアリティを感じさせる心理や外部事情を詳細かつ客観的に描く手法であるから、理想的な登場人物がいてもリアリズムは成立する。エリオットの他の小説にも『ロモラ』のロモラなど、理想的な人物は登場する。

『アダム・ビード』は前述の通りほとんどの批評家にリアリズム小説と見なされてきた。ジュディ・グリフィス (Judy Griffith) は、一見変わらず安定しているかに見える架空の村に属する平凡な登場人物の運命が、時間の経過に連れて確実に変化していることを描く点に「まさにエリオットのリアリズムの関心がある」(16)と述べている。物語はアダムが大工仕事の作業場にいる1799年6月の夕方に始まり、1807年6月の夕方に同じ場所にアダムがいて物語は終わるのであるが、アダムは大工の棟梁から作業場のオーナーに出世し、ヘティではなくダイナと結婚して2人の子供がいる。平凡な生活の中での人間の確実な変化を描くところに堅固なリアリズムが見出せるのである。

セアラ・ゲイツ (Sarah Gates) はテナント農家の主人の姪であるヘティが荘園領主の跡取りの誘惑に陥ることに階級制度の弊害のリアリティが描かれ (28–29)、またメソデ

---

出版社社主のジョン・ブラックウッド (John Blackwood) 宛の1858年4月1日付の手紙で、スコットの『ミドロジアンの心臓』(*The Heart of Midlothian*, 1818)を挙げて、『アダム・ビード』の未婚の母親と嬰兒殺しという不道德な話を小説にすることの妥当性を弁護している (*Letters* 8: 201; Ashton, *Life* 194)。

<sup>34</sup>「家庭の天使」という名称は、コヴェントリ・パトモア (Coventry Patmore, 1823–96) が妻エミリー (Emily) に捧げた詩集『家庭の天使』(*The Angel in the House*, 1854–63) に由来する。女性は家庭で、家族に安らぎと無償の愛を与える天使のような存在であることを理想とするヴィクトリア朝の社会通念を表す。Cf. Sedgwick 140–44.

イストの説教師として人生を神に捧げるつもりであったダイナがアダムと結婚することに父権制社会の弊害のリアリティが示されていると述べ（32）、作品に描かれた階級制度と父権制にリアリズムを見ている。ジリアン・ビア（Gillian Beer）も、男性の語り手はヘティとダイナを「犠牲にしている」（*George Eliot* 72）と述べている。

イアン・アダム（Ian Adam）は、『アダム・ビード』がリアリズム小説である根拠を、登場人物の社会階層や性格が珍しくなく、物語の舞台も身分の低い典型的な農民の社会であること、悲劇的事件もありふれた誘惑から生じること、さらにこれらの主題の扱いにおいて、時と場所の詳細が一貫しており歴史的に正確であること、背景事実が豊かで詳細であることなどに置いている（127）。エリオットの中期以降の作品は「道徳的寓話」であると考えた批評家も、エリオットの初期作品に現れた、エリオットになじみの深いイギリス中西部の農村生活と風景の描写を称賛していることは序論第2節で述べた。

『アダム・ビード』にリアリズムを見出すこれらの見解は、本章も認めるところである。『アダム・ビード』における農民の生活の一場面を具体的に見てみよう。次に引用するのは、アダムが久しぶりにポイザー一家を訪れ、ヘティがサ克蘭ボを集めているのを手伝った後、一緒に母屋に入って来る場面である。農家の生活のありふれた情景が生き生きと描写されている。

The yard was full of life now: Marty was letting the screaming geese through the gate, and wickedly provoking the gander by hissing at him; the granary-door was groaning on its hinges as Alick shut it, after dealing out the corn; the horses were being led out to watering, midst much barking of all the three dogs and many “whups” from Tim the ploughman, as if the heavy animals who held down their meek, intelligent heads, and lifted their shaggy feet so deliberately, were likely to rush wildly in every direction but the right. Everybody was come back from the meadow; and when Hetty and Adam entered the house-place, Mr. Poyser was seated in the three-cornered chair, and the grandfather in the large arm-chair opposite, looking on with pleasant expectation while the supper was being laid on the oak table. (203; bk. 2, ch. 20)

裏庭は今、生き物で一杯だった。マーティはガーガー鳴く雌のガチョウたちを門から入れ、雄のガチョウにはシーッと挑発して意地悪をしていた。穀物倉庫の扉は、アリックが麦を分配した後に閉めると、蝶番がギーッと音を立てた。馬たちは水を飲むために、外に出してもらったところだった。3匹の犬が揃って馬たちに向かって吠えた。その従順で賢い頭を垂れ、毛むくじゃらの足をゆっくりと持ち上げる重い動物たちが、あたかも見当違いの方向にやみくもに突進しそうであるかのように、馬は農夫に何度も「鞭」で打たれた。皆、牧草地から帰っている。ヘティとアダムが家に入ると、ポイザー氏は三角椅子に座っており、ポイザー氏の父親は向かい側の大きな肘掛椅子に座り、夕食が檜の木の食卓に並べられる間、期待しながら喜ばし気に眺めていた。

この一節では、この時点におけるポイザー一家の家に存在するさまざまな生き物の詳細な描写が、大きなテナント農家の暮らしという一幅の絵を構成している。他にも、ポイザー一家が農夫をもてなす、年に1度の収穫時の宴会、ポイザー一家の小麦畑の一部を牧草地と取り替える交渉に来た荘園領主にポイザー夫人が弁舌で立ち向かう場面など、庶民の生活の喜怒哀楽を描く場面は、平凡を詳しく描くというエリオットのリアリズムに沿っている。

『アダム・ビード』第17章は、庶民の生活を描いたオランダ絵画が自らのリアリズムの手本であると言い、1人で正餐を食べる老女の横で、木の葉に仕切られて和らいだ日の光が彼女の室内帽や糸巻車の縁、石製の水差しに当たっている絵を例として挙げている<sup>35</sup>。彼女の所有物は皆ありふれた安物であるが、彼女の暮らしにとって貴重な必需品である。

次に農民の心理や言葉を描いた場面を見よう。ヘティとダイナの伯父で大規模なテナント農家の当主であるマーティン・ポイザーが、アダムの父親の葬式に参列するために朝教会に行く途中で、日曜日には仕事をしない主義を正当化する長閑な場面を取り上げる。

The damp hay that must be scattered and turned afresh tomorrow was not a cheering sight to Mr. Poyser, who during hay and corn harvest had often some mental

---

<sup>35</sup> エリオットは、『アダム・ビード』第17章を書いていた1958年4月に、ミュンヘンの美術館を訪れており、このことがリアリズムとそのオランダ絵画との関係についてのエリオットの議論に影響を与えた (*Adam Bede*, “Explanatory Note 161”)。糸巻車の横で食前の祈りを捧げている物語中の老女の絵は、ヘラルト・ドウ (Gerard Dou, 1613–75) の「糸紬女の食前の祈り」 (“Betende Spinnerin”) である (Witemeyer 108)。

struggles as to the benefits of a day of rest; but no temptation would have induced him to carry on any field-work, however early in the morning, on a Sunday; for had not Michael Holdsworth had a pair of oxen “sweltered” while he was ploughing on Good Friday? That was a demonstration that work on sacred days was a wicked thing; and with wickedness of any sort Martin Poyser was quite clear that he would have nothing to do, since money got by such means would never prosper.

“It a’most makes your fingers itch to be at the hay now the sun shines so,” he observed, as they passed through the “Big Meadow.” “But it’s poor foolishness to think o’ saving by going against our conscience. There’s that Jim Wakefield, as they used to call ‘Gentleman Wakefield,’ used to do the same of a Sunday as o’ week-days, and took no heed to right or wrong, as if there was nayther God nor devil. An’ what’s he come to? Why, I saw him myself last market-day a-carrying a basket wi’ oranges in’t.” (174–75; bk. 21, ch. 18)

明日はまた散らばってひっくり返るに違いない濡れた乾草を見るのは、ポイザー氏にとって楽しいことではなかった。ポイザー氏は、乾草と小麦の収穫時には安息日の効用について精神的に葛藤することが多かった。しかし、日曜日にどんなに早起きしても、畑仕事をする気にはならなかった。というのも、マイケル・ホールズワースは、聖金曜日に畑を耕していて、牡牛2頭を「熱射病」でやられてしまったのではないか。あれは、聖日に働くのは不道德だという証拠だ。そして不道德な事には何であれ、マーティン・ポイザーは無縁だった。というのも、そのような手段で得たお金が役に立つことは決してないから。

一行が「大牧草地」を通過した時には、「こんなに太陽が照っている時に干し草のところを通るなんて、指がムズムズするね」とポイザー氏は言った。「しかし、良心に反してまで金を貯めることを考えるなんて、馬鹿げたことさ。あのジム・ウェイクフィールド、『ウェイクフィールドの旦那』なんて呼ばれている男がいてね。日曜日でも平日と同じく働いていたものさ。神も悪魔もいないって風にさ。それでどうなったと思う？ この前の『市の日』にあの男がオレンジをバスケットに入れて売り歩いているのを見たよ」

ポイザー氏は、日曜日に自分が畑仕事をしない理由を（主筋とは無関係な登場人物の、ヘイスロープの界限ではよく知られた）田舎の挿話で理屈づけている。ポイザー氏の方言や状況の生き生きとした描写がリアリズムに資するだけでなく、第2段落が同じ種類の別の挿話の繰り返して情報が少ないことも、「そのようなゆっくりした手順は、日曜日と小説の豊かな田舎の背景にふさわしい」（Adam 129）<sup>36</sup>。

最後にヘティの深刻な心理状態を描いた場面を引用する。ヘティがウィンザー（Winsor）でアーサーに会うことが出来なかった時、これから先の旅費の心配をする場面である。彼女の所持品が細かく示されることにより、ヘティの心細さが浮かび上がる。

It was then she thought of her locket and earrings, and seeing her pocket lie near, she reached it and spread the contents on the bed before her. There were the locket and earrings in the little velvet-lined boxes, and with them there was a beautiful silver thimble which Adam had bought her, the words “Remember me” making the ornament of the border; a steel purse, with her one shilling in it, and a small red-leather case fastening with a strap. Those beautiful little earrings with their delicate pearls and garnet, that she had tried in her ears with such longing in the bright sunshine on the 30<sup>th</sup> of July! She had no longing to put them in her ears now: her head with its dark rings of hair lay back languidly on the pillow, and the sadness that rested about her brow and eyes was something too hard for regretful memory. Yet she put her hands up to her ears: it was because there were some thin gold rings in them, which were also worth a little money. Yes, she could surely get some money for her ornaments: those Arthur had given her must have cost a great deal of money. The landlord and landlady had been good to her; perhaps they would help her to get the money for these things. (340; bk. 5, ch. 37)

その時だった。彼女がロケットとイヤリングのことを思い出して、近くにある小

---

<sup>36</sup> このポイザー氏が安息日に畑仕事をしないことの原因は、本章の後の部分でもう1度取り上げる。

袋を眺め、中身をベッドの上の自分の眼前に広げたのは。ロケットとイヤリングはベルベットの裏のついた小さな箱の中に入っていた。アダムが買ってくれた美しい銀製の指抜きもあった。「私を覚えていて」という言葉が縁飾りになっていた。紐で括る小さな赤い鋼のガマ口もあった。優美な真珠のついたその小さな美しいイヤリングを、7月30日の明るい日光の中で、私はあれほど憧れをもって付けてみたのに！ 彼女には今、イヤリングを身に着けようという願望は全くなかった。彼女は黒髪をぐるぐる巻きにした頭を、枕の上にけだるく乗せていた。彼女の眉や目のあたりに漂う悲しみは、後悔に満ちた思い出には辛すぎた。それでも彼女は、両手を自分の耳に当てた。薄い金のリングを付けていたからである。そうよ、きっとここにあるアクセサリーと交換にいくらお金が手に入る。アーサーがくれた物はとても高価なものに違いないもの。宿の主人とおかみさんは自分に親切にしてくれた。多分あの2人がこれらの物をお金に換えるのを手伝ってくれるわ。

この場面でヘティは苦境にある。アーサーと自分の髪を入れたロケット、自分の身を飾ったイヤリング、アダムが買ってくれた指抜きのすべてが、身投げのできる池を探すための旅費を作るための手立てになってしまった。そして旅費にするには不十分であることに語り手の皮肉もこめられているが、ヘティのペーソスとナイーブさが強調されている (Adam 131)。

ドロシー・ヴァン・гент (Dorothy van Ghent) は、『アダム・ビード』の世界は「最初から最後まで道徳的判断と道徳的評価によって構成されている世界」であり、『『作られた』世界である』と述べているが (172)、本論文は上述の先行研究と同じく、『アダム・ビード』は道徳的寓話ではなく直接的観察と認識に基づいていると見なし、гентのこの見解は当たらないと考える。しかし同時に本論文は、語り手とその背後にいる作者の道徳観がリアリズムに従った描写を妨げている場面があると考え。ヘティの心理描写のうち、ヘティに対する道徳的非難が他者に転化されヘティが道徳的非難を免れたり、あるいはヘティに改悛の情が見受けられそうな場面では、ヘティの心理は詳しく描かれないうち、描かれていてもヘティの心理を肯定する表現が省かれていると思われるのである。そこでヘティの心理描写について吟味することにより、『アダム・ビード』のリアリズムの限界を考える。

ヘティの描写に関しては、シンパシーに欠ける面のみがテキストで強調されているが、

それがリアリズムの範疇にあることを疑う批評家はいない。『アダム・ビード』の先行研究において、第37章のタイトルにもなっている「絶望の旅」(339; bk. 5, ch. 37)、法廷、監獄におけるヘティの心理描写のリアリズムについて言及しているのは、筆者の知る限り冒頭に挙げたイアン・アダムのみである。アダムは、後述するヘティのシンパシーの芽生えがヘティの「再生」(“regeneration”)を暗示していると述べ、そこにリアリズムを見出している(147)。しかしアダムの論文では、語り手がこのヘティの「再生」を評価していないことが見逃されている。本論文は、「絶望の旅」の場面でも、後の法廷の場面や、監獄でダイナに罪を告白する場面においても、ヘティの悔悟など、読者がヘティを肯定的に捉えることを可能にする心理描写に対して語り手が消極的であり、リアリズムが十全でないことを指摘し、最後にその理由を考える。リアリズム小説の目指すものは、詳細な描写を通じた現実らしさの提示であるが(必ずしも現実との一致ではない)、上記の考察を通じて『アダム・ビード』のリアリズムを再考することが本章の目的である。

なお、論を進めるにあたり、『アダム・ビード』の作者と語り手の関係を確認しておく。『アダム・ビード』の語り手は、アダムが年老いてからインタビューした時に“sir”と呼ばかけられ、人格と性別(男性)を与えられている(167; bk. 2, ch. 17)。したがってテキストの語りのレベルでは、あくまで「語り手」が主体である。しかし語り手は第17章において、エリオットが考えるものと同様のリアリズムの内容と、その目的たる読者のシンパシーの向上、さらにはリアリズムの難しさについて述べている。このことから、小説におけるリアリズム観については、語り手はエリオットの代弁者であると考えられる。

## 1. ホール・ファーム時代のヘティの心理描写

### (1) シンパシーに欠けるヘティ

まず、ホール・ファーム時代の描写において、ヘティのシンパシーに欠ける冷たい性格や、「無分別」(“unreflectiveness”) (Beer, *George Eliot* 67; Adam 146)が詳細に説明されていることの確認から始めたい。

ヘティは、両親を亡くして8歳の頃ポイザー家に引き取られ、以来17歳までポイザー夫人の手助けとして働いてきた。ポイザー夫人から小言を言われなくて済むほど優れているのはバター作りだけだが、ヘティはバター作りをレディらしくないとして嫌っている。彼女が喜んでバター作りに励むのは、アーサーが見学に来た時だけである。将来荘園領主になる若者に気に入られようと、「ヘティは落ち着いたコケティッシュな態度で、自分の

頭の動きがどれも見逃されていないことを抜け目なく意識しつつ、1ポンドのバターを放り上げたり叩いたりした」(“Hetty tossed and patted her pound of butter with quite a self-possessed, coquettish air, slyly conscious that no turn of her head was lost.”) (76; bk.1, ch. 7)。

ヘティは、ホール・ファームの人間を愛することができない。ヘティがホール・ファームに来た頃、ポイザー夫人の3人の子供のうち最初の子供が赤ん坊で、ヘティはこの子供たちを遊ばせ、衣服の製作や修繕を限りなくしてきた。しかし、ヘティは子供の世話が嫌いで、「静かにしていきたい暑い日にブンブン飛んで来て悩ませる虫と同じくらい」(“as bad as buzzing insects that will come teasing you on a hot day when you want to be quiet”) 煩わしく、とくに甘やかされた末っ子のトティは「一日中厄介の種」(“a day-long plague”)だった (140; bk. 1, ch. 15)。トティが穴に落ちて、小さな靴が泥にはまって胸が張り裂けんばかりに泣き叫んでいた時、ヘティは知らん顔をしていたので、ポイザー夫人は夫に次のように言う。

“She’s no better than a peacock, as ‘ud strut about on the wall, and spread its tail when the sun shone if all the folks i’ the parish was dying . . . It’s my belief her heart’s as hard as a pebble.” (141; bk. 1, ch. 15)

「あの子はまるでクジャクだわ。教区の間が全員死にかけていても、お日様が出ている間は、壁の上を尾羽を広げて気取って歩き回るでしょうよ……あの子の心は小石のように固いに違いないわ」

ヘティに唯一親切で、良い父親の役割を果たしてきたおじのマーティン・ポイザー (Martin Poyser) に対しても、ヘティは驚くほど世話を焼かない。偶々来客があつて自分の甲斐甲斐しい姿を見てくれる時以外、進んでおじにパイプを差し出す親切をすることはなかった。ヘティには中年の人々を好きになれる理由が理解できなかったのである (140; bk. 1, ch. 15)。このようなヘティをクネプフルマッヘルは、「理解力がなく、魂に欠ける」と評し (*Early Novels* 119)、G・レヴァインは「すべての人間は他者 (社会) に依存しており、社会から自らに課せられた責任を果たさない時には、破壊と非人間化が生じる」と述べている (*Realistic Imagination* 270)。彼女の将来の夢の中には、第2の両親

も、彼女が世話している子供たちも、若い友人も、世話している動物たちも、自分自身の子供時代の思い出も一切現れない (140; bk. 1, ch. 15)。「ヘティは、過去の生活を捨てて、2度と思い出さなくても平気だと思っていた」(“Hetty could have cast all her past life behind her and never cared to be reminded of it again”) (140; bk. 1, ch. 15)。ヘティは根無し草で、「もともと植わっていた岩や壁の隅から飾り用の植木鉢に移されても、従来通り繁茂する」(“you may tear them from their native nook of rock or wall, and just lay them over your ornamental flower-pot, and they blossom none the worse.”) (140; bk. 1, ch. 15) ような人間であった。

ヘティが生き物の営みに無関心であることも顕著である。ポイザー一家が教会の礼拝に行く途中の野原で、7歳と9歳の従弟が興味を示す野生の鳥や動物に、一切興味を示さない。鶏や七面鳥が孵化するとその世話が嫌なので、丸い綿毛のヒヨコが母親の羽の下から顔を出しても、ヘティは全く感動しない。アダムは子供の頃、アリが自分の体の4倍もあるイモムシを運ぶ様子に感動して、じっと観察していた。ヘティに見たことがあるかと聞くと、ヘティは「無関心に」(“indifferently”)「いいえ」(“No”)と答える (201; bk. 2, ch. 10)。彼女がかわいいと思うのは、家禽の世話をした金で市<sup>いち</sup>で買う装飾品の方だった。このようにヘティは、人や他の生き物に対するシンパシーに欠ける人間として描かれている。

こうして親族からも孤立しているヘティをダイナと比べてみよう。ダイナはポイザー夫人の姉の娘である。生まれてすぐに両親を亡くし、ホール・ファームのある豊かな農村ヘイスロープではなく、スノーフィールドという、工場と炭鉱で人々が生計を立てている荒涼とした土地で、メソヂスト<sup>37</sup>のおばに育てられた (81; bk. 1, ch. 8; 102; bk. 1, ch. 10)。幼い頃ジョン・ウェスリー (John Wesley, 1703–91) の説教を聞いて感激し、21歳の時か

---

<sup>37</sup> 物語の1800年の時点では、公的な職業のほとんどは非国教徒及びカトリックには閉ざされていた。しかし国教会の伝統的な教区の単位と人口の実態にずれが生じ、国教会は、近代的な都市の労働者階級の形成期に彼らを取りこぼしてしまった。1790年以降、非国教徒、とりわけメソヂストのあいだで礼拝に行く人々が急増した。メソヂイズムは、ジョージ・ホイットフィールド (George Whitefield, 1714–70) の率いた、救いにおける予定説を主張するカルヴァン派と、予定説を取らないジョン・ウェスリー (John Wesley, 1703–91) の率いたメソヂスト派に分かれる (サイクス 134–49; ギリー & シールズ 357–73)。

らメソヂストの説教師の仕事をして始めて4年になる<sup>38</sup>。面倒を見てくれていたおばが亡くなり、自分も病気になって、母親の妹であるポイザー夫人を頼ってヘイスロープに来た。半年後の今、ダイナ25歳、ヘティ17歳である。ダイナはヘイスロープでも、説教するだけでなくポイザー夫人の手助けをし、アダムの父親が溺死した折は、アダムの母親リズベス・ビード (Lisbeth Bede) を慰めるために出かけて、一晩泊まって家族の世話をしている。

ダイナが説教という仕事を生きがいとしているのは、アダムが大工という仕事を生きがいとしているのと同じである。アダムはヘティの流刑後、改悛しているアーサーに、「うまく仕事をして、世界をみんなが楽しめる少しだけより良い場所にすること——それが今私が考えねばならないすべてです」(“It’s all I’ve got to think of now—to do my work well, and make the world a bit better place for them as can enjoy it.”) (422; bk. 5, ch. 48) と言う。アダムと同様、ダイナも現状を肯定し、それはその説教に現れている。「私は、あなた方と同様に貧しい。自分の生活費を自分で手に入れねばなりません。でもどんな貴族もレディも、もし心に神への愛を持っていないなら、私の方が幸せです」(“I’m poor, like you: I have to get my living with my hands; but no lord nor lady can be so happy as me, if they haven’t got the love of God in their souls.”) (29; bk. 1, ch. 2)。ダイナはヘティに対しても、不賛成を唱えたり非難したりすることがない (128; bk. 1, ch. 14)。ヘティの流刑後、暗かったポイザー家の雰囲気も、ダイナの存在のおかげで次第に「穏やかな月光」 (“soft moonlight”) に変わる (437; bk. 6, ch. 1)。語り手は、子供っぽく無責任でシンパシーに欠けるヘティを、「柔らかい毛皮の丸々とした愛玩動物の贅沢な性質 (“the luxurious nature of a round, soft-coated pet animal”）」 (340; bk. 5, ch. 37) を持つ「子猫 (“the little puss”）」 (138; bk. 5, ch. 15) と呼ぶ<sup>39</sup>。他方ダイナは、聖書の言葉で雄弁に話

<sup>38</sup> 1803年7月25日のマンチェスターでのメソヂスト公会議は、女性の説教を一般に禁じ、「しかし、神の言葉を公に話す特別の能力があると考えた女性は……女性に向かってのみ説教をすべきである」と決議した (Eliot, *Writer’s Notebook* 161)。

<sup>39</sup> アーサーはヘティを、「愛情深く善良なやつ」 (“a dear, affectionate, good little thing”) (139; bk. 1, ch. 15) と勘違いしているが、彼がヘティを、「小さなやつ」 (“little thing”) とか「可哀そうなやつ」 (“the poor thing”) (139; bk. 1, ch. 15/421; bk. 5, ch. 8) など、「やつ」 (“thing”) としか呼ばないことには、彼の愛情が肉体的なもののみであることが表れている。ヘティに罪を告白させ、刑場まで荷馬車と一緒に乗ってゆき、テキストに記述は

すことができ、困っている他人の立場に身を置くことを生きがいとして生きているので、ヘティと異なり社会性に富む。

しかし、ダイナがメソヂストの多いスノーフィールドに帰らねばならないことは、彼女の説教師としての限界を示している。物語の中で語り手は、「(豊かなヘイスロープの) 村人の心は、容易に火が付かない」(“the village mind does not easily take fire”) (26; bk. 1, ch. 2) と言っている。エリオットの執筆ノートによると、「農村地区の人々は、メソヂイズムの影響を一番受けにくい。なぜならメソヂイズムは組合や頻繁な会合で活動を維持しているが、人口のまばらな地域はこうした組織が困難か不可能だからである……」 (“The agricultural part of the people were least susceptible of Methodism, for Methodism could be kept alive only by associations & frequent meetings; & it is difficult, or impossible, to arrange these among a scattered population. . . .”) (*Notebook 27*)。

## (2)ナルシスト・ヘティの独善と孤独

仕事にもポイザー家の人々を含めて周囲の生き物にも無関心なヘティが、唯一大切に考えるのは、自らの美貌とそれに対する周囲の反応である。そのことは、第 15 章「2 つの寝室」(“The Two Bed-Chambers”)において、ヘティに対する語り手のネガティブな評価とともに描かれている。

ヘティとダイナは隣り合った部屋を寝室にしている。まずダイナの様子を見よう。月が出ている<sup>40</sup>。彼女は窓から外を眺め、この土地で出会った彼女が大切に思うすべての人々を、そして彼らの将来に待ち構えているかもしれない苦勞を思う。そして目を閉じ、神の愛とシンパシーを感じることに集中することで、彼女の他の人々への心配は消えていく。こうしてダイナは 1 人でいる時も他の人間の運命を思い、聖書の教えを通して人々とコミュニケーションができる。ダイナが人間以外の動物も慈しむことは、アダムの犬、ジップへの態度に現れているが、同時に、「私たちは言葉を尽くしても、自分が感じている

---

ないが、おそらくヘティに監獄に来たアーサーへの許しを与えさせたであろうダイナについては、アーサーは「あの女性は尊敬できる」(“I could worship that woman . . .”) と言って敬意を表している (421; bk. 5, ch. 48)。

<sup>40</sup> ビアは、月は定期的に満ち欠けを繰り返すので女性の生理を象徴し、ダイナは出産の女神だと言う (67)。ヘティが生まれたばかりの嬰兒を森に遺棄して死なせるのと対照的である。

ことの半分も伝えることができないのだから」(“for we can’t say half of what we feel, with all our words”) (108; bk. 1, ch. 11) と言って、人間の言葉の限界にも気づいている (44)。

次に隣の部屋のヘティを見よう。彼女は自分の容姿を見ることに没頭している。まず、汚れのない安物の手鏡を、満足気に微笑みながら眺める。彼女の美貌は、アーウィン (Irwine) 牧師の母親が「完璧な美貌！こんなにきれいな女性は、若い頃から見たことがない」(“She’s a perfect beauty! I’ve never seen anything so pretty since my young days.”) (248; bk. 3, ch. 25) と感嘆の声を上げるほどである (ここでもヘティは、“anyone”でなく外形のみに注目した“anything”で示されている)。ヘティの心の拠り所は自らの美貌である。ヘティは手鏡を見た次に、元は上流階級の所有であった鏡に向かうが、この鏡には拭っても取れないシミが全体に散らばっており、また固定されているためヘティの頭と首しか見えない。ヘティはこの不便な鏡に向かって髪をほどいて、アーサーのおばであるミス・リディア・ドニソン (Miss Lydia Donnithorne) の化粧室に掛かっている絵に描かれたレディの真似をする。古くてあちこち綻ろびた黒いスカーフとガラスのイヤリングも付けてみる。語り手は自由間接話法 (思考) によってヘティの心の内に入り込み、そのナルシズムを描き出す。

O yes! She was very pretty: Captain Donnithorne thought so. Prettier than anybody about Hayslope—prettier than any of the ladies she had ever seen visiting at the Chase—indeed it seemed fine ladies were rather old and ugly—and prettier than Miss Bacon, the miller’s daughter, who was called the beauty of Treddleston. (136; bk. 1, ch. 15)

ええ、そうよ！私にとってはとってもきれいだわ。ドニソン大尉はそう思ってる。ヘイスロープの誰よりもきれいよ——チェイスを訪れるのを見かけたことのあるどのレディよりもきれいだわ——立派なレディたちは結構お年を取っていてもないんじゃないかしら——それに、トレッドルストンの美人と呼ばれている粉屋の娘、ミス・ベイコンよりきれいよ。

その日の夕方、森の中でアーサーから熱烈なキスをされたヘティは、すでにアーサーと結婚して自分がレディになったつもりで、想像の世界に生きている。鏡が重要でなくなるこ

とは、スカーフに引っかかって手鏡が落ちても拾わないことに現れている<sup>41</sup>。他方アーサーは、地主とテナント農家の姪の結婚が許されないこと、また身分違いの恋愛遊びもスキヤンダルであることをよく自覚していた。この時点で、彼は教区牧師であり自分のゴッドファーザーでもあるアーウィン牧師に相談しようと思っている（126; bk. 1, ch. 8）。しかし、ヘティは常識を逸脱し、アーサーとの結婚を確定的事実とみなし、贅沢品に囲まれた働かなくてよい生活を空想している。

Captain Donnithorne couldn't like her to go on doing work: he would like to see her in nice clothes, and thin shoes and white stockings, perhaps with silk clocks to them; for he must love her very much—no one else had ever put his arm round her and kissed her in that way. He would want to marry her, and make a lady of her; she could hardly dare to shape the thought—yet how else could it be? (137; bk. 1, ch.15).

ドニソン大尉が私に仕事を続けて欲しいはずがないわ。私がきれいな服を着て、細い靴と白いストッキングを履いているのを見たいのよ。ストッキングには多分絹の刺繍があるわ。大尉は私をとっても愛しているに違いないもの——私の腰に腕を回してあんな風に私にキスをした人はほかに誰もいないわ。大尉は私と結婚したいのよ、私をレディにしたいんだわ。どうすればこの考えが実現するのか思いつかないけれど——でもほかに考えようがあるかしら？

この後には、医者の手助が医者姪と身分違いの結婚をしたことを挙げて自分とアーサーの結婚の可能性を補強するヘティの考えと、結婚後の贅沢な生活の想像が、自由間接話法（思考）で延々と続く。ヘティの想像の主眼は、仕事のない贅沢な生活である。子育てや

---

<sup>41</sup> 「このような豪華なことをいろいろと考えながら、ヘティは椅子から立ち上がった。すると彼女のスカーフの端がその小さな赤い縁の鏡に引っ掛かり、鏡は音を立てて床に落ちた。しかし彼女は自分の空想に夢中になっていたので、鏡を拾う気にならなかった……」  
 (“At the thought of all this splendour, Hetty got up from her chair, and in doing so caught the little red-framed glass with the edge of her scarf, so that it fell with a bang on the floor; but she was too eagerly occupied with her vision to care about picking it up. . .”) (138; bk. 1, ch. 15)。

妻としての義務、階級の違いによる英語や趣味の違いといった共通点のなさは念頭にない<sup>42</sup>。語り手はヘティの美貌を、その心の軽薄さと冷たさを隠すものとして否定的に捉え、アダムもアーサーもまだ気づいていないヘティの人間性の貧しさ (“the lower nature”) (146; bk. 1, ch. 15) を、「ああ、ヘティのような美しい花嫁を獲得する男は、どんな褒美を得ることだろう……彼女の心も全く同様に柔らかく、角がなく、性格はまったく従順に違いない」 (“Ah, what a prize the man gets who wins a sweet bride like Hetty. . . . Her heart must be just as soft, her temper just as free from angles, her character just as pliant.”) (138; bk. 1, ch. 14) と、皮肉によって炙り出している。

ナルシストのヘティはまた、自分の好みに合わないことは受け入れない頑迷さ、危うさも持つ。アーサーと結婚することを想像して鏡の前で気取って歩いていた時、もうすぐスノーフィールドに帰るダイナが、ヘティの「妻として母親としての厳かな日々の義務」 (the solemn duty of wife and mother) (143; bk. 1, ch. 14) に全く無頓着で、愚かで利己的な喜びに耽っている様子を心配して、ヘティの部屋を訪れる。ヘティの直接話法による言葉はダイナに比べて極端に少ない。ダイナが入っていいかと尋ねてから、お休みを言ってヘティの部屋を出るまでに、ダイナとヘティの喋った単語の数は、前者が「337」に対して後者はわずか「43」である。ここでのヘティの直接話法による言葉数の少なさは、その狭量と無分別に対応していると思われる。なぜなら、ダイナが「もしあなたが困って、いつもあなたのために感じあなたを愛している友達が必要になったら、スノーフィールドにダイナ・モリスがいるわよ」 (“if ever you are in trouble, and need a friend that will always feel for you and love you, you have got that friend in Dinah Morris at Snowfield.”) と言っても、ヘティはダイナの心配と愛情に何ら感動せず、ただ自分の将来に不安を感じて、「どうしてそっとしておいてくれないの？」 (Why can't you let me be?) と言っただけだからである (145-46; bk. 1, ch. 15)。「より高い性質」 (“a higher nature”) を持つダイナは、逆らわないでさっと静かに自室に戻り、ヘティを哀れむ (146; bk. 1, ch. 15)。その後ヘティがアーサーの誘惑に応じたことは、この章の最後に、「ヘティに関して言えば、彼女はまもなく、また森にいた——彼女が見る白昼夢は、眠っている時と同じ

---

<sup>42</sup> アーサーも、ヘティに恋していた間は、「彼女の黒い懇願するような瞳をのぞき込む時に、彼女がどんな種類の英語を喋っているか気にならなかった……」 (While Arthur gazed into Hetty's dark beseeching eyes, it made no difference to him what sort of English she spoke . . .) とある (120; bk. 1, ch. 7)。

く断片的で、混乱していた」(“As for Hetty, she was soon in the wood again—her waking dreams being merged in a sleeping life scarcely more fragmentary and confused.”) とあることから推察される (146; bk. 1, ch. 15)。このように語り手は、ある場合には自由間接話法(思考)を用いることにより、またある場合には直接話法による発言を制限することにより、ホール・ファーム時代のヘティの無分別と他の人間や生き物へのシンパシーに欠ける心理を描いているのである。

他方アーサーは、ヘティと関係を持つ前に、アーウィン牧師に忠告を求めに行ったが言い出せなかった過去を持つ。さらに、アダムに密会現場を見つかって殴られ、別れの手紙を書くことを約束させられた翌日、やっと身分違いの結婚が不可能であると説いた手紙をヘティに宛てて書く。ここで語り手はアーサーを、「アーサーは、ご存じのように、愛情深い性質である」(“Arthur’s, as you know, was a loving nature.”) と庇う (280; bk. 4, ch. 29)。アーサーは、自分の行為がヘティに与えた悲劇を知ると、死刑判決を受けたヘティのために減刑許可書を手に入れ、ヘティの流刑中の7年間は、祖父が亡くなったためすでに自分のものとなっていた領地を離れて軍務に戻る。そしてアダムからヘティの死を知らされると、「償いのできない類の悪事がある」(“There’s a sort of wrong that can never be made up for.”) と、アダムから言われた言葉を繰り返して嘆くのである (482; “Epilogue”)。語り手は、愛情深い人間は道理を弁え、自分のプライドや欲望を抑えて遅まきながらも利他的に行動できるとして、アーサーとヘティを区別している。

## 2. 放浪中のヘティの心理描写

### (1) ヘティの胎児への憎しみ

以上のように、ヘティのナルシズムは詳細に描かれている一方で、放浪中のヘティの心理描写には、ホール・ファーム時代と比べて大きな違いが見られる。ヘティは毎週木曜日に靴下の修繕を習いにドニソン家の女中の下に通っている。アーサーは屋敷の敷地にある森の中の小さな家を1人で使っているが、ここにヘティを連れ込んで密会する。アダムに見つかってアーサーは密会を止めるが、ヘティはすでに妊娠していた。ヘティが1人でアーサーに会いにウィンザーへ出かけたのは、テキストから推測して出産の約2週間前である (350–67; bk. 5, chs. 38–39; 387–88; bk. 5, ch. 43)。ヘティのお腹はすでにかなり膨らんでおり、ヘティが泊まったウィンザーの宿屋の女将が、「ああ、どんなことがあったかは一目瞭然ね」(Ah, it’s plain enough what sort of business it is.”) と事情を察し、「彼

女がもっと醜くてもっと行いが良かったなら、はるかに良かったでしょうに」(“It ’ud have been a good deal better for her if she’d been uglier and had more conduct.”) とコメントしている (338; bk. 5, ch. 37)。

当時の出産が母体にとって危険であることは、物語の中でも明らかである。アーサーの母親は出産が原因で亡くなり、ポイザー夫人は末っ子のトティを生んだ後、体調を崩している。それにもかかわらず、出産2週間前のヘティが、アーサーの居場所を手紙で確認もせず、アダムとポイザー家の人々にダイナを迎えに行くと嘘をついて1人でアーサーに会いにウィンザーに出かけることは実に無謀である。ヘティは妊娠に気づき、その進行に動揺し、アーサーの助け求めてホール・ファームを出たのである。それにもかかわらず、妊娠に伴うヘティの身体的苦労は「ヘティは、非常に体調が悪かった……」(“Hetty was too ill. . . .”) (339; bk. 5.) と記されるだけで、ヘティの胎児への思いはなぜか書かれていない。もちろんヴィクトリア朝の文学では、性的な事柄や女性の身体に関わることは触れることが憚られたという事実はある。ヴィクトリア朝の女性は、出産や妊婦の心理などについて公に語らないように躑けられていた (Showalter 66-67)。しかし、否応なく胎児を意識せねばならない時期であるにもかかわらず<sup>43</sup>、胎児への思いが抽象的にさえ描かれていないことは、ヴィクトリア朝の慎みや、語り手が男性に設定されていることだけでは説明しきれないのではないだろうか。後にダイナに「私は[赤ん坊を]憎んでいたようだわ。」(“I seemed to hate [my baby].”) という狭量なヘティは、胎児の時も憎んでいたに違いない。アーサーへの憎しみ (346; bk. 5, ch. 37) を反映したヘティの胎児への思いに、どんな形であれ語り手が一切触れないことには不自然さを感じられる。後に述べるように、自殺を試みた池の淵でヘティのアーサーに対する憎しみを強く感じていることが描かれているからである。そのヘティが池の端で感じたアーサーへの激しい憎しみも、間接話法で

---

<sup>43</sup> 妊婦は通常、いわゆる月経後胎齢で妊娠第 20 週目頃から胎動をはっきりと感じる (馬場 25-27)。ヘティの嬰兒が大声で泣いているというテキストの記述から、ヘティの妊娠期間は呼吸器の発達に必要な 34 週 (馬場 36) を超えていると推定できる。ハリエット・E・アダムズ (Harriet F. Adams) は、ヘティが妊娠した可能性のある日付をもとに 24-26 週 (月経後胎齢 26-28 週) と考えるが (65)、ヘティの逮捕を「遅くとも 2 月の第 3 週」(65) と勘違いしている (実際には 3 月 2 日) (387; bk. 5, ch. 43; 405-08, bk. 5, ch. 45)、妊娠期間は月経後胎齢 28-30 週となる。いずれにせよヘティは放浪中、妊娠後期にあり、はっきりと胎動を感じていると思われる。

ごく簡潔に記されているだけである。ここでも、胎児に対する憎しみを描くことを避け、ヘティを誘惑したアーサーに読者の非難の矛先が向かないようにしているのではないかと疑われる。

## (2) ヘティの絶望と自殺しない理由

ウィンザーでアーサーに会えなかったヘティは、アーサーの子を妊娠した恥を隠すために自殺するしかないと思い、誰にも知られずに死のうと池を探す。しかし、ウィンザーを出て5日後、ついに見つけた池では自殺を逡巡する。

The pool had its wintry depth now: by the time it got shallow, as she remembered the pools did at Hayslope, in the summer, no one could find out that it was her body. But then there was her basket—she must hide that too: she must throw it into the water—make it heavy with stones first, and then throw it in. She got up to look about for stones, and soon brought five or six, which she laid down beside her basket, and then sat down again. *There was no need to hurry—there was all the night to drown herself in.* She sat leaning her elbow on the basket. She was weary, hungry. (346; bk. 5, ch. 37; my emphasis)

池は今、冬なので深々と水を湛えていた。ヘイスロープの池を思い出してもそうだが、夏には浅くなる。その頃までには、誰もそれが彼女の死体だとはわからないだろう。しかしバスケットがあった——これも隠さなくてはならない。これを水中に投げ入れなければ——まず石で重くして、それから投げ入れなければ。彼女は石を探しに立ち上がった。まもなく5、6個持ってきて、バスケットの脇に置くと、彼女はまた座った。急ぐ必要はない——今晚いつでも飛び込むことができる。彼女はバスケットに肘を持たせかけて座っていた。疲れて空腹だった。

ヘティは死ぬしかないと思って池を探したのだが、実は、後述するように強い生への執着がある。当然飛び込まなくて済む理由を考えるはずと思われるが、「急ぐ必要はない」としか書かれていない。前述の、アーサーとの安楽な結婚生活を思い描いて考えたヘティの

理由付けとは、詳細さが随分異なる。また本章序論第2項で引用したように、ウィンザーでアーサーに会えず、これからの旅費の心配をするヘティの心理も詳細に描かれていた。

試みに、別の登場人物に与えられた自由間接話法（思考）と直接話法を使った理由付けと比べてみよう。本章序論第2項で引用した、マーティン・ポイザーがアダムの父親の葬式に参列するため朝教会に行く途中で、聖日には仕事をしない主義を正当化する長閑な場面と比較する。もしこちらも理由付けが短ければ、ヘティの理由付けの短さも作家の文体の特徴とみなされ得るが、もしポイザー氏が長い理由付けを与えられていれば、生死に関わる緊迫した場面におけるヘティの心理描写が不足していることになる。ポイザー氏の長閑な決断の理由付け部分には115語を要し、ヘティの身投げしない理由には、緊急性が高いにもかかわらず、わずか15語しかない。この心理描写におけるアンバランスは読者に、ヘティが池の端で自殺をためらった理由は他にもあるのではないか、それが語り手の心に映らないだけではないかとの疑いを持たせる。

さらに語り手は、ヘティがこの時当然感じると思われる、自分を誘惑したアーサーへの憎しみや、自分だけが自殺するのはあまりに不公平だという不条理への憤りにも、以下の引用にあるように簡単にしか触れない。また、ヘティが感じる生への執着も重要視しない。

... She set her teeth when she thought of Arthur: *she cursed him, without knowing what her cursing would do: she wished he too might know desolation, and cold, and a life of shame that he dared not end by death.*

The horror of this cold, and darkness, and solitude—out of all human reach—became greater every long minute: it was almost as if she were dead already, and knew that she was dead, and longed to get back to life again. But no: she was alive still; she had not taken the dreadful leap. *She felt a strange contradictory wretchedness and exultation: wretchedness, that she did not dare to face death; exultation, that she was still in life.* ... (346; bk.5, ch. 37; my emphasis)

……アーサーのことを思うとき、彼女は歯を食いしばった。彼女は彼を呪った。呪って何の役に立つか分からなかったが。彼女は、彼も孤独と寒さと、死によって終える勇気のない恥の人生を知ればいいと願った。

この寒さと暗さと孤独の恐怖は——すべての人間から離れて——長い夜の中に刻々と大きくなった。まるで彼女は既に死んでおり、死んでいることを知っていながら、再び生に戻ることを強く望んでいるがごとくであった。いや違う。私はまだ生きている。私はまだ恐ろしい飛込みをしていない。彼女は奇妙な矛盾した惨めさと歓喜を感じた。自分が死に直面できない惨めさと、自分がまだ生きている歓喜を……

バーバラ・ハーディ (Barbara Hardy) は、ヘティがアーサーに会いにウィンザーに行く第36章と、ヘティがアーサーに会えず絶望して死に場所を探す第37章の旅の描写は、作者(本論文では「語り手」と見なしている)の視点から始まり、次第に語彙、シンタックスなど三人称以外の形式において、ヘティの視点から見た「一般化や深い考察のない」解説に転化すると述べている(178)。その証拠としてハーディは、本項の冒頭で引用した“The pool had”以下のヘティの描写の仕方が、監獄でヘティがダイナに直接話法で語る場面の「訥々とした平易さ」に似ていることを挙げている(179)。しかし、“She set her teeth”で始まる前出の引用では、ヘティのアーサーへの呪いと運命に対する不公平感は語り手により間接話法で簡潔に描かれ、アーサーとの結婚を想像した時の思いを長々と描写した、前述のヘティによる自由間接話法(思考)とは異なっている。そのうえ、ヘティのアーサーへの憤りについても、「呪って何の役に立つのか」と語り手の視点から見て、ヘティには憤る資格がないと言わなければならない。またヘティは、2月の夜の寒さと孤独の結果、すでに死んでいるような錯覚に陥る。そして生きている世界に戻りたいと願う。しかし我に返ったヘティは、自分がまだ池に飛び込んでいないことに「惨めさ」と「歓喜」を感じる。語り手はこの「惨めさ」と「歓喜」を等価に扱い、前者に先に言及している。しかし、その暫く後、生きていることに狂喜し自分の両腕にキスするヘティにとっては(347; bk. 5, ch. 47)、後者が圧倒的に重要な筈である。したがって、この場面は一部に自由間接話法(思考)が使われているが、主に語り手の道徳的視点から描かれていると思われる。語り手は、ヘティのアーサーに対する憎しみ、運命の不条理への嘆き、生への欲求を過小評価し、自らの道徳観に基づき、ヘティを裁いているのではないかと疑われるのである。

### (3)ヘティの生き物への愛情の芽生え

アーサーはヘティの予測に反してウィンザーにはいなかった。ヘティは、昔見かけた、教会の前で赤ん坊を抱えて行倒れになり救貧院に送られた女性を思い出す。救貧院に入ることは、旧家のテナント農家出身のヘティにとって耐えがたいことである。そこで旅費の心配をする。本章序論第2項で掲げた引用文にあるように、彼女はポケットの中身をベッドの上に広げてみる。アーサーに貰った豪華なロケットとイヤリング、アダムが買ってくれた美しい銀の指ぬき、1 シリング入った鉄製の小銭入れがあるだけである。ホール・ファームにいた頃は、ロケットやイヤリングは装飾品であり、将来の贅沢な生活の始まりと思われた時期もあった。今や換金して生活費を稼ぐ手段になってしまった。ホール・ファームにいた頃は、そこの生活を捨てて2度と思い出さなくても平気だと思っていたヘティであるが、今初めて、ポイザー夫妻やダイナを懐かしく思い出す。

How she yearned to be back in her safe home again, cherished and cared for as she had always been! Her aunt's scolding about trifles would have been music to her ears now. . . .(340; bk. 5, ch. 37)

どんなに彼女は、自分がいつも大切にされ愛されていた、安全な実家にもう一度戻りたかったことか！ 細かい事でおばから叱責されたとしても、今の彼女の耳には音楽に聞こえたことであろう……

гентは、ヘティが自殺を考えながら放浪する場面について、「彼女の日常を支える唯一の価値から離れて、彼女は動物的恐怖という混乱の中に沈み、人間ならば狂気の沙汰である」と形容している（179）。エリザベス・エアマース（Elizabeth Ermarth）も、「文化から隔離されることはもはや人間でないことを意味する」として、ヘイスローブを離れて放浪するヘティをその例として挙げている（“Incarnations” 276）。しかしホール・ファームにいた頃、精神的に根なし草（140; bk. 1, ch. 15）であったヘティは、やっとな懐かしむべき過去を得たのである。第2章でも述べたように、『フロス河畔の水車場』の主人公マギー（Maggie）はスティーブン（Stephen）に、自分が彼との幸せを求めてルーシー（Lucy）とフィリップ（Philip）を犠牲にしない理由を、「もし過去に縛られないとしたら、どこに義務があるのかしら？」（“If the past is not to bind us, where can duty lie?”）と言って、修辞疑問文により「過去」の重要性を強調している（496; bk. 6, ch.

14)。エリオットは宗教に替わる道德の基礎として、他人とのつながりと自分自身の過去とのつながりを大切にしている (Rignall, “Moral Values” 270)。したがって、ヘティが過去を懐かしむようになったこの変化は重要である。

またヘティは過去の思い出に目覚めるだけでなく、他の生き物への愛情も感じ始める。まずアーサーに会いにウィンザーに向かっていた時、近づいてきた荷馬車の上でブルブル震えている小さな犬に、ヘティは「幾分かの間意識」 (“some fellowship”) を感じた。それは「苦しみが[ヘティ]の中に目覚めさせた新たな感受性」 (“the new susceptibility that suffering had awakened in [Hetty]”) と説明されている (335; bk. 4, ch. 36)。さらに自殺を試みた池の端で、寒さと暗闇の中ですべての人間から離れている孤独の恐怖を思い知ったヘティは、羊の放牧場を歩いていて、彼女に驚いた羊たちの動く物音にほっとする。暖を取るために、羊の出産時期に農民が泊まる小屋に入ると、ヘティは、羊が傍にいるこの地上に自分がまだ生きていることにヒステリックな喜びの涙をこぼし、自分の両腕にキスする。こうしてヘティは初めて他の生き物への愛に目覚める。自己憐憫が他の生き物への感情に拡大しているのである (Adam 146)。

しかし、語り手は第 17 章で「その善行をあなた方が賞賛すべきは、これらの多かれ少なかれ醜く、愚かで、矛盾した人びとなのである……」 (“it is these more or less ugly, stupid, inconsistent people, whose movements of goodness you should be able to admire . . .”) (160; bk. 2, ch. 17) と述べたにもかかわらず、ヘティを断罪の対象としている。それはヘティがアーサーに会いにホール・ファームを出た時の景色の描写に現れている。2月の太陽が雲一つない空に上がり、草原は緑を成し、鳥は澄んだ声でさえずり、よく手入れされた畑の土に葉の落ちた枝の紫がかかった枝が映えている。しかし語り手は、このロームシャーに似た外国を旅した時に、苦しみに満ちたキリストの磔刑像 (“an image of a great agony—the agony of the Cross”) (327; bk. 4, ch. 35) を道端に見つけたことを思い出す。キリストは、人々が罪から救われるために代わりに磔刑に甘んじたのであり、ヘティはキリストに救われるべき存在として断罪されているのである<sup>44</sup>。またこの章の最後では、ヘティを読者や語り手とは別種の間人として憐れんでいる。

---

<sup>44</sup> エリオットは、脇道 (公道) にキリストの磔刑像を置くというローマン・カトリックの国々の習慣に言及している。この像は人々を救うために死んだ苦しむキリストを思い出させるためのものである。エリオットはこのような「苦しみの像」を、1858年9月、この

Poor wandering Hetty, with the rounded childish face, and the hard unloving despairing soul looking out of it—with the narrow heart and narrow thoughts, no room in them for any sorrows but her own, and tasting that sorrow with the more intense bitterness! My heart bleeds for her as I see her toiling along on her weary feet, or seated in a cart, with her eyes fixed vacantly on the road before her, never thinking or caring whither it tends, till hunger comes and makes her desire that a village may be near. . . .

God preserve you and me from being the beginners of such misery. (349–50; bk. 5, ch. 37)

放浪している哀れなヘティ。丸みを帯びた子供っぽい顔と、そこから覗いている愛情の薄い絶望した魂——その狭い心と狭い考えの中には、自分自身の悲しみしか存在しない。悲しみはそれだけ一層苦い！ヘティが疲れた足で苦勞して進んでいるのを、あるいは荷馬車に座っているのを見ると、私の心は、その人間としての情けなさに血を流す。彼女は前方の道をぼんやり見つめているが、その道がどこに向かっているのか考えもしなければ気にもかけない。空腹が訪れ、村が近いことを強く願うまで……。

このような悲惨の始まりを経験しないで済むように、神があなたと私をお守りくださいますように。

“Poor wandering Hetty”や“My heart bleeds”からは、語り手がここでヘティに同情しているように見える。しかし、最後に出てくる“God preserve you and me from being the beginners of such misery.”という祈願文は、語り手がヘティを、救われない存在、自分自身と読者から切り離された存在として憐れんでいることを示している。このとき語り手はヘティを、エリオットが「ドイツ人の生活の博物誌」で述べた「我々の仲間」として扱っておらず、ヘティへの読者のシンパシーを高めることを目的としたリアリズムを放棄していると言えよう。

アラン・ベルリンジャー (Alan Bellringer) は、「語り手の厳しさは、ヘティの美貌が引き起こした悲劇の重大さによって正当化される」(26)と言っているが、「多くの批

---

章を書くためにロンドンに帰って来る直前にドイツを旅した時に見かけたのかもしれない (Adam Bede, “Explanatory Note 327”)

評家は、ヘティの狭量、愛情の欠如、虚栄心を強調することにおいて寛大さに欠けているとして、エリオットのヘティの描き方を批判してきた」(Beer 69)<sup>45</sup>。本章も語り手はヘティのポジティブな人間性を描くことに消極的であると考ええる。

### 3. 法廷と監獄でのヘティの心理描写

次に、法廷の場面でのヘティの心理の解釈を検討する。ヘティは法廷で俯いたまま自分の両手を見つめて、有罪か無罪かの質問にも答えないが、ポイザー氏の名前を聞いたとたん全身が震えて、両手で顔を覆ってしまった。アダムが彼女の隣の席に傍聴に来た時も、そちらを見なかった。アダムには、真っ白で生気のないヘティが、「[ホール・ファームの]庭のリンゴの木の枝の下で彼に微笑みかけたヘティ」(“the Hetty who had smiled at him in the garden under the apple-tree-boughs”)の「死体」(“Hetty’s corpse”)に見えた(387; bk. 5, ch. 43)。しかし、この場面でのヘティの心理は説明されない。

無分別で頑固なヘティは、赤ん坊を産んでいないと言い張って、証人の証言も聞かないため、陪審員の印象はますます悪くなり、最後に死刑判決を受ける<sup>46</sup>。しかしヘティは、最後の証人で、赤ん坊を連れ去った小作人の男ジョン・オールディング(John Olding)の証言だけは熱心に聞く。

At these words a thrill ran through the court. Hetty was visibly trembling: now, for the first time, she seemed to be listening to what a witness said.

“There was a lot of timber-choppings put together just where the ground went hollow, like, under the bush, and the hand came out from among them. But there was a hole left in one place, and I could see down it, and see the child’s head; and I made haste and did away the turf and the choppings, and took out the child. It had got comfortable clothes on, but its body was cold, and I thought it must be dead. . . .” (390; bk. 5, ch. 43)

<sup>45</sup> エリオットのヘティの描き方に批判的な批評としてピアの他、U. C. Knoepfelmacher, *Early Novels* 118–22; Peggy F. Johnstone 27–29 etc.

<sup>46</sup> 本章序論(1)「概要」で見た通り、アーサーの嘆願により、オーストラリアへの流刑に減刑される(414; bk. 5, ch. 47)。

これらの言葉は法廷中を震撼させた。ヘティは目に見えて震えていた。今初めて、彼女は証人の言うことを、耳を澄ませて聞いているように見えた。

「藪の下の、地面が穴のようになったところに、たくさんのおが屑が集められ、片手が突き出ていました。しかし、一か所に穴が開いていたので、奥まで見通せました。赤ん坊の頭が見えました。そこで私は、急いで芝土とおが屑を除けて、子供を取り出しました。暖かそうな衣類を着ていましたが、体は冷たくなっていて、私は死んでいるに違いないと思いました……」

男は、泣き声がどこから聞こえるのか熱心に探したけれども、大量のおが屑や芝土があって見つけれず、そのうちに泣き声が止まってしまったので、一旦捜索は諦めた。小1時間仕事をした帰りに、もう一度探してやっと見つけた。2月末の寒い時期である。赤ん坊が着ている温かそうな衣服は、ヘティを泊めてくれたタバコ屋の女主人が、自分の子供が生まれた時に使って保管していたものである。女主人がヘティの出産を手伝った後、赤ん坊に着せてくれた(388; bk. 5, ch. 43)。しかし、放置されれば、赤ん坊は当然飢えと寒さで死ぬ。赤ん坊を捨てて故郷に帰って元通りの生活に戻ろうと思って、発作的に子供を捨てたヘティの身勝手さを読者は強く感じるに違いない。なるほど、男が赤ん坊の様子を語る証言だけは熱心に聞いているヘティの姿には、捨てた後の赤ん坊に無関心でなく、その様子を気にかけている悔悛したヘティの母親としての責任感が現れているとも受け取れる。しかし、語り手がこの時のヘティの心境を一切語らないので、読者にはヘティが改悛したかどうか分からない。

死刑判決確定後、監獄に面会に来たダイナに、初めてヘティは真相を告白する。ダイナは決して彼女を非難しないからである。ヘティは自分の両手をつかんでいるダイナの手にしがみつき、ダイナの頬に自分の頬を寄せる。しかし語り手は、「彼女が縋っているのは人間的つながりであるが、そのために彼女が暗い淵<sup>47</sup>に沈むことがそれだけ少なくなっているとは言えない」(“It was the human contact she clung to, but she was not the less sinking into the dark gulf”)とヘティの改悛に対して最初から否定的評価をしている

---

<sup>47</sup> 「暗い淵」のイメージはルカ伝第16章26節のラザロと金持ちの男の例えから来ている *Adam Bede*, “Explanatory Note 392”)。ラザロはこの世では体中できものに覆われ、金持ちの門の前で横たわり食卓からこぼれたもので腹を満たしたいものだと思っていたが、あの世では天国の宴会の席に座る。金持ちは亡くなると冥府で苦しむ。

(402; bk. 5, ch. 45)。

ヘティの告白はスムーズでなく、6回も中断する。まずヘティは、告白するとダイナに言った後、嗚咽と涙で話すことができない。ここで最初の中断がある。次に、自分は赤ん坊を森に埋めたが、赤ん坊が泣くのが聞こえるので戻った（実際には、すでに赤ん坊は亡くなっているのであるが）と言って話を止める。これが事件の大筋で、2回目の中断がある。それから彼女は、「私は殺さなかった——自分では、殺さなかったわ」(“I didn’t kill it—I didn’t kill it myself.”) (405; bk. 5, ch. 45) と言い訳する。赤ん坊を埋めたが、完全には覆わずに、誰かが見つけてくれることを期待したと言うのである。それから放浪の旅の孤独と惨めさを訴える。彼女は放浪中に所持金が尽きて物乞いになることを恐れ、同時にホール・ファームには決して戻りたくないと思っていた (405; bk. 5, ch. 45)。当時の思いが強く蘇って、ここで3回目の中断がある。

次にヘティは、ホール・ファームの近くまで来たため知り合いに見つかることを恐れ始めた頃、偶然泊まったタバコ屋の女の家で思いがけず早く赤ん坊が生まれたこと、出産を助けてくれた家主の女が出かけた間に、この子さえいなければ家に帰れるという思いに憑かれ、赤ん坊を連れて出かけたことを話す。赤ん坊がいなければ何事もなかったかのようにホール・ファームに帰れるという妄想には、自分だけが助かればよいという、ヘティのいつもの冷たい人間性と浅はかさが現れている。また、ヘティは赤ん坊を捨てに行く途中で暖かい飲み物とパンを買うが、赤ん坊に乳をやる場面はない。さらに、彼女は乾草の山を見つけてそこで熟睡し、目覚めたときに赤ん坊が泣いていても何もしてやらない。また、この時ヘティは赤ん坊を池で溺死させることを考えているため、誰かに見つかることを恐れている。先に引用した「私は[赤ん坊を]憎んでいたようだよ。」という言葉も、ヘティの赤ん坊への憎しみを表す。しかし、その後続く言葉、「でも、[赤ん坊の]鳴き声が私の全身を貫いたの。それで私には、その小さな手や顔を見る勇気がなかった。」(“and yet its crying went through me, and I daredn’t look at its little hands and face.”) (406; bk. 5, ch. 40) は、赤ん坊の小さな手や顔に特別の意味を見出している点で、ホール・ファームでヒヨコを可愛いと思わなかったヘティとは異なることを示している。また、赤ん坊の泣き声は、後にヘティが赤ん坊を完全に埋めて殺すことを妨げることになるから、ヘティにとって単なる耳障りな音ではない。こうして語り手は、ヘティに芽生えた生き物に対する愛情やシンパシーに言及はしているのだが、ここでもその変化を積極的に評価することはない。

ここで4回目の中断がある。今度はやや長く、ヘティはささやき声になって、いよいよ森の藪の下の穴に赤ん坊を埋める場面を語る。池が見つからず、「他に殺す方法がなかったの」(“I couldn’t kill it any other way.”) (407; bk. 5, ch. 45) と殺意を告白する。しかし、赤ん坊の大きな泣き声に押されて、おが屑や芝土で完全に埋めることはできず、誰かが助けてくれるかもしれないという中途半端な気持ちになった。さらに、赤ん坊の泣き声に引かれて立ち去ることができず、何時間も赤ん坊を見守っていた。しかし、オールディングが来たので慌てて立ち去り、パンを買った後、道路わきの納屋でまた一晩熟睡する。翌朝未明に赤ん坊の声が聞こえる気がして、埋めた場所に戻る。彼女は、オールディングに赤ん坊を遺棄したことが知られても構わなかったと言い、もう家に帰ることはどうでもよくなったと言う (407; bk. 5, ch. 45)。彼女の心からは人目に付くことに対する恐怖が消えている。そして彼女の心の目には、赤ん坊を埋めた場所だけが見えていた (407; bk. 5, ch. 45)。これからもずっと見えるのかしらと、ヘティはダイナに尋ねる。読者はヘティの改悛を期待するが、この時語り手は彼女が赤ん坊に執着する心理を解説しないので、読者はヘティの改悛を判断できない。

ここで5回目の中断があるが、今回の中断は長い。赤ん坊のいなくなっていた穴の情景の記憶、耳から離れない赤ん坊の泣き声が、ヘティに沈黙を強いる。次に語り始めた時、ヘティは、一步進むごとに（すでに亡くなっている）赤ん坊の泣き声が聞こえたこと、穴が空っぽになっているのを見ると気が萎え、心も体も石のように動かないでいるうちに逮捕されたことを語る。赤ん坊を埋める時は誰かが見つけて助けてくれることを期待していたのに、赤ん坊がそこにいないことになぜこれほどがっかりするのか。イアン・アダムの指摘する通り、ヘティが赤ん坊の泣き声に憑かれて赤ん坊を遺棄した場所に戻るとき、彼女はもはや、自分自身の悲しみだけしか顧みない人間ではなくなっており、ヘティの「再生の可能性」(“the possibility of regeneration”) (147) が強く暗示されていると思われる。しかし、語り手がヘティのこの変化に言及することはない。

ここで最後の中断がある。ヘティは沈黙の後、今度はすすり泣きながら大きな声でダイナに尋ねる。「ダイナ、私は全部喋ったんだから、神様はあの泣き声と森の中のあの場所を取り去ってくださるかしら？」(“Dinah, do you think God will take away that crying and the place in the wood, now I’ve told everything?”) (408; bk. 5, ch. 45)。この言葉は、改悛というよりは単にヘティの身勝手に過ぎないと解釈する批評がある (Marck 466)。それは、ヘティがこの言葉を発した意図が描かれていないからである。

こうして、このダイナへの告白の場面でも、ヘティの語りの空白を埋めるような心理描写が省かれている。法廷や監獄でのヘティの心理と、第 37 章「絶望の旅」の放浪の場面における胎児への反感、自殺を逡巡するヘティの誘惑の被害者としての惨めな心境が詳細に描かれ、生き物への愛情や過去の追憶の芽生えが積極的に評価されていれば、ヘティの残酷な行為に対する読者の印象は随分違ってくるはずである。発作的犯行の残酷さは和らぎ、穴に埋めた後も離れられずずっと見守っていることは罪の意識の表れと解され、冷酷なヘティ像を弱めることになるであろう。赤ん坊は誰かが救ってくれると思ったという言葉い訳も、孤独の中で疲れ切った人間のセリフとして、多少とも信憑性を帯びてくる。しかし、それらは語り手の心の鏡に映っておらず、その結果、語り手の意図する冷たい人間というヘティ像は崩れることがないのである。

## 結論

ヘティの裁判は 1800 年 3 月に行われ、ヘティは、1624 年制定の「非嫡出子の破壊と殺害を防ぐ法」(“Act to Prevent the Destroying and Murthering of Bastard Children”) (21-Jac. 1c. 27)によって裁かれた。これは未婚の母親の嬰兒殺しを防ぐために導入された法律である。被告は死産を主張するのが普通であったので、妊娠を秘匿していれば有罪を推定して極刑を課す過酷なものであった (Jackson 32-33)。そこで 18 世紀の半ば以降は、実際には裁判所はこの法律を厳格に適用しなくなった (Jackson 149-51)。さらにこの法律は 1803 年に廃止され、それに替わった通称「エレンバラ卿の法 1803 年」(“Ellenborough’s Act 1803”) (43 Geo 3c.58)では、コモン・ローの例外であった有罪の推定が廃止され、そのかわり妊娠を秘匿することに対する処罰が新たに設けられた (Jackson 168-71)。1803 年の法の下で裁かれていたならば、ヘティは、積極的な殺人の証拠がないので、妊娠の秘匿という、重罪ではない罪によって最長 2 年の懲役の処罰を受けていただろうという説もある (McDonagh 251)。したがってヘティの刑の厳しさは、リアリズムというより、物語の舞台を改正法以前に設定した作者の、ヘティに対する道徳的に否定的な態度を示していると言える。

サリー・シャトルワース (Sally Shuttleworth) は『アダム・ビード』に、エリオットがこの小説を書き始める 15 か月前に出版したエッセイ「ドイツ人の生活の博物誌」と同じ博物学的性格を見出している。エリオットは『アダム・ビード』執筆を終えた 1859 年 11 月 23 日、ダーウィンの『種の起源』(*On the Origin of Species*, 1859) 出版前夜に『種

の起源』を内縁の夫ルイスとともに読み始めている<sup>48</sup>。博物学は生物学と異なり、生物の外形を詳細に記述し分類することを主眼とし、生態の変化や進化には関心がない (Shuttleworth 49)。『アダム・ビード』は、1799年6月夕方のアダムの働く大工の作業場で始まり、1807年6月夕方に同じ場所で終わる。ヘティの流刑後に結婚したアダムとダイナには各々にそっくりな男の子と女の子がいる。ヘティは7年の刑期を終えて帰郷する途中で亡くなり、アーサーはポイザー家やアダムが故郷を離れなくて済むように領地の管理をアーウィン牧師に任せて自分は軍務に戻る。7年後、熱病で衰弱して故郷に帰ったアーサーには苦しみによる罪の贖いを経て善き地主になることが暗示されている。シャトルワースは、このように『アダム・ビード』の世界は、変化よりも継続を好む静的世界であり、異分子は追放され、元々の世界が継続するのだと説明している (49)。

こうしてみると、エリオットが語り手を通じてヘティに厳しい態度をとる理由として、エリオットにはこうした静的世界を維持するために、シンパセティックで道徳的に善であるアダムとダイナ、本来シンパセティックで道徳的に善であることを目指しているが、欲望に負けて道を踏み外し反省と償いをするアーサー、シンパシーに欠ける冷たい人間ヘティという、人物像の分類を維持する必要があったということが考えられる。この作者の意図に沿って語り手は、ヘティの人間性の向上の兆しの見られる心理は描いたとしても評価せず、ヘティに読者の同情の集まりそうな心理描写は避けたのである。エリオットにとって、芸術におけるリアリズムは読者のシンパシーを高める手段であり、第17章で語り手に、自分の心に映るままに描くと宣言させた。しかし、作者がリアリズムよりも自らの博物学的道徳観を優先するとき、ヘティの心理状況に関して、語り手の心の鏡に映らない事柄もあったのである。この点に於いて『アダム・ビード』は、ヘティも「我々の仲間」であるという作者の理想とする道徳観にも、ヘティのポジティブな側面も描くというリアリズムにもまだ十全には到達していない。

---

<sup>48</sup> エリオットの1859年11月23日の日記には次のように書かれている。「私たちは今晚、ダーウィンの『種の起源』を読み始めた。それは上手に書かれているとは思えない。興味深い事柄に満ちているが、啓発的で秩序だった提示の仕方に欠けている」(“We began Darwin’s work on ‘The Origin of Species’ tonight. It seems not to be well written: though full of interesting matter [sic], it is not impressive, from want of luminous and orderly presentation.”) (*Journals* 82)。

## 第4章 洪水の結末とシンパセティックなトム ——『フロス河畔の水車場』におけるリアリズムの進展

本章は、『フロス河畔の水車場』(*The Mill on the Floss*, 1860) がジョージ・エリオットの小説におけるリアリズムの進展と道德観の成熟における中間地点に当たることを示すことを目的とする。中間地点という意味は、『フロス河畔の水車場』が登場人物の性格を多面的に描いている点で、その前に書かれた『アダム・ビード』よりもリアリズムの進展が見られるが、結末の洪水の場面で作者の道德的必要と個人的事情によりリアリズムからの逸脱が見られ、後期作品の『ミドルマーチ』には及ばないという意味である。焦点を当てるシンパシーに乏しい人物は、主人公マギー (Maggie) の兄トム (Tom) である。前章で見た『アダム・ビード』のヘティは、周囲の人間も動物も愛さないシンパシーに欠けた人間で、邪魔になった自分の赤ん坊を寒い森の中に捨てて死なせてしまう。エリオットはヘティを異分子として扱い、ヘティの苦悩や不公平感といった、読者が自分と同質の人間として同情しそうな事柄は描かなかった。ヘティに見られたシンパシーの芽生えや改悛の可能性も、描くことはしても評価しなかった。このように『アダム・ビード』は、登場人物の性格を固定的に分類して描いた点に十全なリアリズムに至っていない点があった。

『フロス河畔の水車場』のリアリズムからの逸脱に関して言えば、物語の最後の洪水の場面は、エリオットと同時代の批評家からもその蓋然性が問題視されてきた。そこで本章はまず、この洪水の場面の意味を再検討する。次いでトムの人物像にはヘティのそれと異なり、シンパセティックな側面が様々に描かれ、次いでその変容も描かれている点に優れたリアリズムを見出し、後者の側面がやがて『ミドルマーチ』の多面的な人物描写につながっていくことを述べる<sup>49</sup>。

### 序論

#### (1) 『フロス河畔の水車場』の概要

物語が描くのは 1829 年 2 月から 1839 年 9 月までの時期である。フロス河畔の長閑な

---

<sup>49</sup> 本章は、拙稿「『フロス河畔の水車場』におけるリアリズムと道德観の相克——トムとマギーの兄妹愛の描き方からの再考」『日本英文学会第 95 回大会 Proceedings』, 2023 年および「Tom Tulliver の悲劇—*The Mill on the Floss* における名誉欲と家族愛」, 『ジョージ・エリオット研究』, 第 16 号, 2014, pp.1-14 に基づいている。

風景の中には、セント・オッグズ (St. Ogg's) の町がフロス河 (the Floss) を通じて世界とつながる新しい時代の様子が窺われる。黒い蒸気船が様々な物品をセント・オッグズの町に、あるいは町から海外に運ぶ (9; bk. 1, ch. 1; 323; bk. 5, ch. 2)。登場人物の階級に関しては、タリヴァー家 (the Tullivers) は、自己所有の大きな水車を動かして製粉業を営み (82; bk. 1, ch. 8; 121; bk. 1, ch. 11)、かなりの広さの畑 (“a pretty bit of land” [83; bk. 1, ch. 8]) を所有しているが、水車の川上で灌漑施設を作ろうとするピヴァート (Pivart) 氏ほど金持ちではなく (165; bk. 2, ch. 2)、ダヴィドフとホール (Davidoff and Hall) によれば下層中流階級に属する<sup>50</sup>。

物語は 1829 年、イギリス中西部の田舎町セント・オッグズを流れるフロス河の描写から始まる。その支流のリプル川 (the Ripple) の岸に 9 歳の主人公マギー・タリヴァー (Maggie Tulliver) の住む水車場ドルコート・ミル (Dorlcote Mill) がある。タリヴァー家は 100 年に亘りそこで製粉業を営み、ヨーマンとして畑地を所有してきた<sup>51</sup>。マギーは父親に似て浅黒い肌と黒髪、黒い目を持ち、頭は良いが不注意で気が強い。父親は味方してくれるが、母親とその実家の姉妹を嘆かせている。「ドドソン家の宗教とは、慣習や世間体に乗っていることを、何であれ崇拜することである」 (“The religion of the Dodsons consisted in revering whatever customary and respectable”) (285; bk. 4, ch. 1)。したがって、普通と異なった外観や頭の良さを持つことは、それだけで罪である。さらにマギーは

---

<sup>50</sup> 例えば 19 世紀半ば、ウィザム (Witham) という人口 3,300 の大きな村では、その 4% を占める上流・中流階級には、在郷ジェントリ、牧師、退職した士官、300-400 エーカーの土地を所有し、200 人以上の農場労働者を雇っている農民、非常に裕福な弁護士 1 人と、大きなブラシ工場の所有者 1 人が属し、13% を占める下層中流階級は、14 の宿屋、小規模の農民と土地管理人、2 人の製粉業者、様々な小売店主、学校所有者と教師、比較的新しいホワイトカラーである、肉体労働を伴わない国家もしくは鉄道の被雇用者からなる。残りは労働者階級に属する (Davidoff and Hall 231)。

<sup>51</sup> 『フロス河畔の水車場』の中でエリオットは、ヨーマンという誇り高い階級を次のように描いている。「上等なブロードクロスを着て、高い地方税と国税を支払い、教会に行き、日曜日には特別豪華なディナーを食べ、教会と国家の構造の起源は、太陽系や恒星の起源と同じく辿れないくらい古いと考えている」 (“who dressed in good broadcloth, paid high rates and taxes, went to church, and ate a particularly good dinner on Sunday, without dreaming that the British constitution in Church and State had a traceable origin any more than the solar system and the fixed stars.” (75; bk. 1, ch. 7)。何世紀もの間、ヨーマンは団結、繁栄、中庸を表し、国家的危機に当たっては勇気を示した (Altick 36)。

母親の言いつけを忘れて歌を歌っていたり、グレッグ伯母 (Aunt Gleg) のためのベッドカバーを作るためにパッチワークを命ぜられると、布を切ってまた縫い合わせるなど馬鹿げているとか、グレッグ伯母さんのために何かするのは嫌だと言って聞かなかったりするなど (15-16; bk. 1, ch. 3)、不注意と反抗的態度が目立つ。これに対して従妹のルーシー・ディーン (Lucy Deane) は色白でおとなしく、当時の若い娘の理想像として描かれている<sup>52</sup>。13歳の兄のトムは、母親に似て色白で、頭は良くないが要領がよい。マギーにとってトムの愛情は極めて大切に、トムが不親切な態度を示すと絶望する。トムはマギーが大好きでよく面倒を見るが、その一方で愚かな家政婦として扱い、時々罰を与える。タリヴァー氏はトムに自分の受けられなかった教育を受けさせて弁が立つように育て、競売人兼鑑定人であるライリー氏 (Mr. Riley) のような仕事につけたいと考え、トムを牧師の家に送る。しかし、そこで教えられるラテン語やユークリッド幾何などは、頭の良いマギーは羨ましがるが、トムにとっては苦痛以外の何物でもない。タリヴァー氏の訴訟相手の弁護士ウェイケム (Wakem) の息子フィリップ (Philip) が、途中からトムと一緒に学ぶことになり、マギーを気に入る。フィリップは知的で感性が豊かだが、背中が曲がって体が不自由で神経質である。

タリヴァー氏は訴訟好きで、川上の大農場主ピバート氏の灌漑の差し止めを求めるなど、勝ち目のない訴訟を起こしては負けて破産し、水車場も家財道具も売り払い、仇敵の弁護士ウェイケムが買い取った水車場の管理人として働くことになる。トムは牧師の下での勉強を2年半でやめ、マギーも寄宿学校に通い始めてから1年と少しで家に戻らねばならない。トムは町で最大の商社であり銀行でもあるゲスト商会 (Guest) で出世してパートナーにまでなったディーン伯父 (Uncle Deane) を頼って、同商会に就職する。最初は倉庫で労働者として働き、幼友達のボブの誘いに乗って投資 (貿易) に成功したこともあり、トムは父親の借金を5年で完済する。マギーはその間、女性であるため働くことも出来ず、貧しいため本にも音楽にも接することなく、すっかり自信を失った父親と愚痴の多い母親を相手に日々を過ごす。ある日マギーは、トマス・ア・ケンピス (Thomas à Kempis,

---

<sup>52</sup> 「……[ルーシー]を丸椅子に載せれば、1時間そのまま座っていて、降りるとは言わないでしょう——あの子を自分の娘みたいに好きにならずにいられないわ……」 (“... you may set her on a stool, and there she'll sit for an hour together and never offer to get off—I can't help loving the child as if she was my own...”) とタリヴァー夫人は羨んでいる (47; bk. 1, ch. 6)。

1379/80–1471) の『キリストに倣いて』(*The Imitation of Christ*, 1441) が説く、「自身を棄てよ、自身を諦めよ、そうすれば汝は心の平和を大いに楽しむことができる」を知り、実行する。しかし、やがてフィリップと密会して本を借りたり話したりすることを楽しむようになる。フィリップはマギーに友情以上のものを期待する。しかし1年後、この密会はトムに見つかり、2人が会うことはなくなる。同じ頃トムは父親の借金を完済し、それを見届けてからタリヴァー氏は亡くなる。

それから2年間、マギーはセント・オッグズの町を出て三流の学校で働き、一時休養のため町に戻って来る。マギーはルーシーの家で過ごす間に、ルーシーの事実上の婚約者でゲスト商会のオーナーの一人息子スティーブン・ゲスト (*Stephen Guest*) と恋に陥る。ある日マギーがスティーブンに誘われて2人でボート遊びに出かけたところ、スティーブンはわざと目的地を行き過ぎ、駆け落ちを迫る。マギーもボートを降りることをせず、2人で貨物船に乗り移ってその甲板で一晩を過ごす。しかし、マギーは結局スティーブンの駆け落ちの願いを振り切って1人で水車場に帰って来る。しかし、トムはマギーの不名誉を嫌って家に入れず、セント・オッグズの町の人々もマギーを排斥する。町を出て家庭教師をするつもりだったマギーは、その気力もなくしてボブの家にとどまるうち、突如洪水がセント・オッグズの町を襲う。マギーは危険を冒し、1人ボートを漕いで水車場へトムを救いに向かう。屋根裏に避難していたトムは、マギーのボートに乗り込む。漕ぎ出して初めて、トムはマギーの冒した危険を悟り、マギーの誠意を理解して目を潤ませる。しかし、2人がルーシーの無事を確認するためにボートをフロス河に乗り入れた時、川上から流れてきた、船着き場の機械の大きな破片がボートを転覆させる。2人はしっかり抱き合ったまま溺死する。

## (2) 『フロス河畔の水車場』のリアリズムに関する先行研究

『フロス河畔の水車場』のトムとマギーの子供時代の生き生きとした描写は、出版当時から賞賛されてきた。1860年5月19日のタイムズ紙の書評でE・S・ダラス (*E. S. Dallas*) は、「『ジョージ・エリオット』はこれまで通り偉大だ」とし、「子供の生活を、あえて散文的リアリティのすべてを用いて描いた」と述べた (“Unsigned Review” 136)。1860年4月7日の『スペクテイター』誌 (*The Spectator*) の無署名の書評は、エリオットの「すべての子供に共通する事柄について子供がどのように感じているかを知る能力」は、ディケンズのそれより遥かに優れていると断言している (*D. Carroll, Critical*

*Heritage* 109)。ヘンリー・ジェイムズ (Henry James) は、イギリス小説に見られる子供の描写の中で、「『フロス河畔の水車場』の初めの頃の頁ほど事実在即したもの」はないと考えた (“Novels” 42)。ローズマリー・アッシュトン (Rosemary Ashton) も、「『フロス河畔の水車場』でエリオットが最も成功しているのは、その心理学的リアリズムである」とし、特に会話にリアリティを見出している (*Natural History* 22-29)。このように出版当時から批評家は、『フロス河畔の水車場』の第1巻と第2巻は「ユーモラスな田園詩であり悲劇でもある最もノーブルな小説」として、そのリアリズムを評価してきたのである (Swinburne 163) <sup>53</sup>。

しかし、物語の最後に突如洪水が起きてマギーとトムが和解した後に溺死する結末が、あまりに突然でリアルさに欠けるということは、出版当初から指摘されてきた (Rignall, “*Mill*” 266)。例えばジェイムズは、物語は洪水の終末に向かって準備されていないとして、作者が最初から洪水を意図していたことに疑問を投げかけている (“Novels” 52)。F・R・リーヴィス (F. R. Leavis) も、洪水には「象徴的価値も比喩的価値もなく」、ただ

---

<sup>53</sup> しかし、第1巻の父親タリヴァー氏が破産するまでのトムとマギーの子供時代、第2巻のトムがタリヴァー氏の借金を完済しタリヴァー氏が亡くなるまでの時代に比べて、第3巻でマギーが従妹ルーシーの事実上の婚約者スティーブンに出会って恋に落ち、トムおよび町の人々から追放され、最後にトムと和解して洪水で一緒に溺死するに至る過程は十分に描かれていない。このことに対しては、出版当初から叙述のバランスの点で疑義が持たれてきた。エリオット自身も、『フロス河畔の水車場』の最終章を書き上げて出版社に送った後、ルイスと出かけたローマから出版社社主のジョン・ブラックウッド (John Blackwood) に宛てて出した1860年4月3日付の手紙で、次のように認めている。「第3巻については、そこに書かれたかもしれないことが欠落しているということ以外、私には何も見えません。しかし実際には第3巻は、小説一冊分の材料が圧縮されているのです」

(“As for the book, I can see nothing in it just now but the absence of things that might have been there. In fact, the third volume has the material of a novel compressed into it.”)

(*Letters* 3: 285)。さらにエリオットは、第3巻の描写が圧縮されている理由を、次のように述べている。「子供時代のシーンを愛するあまり、そこに時間をかけてしまいました。そのため、悲劇の起きる最終巻を思ったほど十分に描き切ることが出来なかったのです。最初から大いに注意を払い準備していたのですが」 (“My love of the childhood scenes made me linger over them; so that I could not develop as fully as I wished the concluding ‘Book’ in which the tragedy occurs, and which I had looked forward to with much attention and premeditation from the beginning.”) (*Letters* 3: 374)。つまり、詳述という点で第3巻には不十分なところが残るのである。

「偶然の出来事」で、作者の「未熟さ」が現れているとする (60)。

洪水のリアリズムもしくは象徴性については、他の観点からの批評もある。まず、後述する自伝的観点からバーバラ・ハーディ (Barbara Hardy) は、洪水による兄妹の和解と溺死という終わり方は明らかに空想的であり、芸術的必然性よりは、実生活で兄アイザック・エヴァンス (Isaac Evans, 1816-90) に勘当されていた作者の個人的必要性によると考えている (“George Eliot” 50)。アッシュトンも洪水の場面に自伝的要素を見て取り、エリオットが兄アイザックから義絶され落胆した事実を重視し、「エンディングは、トム (アイザック) を殺すだけでなく、寛大にも許している」と主張している (“Mill” 36)。

フェミニズム批評は、『フロス河畔の水車場』の洪水による兄妹の和解と溺死は、リアリズムを維持できないのではなく、リアリズムを故意に破っているのだと考える。たとえばシャトルワースは、「マギーの取り得る社会的選択と、マギーを生んだ作家が取りうる小説の形が両方とも不十分であることを示すために、わざとリアリズムから外れたと考えている (“Introduction” 492)。メアリ・ジャコバス (Mary Jacobus) はエンディングを、「分析的で現実的な様式を超え、女性の無限の欲望を表すメタファーで締めくくる」と考えている (222)。この場合の「女性の無限の欲望」とは、マギーのトムへの近親相姦的な恋情のことである。ジリアン・ビア (Gillian Beer) は洪水の蓋然性には触れず、「マギーとトムの和解には、近親相姦の愛の実現と自己の再建への主張がある」とし、また未来への希望がないことを溺死の理由としているが (*George Eliot* 101)、同時に「エリオットはヒロインの抑えきれない欲望に興奮している……河は洪水で形を失う」として、常軌を逸した愛情の象徴的意味も見出している (“Beyond Determinism” 88)。別のフェミニズム批評は、トムを溺死から「救いに」行って、結局マギーと抱き合っ「暗い深み」に沈むことは、トムが「両親の評価を独り占めし、彼女の知的野心を馬鹿にし、彼女が自身の人生を生きることが想像することを抑圧し、その狭い道徳的基準で厳しく糾弾してきた」ことに対してマギーが懲罰を与えたのであると考える (Gilbert and Gubar 493-94; Boumelba 29)。フロイト心理学の立場をとる批評家は、マギーの救助行為にライバルとしての兄に対する優越を、溺死には子宮の温かさと一体感、生れ落ちる以前の過去への回帰への願望の満足を見出している (Emery 9-10)。

興味深いことに、ヴィクトリア朝の批評家は、マギーとスティーブンの逃避行に困惑し不快を感じてはいるが、トムとマギーの突然の死は受け入れている (Beer, *George Eliot* 105)。1860年4月14日の『サタデー・レビュー』(*The Saturday Review*) の匿名

の書評は、第3巻の波乱万丈の後、「2人の主要人物が溺死しても」残念ではないと述べている (D. Carroll, *Critical Heritage* 119)。これに対し、現代の読者がマギーとステューブンの逃避行の道徳性を問題にすることは少ない (Ashton, *Natural History* 16)。

### (3) 本章の立場

『フロス河畔の水車場』は、エリオットの兄アイザックとの不幸な関係を移し替えた、エリオットの作品の中で最も自伝的色彩の濃い小説である。物語中にはジョージ・ヘンリー・ルイスとの内縁関係を理由に自分を勘当した兄に対してエリオットが感じた複雑な思いと、社会的・性的ルールを破った女への社会の判断に対する強い不公平感が表れている (Ashton, “Difficulties” 34)。こうして、マギーに注目する批評においては、多くの場合、トムはシンパシーに乏しいマギーの抑圧者としてのみ捉えられてきた<sup>54</sup>。しかし本章は、トムにはシンパセティックな側面もあり、マギーの保護者でもあったと考える<sup>55</sup>。

本章はまず、結末部分の洪水の場面のリアリズムについて論じ、洪水自体の蓋然性は

---

<sup>54</sup> Cf. Szirotny; Shuttleworth; U. C. Knoepflemacher, *Early Novels*. 同時代人であるダイナ・ムロック (Dinah Mulock) の書評は、トムに対する作者の「軽蔑」を感じ取っている (“Unsigned Review” 157)。

<sup>55</sup> エリオットは、『フロス河畔の水車場』というタイトルをブラックウッド社から提案される前に、1860年1月3日付の同社宛ての手紙で、『妹マギー』 (*Sister Maggie*) とともに、『タリヴァー家、あるいはフロス河畔の生活』 (*The House of Tulliver, or, Life on the Floss*) というタイトルも示していた (*Letters* 3: 240)。後者にはギリシア悲劇の響きがあり、洪水で溺死したトムも悲劇の主人公であることは明らかである (Ashton, *Natural History* 44)。また、エリオット自身がトムへの軽蔑を否定している。エリオットは、出版社社主ブラックウッドに宛てた1861年3月30日付けの手紙で、次のように述べている。

Tom is painted with as much love and pity as Maggie. . . . the exhibition of the *right* on both sides being the very soul of my intention in the story. However, I ought to be satisfied if I have roused the feeling that does justice to both sides. (*Letters* 3: 299, 397; Eliot’s emphasis)

トムはマギーに対するのと同じ愛情と同情で描かれています……両者[トムとマギー]の側の正当性を示すことがこの物語における私の意図です。でも両者を正当に扱うべきだという感情を引き起こしたなら、私はそれで満足すべきだと思います。

認められるが、トムとマギーの行為については蓋然性の観点からリアリティに乏しいことを指摘する。次に、トムの性格描写のリアリズムについて検討する。子供時代のトムとマギーの心理描写のリアリズムは出版当時から賞賛されてきたが、本章では新たにトムの性格の多面性という観点からそのリアリズムを評価する。

## 1. 洪水の場面におけるリアリズムからの逸脱

### (1) 洪水自体の蓋然性

まず洪水自体の蓋然性については、本章は次のような理由で認める。物語の中には、以前にも洪水が起こった事が記され、13歳のトムが「大人になったら、てっぺんに木造の家をついたボートを造る……」(“When I’m a man, I shall make a boat with a wooden house on the top of it . . .”) (54; bk.1, ch. 6) という対策を友人のボブ (Bob) に述べている。またタリヴァー夫人は、「完全に合理的にかつ現実的に」自分の子供たちのいずれか、おそらくはマギーが、フロス河もしくは、水車場のある支流のリップル川で溺れることを心配している (Ashton, *Natural History* 71)。「あの子はいつか転がり落ちるわ」(“She’ll tumble in some day.”) (16; bk. 1, ch. 3)、「何てこと！ あの子溺れたんだわ」(“Goodness heart! She’s got drowned”) (41; bk. 1, ch. 5)、「あの子たちはいつか溺死して家に運ばれて来るんだわ」(“They’ll be brought in dead and drowned some day.”) (110; bk. 1, ch. 11) と、タリヴァー夫人は繰り返し子供たちの溺死について口にするのである。

さらに、語り手はセント・オグズズの町の名前の由来をフロス河の洪水と絡めて語る。昔、フロス河にベオール (Beorl) の息子でオグ (Ogg) という名前の船頭がいた。ある風の強い日に、赤子を抱きボロを着た女が河を渡りたいと泣いていた。オグは危険を冒して渡してやった。向こう岸に着くと、女のボロ着は白いローブになり、彼女の頭の上には後光が現れる。彼女はオグを、その憐れみと親切のゆえに祝福し、彼のボートも祝福する。その後洪水が起きると、オグの祝福されたボートは多くの人々を救った。このように洪水はセント・オグズズの町の歴史に組み込まれ、町の名前そのものが洪水を間接的に指していると言える。また、洪水の際にはボートに救われるというアイデアもここに示されている。さらにはオグが亡くなった後も、オグのボートは洪水の際に処女マリアとともに現れて人々を救うだけではない。後述するように、マギーがスティーブンとボート遊びで行方不明になった時も、マギーの夢に現れて、スティーブンの駆け落ちを踏みと

どまらせる役目をしている。この時の船頭はトム、聖母マリアはルーシーの姿をしている。こうして物語にはフロス河の洪水と溺死のアイデアが終始織り込まれている。また、エリオットの『フロス河畔の水車場』の執筆に関する最初の記録は、1859年1月12日に洪水の過去の例を調べるために内縁の夫ジョージ・ヘンリー・ルイスとロンドンへ年鑑を見に行ったことである (*Journals* 76)。エリオットは執筆当初から物語の結末の洪水を予定していたのである。

## (2) 洪水における兄妹の溺死の蓋然性

### ① マギーの航跡

次に、洪水と兄妹の溺死については、マギーとトムの双方の行為が蓋然性に乏しいことを検証する。そのためにはまず、トムのいるドルコート・ミル、セント・オッグズの町、マギーが滞在しているボブの家、ルーシーの家、スティーブンの家、フロス河とその支流であるリップル川の位置関係を知る必要がある。

次に掲げるのは、位置的にドルコート・ミルのモデルとされるゲインズバラ (Gainsborough) の水車場アッシュクロフト・ミル (Ashcroft Mill) の地図である (図1)<sup>56</sup>。エリオットは、1859年9月に、ルイスとリンカンシャー (Lincolnshire) のゲインズバラに出かけ、ゲインズバラに沿って北へ流れるトレント河 (the Trent) をフロス河のモデルに、ゲインズバラから下ったところでトレント河に注ぎ込むアイドル川 (the Idle) をリップル川のモデルにすることを決めた。セント・オッグズの町の建物には、ゲインズバラのそれが利用されている (Gray 130)。トレント河に面しているのが住居部分で、支流のアイドル川に接しているのが水車小屋と思われる。

---

<sup>56</sup> ドルコート・ミルの建物のモデルは、メアリ・アン・エヴァンスが子供の頃遊んだアーベリー・ミル (Arbury Mill) である (Byatt, "Introduction" xi)



図1 ドルコート・ミルのモデルとされる水車場 (flickr.com)

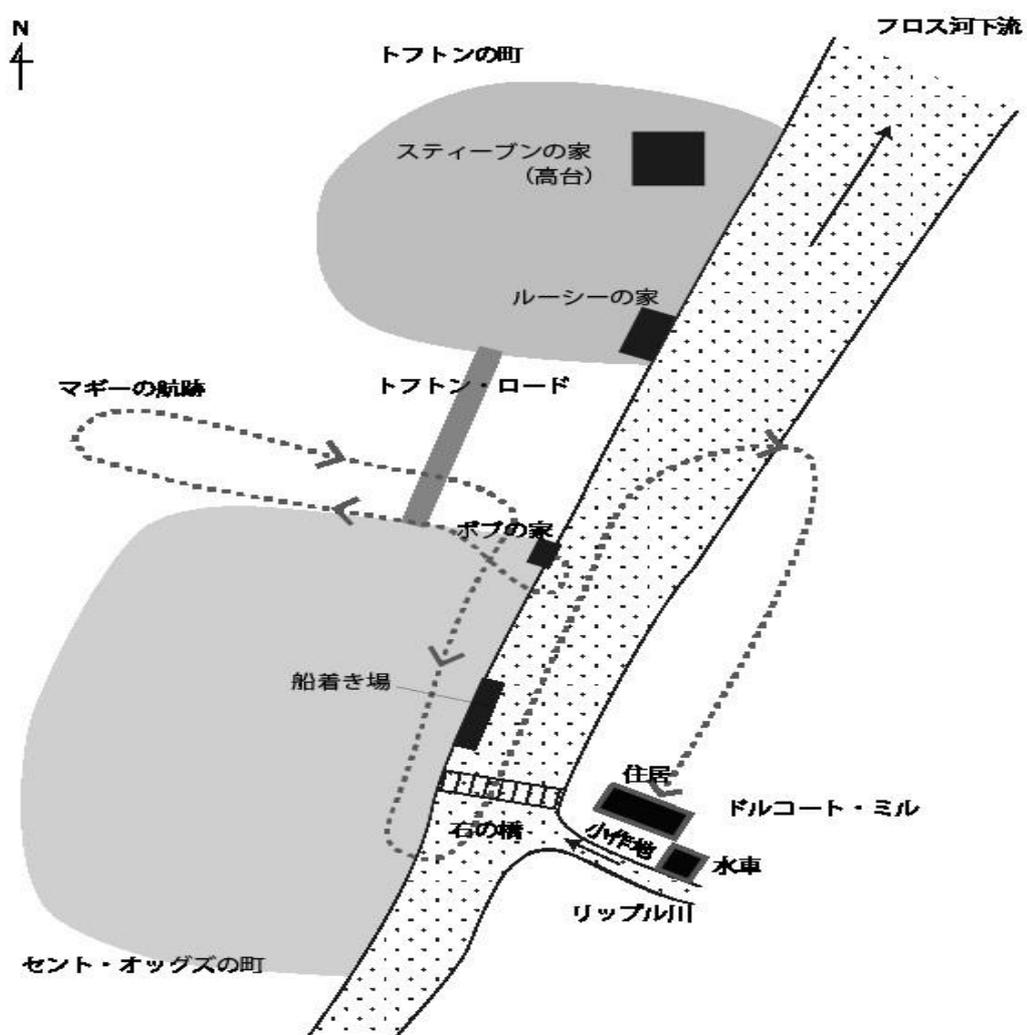


図2 洪水の際のマギーのボートの航跡

この地図は、テキストの記述を元に筆者が作成したものであるが、その根拠は以下の通りである。リップル川は、「常に変わる黒っぽい色のさざ波を立てて、何と生き生きしていることだろう！」（“How lively the little river is with its dark, changing wavelets!”）と形容される小さな川で、フロス河に注いでいる（9; bk. 1, ch. 1）。マギーが洪水の際、ボブの家からボートを漕いでドルコート・ミルにいるトムを救いに行くとき、いったんフロス河によって下流に流された後、河に沿って川上に向かって左側の岸の浸水地を遡って行くのだが、濁流の流れるリップル川を渡る記述はないから、ドルコート・ミルはリップル川の右岸にある。この点がまず、アッシュクロフト・ミルと異なる。水車はリップル川に面してその水を使っている。これは洪水の際にトムが、流れてきた木や石が当たって水車小屋の一部が壊れ、使用人がリップル川に流されたと言っていることから分かる（541; bk. 7, ch. 5）。

次に 2 つの川とドルコート・ミルの母屋の位置関係を考える。「母屋の居間は、両端に窓のある長い部屋で、窓の一方は小作地に向きリップル川に沿っており、フロス河の両岸まで見晴らせた。もう 1 つは水車小屋の裏庭に向いていた」（“The family sittingroom was a long room with a window at each end—one looking towards the croft and along the Ripple to the banks of the Floss, the other into the mill-yard.”（308; bk. 5, ch. 1）。ドルコート・ミルの居間の片端の窓が小作地に向いており、リップル川に沿っていてフロス河の両岸が見晴らせるから、こちら側はリップル川にもフロス河にも接していない。もう一方の窓は水車小屋の裏庭に面しているから、これも川に接していない。母屋の主要部分はどちらの河川にも接していないと思われる。この点もアッシュクロフト・ミルと異なる。

次は、ドルコート・ミルとセント・オッグズの町の位置関係である。トムがゲスト商会に就職する希望を持ってその共同経営者である伯父のディーン氏（Mr. Dean）に会いにセント・オッグズの町にある事務所に赴く時、「フロス河の石の橋を渡ってセント・オッグズに入る頃までには」（“By the time he had crossed the stone bridge over the Floss, and was entering St Ogg’s”）（237; bk. 3, ch. 5）とあるので、ドルコート・ミルとセント・オッグズはフロス河を隔てて対岸にあり、石の橋で繋がっている。またトムは、この橋を渡って帰る時、赤煉瓦の我が家が「いつも陽気に招いているように思われた」（“which always seemed cheerful and inviting outside”）（362; bk. 5, ch. 6）ので、おそらくは橋の正面もしくは近くにドルコート・ミルは立っている。洪水の際、この橋が流されているのをマギーは見る（540; bk. 7, ch. 5）。

トフトン (Tofton) の町には、スティーブンの他、弁護士ウェイケム (Wakem)、ディーン氏と娘のルーシーといった金持ちが住んでいる (264; bk. 3, ch. 7; 540; bk. 7, ch. 5; 541; bk. 1, ch. 5)。セント・オッグズとはトフトン・ロード (Tofton Road) で繋がっており、地図には記載していないが、グレッグ伯母 (Aunt Gregg) の家は客間の窓からトフトン・ロードを見晴らしている (128; bk. 1, ch. 12)。ドルコート・ミルからトフトンへは、トフトン・フェリー (Tofton Ferry) で行くこともできる (370; bk. 5, ch. 7)。

次に船着き場について説明する。ゲスト商会を含めセント・オッグズの町は外国と貿易をしており、「オランダ船」(“a Dutch vessel”) (488; bk. 6, ch. 13) などが行き来する船着き場があると描かれている。以下の通りである。

On this mighty tide the black ships—laden with the fresh-scented fir-planks, with rounded sacks of oil-bearing seed, or with the dark glitter of coal—are borne along to the town of St Ogg’s, which shows its aged, fluted red roofs and the broad gables of its wharves . . . (9; bk. 1, ch. 1)

この力強い潮に載って黒船が——新鮮な臭いのするモミの木材、油を含んだ種子を詰めた丸い大袋、黒光りのする石炭を積んで——セント・オッグズの町まで運ばれる。町には、船着き場の、縦に溝の入った古びた赤い屋根と幅の広い切妻屋根が見える…

…

これだけの大きな貨物船は石の橋をくぐることが出来ず、その停泊する船着き場は石の橋の下流にあるはずであるから、上図の位置に置いた。なお、マギーとスティーブンが小さなボートから蒸気船 (貨物を積んだオランダ船) に乗り移った時、船長は、フロス河河口の海岸線に沿った町マッドポート (Mudport) に、風の具合が良ければ 2 日以内に着くと言っている (488; bk. 6, ch. 13)。翌朝、船長は午前 5 時までには着くと言っているが (498; bk. 6, ch. 14)、いずれにせよ、セント・オッグズの町の船着き場は、河を相当遡った所にある<sup>57</sup>。

---

<sup>57</sup> フロス河のモデルとなったトレント河は、河底の傾斜が少ないため、上げ潮が河口から

マギーがスティーブンと行方不明になってトムに勘当された後、マギーはボブの家に下宿している。ボブの家はセント・オグズズの町にあり、フロス河に面している (404; bk. 6, ch. 4; 507; bk. 7, ch. 1)。洪水の際、マギーはフロス河に面しているボブの家から上げ潮に流され、しばらくは河から離れた畑 (もしくは草地) を漂う (538; bk. 7, ch. 5)。雨が止み、夜が明けかけて周囲の状況が把握できるようになった時、マギーはフロス河の近くまで漕ぎ戻ると、セント・オグズズの町は「遠くの大きな黒い塊」 (“a large black mass in the distance”) に見えた (539; bk. 7, ch.5)。次は河沿いにセント・オグズズの町を遡る。したがってボブの家は、セント・オグズズの町の川下の地域にあると思われる。因みにボブの子供時代の家に対するマギーの印象は、「川下の地域にある奇妙な丸い家」 (“a queer round house down the river”) である (51; bk. 1, ch. 6)。

ルーシーの家はフロス河に面していて、ボートハウスがある (377; bk. 6, ch. 1)。マギーは、セント・オグズズの町を遡り、濁流と化したリップル川の河口を過ぎたところでフロス河を渡ろうとして河にボートを乗り入れる。トフトンの町の (Toften) 近くまで流され、さらに下流にルーシーの家が見えたことから、ルーシーの家は河岸にあるだけでなく、トフトンの川上側の地域にあることが分かる (540; bk. 7, ch. 5)。スティーブンは、トフトンのパーク・ハウス (Park House) と呼ばれる屋敷に住んでいる。ルーシーの家に行くのに徒歩でなく馬でもなくボートを使っているため、ルーシーの家に近くはないが河に比較的近い位置にあり、洪水でも全く浸水していないから高台にあると思われる (424; bk. 6, ch. 6; 541; bk. 7, ch. 5)。以上で図2の説明を終え、洪水におけるマギーとトムの行動の吟味に移りたい。

## ②洪水時のマギーの行動

洪水が起きた時、マギーは幼馴染のボブの家に行った。マギーはボブの家でスティーブンからの求愛の手紙を前に、誘惑から逃れることを願って祈っている。夜が更け、遂に過去の懐かしい思い出が誘惑に勝ち、スティーブンからの手紙を焼き、「翌日スティーブンに別れの手紙を書こう」 (“To-morrow she would write to him the last word of parting.”)

---

80 km まで遡る。セント・オグズズの町のモデルとなったゲインズバラはその範囲内に含まれ、上げ潮も物語に利用されている (<https://www.britannica.com>, accessed Dec. 3, 2022)

(536; bk. 7, ch. 5) と決めた時、足元に水が入って来る。マギーは直ちに洪水と悟りボブを起こす。「翌日」とあるので、まだ夜が明けていない。物語の洪水の起きた 9 月第 2 週の日の出時刻は、現在であれば、例えばコヴェントリ (Coventry、物語に登場する方言の話されているイングランド中西部にあって、エリオットと所縁の深い町) とほぼ同じ経度にあるオックスフォード市 (Oxford city) で 6:30 から 6:40 である<sup>58</sup>。

以下に、ボブの家に水が入ってきてからのマギーの行動を箇条書きで示す。

- 1) マギーがボブを起こして洪水を告げた後、2 人はそれぞれボートに乗り込むが、2 人も新しい上げ潮に乗って流される (537; bk. 7, ch. 5)。
- 2) マギーは長い間、どこにいるか分からなかった (“... and [she] for a long while had no distinct conception of her position.”) (538; bk. 7, ch. 5)。雨が止んで、微かな光が差し、家族を救いに行くことを思い立った時、マギーは、「おそらくは遠く離れた浸水した畑地 (もしくは野原) の——なめらかな水面を漂っていた」 (“She was floating in smooth water now—perhaps far on the over-flooded fields.”) (538; bk. 7, ch. 5)。セント・オグズとトフトンの間の畑地 (もしくは野原) に流されて漂っていたと思われる。強風が吹いている (“the loud moan and roar of the wind”) (536; bk. 7, ch. 5)。夜明けまでオールをつかんだまま無事に漂っているマギーの状態は不可解である。
- 3) 夜が明けかけた頃 (538; bk. 7, ch. 5)、彼女はフロス河を目当てに漕ぎ、次いで河の近くを漕いで水に浸かったセント・オグズの町を遡り、リップル川の河口まで行く。
- 4) 次いでマギーは、リップル川の河口を過ぎたところで、濁流の渦巻くフロス河を横切ろうとしてフロス河にボートを漕ぎ入れる。その髪を強風になびかせ (“her streaming hair was dashed about by the wind.”) (539; bk. 7, ch. 5)、彼女は立ってオールを操る (“Maggie seized her oar, and stood up again to paddle. . .”) (540; bk. 7, ch. 5)。しかし、今や引き潮によって速さを増した濁流にトフトンの近くまで流され、やっと河から右岸に出る (540; bk. 7, ch. 5)。
- 5) 次いで、フロス河の右岸の浸水地を遡り、トムがいるドルコート・ミルに到着する (540; bk. 7, ch. 5)。

---

<sup>58</sup> 2021 年 9 月 1 日の日の出時刻が 6:17、2021 年 9 月 30 日の日の出時刻が 7:03 である (<https://ja.weatherspark.com/m/41645/9/>, accessed September 27, 2022)。

ニーナ・アウエルバッハ (Nina Auerbach) は、『フロス河畔の水車場』全体をゴシック小説と考え、魔女<sup>59</sup>たるマギーが祈って洪水を引き起こし、さらにトムを一時的な避難場所である屋根裏からおびき出して溺死させたと考えている (243)。しかし、『フロス河畔の水車場』はリアリズム小説の範囲内にあると考える批評家がほとんどである。本論文も後者に属するが、洪水の場面のマギーの描き方には、確かに超人的存在を想像させるものがある。濁流を小さなボートで横切るのは極めて難しいと思われる。物語の中でフロス河の濁流は石の橋を破壊し、船着き場の木造の機械をいくつかの塊にして押し流している (540, 542; bk. 7, ch. 5)。それほど濁流の勢いは強い。ましてマギーのように立って漕いでいけば、たちまちバランスを崩して転覆する可能性が高い。マギーの行為は人間業とも思われず、アウエルバッハの言うように「魔女」と形容しても、あながち誇張とはならないだろう。このような超人的な行動が可能かどうか、大いに疑問である。

さらに、マギーの心理の描き方にも常人とは思えないところがある。マギーが「ああ神様、もし私の人生が長いなら、祝福と慰めを与えるものにしてください——」(“O God, if my life is to be long, let me live to bless and comfort—”) (536; bk. 7, ch. 5) と祈った瞬間に、まるでその祈りに応じるかのように、つまりマギーが洪水を引き起こしたかのようにドアから水が入ってくる。しかも、マギーは「一瞬たりとも動じなかった。彼女は洪水だと知っていた!」(“She was not bewildered for an instant—*she knew it was the flood!*”) (536; bk. 7, ch. 5; my emphasis)。ボブにも、「ボブ、洪水が来たわ!」(“Bob, *the Flood* is come!”) (536; bk. 7, ch. 5, my emphasis) と告げている。彼女は水が侵入してくる直前まで、スティーブンの誘惑から逃れることを祈り、自分の「もがき、墮落し、後悔する」

---

<sup>59</sup> キース・トマス (Keath Thomas) によれば、魔女は多くの場合女性で、イングランドの場合、他の人間や家畜に不思議な方法で危害を加えたり、バターやチーズやビールを家内で製造するのを妨げる。ヨーロッパ大陸では魔女は天候にも影響を与える。この類の魔女の起源は人類の歴史上古くからあるが、魔女が悪魔を崇拝しこれと交わるために夜の集會にでかけ、したがって魔術は異端であると考えられるようになったのは、中世後期である。イングランドでは 1542-47 年と 1563-1736 年の時期に魔術を禁じる法律が施行されたが、大陸と異なり、異端かどうかよりも与えた実害についてコモン・ロー裁判所や教会裁判所で裁かれた。法廷に現れるのは氷山の一角にすぎず、1736 年に「魔術に関する法律」が廃止された後も、「魔女」とされる人々に対する迫害 (リンチ) は、19 世紀後半までイングランドの田舎において散発的に生じた (435-68)。

人生の辛い試練が続くことを恐れていた(“O God, am I to struggle and fall and repent again?”) (536; bk. 7, ch. 5)。ボートに乗り込んだマギーは心の中で、過ちを犯し続けるこの世の生活から、苦しむことなく死の世界に移る (537–38; bk. 7, ch. 5)。マギーは暗闇の中で一人ぼっちで、ただ神の存在だけを感じる (“and she was lone in the darkness with God.”) (538; bk. 7, ch. 5)。マギーは命が助かるためにボートを操っているのではなく、死の世界を望んでいるのである。水面を漕ぎ進むにつれてますます力が湧いてくる様子も、「あたかも彼女の人生は、この時に費やされ未来には必要のないエネルギーを蓄えるためのものであったかの如くである」 (“as if her life were a stored-up force that was being spent in this hour, unneeded for any future.”) (539; bk. 7, ch. 5) と描かれている。マギーはトムのもとへ行く時、その後の生は考えていない。トムを勘当を解いた後に死ぬことをむしろ望んでいるのである。

マギーが死を覚悟している点を裏付ける記述がもう1つ、テキストに描かれている。物語の冒頭部分で9歳のマギーがタリヴァー氏の客人ライリー (Ryley) 氏に、デフォー (Daniel Defoe, 1660?–1731) の『悪魔の歴史』 (*The History of the Devil*, 1728) の魔女裁判を描いた挿絵を説明する場面である。

“O, I’ll tell you what that means. It’s a dreadful picture, isn’t it? But I can’t help looking at it. That old woman in the water’s a witch—they’ve put her in, to find out whether she’s a witch or no, and if she swims she’s a witch, and if she’s drowned—and killed, you know, —she’ innocent, and not a witch, but only a poor silly old woman. But what good would it do her then, you know, when she was drowned? Only, I suppose she’d go to heaven, and god would make it up to her. . . .” (20; bk. 1, ch. 3)

「ああ、何のことか教えてあげるわ。恐ろしい絵じゃない？ でも私は見てしまうの。水の中におばあさんは魔女なの——みんなで入れたの。彼女が魔女かどうか見るためにね。もし彼女が泳げば魔女で、もし溺れたら——そして死んだら、ね、——彼女は無実で魔女じゃなくて、ただのかわいそうな馬鹿なおばあさんなの。でもそれで何のいいことがあるかしら、溺れちゃったら？ 天国に行って、神様が償いをしてくださるとは思うけど……」

この魔女とマギーには共通点がある。トムのもとにたどり着いて誠実さを示しても、溺死しなければ兄妹の和解は永遠のものにはならない。マギーは、トムのもとにたどり着くまでは魔女のように超人的な行動をするが、トムと和解するという目的を達した後に人間に戻って溺れるのである。このようにマギーが1人ボートを漕いでトムを救いに行く行動は、たどり着く可能性が低いだけでなく、初めから死を予定している。ギルバートとグーバーやブーメラから懲罰のためにトムをおびき出して溺死させたと評されても仕方がないほど不自然なプロットである(Cf. 本章序論(2))。

### ③洪水時のトムの行動

次に、洪水が生じた時のトムの状況を見よう。トムは水車場の自宅の屋根裏に避難し、2階まで浸水したところで雨が上がった。リップル川を流れてきた木や石が当たって水車が一部損壊し、中にいた雇人が1人、川に流されたらしい(541; bk. 7, ch. 5)。マギーがトムを助けに水車場に向けてボートを漕ぎだした時、すでに雨は上がっており、マギーがボートを漕ぐうちに、「曇った空は次第に上がり」(“the gradual uplifting of the cloudy firmament”) (538; bk. 7, ch. 5)、夜明けの光が強まる(“the growing twilight”) (539; bk. 7, ch. 5)。マギーが水車場に着いた時には、色が分かり始めていた(“Colour was beginning to awake now.”) (540; bk. 7, ch. 5)。マギーが水車場に到着した時、トムは、水が引くのを待つだけというやや安心した心境であったと思われる。図2にあるように、水車はリップル川に接しているが、母屋はフロス河はもちろん、リップル川にも接していない。実際、マギーが水車場に到着した時、1階が水に浸かっているとはいえ、母屋はしっかりと立っていた(“... the house stood firm: drowned up to the first story, but still firm—or was it broken in at the end towards the Mill?”) (540; bk. 7, ch. 5)。にもかかわらず、トムはマギーの誘いに応じて、屋根裏からボートの高さにある2階まで降りてきてボートに乗り移る。彼は家の外の様子を知らない。そして、トムは誰かが自分の名前を呼ぶのを聞いて、「誰だ。ボートを持ってきたのか？」(“Who is it? Have you brought a boat?”)と尋ねている(541; bk. 7, ch. 5)。したがって、彼は周りの状況を把握するために出かけたのだと思われる。

しかし、トムはボートに乗り込んで広い水面に漕ぎだした時、戸外をボートで移動することの危険性を初めて悟る。マギーの冒した危険を思い、マギーの愛情に感動するのである。

It was not till Tom had pushed off and they were on the wide water—that the full meaning of what had happened rushed upon his mind. It came with so overpowering a force—such an entirely new revelation to his spirit, of the depths in life, that had lain beyond his vision which he had fancied so keen and clear, that he was unable to ask a question. . . . But at last a mist gathered over the blue-grey eyes, and the lips found a word they could utter: the old childish—“Magsie!”

広い水面に漕ぎだした時であった——起こったことがいかに危険であったかをトムが完全に理解したのは。その意味はあまりにも圧倒的な力で押し寄せたので——トムの心にとって全く新たな人生の深さの啓示、彼が自分では非常に鋭く明晰であると考えていた見識を超えた啓示であったので、彼は問いを発することができなかった…しかし遂に、青灰色の目がかすみ、唇は発する言葉を見つけた。子供の頃の——『マグジー!』を。

トムがボートを漕ぎだしたとき、マギーはルーシーの無事を確かめに行くことを提案する。しかし、すでに洪水の中をボートで行く行為の危険を十全に悟ったトムが、命がけて自分を救いに来たマギーをさらなる危険に晒すことは考えにくい。トムは責任感が強い人間である。マギーを勘当して家に入れなかった時も、「お前を見るとむかつく」(“the sight of you is hateful to me.”) (505; bk. 7, ch. 1) と言いつつ、「もし入用なものがあって困ったら援助するから——お母さんに言いなさい」(“If you are in want, I will provide for you—let my mother know.”) (504; bk. 7, ch. 1) と付け加えている。

しかし、トムはフロス河にボートを漕ぎ入れる。2人はスティーブンの屋敷が全く水に浸からずに立っているのをボートから眺める (541, bk. 7, ch. 5)。ルーシーの家は河岸にあるので、マギーは、「パーク・ハウスは洪水に浸かってないわ」、「多分ルーシーはそこにいるわ」(“Park House stands high up out of the flood.” “Perhaps they have got Lucy there.”) と言う (541; bk. 7, ch. 5)。トムはスティーブンの父親の会社ゲスト商会に勤めており、またマギーはゲスト家のダンスパーティーに出席しているから、2人ともパーク・ハウスを知っている。フロス河に漕ぎ入れる前にルーシーの無事を察している筈で、それを確認した形である。漕ぎ入れてまもなく、2人のボートは、川上から流れてきた船

着き場の木製機械の大きな破片によって転覆する。実際、登場人物のうちでこの洪水で亡くなったのは、マギーとトムだけである (543; bk. 7, “Conclusion”)。

マギーは生来不注意であり、子供の頃はトムに頼まれたウサギの世話を忘れて死なせてしまったり (39; bk. 1, ch. 5)、トムが慎重に厚紙を積み重ねて作ったパゴダを壊したり (92-93; bk. 1, ch. 9)、これまでトムにたびたび被害を与えてきた。また子供時代のマギーは、トムに冷たくされるとジプシーのところで女王になろうと逃走したり (111-23; bk. 1, ch. 11)、ぼさぼさの髪を伯母たちに笑われると自分でじよきじよきと切ったりする (68-70; bk. 1, ch. 7) など衝動的に行動した。洪水が来た時、マギーがボートでトムのところに行こうと思いついたのは、彼女の生来の無謀さも一因である (Learner 277)。そして無事にたどり着けたことは常人ではなしえないことであり、トムは「ほとんど奇跡的な神のご加護のある努力」 (“a story of almost miraculous divinely-protected effort”) (541; bk. 7, ch. 5) と認識している。したがって、トムは一旦マギーのボートに乗り込むが、広い水面に出てボートで外に出ることの危険性を悟ってマギーの愛情に感動した後、一緒に自宅に引き返すのが自然である。なぜエリオットはこの状況でトムが取る可能性の最も高い行動を捨てたのか。

#### ④蓋然性の低いプロットを使った理由

次に、エリオットがそのような選択をした理由を考える。

##### 1) エリオットの道徳観

1つには作者のシンパシーを重んじる道徳観がある。それは2人のボートが沈没して再び浮かび上がる時、金色の日光に輝く河面に黒い点となって現れることから分かる (“But soon the keel of the boat reappeared, a black speck on the golden water.”) (542; bk. 7, ch. 5)。金色の日光がエリオットの小説や紀行においてシンパシーと天国を象徴することについては、第2章第3節で説明した。トムは、危険を冒して自分を助けに来たマギーを見て自分への忠誠心を知り、彼女に対して失っていたシンパシーを取り戻したのである。

##### 2) 自伝的要素

エリオットは、1854年7月から1855年3月まで、妻子を持つジョージ・ヘンリー・ルイスがゲーテの伝記を書くための取材旅行にドイツに同行して以来、社会から締め出された。ルイスの結婚が破綻していること、ルイスが妻と別の男との間にできた子供を認知し

たため当時の法律では離婚できなかったことは考慮されなかった。ドイツから帰国後も 2 人は同棲していたが、ルイスだけが夕食に招待され、エリオットを訪ねてくる女性はほとんどいなかった。1868 年 1 月にルイスから自宅に招待されたアメリカ人チャールズ・エリオット・ノートン (Charles Eliot Norton) は手紙で、エリオットが当時置かれていた社会的状況を次のように述べている。

She is not received in general society, and the women who visit her are either so émanicipée as not to mind what the world says about them, or have no social position to maintain. Lewes dines out a good deal, and some of the men with whom he dines go without their wives to his house on Sundays. (Haight, *Biography* 409)

彼女[エリオット]は、一般社会では受け入れられていません。彼女を訪れる女性は、世間に何を言われても気にしないほど放縦か、維持すべき社会的地位を持たないからです。ルイスはよく夕食を外で食べますが、彼と夕食を共にする男たちの中には、日曜日にルイス家を訪れる者もいますが、妻を連れて行きません。

エリオットは兄からも絶交された。彼女が 1857 年 5 月 26 日付の手紙で兄のアイザック (Isaac Evans, 1816–90) に、自分の姓が変わったことを知らせ、父親が彼女に残した信託財産による収入をルイスの口座に振り込むように依頼すると (*Letters* 3: 331–32)、アイザックは自分の弁護士を通じて、エリオットの結婚の日にちと場所の詳細を問うた。エリオットが直ちに、ルイスとの結婚は法律上のものではないことを知らせると (*Letters* 2: 349–50)、アイザックは直接返事を寄越さず、代わりにエリオットと仲の良かった姉のクリスティアーナ (Christiana, 1814–59) に、エリオットに宛てた絶縁状を書かせた (Haight, *Biography* 233)。クリスティアーナは 1860 年 3 月 15 日に亡くなるが、結核で死の床にあったクリスティアーナに、エリオットは会うこともできなかった。その年の 1 月から『フロス河畔の水車場』を書き始めていたエリオットは、姉の死の直後に執筆を止めた。代わりにエリオットは、周囲の人々の心と自分の未来が見える透視力を備えた男を主人公とする短編ゴシック小説「引き上げられた帳」(“The Lifted Veil,” 1859) を書き始め、4 月 26 日に完成するまで『フロス河畔の水車場』の執筆には戻らなかった。また、マギーとトムの生まれた年は、エリオットと兄アイザックのそれと同じである。そ

れゆえ、この作品の悲劇的な結末において兄妹が和解に至るという成り行きには、当然作者自身の願望が込められていると見ることができる (Ashton, *Natural History* 92-93)。エリオットは兄を改悛させる強い必要を感じていたから、マギーは何としてもボートで水車場にたどり着かねばならず、さらに和解を永遠のものにするため、トムはマギーとともに死なねばならなかったのである。トムとマギーの墓碑銘には「死においても分かたれることはなかった」(“In their death they were not divided.”) (544; bk. 7, “Conclusion”) と刻まれた。ルイスは、この場面をエリオットが泣きながら書いていると、手紙で出版社社主のジョン・ブラックウッドに知らせている。

“Mrs. Lewes is getting her eyes redder and *swollener* every morning as she lives through her tragic story.” (Eliot, *Letters* 3: 269; Lewes’s emphasis)

「ルイス夫人は悲劇的な物語を登場人物になり切って書いているので、毎朝ますます目を赤く腫らしています。」

## 2. トムの性格描写に現れたリアリズム——シンパセティックなトム

ここまでは『フロス河畔の水車場』におけるリアリズムからの逸脱を見てきたが、ここからは逆にトムの性格描写に即してこの小説におけるリアリズムの進展のあり方を検証したい。本節では、『フロス河畔の水車場』はトムのシンパシーに乏しい態度だけでなく、シンパセティックな態度も補完的に描いていることを示す。

語り手は、スティーブンと2人だけでボート遊びに出かけて夜を共にし、1人で帰ってきたマギーをトムが勘当し、町の人々が排斥する場面で、シンパシーに欠ける人を公理に基づいて判断する人と定義している。

All people of broad, strong sense have an instinctive repugnance to the men of maxims; because such people early discern that the mysterious complexity of our life is not to be embraced by maxims, and that to lace ourselves up in formulas of that sort is to repress all the divine promptings and inspirations that spring from growing insight and sympathy. (518; bk. 7, ch. 2)

幅広く堅固な良識の持ち主は皆、公理一辺倒の人間に本能的な反感を抱く。なぜならそういう人々は、我々の人生の不思議な複雑さというものは公理には包摂されえないこと、その種の公式で自分を縛れば、全ての神の働きかけと増してゆく洞察力とシンパシーから生じるインスピレーションを抑えつけてしまうことを早くから認識しているからである。

したがって、トムは公理一辺倒のシンパシーに欠ける人間であるかがここでの問題である。それを考えるために、1 つには男性優位思想の影響を受けて抑圧的なトムのシンパセティックな側面を検討し、もう1 つはそもそもマギーがトムの愛情に執着することの背後にある彼女の異分子的特徴に起因する自信のなさ、彼女の愛情欲求を満たす「より強い存在」(“[a] stronger presence”)として彼女を保護するトムのマギーに対するシンパセティックな側面を検討する。

#### (1) 語り手が“manly”と評するトム

トムは幼い子供の頃から父権制社会の男性優位の考え方に染まっており、マギーを「自らの所有物のように扱う」(Szirotny 74)。また人類のより優れた半数に属しているからマギーより所持金が多いと自慢し、喧嘩が好きで「コフキコガネ、近所の犬、妹を含む、野生であれ、飼育されているものであれ、自分より劣った動物に対する支配」(“the inferior animals wild and domestic, including cockchafers, neighbours’ dogs, and small sisters”)を好む(98; bk. 1, ch. 9)。彼女が褒められることを切望している知識を、「そんなもの」(“stuff”)と呼ぶ(44; bk. 1, ch. 5)。大方の批評家は、トムのマギーの意図を理解しない態度はトムの子供の頃から一貫していると述べ、トムが利己的・専制的であることは子供の頃から変わらないと見なしているが、その多くがフェミニズム批評である<sup>60</sup>。フェミニズム批評のキーワードには例えば「ジェンダー社会」(“a gendered world”) (Gilbert and Gubar 492)や「家父長制社会の男性」(“a patriarchal man”) (Szirotny 74)があるが、物語中にはジェンダーに関する言葉として“manly”と“masculine”があるので、まずはこれを切り口としてトムがシンパシーに欠ける公理一辺倒の人間として描かれているかどうかを調べることにする。

<sup>60</sup> E.g., Szirotny, Barrett, Gilbert and Gubar, etc.

## ① “manly”と“masculine”の辞書的意味

オックスフォード英語辞典によるとこの2語の定義は以下のようになっている。

**“manly”**

2. Possessing the virtues proper to a man as distinguished from a woman or child; chiefly, courageous, independent in spirit, frank, upright.
3. Of things, qualities etc.: Befitting or belonging to a man; masculine.

**“masculine”**

4. Pertaining to the male sex; peculiar to or assigned to males; consisting of males.

“manly”における勇気や自立や率直や正直が男性特有の美德とされている点には、男性優位思想が現れている。17, 18世紀の“manliness”は名誉を重んじ、決闘も“manly”と考えられていた。19世紀には福音主義と個人主義が重んじられ、少なくとも建前上は自立した良心が重視され、したがって“manliness”は暴力から脱して性格の問題となった（Tosh 72-77）。“manliness”の内容としてジョン・トッシュ（John Tosh）は、オックスフォード英語辞典の定義に沿って肉体的タフさであるエネルギー、強さ、精神的タフさである決断力、勇気、忍耐力、自立心を挙げている。これに対して、ロビン・ギルモア（Robin Gilmour）は、19世紀のイギリス文学作品の中から、シンパシーが“manliness”と呼ばれている場面を見つけ出している。例えばウィリアム・メイクピース・サッカレイ（William Makepeace Thackeray, 1811-63）の『虚栄の市』（*Vanity Fair*, 1848）に登場するウィリアム・ドビン（William Dobin）は、ウォータールー（Waterloo）の戦い以来15年も従軍して血のシミ跡をコートにつけている勇敢な男性であるが、他方弱いものに対してシンパシーを感じる意味でも manly な人物であると描かれている（69-70）<sup>61</sup>。このよ

---

<sup>61</sup> 『虚栄の市』におけるドビンに関する記述は次の通りである。

Which of us can point out many such in his circle—men whose aims are generous, whose truth is constant, and not only constant in its kind, but elevated in its degree; whose want of meanness makes them simple: who can look the world honestly in the

うに“manly”は、オックスフォード英語辞典に「男性固有の」とあるが、現在の基準では女性にも当てはまる形容詞である。

フェミニズム批評家が問題視するトムの抑圧的性格は、男性優位思想に基づくもので、男性にその指示対象が限られた“masculine”と強い関連性を持つはずである。そこでトムの性格の吟味に入る前に、19世紀イングランド中産階級の“masculinity”に含まれる男性優位思想を概観しておきたい。

## ② 19世紀イングランド中産階級の“masculinity”に含まれる男性優位思想

まず、男女は解剖学的に明確に区別できると考えられ、生物学的に女性の体は男性より「小さく、弱く、性的に受動的で」、女性の脳は男性に比べて「小さく働きが劣っている」(Showalter 64; Tosh 68–69)と考えられていた。エリオットもエッセイの中で、女性の脳は「抽象的アイデアから具体的アイデアを導き出せるだけの強さの電池がない」(“the voltaic-pile is not strong enough to produce crystallizations [sic]”) (“Woman in France,” *Essays* 56)と述べている。

社会学的にも、男性優位の世の中(“hegemonic masculinity”)であった(Connell 186–99; Tosh 63–68)。R・W・コネル(R. W. Connell)は、ヨーロッパにおける近代ジェンダー秩序、「覇権的な男らしさ」(“hegemonic masculinity”) (189)の誕生の理由として、1450–1650年頃にカトリック教会の支配が緩み個人の理性が重視されるようになったこと、帝国主義の植民地において女性は妻、召使など従属的地位に置かれたこと、商業資本主義が発達したがその成功者は例えばベンジャミン・フランクリン(Benjamin Franklin, 1706–90)に代表される男性であったこと、ヨーロッパにおける宗教(16世紀と17世紀)や王朝(17世紀と18世紀)に関する内戦は軍事的能力を名誉とする近代国家を生み出し父権制社会を強固にしたことを挙げている(186–91)。

---

face with an equal manly sympathy for the great and the small? (729; ch. 62)

[ドビンの]仲間には、ドビンのような人間は多くない。どんな人間かと言えば、彼の目的は寛容で、常に正直であり、常に正直であるだけでなく正直さの程度が高い。彼の目的は卑劣さがないから単純である。彼は偉大なものに対しても小さなものに対しても等しく優しい(manlyな)シンパシーをもって、世界を真正面から誠実に見ることができるのである。

例えば、『フロス河畔の水車場』の舞台である19世紀前半のイングランドにおける妻の弱い地位は以下のようなものである<sup>62</sup>。19世紀前半のコモン・ローにおいて、夫と妻は1つの人格を持ち、その人格とは夫であった。これを“coverture”（「妻の地位」[田中 216-17]）と呼ぶ。“coverture”とは「妻の法的無能力の総称」である(Doggett 34)。独身女性は財産を所有することが出来たし、契約を締結することも出来た。しかし結婚すると、妻が婚姻時に持参した、もしくは婚姻中に得た債権・株式を含む動産は、衣服やアクセサリは別として、すべて夫の所有に移った。妻の土地は、夫の完全な所有には属さなかったが夫に管理権があり、土地から上がる収入は夫の自由であった(Doggett 36-44; Holcombe 18-36)。これに対して、中世以来、コモン・ローの契約や不法行為への適用が不公平をもたらす時に、その不備を補うため国王からの「恩恵」として、コモン・ローの適用例外を認めた制度があった。これは、エクイティ(“equity”)と呼ばれる。エクイティの上では夫と妻は別人格であり、娘に持参金として持たせる土地・建物・動産が婿に散財されないように、婚姻時に娘の財産を信託する手法が発達した。これは「別財産」(“separate property”)と呼ばれる。但しこの契約を締結するには、弁護士による契約書作成費用だけでも100ポンドを優に超えた(Doggett 38; Holcombe 37-47)。

「離婚法」(“The Divorce Act of 1857”)により離婚裁判所が設立される以前は、離婚手続きの第1審裁判所は、ロンドンにあるコモン・ローを扱う王座裁判所(the Court of King’s [Queen’s] Bench)、もしくはコモン・ロー裁判官が国王の名代として地方に赴いて開廷する巡回裁判所(assize)のどちらかであった<sup>63</sup>。第2審は教会裁判所、最終審は貴族院である<sup>64</sup>。離婚理由は、必ず第一に相手の不倫でなければならない。これは、結婚を神聖なものとするキリスト教の考えに基づいている。さらに、妻が訴える場合だけは、夫の不倫に加えて夫による虐待や重婚や近親婚などの事実を証明せねばならないというダブルスタンダードがあった。離婚手続きの手順は、まず王座裁判所もしくは巡回裁判所で、妻もしくは夫の不倫の相手に損害賠償請求をして勝訴せねばならない(Stone 231-300)。次

<sup>62</sup> 拙稿「『ワイルドフェル館の住人』に描かれた「事実」——19世紀初頭のイングランドの妻の脆弱な法的地位」,『ブロンテ・スタディーズ』,第6巻第5号,2018年,pp. 23-35を利用した。

<sup>63</sup> 巡回裁判の制度は裁判所法(“Courts Act 1971”)により廃止された(田中 66-67)。

<sup>64</sup> 貴族院が最高裁判所の役割を果たす制度は2009年に廃止され、新たに最高裁判所(the United Kingdom Supreme Court)が設立された(Andrews 26-32)。

いで、教会裁判所から「教会による別居」を手に入れる。最後に貴族院で離婚判決という「個別法律」(“private act” [田中 664])を可決してもらって、漸く離婚が成立する(Stone 301-46)。その費用は、1845年の時点で1000ポンドを超えた(Shanley 36-37)。実際、貴族院が離婚案を可決した件数は少ない。18世紀において134件、19世紀において1857年の離婚法成立までに90件である。そのうち女性で離婚に成功したのは、わずか4人に過ぎなかった(Holcombe 95-96)。

離婚法以前は、法的別居は「裁判所による別居」(“judicial separation”)ではなく、教会裁判所が、夫の不倫や妻への虐待を理由として与えていた「教会による別居」(“*a mensa et thoro*”)であった。教会裁判所の起源は、もともとカトリック教会のカノン法が、全世界を拘束するものと考えられていたことにある。ウィリアム1世以来、イングランドの聖俗裁判所の管轄を明確にする試みがなされたが、教会は長らく宗教上の事件の民事裁判権を認められていた。宗教上の事件とは、婚姻無効や別居、子供の嫡出・非嫡出、財産の相続の問題などである。教会裁判所は、結婚は神聖であるから将来的に解消することは出来ないとして、「婚姻無効」(“*a vinculo matrimonii*”)と「教会による別居」のみ認めた。「婚姻無効」は、重婚、性的不能、精神異常などが婚姻時から存在することが条件で、婚姻が無効だから当事者は再婚でき、妻は独身時と同じ法的権利を回復する。しかし、無効とされた婚姻関係から生まれた子供は非嫡出子となる。

他方、「教会による別居」は、完全な離婚ではないから当事者は新たに婚姻することが出来ない。妻の法的無能力もそのままである。教会裁判所は、夫の生きている間のみ、別居中の妻の扶養料の支払いを命じた(妻が不倫をしていれば別である)。「教会による別居」が認められるのは、夫の不倫、虐待に理由が限られた。夫から口汚く罵られるなどの精神的暴力は、教会裁判所では、別居理由として認められなかった。1790年のエヴァンス対エヴァンス(*Evans v. Evans*)裁判の判決で、サー・ウィリアム・スコット(Sir William Scott)判事が「単に感情を傷つけることは、現実もしくは脅しとしての身体的負傷を伴わない限り、別居理由として認められない」と述べたことが、その後30年間の規範とされた(Stone 203-04)。とくに、妻が夫をなじったとか、妻の務めを怠っている場合は、妻は夫が改めるのを待つように言われ、別居を認められなかった。また「教会による別居」は訴訟費用が高かついた。1850年代において争いのない場合が300~500ポンド、争われた場合は数千ポンドが必要だった(Holcombe 95)。さらに妻が家出した場合、夫はコモン・ロー裁判所から人身保護令状(“a writ of habeas corpus”)を得て、妻を連れ戻すことが出

来た。従わない妻は監獄に入る。夫が妻を監禁する権利を初めて最高裁判所(貴族院)が否定したのは、1891年、エミリー・ジャクソン(Emily Jackson)の実家の家族が人身保護令状を請求した裁判の判決(*Rex v. Jackson* 判決)においてであった(Doggett 1-4, 134-37)。

当時の妻には、法律上、子供の監護権はなかった。18世紀から19世紀初頭の判決を通じて、コモン・ロー裁判所の判断基準は、夫が子供にその生命の危険に至る暴行を加えているかどうかであり夫の性格の悪さは考慮されなかった。判例によれば、親とはすなわち父親を指し、これは他のどんな関係より強いとされた。その背景には、妻には法律上自由にできる財産がないこと、生活費を稼ぎ、子供に正規の教育を受けさせ、就職を確保するのは父親の仕事であるという伝統的考え方に基づく。子供が妻に連れ去られた場合は、父親は裁判所に人身保護令状を請求して子供を連れ戻すことが出来た。さらに夫が自分の死後の子供たちの後見人として妻以外の人間を遺言で指定すると、妻にはどうすることも出来なかった。また夫より長生きした妻は、自分の死後の未成年の子供たちの後見人を遺言で指定することが出来ず、裁判所が後見人となった。エクイティ裁判所も、1830年代までは父親の子供に対する監護権の問題に踏み込むことには消極的であった(Shanley 132-38)。「児童監護法」(“The Infant Custody Act of 1839”)により、7歳未満の子供の後見の権利と7歳以上の子供との定期的接見の権利が妻に認められたが、訴えるための費用は高額で、また妻が不倫をしていないことが条件とされた(Shanley 137)。“The Infant Custody Act of 1873”は、特別の状況の下で、16歳未満の子供と母親の接見を認めた。“The Infant Custody Act of 1886”も、児童監護における両親の平等の権利を認めず、母親が遺言で監護人を指定した場合、父親が1人で後見人になるに相応しくないと裁判所が認めた場合に限り、裁判所は母親が遺言で指定した後見人が父親とともに後見の任に当たることを許可することができるとした。1880年代末からは子供自身の利益が考えられるようになった(Shanley 139-55)。こうして19世紀イギリスにおいては、男性と女性の自然の差異を理由に、経済的・政治的活動の場は男性に、家庭は女性にという住み分けが当然のこととして実践されていた(Connell 195)のみならず、家庭内においても男女間の格差は大きかったのである。

トム・マギーに対する抑圧的態度の背景には、このような女性蔑視社会がある。次に、物語中で“masculine”、“manly”がトムに関してどのように使われているかを見たい。

### ③ 男性優位思想に染まったトム

『フロス河畔の水車場』の中で、“masculine”およびその名詞形は「男性」を表すために使われているが、次の引用はまさしく男性優位社会に言及している。

Still, Latin, Euclid and Logic would surely be a considerable step in *masculine wisdom*—in that knowledge which made men contented and even glad to live. . . . And so the poor child, with her soul’s hunger and her illusions of self-flattery, began to nibble at this thick-rinded fruit of the tree of knowledge, filling her vacant hours with Latin, geometry, and the forms of the syllogism, and feeling a gleam of triumph now and then that her understanding was quite equal to these peculiarly *masculine studies*. (299; bk. 4, chap. 3 ; my emphasis)

それでも、ラテン語、ユークリッド、そして論理学は男性の知恵——すなわち男性を満足させ、生きることを楽しくさえするあの知識において、確かに相当な一歩になるだろう……そこでこのかわいそうな子[マギー]は、知識の木の皮の厚い果実を齧り始めた。暇な時間をラテン語、幾何、三段論法で埋め、このような特に男性のみに許される学問を、男性に劣らずこなすことのできる自分の理解力に、時々勝利の光を感じていた。

トムが牧師館に寄宿して習うラテン語やユークリッド幾何学といった抽象的学問は男性にのみ許された学問であり<sup>65</sup>、トムはこれが苦手である。しかしそれらを学ぶのに苦労していたトムは、ステリング牧師が次のように言うのを聞いて、これらの学問に適した頭を持つマギーを馬鹿にする。

“They can pick up a little of everything, I daresay,” said Mr Stelling. “*They’ve a great deal of superficial cleverness: but they couldn’t go far into anything. They’re*

---

<sup>65</sup> 古典教育を受けた少女たちは、フローレンス・ナイティンゲール (Florence Nightingale, 1820–1910) のように「家庭教師から音楽と絵を、父親からギリシア語、ラテン語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、歴史、哲学を教わった」(Purvis 66–67)。エリオット自身は、ギリシア語とラテン語の読み書きを独習した(Jenkyns 113; *Letters* 5: 464)。

*quick and shallow.*”

Tom, delighted with this verdict, telegraphed his triumph by wagging his head at Maggie behind Mr. Stelling’s chair. As for Maggie, she had hardly ever been so mortified: she had been so proud to be called “quick” all her little life, and now it appeared that this quickness was the brand of inferiority. (158; bk. 2, ch. 1; my emphasis)

「女子は何でも少しなら理解できる」とステリング牧師は言った。「女子は、薄っぺらな賢さを大いに持っている。だが何事も深くは理解できない。女子は呑み込みが早いが浅いんだ」。

トムは、この判決に喜んで、ステリング牧師の椅子の背後からマギーに、自分の頭を左右に振って勝利宣言した。マギーはといえば、これほど屈辱を味わったことはなかった。彼女はその短い生涯で「呑み込みが早い」と呼ばれることを大層誇りにしてきた。今や、呑み込みの早さは、劣っていることの烙印に思われた。

トムは、抽象的事物に対する自分の理解力のなさという現実を柵に上げて、男性優位思想を利用してマギーの自尊心を傷つけるのである。

次の引用には“masculine”という言葉は入っていないが、トムの男性の社会学的男性優位に乗じたトムの態度を示している。父親タリヴァー氏の破産後、本も音楽も学校も話し相手も失ったマギーは、父親が敵と見なしている弁護士ウェイケムの息子フィリップと密会していた。父親の借金返済のために働いているトムはマギーに、これを禁じる。

“Because you are a man, Tom, and have power, and can do something in the world.”

“Then, *if you can do nothing [in the world], submit to those that can*” (361; b. 5, ch.5; my emphasis)

「トム、あなたは男だから、力があり、世の中で何かができるわ」

「それなら、自分では何もできないのなら、できる人間に従え」

トムは、社会的優位を背景にマギーを自分に従わせようとしている。トムがマギーとフィ

リップの交際を禁じる理由は、父親の意思を尊重することと、もともと体の不自由な人間に対してトムと社会が抱いている偏見である。マギーを連れてフィリップに会ったトムは、次のようにフィリップを罵り、マギーに“unmanly”な行為だと非難されている。

“And you—you to try and worm yourself into the affections of a handsome girl who is not eighteen, and has been shut out from the world by her father’s misfortunes! That’s *your crooked notion of honour*, is it?” (358; bk. 5, ch. 5)

「それから君は——君は 18 歳にもならないきれいな女性の愛情につけこんでいる。父親の不幸のために世間から締め出されてきた女性の愛情にね！ それが君のねじ曲がった名誉心かね？」

ここには、父親タリヴァー氏の意向だけでなく、後に述べるようにタリヴァー氏の破産以後、世間体を強く気にするようになったトムの姿が反映されているとも言える。

次は子供時代のトムがマギーを家政婦として見なしている場面であるが、彼のマギーに対する愛情は、彼女を家政婦として「搾取」することにあるとする批評がある (Cf. Shuttleworth, “Introduction” 498)。

Tom, indeed, was of opinion that Maggie was a silly little thing; all girls were silly . . . Still he was very fond of his sister, and meant always to take care of her, make her his housekeeper, and punish her when she did wrong. (44; bk. 1, ch. 5)

トムは実際、マギーは馬鹿なおチビちゃんだと思っていた。女子はすべて馬鹿だ… …それでもトムは妹が大好きだった。つねに面倒を見て、家政婦にして使って、間違ったことをしたら罰するつもりだった。

確かに 13 歳のトムは 9 歳のマギーを家政婦とみなしている。そしてこのことはマギーの心に傷を残している。17 歳のマギーはトムを詰る。「私が幼かった頃でさえ、いつも兄さんがこの世の誰よりも好きだった時も、兄さんは私を許してくれずに泣きながらベッドに行かせたわ」 (“even when I was a little girl, and always loved you better than any one else

in the world, you would let me go crying to bed without forgiving me.”) (360–61; bk. 5, ch. 5)。しかし、トムは男性優位社会に染まってマギーを利用しつつもマギーの面倒をみる責任を感じていること、後述するようにマギーがトムの自分に対する愛情に執着していることの背景にあるトムのマギーの保護者としての役割にも注意すべきである。

#### ④ “manly”なトム

このように、確かにトムの性格は抑圧的で独善的であるが、トムは優しさも併せ持っている。このことを何より示すのは、牧師館で学んでいた頃に牧師の幼い娘ローラの散歩を日常的に命じられて、嫌がらなかったことである。ステリング夫人がトムを使用人代わりに使って、ローラの庭の散歩に付き添わせるのであるが、ローラは幼いので、トムは大抵ローラを抱いて庭をくるくる回ることになる。トムは、居丈高で「義務」(“duty”)という言葉を頻発するステリング夫人は大嫌いで、薄金色の巻き毛と幅広い三つ編みを生涯嫌悪したほどであったが、幼いローラは好きだった。秋の日の一番日当たりの良い時間帯にローラを連れ出すのは、トムの「お気に入りの仕事」(“quite a pretty employment”)であり (150; bk. 2, ch. 1)、そんな時トムは、自分が牧師館の家族の一員であるかのように感じた。トムのこの優しさをエリオットは、語り手を通して“true manliness”と呼んで賞賛している。

If Tom had had a worse disposition, he would certainly have hated the little cherub Laura, but he was too kind-hearted a lad for that—*there was too much in him of the fibre that turns to true manliness, and to protecting pity for the weak.* (151; bk.2, ch.1; my emphasis)

もしトムがもっと悪い性格であったなら、彼はきっと小さな天使ローラを憎んだことだろう。しかし彼は、あまりに優しい心の持ち主だった。彼の中には、真の男らしさ、弱い者に対する保護者としての憐憫へと変化する素質があまりにたくさんあったのである。

そしてこのトムの優しさは、マギーに対しても示される。13歳のトムは、9歳のマギーに、自分が寄宿学校に行っている間、彼のウサギの世話を頼む。マギーが餌をやるのを忘

れてウサギを全部死なせてしまうと、トムは、自分がマギーのために釣り糸を買ってきたこと、マギーが過去に自分に与えた被害を並べて、翌日の釣りに連れて行ってやらないこと、マギーにとって一番辛い言葉、「愛してやらない」(“I don’t love you”) (39; bk. 1, ch. 5) を言ってマギーのもとを去る。確かにここには、トムがマギーを家政婦代わりに使う身勝手な怒りがある。しかし、次の引用にあるように、トムには屋根裏で泣いているマギーを許し慰める優しさもある。

“Don’t cry then, Magsie: — here, eat a bit o’ cake.” Maggie’s sobs began to subside, and she put out her mouth for the cake and bit a piece; and then Tom bit a piece, just for company, *and they ate together and rubbed each other’s cheeks and brows and noses together while they ate, with a humiliating resemblance to two friendly ponies.* (43; bk.1, ch. 5; my emphasis)

「もう泣くなよ、マギー——ほら、ケーキを一口お食べ。」マギーのすすり泣きは収まり始めた。彼女はケーキに口を突き出して一口かじった。それからトムが、マギーに付き合うためだけに一口かじった。2人は一緒にケーキを食べ、食べている間、頬や眉や鼻をお互いにこすりつけた。その様子は仲の良い2頭のポニーに似ていた。

父親に言われて屋根裏に迎えに来たトムは、マギーのために持ってきたケーキと一緒に食べるのだが、頬や鼻をくっつける様子は仲の良い仔馬に例えられている。この時点でトムのマギーへの怒りは静まり、マギーの不注意な仕業を許している様子が伺える。ここには大人の理性を介さない“manly”以前の子供同士のシンパシーが描かれている。後にトムがマギーを憎んで勘当した後、マギーの命がけの行為に感動してマギーを許すのも、マギーは悪意がなくても過ちを犯すことがあるという、トムの子供の頃からの認識が影響していると思われる。

トムは、当然のことながら両親に対しても“manly”な態度を示すが、その背後にはシンパセティックな側面がある。次の引用には母親タリヴァー夫人へのシンパシーが現れている。

There was silence for a few moments, for every one, including Maggie, was astonished

at Tom's sudden *manliness* of tone. (225; bk. 3, ch. 3; my emphasis)

暫く沈黙があった。というのも、マギーを含めて全員が、突然トムの口調が男らしいもの変わったからである。

これはタリヴァー氏が破産した後の親族会議の席で、将来伯母たちが自分たち兄妹に残すつもり遺産を、今、母親が手放したくない茶器や家具を買うために使ってくれとトムが提案する場面である。しかし、将来甥と姪に遺産を残さなかったと噂されたくない伯母たちに断られる。ここにおける“manly”の意味は、オックスフォード英語辞典の定義である「勇敢な、精神的に自立した、率直な、正直な」(“courageous, independent in spirit, frank, upright”)であるが、その背後にはトムの母親に対するシンパシー(同情)が見える。

さらにトムの父親に対するシンパシーを表す場面が続く。破産という不幸に耐えきれず病に伏している父親の意思をなおざりにせず、トムが自分の負担と責任で父親の意思を果たそうとする様子が描かれている。

Tom hesitated a little, and then went on.

“He said something to me about Maggie, and then he said. ‘I’ve always been good to my sister, though she married against my will; and I’ve lent Moss money, but I shall never think of distressing him to pay it: I’d rather lose it: my children must not mind being the poorer for that.’ And now my father’s ill and not able to speak for himself, *I shouldn’t like anything to be done contrary to what he said to me.*” (230; bk. 3, ch. 3; my emphasis)

トムは少し躊躇して、それから続けた。

「父はマギーについて僕に或る事を言いました。それから言ったんです。『わしはいつも妹には親切だった。あれはわしの意思に反した結婚をしたがな。わしはモスに金を貸してやったが、返すようにせつつく気はない。むしろ失った方がました。わしの子供たちもそのために貧しくなっても気にしてはならん』そして今、父は病気で自分で喋ることができません。僕は、父が僕に言ったことに反する事は、何も

したくないんです」

タリヴァー氏が破産したため集まった親戚に対して、トムはタリヴァー氏が自分に言い含めたことを明かす。タリヴァー氏の妹モス夫人 (Gitty Moss) は、タリヴァー氏の意味に反して貧しいモス氏と結婚し、8 人の子供を産み育てている。タリヴァー氏はモス氏に 300 ポンド貸しているが、この返還を求めてはならないとトムに命じたのである。さらにトムは、心臓発作からまだ回復しないタリヴァー氏から、昔からの使用人であるルーク (Luke) から預かっている 50 ポンドを返してやるように言われると、自分とマギーの貯金から返すことも決意する。こうしてトムは、自分の返済の負担が増えても父親の意思を尊重するだけの勇気や実行力とともに、父親の意思を尊重するシンパシーを持っていると言える。

さらに次の引用には、公理に逆らっても父親の意向を生かそうとするトムのシンパシーが現れている。敵の弁護士ウェイケムがドルコート・ミルを買い取り、その下で管理人として働くことを選んだタリヴァー氏は、トムにタリヴァー家伝来の聖書に、自分は正直にウェイケムのために働くが、ウェイケムを許さないと書かせる。さらにトムにいつかウェイケムに仕返しする決意を書かせようとする場面である。

“Now write—write as you’ll remember what Wakem’s done to your father, and you’ll make him and his feel it, if ever the day comes. And sign your name Thomas Tulliver.”

“O no, father, dear father!” said Maggie, almost choked with fear. “You shouldn’t make Tom write that.”

“Be quiet, Maggie” said Tom. “I *shall* write it.”

(281; bk. 3, ch. 9; Eliot’s emphasis)

「さあ、ウェイケムがお前の父親にしたことを忘れないで、いつか時が来たらあいつに思い知らせてやると書け。それからトーマス・タリヴァーと署名しろ。」

「ああ、お父さん、お父さん！」とマギーは、恐怖でほとんど窒息しそうになりながら言った。「そんなことトムに書かせちゃいけないわ」

「黙れ、マギー」トムは言った。「僕は書くよ」

聖書に書いて復讐を誓えば、天罰が下るかもしれない。聖書は敵を許すことを命じているからである。しかしトムはマギーの反対を押し切り、公理を度外視して父親の心情を大切にしている。先に引用したトムがマギーとフィリップとの逢引を禁じる場面も、フィリップを侮辱しているものの、この聖書の誓いの延長上にある。

このようにトムは確かに抑圧的であるが、他方、弱い人間に対する優しさを持ち合わせており、弱い人間を守るために着実に行動する。マギーも、「君は自分で悪いと分かっていることに抵抗する決意に欠ける」(“you have not resolution to resist a thing that you know to be wrong.”) (409; bk. 6, ch. 4) とトムに指摘されると、その言葉に「恐ろしい辛辣な真実」(“a terrible cutting truth”) (409; bk. 6, ch. 4)を感じる。トムはマギーの性格を見抜いており、勘当した後にマギーを許すのも、トムに備わっているシンパセティックな性格に基づくとと言えるのである。

ここまでトムの性格のシンパセティックな側面の描写が多くあることを、“manly”と“masculine”の対比を手掛かりにして示してきた。次に、そもそもマギーがトムの自分への愛情に執着する背景にはトムの彼女に対するシンパセティックな側面があるはずであることを、マギーがスティーブンと2人でだけでボート遊びに出かけたこと、スティーブンの駆け落ちせずに水車場に帰ってきたことの原因から説明する。

## (2) マギーのトムへの依存が示すトムのシンパセティックな側面

本項では、マギーがなぜトムの愛情に執着するのか、その背景にあるトムのシンパセティックな側面を確認したい。具体的には、マギーがその容貌と性格のゆえに母親や母方の親戚に異分子と見なされ、「より強い存在」(“stronger presence”) (484; bk. 6, ch. 13)として自分を保護してくれるトムに依存する様子を明らかにする。

### ①マギーのトムへの依存の原因

マギーは母親の家系(ドドソン家、the Dodosons)に似ず、色黒で黒髪であるばかりでなく、幼い頃から父親に似て気性が激しく意地っ張り、そのうえ言いつけを忘れて空想に耽る風変わりな子供である。ドドソン家の理想の娘は、色白でかわいらしくおとなしい従妹のルーシー(Lucy)である。母親は「神様を冒涇したくはないけど、たった1人の女の子がこんなに滑稽だなんて、辛く思えるわ」(“I don't like to fly i' the face o'

Providence, but it seems hard as I should have but one gell, an' her so comical.”) (15; bk. 1, ch. 2) と嘆き、2人の子のうち少なくとも1人はドドソン家の血統であることに慰めを見出している。母方のプレット (Pullet) 伯母も、マギーが川に溺れたかと心配しているタリヴァー夫人に、マギーがジプシーのように浅黒いのは不吉であって、生きていても将来ロクなことはないと言う<sup>66</sup>。マギーが非常に誇りに思っている自分の高い知性でさえ、旺盛な知識欲とともに、災いになると心配されている。バーナード・J・パリス (Bernard J. Paris) が指摘するように、周りの低い評価によってマギーは、自らのアイデンティティに関するほとんど神経症的な不確かさを抱いている (172)。彼女は、その保護のもとで白昼夢 (“waking dreams”) (287; bk. 4, ch. 2) を見ることが出来るような「自分より強い存在」 (“stronger presence”) (484; bk. 6, ch. 13) を好む。

幼いマギーは、彼女の母親とその親戚がほとんど彼女を認めてくれないので、愛情と保護を父親と兄に求める。マギーに対するシンパシーという点では、父親のタリヴァー氏の方がはるかに勝っている。彼女の知性を自慢してくれるのはタリヴァー氏だけである<sup>67</sup>。トムはマギーを「愚かなちびっ子」 (“a silly little thing”) と見なしている (44; bk. 1, ch. 5)。「誰もが会いたがるまっすぐな黒目の女子」 (“a straight black-eyed wench as anybody need wish to see”) (15; bk. 1, ch. 2) と言って、マギーの容貌を褒めてくれるのも、タリヴァー氏だけである。トムは、ぼさぼさの髪を伯母たちに非難されてマギーが自分でじょきじょき切るのを手伝った時、「なんてこった、変な顔！」 (“O, my buttons, what a queer thing you look!”) (69; bk. 1, ch. 7) と言ってマギーを憤慨させる。さらに常にマギーが叱られないように庇ってくれるのもタリヴァー氏である。トムがルーシーにばかり親切にするのに絶望したマギーが、ジプシーのキャンプに逃走した時も、偶然マギーがジプシーに連れられて家に向かっている場面に出くわしたタリヴァー氏は、彼女を慰めてくれただけでなく、母親とトムにこのことには触れないように命じている (123; bk. 1,

<sup>66</sup> アリシア・キャロル (Alicia Carroll) によれば、「肌と髪と目の黒さがジプシーの特徴で、ジプシーはさまざまなヨーロッパ的恐怖とファンタジーを体現しうる」(33)。

<sup>67</sup> もっともタリヴァー氏もマギーの賢さについて心配し、友人のライリー氏に、「女にしては賢すぎるんじゃないかね。あいつが幼いころは問題ないが、賢すぎる大人の女はしっぽの長い羊と同じだよ」 (“Too ‘cute for a woman, I’m afraid. It’s no mischief much while she’s a little un, but an over-‘cute woman’s no better nor a long tailed sheep.”) (22; bk. 1, ch. 3) と言っている。

ch. 11)。他方トムは「妹がとても好き」(“very fond of his sister”) (40) なのだが、彼女を「家政婦」(“his housekeeper”) (44; bk. 1, ch. 5) として扱い、必要と考えた時は彼女に罰を与える。

このようにタリヴァー氏の方がトムよりもマギーに対してシンパセティックであるが、マギーにとって「より強い存在」はトムである。タリヴァー氏はその性急さと社会的脆弱さにおいてマギーによく似ている。彼はいくつかの無茶な訴訟を起こして破産し、道徳的にも逸脱することがある。自分の敵と信じる弁護士ウェイケムへの復讐をトムに聖書に書いて誓わせるだけでなく (281; bk. 3, ch. 9)、ある時マギーは、父親がウェイケムを鞭で激しく打つのを止めねばならなかった (369-70; bk. 5, ch. 7)。タリヴァー氏にとって世界は訳が分からず (“a puzzling world”) (277; bk. 3, ch. 9)、手に負えない (“too many for [him]”) (17; bk. 1, ch. 3)。これに対してトムは、「自分が強く望んだことは絶対に失敗しないと予言できるような若者である」([Tom] is not a youth of whom you would prophesy failure in anything he had thoroughly wished.) (320-21; bk. 5, ch. 2)。トムは「自分の意図したことを実行し、目的に沿わないすべての衝動を抑え、可能であることがはっきりしているから見通せないことは計画しない性格」(“A character . . . that performs what it intends, subdues every counteracting impulse, and has no visions beyond the distinctly possible.”) を持っている (322; bk. 5, ch. 2)。彼の「想像力に欠け、シンパシーに欠ける」(“unimaginative, unsympathetic”) 心は、目前の目的に集中することに役立つ (409, bk. 6, ch. 4)。マギーはトムのシンパシーの乏しさを非難するが、その実際的な性格は彼の家族や町の人々の期待に合致している。その結果、トムは家族の借金を返済して家族の名誉と水車を取り戻し、ルーシーへの不可能な恋を隠し通し、マギーの「より強い存在」への愛情の必要性を満たすことができるのである。「哀れなマギーの性格の中で最も強い必要性」(“the strongest need in poor Maggie’s nature”) は「愛される必要」(“the need of being loved”) であった (41; bk. 1, ch. 5)。もし家族や親族から異分子扱いされていなければ、彼女は自らの孤独や脆弱を恐れることなく、トムへの過度の依存から離れることができたかもしれない。パリスが言うように、「彼女のトムに対する畏怖は自分自身の心配に対する恐怖であり、その恐怖の強さは自分の真の姿[アイデンティティ]の弱さをそのまま暴露しているのである」(171)。

## ②マギーとスティーブンの醜聞のきっかけ

次の引用は、9歳のマギーが13歳のトムに連れられて池で釣りをしている様子である。

There was nothing to mar her delight in the whispers and the dreamy silences, when she listened to the light dipping sounds of the rising fish and the gentle rustling, as if the willows and the reeds and the water had their happy whisperings also. Maggie thought it would make a very nice heaven to sit by the pool in that way, and never be scolded. She never knew she had a bite till Tom told her, but she liked fishing very much. (44; bk. 1, ch. 5)

水面へ上ってくる魚から滴る軽い水音を聞き、柳も葦も水も楽しげに囁きかわしているような、その柔らかな葉ずれの音に耳を傾けて、その囁きや夢のような沈黙に浸る彼女の喜びを損なうものは何もなかった。このまま池の端に坐って誰からも小言を言われることがなかったら、それこそよなき天国であろう。マギーはトムに声をかけられるまでは自分の釣針に魚が食いついても分からなかった。それでも彼女は魚釣りが大好きであった。

このようにトムが親切に面倒を見てくれ、すべてをトムに任せられた状態であることが子供時代のマギーの最も幸せな時間であった。マギーにとってトムは自分を守ってくれる自分より強い存在である。

しかし、マギーのこの受動性がマギーを危機に導く。夢見心地の幸せに浸るマギーの受動性は従妹ルーシーの事実上の婚約者スティーブンとの関係でも見受けられるからである。マギーとスティーブンはお互いに恋に落ちている (469; bk. 6, ch. 11)。注意深くスティーブンを避けていたマギーであるが、偶然の経緯からスティーブンとボート遊びに出かけることになる。このことが醜聞を作り、町から追放されるきっかけとなった。

And they went. Maggie felt that she was being led down the garden among the roses, being helped with firm tender care into the boat, having the cushion and cloak arranged for her feet, and her parasol opened for her (which she had forgotten)—all by *this stronger presence* that seemed to bear her along without any act of her own will, like the added self which comes with the sudden exalting influence of a strong tonic—and

she felt nothing else. Memory was excluded. (484; bk. 6, ch. 13 ; my emphasis)

そして彼等は出て行った。バラの花咲く庭を導かれ、力強く優しく支えられて舟に  
乗せられ、座布団やマントで足の置き場を整えてもらい、日傘を（彼女はすっかり忘  
れていたのに）開いてもらう——すべて彼女自身の意思を働かせるのではなく、彼女  
を運んでゆくこの自分より強い存在のなすままにされるような気がした。あたかも強  
壯剤を飲んだとき、たちまち湧きあがる昂然とした力に日頃の自分以上のものになる、  
ちょうどそのように——そして、それ以外のことは何も考えられなかった。記憶は遮  
断された。

この引用で目立つのは、強さに関わる語と、受動態の多用である。マギーは「力強く優し  
く支えられ」、「自分より強い存在のなすまま」で、「強壯剤」を飲んだような気がしてい  
る。彼女は「支えられ」、「乗せられ」、「整えてもらい」、「開いてもらう」。記憶は「遮断  
された」。この場面は、マギーがトムに連れられて釣りに行き、トムに釣り竿のセッティ  
ングも釣り上げることもしてもらい、上がって来る魚の跳ねる音や葦や柳のカサコソとい  
う音を聞きながらうっとり幸福感に浸っている場面を彷彿させる。マギーが子供の頃ト  
ムに求めていたのは、スティーブンに見出したと同じ「自分より強い存在」(“stronger  
presence”)であり、シンパシーを含む“manliness”に基づく愛情であった。この引用にス  
ティーブンの固有名詞が出て来ないことに注目すべきである。彼はあくまでも、「自分よ  
り強い存在」でしかない。スティーブン・ゲスト (Stephen Guest) という名前にも、彼  
が一時的存在にすぎないことが現れている (Beer, *George Eliot* 99)。マギーがスティーブ  
ンに感じたのが自分より強い者に対する依存感情であるなら、マギーがトムに対して常に  
感じている感情の延長である。トムは、母や伯母たちのマギーへの非難に同調することな  
く、父親のように軽率でもない、マギーにとって頼りになる「自分より強い存在」であっ  
た。

### ③マギーがスティーブンを諦めた理由

マギーが、駆け落ちしようというスティーブンの強い願いを振り切って1人帰って来た  
最大の理由は、マギーのトムへの忠誠心である。マギーがスティーブンの結婚を拒否す  
るプロットを批判する批評家もある。ジョン・ベネットは、エリオットは「当時の道徳

的前提に妨げられ、「『すべての犠牲は良いものだ』という推定に従っている」と述べている (129)。アウエルバッハは、この小説の中でマギーがスティーブンと結婚すればマギーを受け入れるという世論の態度は間違っておらず、「マギーが [スティーブンの結婚から] 大きく逸れて自制することや、彼女が駆け落ちの後で 1 人で帰ってくることは、彼女にできる最も破壊的な選択である」と述べている (245-46)。ローズマリー・ボデーンハイマー (Rosemary Bodenheimer) は、マギーの決意に、マギーとスティーブンのどちらにも正当性を認める矛盾するメッセージが込められていると主張する (110)。

マギーがスティーブンと別れた理由であると批評家が考える事柄を整理すると、彼女の過去への愛着を挙げる説、マギーがついにトマス・ア・ケンピスの教え (地上の欲を諦める) を体得したのであるとする説、マギーの子供の頃からの「惜しめない愛情」のせいであるとする説、マギーのトムへの近親相姦的愛情がスティーブンへの愛情より勝っているとする説などである<sup>68</sup>。フェリシア・ボナパルト (Felicia Bonapart) は第 1 の説で、

---

<sup>68</sup> パリスは、マギーが父親の破産後、本も音楽も明るい家庭も学校もなくし、生きがい求めて、天国での幸せのために地上の喜びを棄てよというトマス・ア・ケンピスの教えに従った時期があるから、マギーはスティーブンの関係でこれを実行したのであるとする (182)。バーバラ・ハーディは、マギーがスティーブンを諦めた理由は、トマス・ア・ケンピスの影響もあるが、それよりも彼女の子供の頃からの「惜しめない愛情」から生じた、ルーシーやフィリップに対する義務感だとする (“*Mill*” 55)。ピアのようにトムとマギーの関係を、少なくともマギーの側からの近親相姦と捉えれば、マギーがスティーブンと別れるのはその愛情の度合いによることになるだろう。マギーが恋に陥るスティーブンをマギーに値しない「物」(Swinburne 164)、「二流の商売人」もしくは「ただの理髪師」(Stephen 104)、「悲しい誤り」(Leavis 54) と見做す批評もある。スティーブンが物語に初めて登場するとき、彼はセント・オグズズの町の「最大の精油工場 (水車) と最大の船着き場」を所有するゲスト商会の一人息子であり、「ダイヤモンドの指輪をはめ、バラの香水をつけ、屈託のない雰囲気」(“whose diamond ring, attar of roses, and air of nonchalant leisure”) で正午に時間を持て余している (377; bk. 6, ch. 1)。レズリー・スティーブン (Leslie Stephen) は、エリオットには「真に男性的なヒーローを描く能力」が欠けるとし、F・R・リーヴィスは、スティーブンに恋するマギーの「未熟さ」はエリオットのものであるとしている (56-57)。しかし A・S・バイアットの指摘する通り、エリオットは、スティーブンが「二流の商売人」であることは十分に承知しており、マギーに恋するスティーブンは、「もはや昼日中からルーシーのハサミやスパニエルと戯れている滑稽な存在ではなくなる」(*Mill*, 547; “Appendix”)。スティーブンに限らず、エリオット

「過去は、時としても場所としても、彼女のアイデンティティの基礎である」と主張する (210)。スティーブンが「自然の法は他のすべてに優る——それが何と衝突しても、僕たちにはどうすることもできない」(“That natural law surmounts every other, —we can’t help what it clashes with.”) (495; bk. 6, ch. 14) と言って、自然の感情を理由にマギーを説得しようとするのに対して、マギーは「私には、それ[過去]を忘れて新しい生活を始めることなんてできないわ——私は過去に戻ってしがみつかなきゃならないの——さもないと、足元に確かなものが何もないように感じるでしょう」(“I can’t set out on a fresh life, and forget that—I must go back to it, and cling to it, —else I shall feel as if there were nothing form beneath my feet.”) (499; bk. 6, ch. 14) と答えている。またマギーは、スティーブンと結婚することは、「過去の生活が私にとって愛しく神聖なものにしたものすべてから私を引き離すでしょう」(“would rend me away from all that my past life has made dear and holy to me.”) と言っている (499; bk. 6, ch. 14)。ボナバルトは、マギーをスティーブンと別れさせるのは自らの過去に対する執着であるとする。本章もこの説をとるが、マギーにとって「過去」とはトムの自分に対する愛情が主であると考え、以下に理由を補強する。

スティーブンはわざと目的地を通過してマギーに駆け落ちを勧める。貨物船に拾われ甲板でスティーブンと一夜を過ごした時、マギーはトムの夢を2つ見る。スティーブンと別れた理由を考えるには、この夢が重要であると思われる。

She [Maggie] was in a boat on the wide water with Stephen, and in the gathering darkness something like a star appeared, that grew and grew till they saw it was the Virgin seated in St Ogg’s boat, and it came nearer and nearer till they saw the Virgin was Lucy and the boatman was Philip—no, not Philip, but her brother, who rowed past without looking at her; and she rose to stretch out her arms and call to him, and their own boat turned over with the movement and they began to sink, till with one spasm

---

は、後述するグレッグ伯母など人間の様々な側面を活写している。エリオットは、スティーブンを、マギーが恋するに足る男性として描いていると思われる。さらに重要なのは、彼が「気高さを内に」(“the fiber of nobleness in him”) (469; bk. 6, ch. 6) 持っていることと描写され、ここでエリオットは彼女が滅多に使わない“nobleness”という言葉を使っていることである (Szirotny 77-78)。

of dread she seemed to awake and find she was a child again in the parlour at evening twilight, and Tom was not really angry. (491; bk. 6, ch. 14)

彼女は広い川面にスティーブンとボートに乗っていた。暗闇が迫る中、星のようなものが現れた。それは刻々と大きくなり、セント・オググのボートに坐っている処女マリアであることが分かった。次第に近づいて来るのを見ると、マリアに見えたのはルーシーで、船頭はフィリップ——いや、フィリップではなく、彼女の兄であった。彼女を見ずに過ぎて行った。彼女は立ち上がって両腕を伸ばし、彼に呼び掛けた。するとその弾みでマギーたちのボートはひっくり返り、沈み始めた。恐怖と共に目が覚めたらしかった。気がつくや、彼女は子供に戻って夕暮れ時の居間にいた。そして、トムは本当は怒っているのではなかった。

ローラ・エメリー (Laura Emery) は、マギーがスティーブンの愛情を獲得したことは、マギーのルーシーに対する勝利と考え、ルーシーがトムのボートに乗っていることは、マギーの「無意識の嫉妬」を反映していると考えている (44)。しかし、夢の中のルーシーは従姉と婚約者の裏切りに苦しむ哀れな女性としてではなく、哀れみ深い聖母マリアの輝かしい形を取って登場するのであるから、ルーシーの輝く姿はマギーの嫉妬ではなく、マギーがルーシーの許しを乞いルーシーに縋る気持ちを表していると思われる。シンパシーは「自己の延長——もしくは自己の他者への延長」とも考えられるからである (Ablow 71)。ルーシーはマギーの苦しみを哀れみ、後悔を受け入れねばならない。ルーシーが聖母マリアの姿であることは、前述のセント・オググズの町の聖母マリア伝説と関係する。いつもマギーに優しくしたルーシーが、マギーの夢に現れてスティーブンと2人だけでボートに乗っていることを非難するはずはなく、むしろ新しい愛と過去の忠誠心に引き裂かれているマギーに同情することをマギーは期待すると思われる。言い換えれば、ルーシーはマギーのアイデンティティの危機と過去との和解を望む心の象徴として、マギーの心の中に存在しているのである。

マギーのスティーブンに対する態度を決定的に変えるのは、夢の中のトムの様子である。マギーはスティーブンに対して、ルーシーとフィリップを裏切れないと言うが (496; bk. 6, ch. 14)、夢に現れたのはフィリップではなくてトムである。実はトムがスティーブンの駆け落ちを阻んでいるのである。夢の中のトムは別のボートにいるマギーを無視す

る。彼が不機嫌な時の癖である。マギーはすべての人間の中でトムを最も恐れている (503; bk. 7, ch. 1)。次の夢に移ると、マギーは子供に戻って古い居間にいる。そして「トムは本当は怒っていない」と安堵する。これはマギーのトムの許しを願う気持ちを象徴すると考えられる。

トムの怒りへの恐れが蘇ると、マギーが駆け落ちに賛成しないことにスティーブンが憤慨していることなど何でもなくなる。自然の感情を理由としてルーシーを棄てるスティーブンは、マギーのアイデンティティを一時的に支えているだけかもしれない (Beer, *George Eliot* 99)。彼女のアイデンティティと自己評価は、トムの愛情と受容によって養われてきた。トムとマギーの人生は、2人が小さな手を繋いでデイジーの咲く野原を一緒に歩き回った日々以来、密接にからみあってきたとマギーは思っている (542; bk. 7, ch. 5)<sup>69</sup>。エリオットは前述のように、宗教に替わる道徳として人間同士のつながりであるシンパシーと過去とのつながりを重視した。また実証哲学は家族とのつながりを重視する。翌朝、スティーブンの横で目が覚めると、マギーはもはやスティーブンと別れることを躊躇しない。マギーには、自分を定義する「記憶」(“memories”)、「愛情」(“affections”)、「完全な善に対する憧れ」(“longings after perfect goodness”)を捨て去ることはできない (497; bk. 6, ch. 14)。彼女はスティーブンに、彼は彼女の「感情」(“feeling”)を一時的に手に入れられるかもしれないが、彼女の「魂全部」(“whole heart and soul”)は持つことが出来ないと宣言する (497; bk. 6, ch. 14)。マギーにとって過去とは、マギーが頼りにして生きてきたトムのシンパシーを意味する。マギーのこれほどの過去に対する執着の背後には、トムのマギーに対する過去のシンパセティックな態度がある。

### 3. トムの変貌に現れたリアリズムの進展とリアリズムからの逸脱

以上、トムのシンパセティックな側面を見てきた。しかし父親の破産後、名誉回復のためにひたすら努力してきたトムは、マギーの醜聞に面して変貌し、マギーに非難と憤りの言葉を、世間の考え方を背景に余すところなく投げつけて勘当する。他方、トムが孤独や疎外感に苦しんでいる心境は、子供のころのホームシック (148-50, 159; bk. 2, ch. 1)

---

<sup>69</sup> マギーのこの幸せな子供時代の描写に懐疑的な批評家もいる。たとえば、U・C・クネプフルマッヘルは、トムは「死ぬ時にやっと彼女を苦しめるのをやめる」と言っている (*Early Novels* 291)。しかし上述したように、マギーはトムの世話と保護のもとに白昼夢を見る時に至福の時を過ごしている。

を除いてほとんど描かれていない。強者トムが強調され、弱者トムが不在である。

### (1) トムの変貌

マギーはスティーブンと結婚せず性的関係も持たなかったが、トムと世間から墮落した女と見做される (Loesberg 137)<sup>70</sup>。トムは「馬も犬も好きなだけ買える」(237; bk. 3, ch. 5) ことに象徴される町の名士になることを目指し、マギーにも、みすぼらしい自活などせずピュレット伯母の世話になり、中流階級のレディとして良い結婚をしてほしいと願っていた (408; bk. 6, ch. 4)。マギーとスティーブンは行方不明になって5日後の午後4時と5時の間、水車場の外を歩いているトムの顔は苦り切っている。水車場の主となった喜びも勝利も見受けられない。トムの予期する最悪の事態は、マギーの死ではなく恥辱である (502; bk. 7, ch. 1)。避難所を求めてきたマギーに、トムはマギーを家に入れないと言い、マギーがフィリップをルーシーに対する隠れ蓑に使ってスティーブンを誘惑したと糾弾する。トムのマギーへの憤りは直接話法で31行に渡って描かれている。以下、家の前で自分を頼って帰って来たマギーを糾弾するトムの発言部分を引用する。まず、マギーがトムに「ただいま」を言うと、トムはマギーを家に入れることを拒否する。

“You will find no home with me,” he answered with tremulous rage. “You have disgraced us all—you have disgraced my father’s name. You have been a curse to your best friends. You have been base—deceitful—no motives are strong enough to restrain you. I wash my hands of you for ever. You don’t belong to me.” (503; bk. 7, ch. 1)

「僕の家には入れないよ」とトムは怒りに震えながら言った。「お前は僕たち全員に恥をかかせた——父さんの名前にも泥を塗った。お前は最良の友達にとって呪いだ。お前は卑劣だ——人を騙す——どんな動機もお前を止めることは出来ない。僕はお前とは永久に手を切る。お前は僕の家族じゃない」

---

<sup>70</sup> この見方がヴィクトリア朝の人びとの考え方でもあることは、例えばエドワード・ブルワー-リットン卿が出版社社主ジョン・ブラックウッドに宛てた1860年4月14日付けの手紙 (*Letters* 8: 121-22) を参照。

次に、マギーが言い訳をして、ボートが遠くまで行きすぎてしまったが出来るだけ早く帰ってきたと言うと、トムはマギーの言葉は信じられないと言い、マギーとスティーブンの付き合いはマギーが仕組んだものであると決めつける。

“I can’t believe in you any more.” Tom, gradually passing from the tremulous excitement of the first moment to cold inflexibility. “You have been carrying on a clandestine relation with Stephen Guest—as you did before with another. He went to see you at my aunt Moss’s; you walked alone with him in the lanes: you must have behaved as no modest girl would have done to her cousin’s lover, else that could never have happened. The people at Luckreth saw you pass—you passed all the other places: you knew what you were doing. You have been using Philip Wakem as a screen to deceive Lucy—the kindest friend you ever had. Go and see the return you have made her: she’s ill—unable to speak—my mother can’t go near her, lest she should remind her of *you*.” (504; bk. 7, ch. 1; Eliot’s emphasis)

「僕はお前のことはもう信じられない」とトムは言った。最初の怒りに震える状態が過ぎ、冷たい頑固さに変っていた。「お前はスティーブン・ゲストと秘密の関係を続けてきたんだ——前にも別の男と付き合っていたね。スティーブンはモス叔母さんのところにいるお前に会いに行った。彼と2人だけでお前は小道を歩いた。慎みのある女子なら自分の従妹の恋人に対してできないことをお前はしたんだ。そうでなければあんなことは起こりえなかった。ラックレスの人たちはお前が通り過ぎるのを見ている——お前は他のあらゆるところを通った。お前は自分のしていることが分かっていたんだ。お前はルーシーを騙すための隠れ蓑としてフィリップ・ウェイケムを使ってきた。ルーシーはお前に一番親切にしてくれた友達なのに。お前がルーシーにした仕返しを見に行ってい。ルーシーは加減が悪くて——喋ることも出来ない——母さんは、お前を思い出させるといけないから、ルーシーに近寄れないんだ。」

さらに、マギーが自分は後悔していて償いをしたいので守ってくれと言うと、トムは吐き捨てるように言う。

“What *will* keep you?” said Tom, with cruel bitterness. “Not religion—not your natural feelings of gratitude and honour. And he—he would deserve to be shot, if it were not—But you are ten times worse than he is. I loathe your character and your conduct. You struggled with your feelings, you say. Yes! *I* have had feelings to struggle with—but I conquered them. I have had a harder life than you have had; but I have found *my* comfort in doing my duty. But *I* will sanction no such character as yours: the world shall know that *I* feel the difference between right and wrong. If you are in want, I will provide for you—let my mother know. But you shall not come under my roof. It is enough that I have to bear the thought of your disgrace—the sight of you is hateful to me.” (504–05; bk. 7, ch. 1; Eliot’s emphasis)

「何もお前を守ることはできない」とトムは、冷たく辛辣な調子で言った。「宗教もだめだ。感謝だの名誉だのという自然の感情だってだめだ。そしてあいつは——あいつは殺してよければ撃ち殺されても仕方ない奴だ——しかしお前はあいつより 10 倍も悪い。僕はお前の性格と行動を呪うよ。お前は自分の気持ちと戦ったと言う。そうさ！ 僕にも戦わねばない気持ちがあった——しかし克服したんだ。僕はお前より辛い生活を送ってきた。だが僕は自分の義務を果たすことに自分の慰めを見出してきた。しかし僕はお前のようなそんな性格は認めない。僕が善悪の区別を知っていることを、世間に知らせるんだ。何か必要なものがあれば渡してあげる——母さんに言いなさい。だがお前を僕の家には入れない。お前の不名誉な行いを思って耐えねばならないだけで十分だ——お前を見るとむかむかする。」

トムは、自分の基準を満たさず裏切った人間に対してシンパシーに欠ける人間が感じる不満と憤りを、余さず口に出している。『アダム・ビード』において、ヘティがアーサーの子供を妊娠したことを恥じて池に飛び込んで死のうとした時に、ヘティがアーサーに対して感じた憤りが、シンパシーに欠ける人間には憤る資格がないかの如く 2 行の間接話法でしか示されなかったのとは大きく異なる<sup>71</sup>。シンパシーに欠ける人間の主張と心情が詳細

---

<sup>71</sup> Cf. 第 3 章第 2 節 (2)。

に描かれ、読者にその人物との同化を幾分促している点でリアリズムが進展していると言える。

さらにここで注意すべきは、トムが世間の態度、すなわち「公理」と一致している点である。語り手によれば、「世論」とは「このような場合、性別は常に女性のジェンダーである——世間ではなく、世間の妻である」(“Public opinion, in these cases, is always of the feminine gender—not the world, but the world’s wife.”) (509; bk. 7, ch. 2)<sup>72</sup>。そして「世間の妻」は、トムを「真に尊敬すべき若者だ」(“A truly respectable young man”) (511; bk. 7, ch. 2)と誉め、マギーについては「彼女にはこの近所から出て行って貰いたい——アメリカなりどこへなりと——セント・オグズの空気を彼女の存在による汚染から浄化するために——町の娘たちにとって極めて危険な存在だ！」(“It was to be hoped that she would go out of the neighbourhood—to America, or anywhere—so as to purify the air of St Ogg’s from the taint of her presence—extremely dangerous to daughters there!”) (511; bk. 7, ch. 2)と評する。

トムは「世間の妻」に迎合している。タリヴァー夫人の姉のグレッグ伯母は、タリヴァー氏の破産後の親族会議で、タリヴァー夫人が手放したくない嫁入り道具の茶器を買ってやることを拒み、生活に必要最小限の物だけを買って残せばよいという冷たい反応をしたが、今回は、身内の恥は内輪に取めて世間の非難からは守ってやるべきだとトムに忠告する（ここでもシンパシーに乏しい人物の性格の多面性が描かれている）。しかしトムは全く応じない (518–19; bk. 6, ch. 3)。マギーの方が駆け落ちを拒否したのだというステイブンの手紙も、トムのマギーの性格への不信を拭えない。トムは、マギーがフィリップを隠れ蓑にしてルーシーや自分を騙したと思い込んでいる (504; bk. 7, ch. i)。

子供の頃のトムは、母親やドドソン家の伯母たちがマギーの肌の色の黒さやぼさぼさの黒髪を嘆いても、それに迎合してマギーを伯母に倣って「ジプシー」と呼んで差別することは一切なかった。マギーを家政婦のように使って、自分の思い通りにいかないと彼女を罰することはあったが、トムはマギーが大好きで保護者を任じ、結局は彼女の不注意な行為により自分の被った被害を許していた。しかし、トムの性格は父親の破産という「道徳的な晒し台の類」(“a sort of moral pillory”) (290; bk. 4, ch. 2)に直面して変貌する。今

<sup>72</sup> エリオットがルイスとの内縁関係により社会から疎外された時、夫より妻の方がエリオットに冷たく当たったことは、本章第1節(2)④で言及した。

やトムはタリヴァー家の名誉に捕らわれて「世間の妻」たちに迎合し、マギーを心底憎むに至った。これはマギーにとっての悲劇であるとともに、トムにとっても悲劇であると作者は考え、洪水の大団円に向かうのである<sup>73</sup>。

## (2)弱者トムの不在

しかし、父親の破産により失った名誉回復に専心し、遂にマギーを勘当するに至る過程で、トムの心理には描かれない部分がある。それはトムの孤独と疎外感である。例えば、トムのルーシーに対する恋心も、トムが下宿している家の家主で幼馴染のボブの観察としてしか描かれていない。ボブはトムがルーシーへのプレゼントにするために、珍しい種の

---

<sup>73</sup> 人生における悲劇とは、オックスフォード英語辞典によると「実生活における1つもしくは一連の不幸なもしくは致命的な出来事。大災害もしくは大惨事」(“An unhappy or fatal event or series of events in real lives; a dreadful calamity or disaster.”) (*Oxford English Dictionary*, “tragedy” 3) を指すが、エリオットの小説における悲劇は、彼女の愛読したギリシア悲劇におけると同じく、当該人物の性格や意志と、それらを超えた運命的な力といえる人生経験が相まってもたらされるものを指す (418; bk. 6, ch. 6)。テキストにおいてマギーとタリヴァー氏の運命は悲劇であると形容されているが、トムの運命が悲劇であることは、名指しでは述べられていない。しかし次の一節は、兄妹の不和を悲劇の例としてあげており、トムがマギーに対する信頼を失ってゆくことが悲劇として捉えられていることが分かる。

...such tragedy, perhaps, as lies in the conflicts of young souls, hungry for joy under a lot made suddenly hard to them, under the dreariness of a home where the morning brings no promise with it, and where the unexpectant discontent for worn and disappointed parents weights on the children like a damp, thick air in which all the functions of life are depressed . . . (207; bk. 3, ch. 1)

……そのような悲劇は、たぶん、突如辛い運命に見舞われ、朝が来ても何の約束もなく、疲れて失望した両親に対する思ってもみなかった不満が子供たちの上に湿った重たい空気のようにのしかかり、生活のあらゆる機能が抑圧される家庭のわびしさの下にいる、喜びに飢えた若者の魂の煩悶の中にある……

こうして語り手は、タリヴァー氏の悲劇がトムにも及ぶことを示唆している。トムのマギーへの愛情の喪失を悲劇と捉える批評は、アッシュトンにも見られる (*Natural History* 42-52)。

スパニエル犬を欲しがったこと、それ以来トムの様子がおかしいことをマギーに告げる。

“My wife says, when she goes in sometimes an’ he takes no notice of her, he sits lookin’ into the fire and frownin’ as if he was watchin’ folks at work in it.” (406; bk. 6, ch. 4)

「カミさんが言うんですがね、カミさんが時々トムさんの部屋に入っても、トムさんは全くカミさんには気が付かずに、眉をしかめて火を見つめて座っているんだそうさ。まるで火の中で働いている人をじっと見つめているみたいに」

マギーにとっては寝耳に水で、「かわいそうに！」(“Poor fellow!”) と思う一方、ボブの思い違いかもしれないと半信半疑である (406–07; bk. 6, ch. 4)。

またトムは、父親の破産後、母方の伯父で、一介の労働者からセント・オグズズの町の最大の精油工場（水車）と最大の船着き場を所有するゲスト商会の共同経営者にまで上り詰めたディーン氏（Mr. Dearn）を頼って就職する。就職の斡旋を頼みにディーン氏を訪れたトムに、ディーン氏は「私が 16 歳の時は私の上着はタールの臭いがしたし、チーズを手で扱うことも恐れなかった」（“when I was sixteen my jacket smelt of tar, and I wasn’t afraid of handling cheeses.”）(243–44; bk. 3, ch. 5) と告げ、さらにトムの取るべき道について次のように語る。

“The world isn’t made of pen, ink and paper, and if you’re to get on in the world, young man, you must know what the world’s made of. Now the best chance for you ’ud be to have a place on a wharf or in a warehouse, where you’d learn the smell of things—but you wouldn’t like that, I’ll be bound: you’d have to stand cold and wet and be shouldered about by rough fellows. You’re too fine a gentleman for that.” (243; bk. 3, ch. 5)

「世界はペンとインクと紙で出来ているんじゃない。もし世界で出世したかったらね、君、世界が何で出来ているかを知らなきゃならん。今君にとって一番いいのは、船着き場か倉庫で働くことだろう。そこなら君は物の臭いを学べる。だが君には気に入らんだろうね、きっと。君は冷たい雨の中、立っていなければならんし、乱暴な奴らに

肩で押しのけられるだろう。君はそんな目に会うにはお上品すぎる」

トムが牧師館で苦勞して学んだラテン語もギリシア語も幾何学も英詩も修辭法も、就職の役には全く立たたなかった。トムは、昼間は倉庫で働き、夜は簿記を学ぶことになる (257; bk. 3, ch. 7)。この物語の時代から1世紀を経た後、自らを上層中流階級の下に位置付けるジョージ・オーウェル (George Orwell, 1903–50) は、労働者階級に対する肉体的嫌悪感をどうしようもなかったと告白している (119)。階級の下がったトムにとって、この嫌悪感は同時に屈辱でもある。そのうえ、オーウェルが指摘するように、中流階級の風采を持つ人間への労働者階級からの風当たりは強かったから (118)、オックスフォード大学を出た牧師に倣って話す英語の発音 (“a new standard of English pronunciation”) (141; bk. 2, ch. 1) など、ジェントルマンらしい風格を身に着けたトムは、ディーン氏の後ろ盾があっても、他の労働者たちに虐められたと思われる。しかしトムが感じていたであろう孤独や疎外感は全く描かれていない。「トムは家にいる短い合間は、疲れてぼんやりしていた……」 (“Tom was weary and abstracted in the short intervals when he was at home. . .” 291; bk. 4, ch. 2) とあるだけである。

作者は、自伝的色彩の濃いこの物語において、自分を勘当した兄アイザックを摸したトムが弱音を吐く場面を作者は描くことができない。ここにも本論文の主張する作者の道德観とリアリズムの相関関係がある。トムの弱音を書かないことは、批評家がトムのシンパシーの乏しさのみに注目し、シンパセティックな側面を軽視する一因にもなっていると思われる。

## 結論

『フロス河畔の水車場』のリアリズムは、後に見るようにシンパシーに乏しい人間がシンパシーに乏しいままでも結果的に他者を更なる絶望から救う場合のあることを描く『ミドルマーチ』に及ばない。それは物語の最後の洪水の場面に端的に現れている。本章は、マギーが1人ボートを漕いでトムのいる水車場に行きつくことが奇跡的であるのみならず、家族を大切に作る用心深いトムが、マギーのボートに乗り込みボートで戸外を移動する危険性を悟った後、そのままフロス河にボートを漕ぎ入れてマギーを危険に晒す行為がリアリティに欠けると考える。この不自然なプロットの背後には、シンパシーに乏しい人間はシンパシーを取り戻さねば有害であるというエリオットの道德観の狭さと、シンパ

セティックな人間は必ずシンパシーに乏しい人間を改悛させ救うことができるという楽観的態度が見られる。この狭く楽観的な道德観は『ミドルマーチ』において修正され、それとともにリアリズムが進展するのである。

また洪水を使ったトムの改悛と2人の溺死という不自然なプロットの背景には、エリオットの個人的事情もある。エリオットは妻子のあるジョージ・ヘンリー・ルイスと内縁関係に入ったため、兄アイザック・エヴァンスに勘当され、ヴィクトリア朝社会からも排斥された。ルイスの結婚は破綻していたが、ルイスが妻の婚外子を認知したために離婚できないのだという特別の事情は考慮されなかった。したがって、トムに改悛させ、兄妹の和解を永遠のものにすることは、エリオットにとってリアリズムよりも優先されるべき事項だったのである。

しかしながら『フロス河畔の水車場』は、シンパシーに乏しい人間の性格の多面性や変容を描く点で、性格の描き方が一面的で固定的な『アダム・ビード』よりリアリズムが進展している。『フロス河畔の水車場』は、シンパシーの対極に「公理」(“maxims”)に基づく道德的非難を挙げている(518; bk. 7, ch. 3)。生来シンパシーに乏しいと説明されるトムは、『アダム・ビード』のヘティと異なり、犯罪を犯さない公理に従う人間である。しかも公理一辺倒ではなく、家族を大切にし自己犠牲も厭わないシンパセティックな側面も持つ。トムのシンパシーに欠ける行為は主に父権制社会を背景にしたもので、シンパセティックな行為も十分補完的に描かれている。そしてトムは、父親が破産し、家族の名誉回復に没頭するうちに、世間の評判を気にして次第にマギーに対するシンパシーを失っていくが、物語の最後に改悛してマギーへの誤解を解き、彼女への愛情を回復する。このようにトムをいわゆる「フラット・キャラクター」とせず、その性格が多面的でかつ変容を含むようにしたことは、人物描写のリアリズムにおいて優れている。ただし、トムは牧師館に寄宿していた頃の一時期を除いて常に自信に満ちた強い人間として描かれ、その孤独や疎外感には描かれず、わずかなヒントから読者はその辛い胸の内を想像することを余儀なくされる。この点は中期小説『急進主義者フィーリクス・ホルト』において、次いで『ミドルマーチ』において、シンパシーに乏しい人間の孤独と疎外感を語り手が同情をもって描かれるようになって修正される。以上のことから『フロス河畔の水車場』は、リアリズム表現においても、その背後にある作者のシンパシーの対象の範囲においても、『アダム・ビード』と『ミドルマーチ』の中間地点に位置付けられるのである。



## 第5章 シンパシーとシンパシーの欠如の交差 ——『ミドルマーチ』における道徳観の成熟とリアリズムの進展

### 序論

前章では、『フロス河畔の水車場』(*The Mill on the Floss*, 1860)は、シンパシーに乏しいトムの性格のシンパセティックな側面も大いに描き、かつトムが感じる道徳的憤りを詳細に描いている点において、『アダム・ビード』(*Adam Bede*, 1859)よりリアリズムが進展しているが、その反面、トムの感じる孤独や疎外感<sup>74</sup>は描かれず、あくまで強い人間として扱われている点では一面的描写であること、またトムのマギーの誠実さに対する信頼とマギーへの愛情を回復し、それを永遠のものにするためのプロットがリアリティに欠けることを論じた。このことは道徳観の観点から見ると、『フロス河畔の水車場』ではシンパシーに乏しい人物にポジティブな側面を見出し、またシンパシーに乏しい人物の言い分を明確かつ詳細に描く点で、エリオットの考えるシンパシー、すなわち「もがき、過ちを犯す人間であるという幅広い事実以外は、すべての点で自分と異なっている人々の痛みと喜びを想像し感じること」<sup>74</sup>という理想に近づいていると言える。しかしその一方で、マギーを勘当したトムはマギーに対するシンパシーを取り戻さねばならず、またシンパセティックで高潔な人間が命がけで誠実さを示せば、シンパシーに欠けるトムも改心して2人とも幸せになると考える点において、エリオットの道徳観はまだ狭く、かつ楽観的であると言わざるを得ない。

本章では、『ミドルマーチ』(*Middlemarch*, 1871-72)におけるリアリズムのさらなる進展と作者の道徳観の成熟(包容力の高まり)を、シンパシーに乏しいエドワード・カズボン(Edward Casaubon)<sup>75</sup>とロザモンド・ヴィンシー(Rosamond Vincy)に注目して検証する。『ミドルマーチ』において、この2組の夫婦のあり方を通して、シンパシーが必ずしも万能でないことを描く点に、出来事の蓋然性、現実らしさが高まるとともに、エリオットの人間性理解が深まったことが見て取れる。すなわちシンパシーに乏しい人間の加害者的側面だけでなくポジティブな側面が、またその孤独や疎外感、自分の境遇への嘆

<sup>74</sup> 第2章第1節参照。

<sup>75</sup> 『ミドルマーチ』の登場人物の名前の発音は、George Eliot, *Middlemarch: Penguin Classics* (audible version), narrated by Julie Aubrey (Penguin Audio, 2019)に従った。

きが語り手の同情の言葉とともに描かれ、シンパシーに乏しい人間が「我々の仲間」として扱われている。まさに作者の道德観の成熟とともに、小説のリアリズムも進展しているのである。

ただし、このことを検証する前に、『フロス河畔の水車場』と『ミドルマーチ』の間に書かれた中期長編小説『ロモラ』(Romola, 1862–63)と『急進主義者フィーリクス・ホルト』(Felix Holt: The Radical, 1866)におけるシンパシーに乏しい登場人物の描写のリアリズムの進展度について確認しておく必要がある。結論を述べると、いずれの作品においても『フロス河畔の水車場』における多面的な性格描写から『アダム・ビード』の一面的な性格描写に後退しているが、他方『フィーリクス・ホルト』においては、シンパシーに欠けるトランサム夫人(Mrs. Transome)の感じている孤独や疎外感や自らの運命に対する嘆きが詳細に描かれるとともに、トランサム夫人が追放にも溺死にも会わず、若干明るい未来が暗示されている点に、『ミドルマーチ』の先駆的要素が見られる。

## 1. 中期小説におけるリアリズムの後退と進展

### (1) 『ロモラ』(Romola, 1862–63)

#### ① 『ロモラ』の概要

『ロモラ』は15世紀のフィレンツェを舞台にした歴史小説である。物語は、15世紀末のフィレンツェ共和国の支配者メディチ家と、サン・マルコ修道院の院長フラ・ジローラモ・サヴォナローラ(Fra Girolamo Savonarola)に影響された民衆との間の政治的緊張を軸として展開する。メディチ家の当主が追放された後の数年間、サヴォナローラは神権政治を行う。

若く美しいロモラ・デ・バルディ(Romola de' Bardi)は、学者である父親バルド(Bardo)の秘書役を務めている。そこに若く美しく優秀なギリシア人の学者ティート・メレマ(Tito Melema)が船の遭難によりフィレンツェに流れ着き、2人は結婚する。ティートは頭の弱い乳しぼり女のテッサ(Tessa)を騙して結婚と偽り、情婦にしている。ティートはまた、元々は養父のものである手持ちの宝石と金貨を、奴隷に売られて助けを求めてきた養父のための身代金にするつもりはない。バルドの死後、ティートがバルドの遺志に背き、ロモラの同意なくバルドの宝石と書籍を売り払ったので、ロモラはフィレンツェを出る。サヴォナローラの説得でロモラは一旦町に帰るが、自分の名付け親がサヴォナローラによって処刑されたのに絶望して、小舟に横になって当てもなくフィレンツェを

去る。やがてロモラの小舟は、疫病に取り付かれ見捨てられた村にたどり着き、彼女は村の病人の看病をして、処女マリアと称えられる。他方、ティートは養父に殺され、サヴォナローラはローマ教皇から破門された後、民衆によって火刑に処せられる。ロモラはフィレンツェに戻り、テッサとその子供たち、母の従姉妹と居を構える。

## ②『ロモラ』のリアリズムに関する先行研究と本章の立場

マーガレット・オリファント (Margaret Oliphant, 1828-97)<sup>76</sup>は『ロモラ』を、「人類の知っているどんなマリー (Murray [出版社名]) も及ばない」フィレンツェのガイドブックであると断言している (M. Harris, “*Romola*” 340)。『ロモラ』は、それほど丹念に調べ上げられた書物の知識に基づいて書かれている。しかし他方、『ロモラ』のリアリズムには出版当初から疑問が呈されてきた。ヘンリー・ジェイムズ (Henry James) は『ロモラ』には「自由な美的感覚のある人生」が欠如しており、リアリティに欠けると述べている (“*Cross’s Life*” 497)。ジェイムズによると、「抽象から具体」が生まれ、「登場人物も状況もエリオットの道徳的意識から生じたもので」、「観察の結果というものは間接的にすぎない」 (“*Cross’s Life*” 498)。R・H・ハットン (R. H. Hutton) も、「登場人物の行動は彼女 [作者] が決めた彼らの性格に従っている」 (“*Unsigned Review*” 199) と述べ、別の無署名の書評は、「政治的な人々もそうでない人々も生きているように見えない」 (D. Carroll, *Critical Heritage* 196) と述べている。『ダニエル・デロンダ』 (*Daniel Deronda*, 1876) の女主人公グウェンドレン・ハーレス (Gwendolen Harleth) の描写に、「トルストイの深さとリアリティ」を見出す F・R・リーヴィス (F. R. Leavis) も<sup>77</sup>、『ロモラ』のリアリズムに関しては「存在は皆無であり、分析が代理を務めている」と否定的である (63)。ジェイムズがティートにだけ、ある程度のリアリティを認めることについても、リーヴィスはジェイムズの言葉を引用して、「抽象から具体へ」と作られた人物像でありリアリティに欠けると見なしている (75)。ジョーン・ベネット (Joan Bennett) は、読者の同情はティートの裏切りの連続に消し去られてしまうと考えている (148)。

本章は、シンパシーに乏しい人物、ティートに注目する。ティートは野心家でありな

<sup>76</sup> エリオットと同時代のスコットランド出身の小説家、著述家。エリオットとの面識はないが、エリオットの作品を高く評価していた (Harris 293-94)。

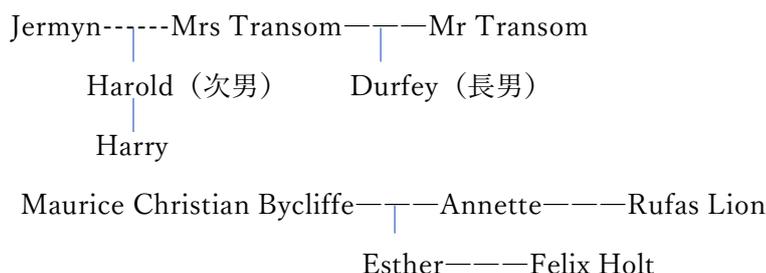
<sup>77</sup> Cf. 序論第2節。

がら意思が弱く、裏切りと嘘を繰り返し、最後は復讐の鬼と化した養父に殺される。彼は養父が海賊に奴隷として売られ助けを求めて手紙を寄越した時にこれを無視し、身代金として十分な宝石と金貨を着服してフィレンツェでの出世を試みる。ティートの養父はシャルル 8 世の囚人としてフィレンツェに来るが、ティートは養父を精神異常者扱いして知らぬ顔をする。裏切りを悪いこととは考えない。彼はロモラを愛しているながら、頭の弱い乳しぼり女であるテッサ (Tessa) と偽りの結婚をして家を与え、2 人の子を産ませる。彼は自分が優しさに負けたからだと思っているが (286; ch. 34)、テッサが「結婚」について沈黙を守らないと「2 度と自分に会えなくなる」 (“she would never see him again.”) と脅す (286; ch. 34)。またロモラの父親の蔵書売り払ったことをロモラに批判された時も、妻は与しやすいと馬鹿にして開き直って言う。「事態は変えられない。蔵書は売られ、君は僕の妻だ」 (“The event is irrevocable, the library is sold, and you are my wife.”) (275; ch. 33)。ティートは、裏切るたびにそれを正当化する。ティートの性格と心理の描写が一面的であり、『フロス河畔の水車場』より後退していることに異論はないと思われる。

(2) 『急進主義者フィーリクス・ホルト』 (*Felix Holt: The Radical*, 1866)

① 『急進主義者フィーリクス・ホルト』の概要

『フィーリクス・ホルト』の人物関係



第 1 章では、トランサム・コート (Transome Court) という名の荘園の領主夫人であるトランサム夫人が次男のハロルド (Harold) を待っている<sup>78</sup>。ハロルドが顧問弁護士マ

<sup>78</sup> 物語の舞台はエリオットに所縁の深いナニートン (Nuneaton) とコヴェントリ

シュー・ジャーミン (Mathew Jermyn) とトランサム夫人の間の子供であることはトランサム夫人の秘密である。ハロルドは19歳から15年間中東で資産を築き、兄の死により今やトランサム家の跡取りとして帰宅する。同時に彼は、急進派として下院に立候補する。同じ頃、フィーリクス・ホルト (Felix Holt) も薬屋の修業から帰宅する。彼は家業の薬屋を継いでインチキな薬を売ることを拒否し、代わりに時計の修繕を生業として貧しい人びとを教育するつもりである。

選挙当日に労働者の暴動が起きる。フィーリクスは暴徒たちをトラブルから救おうとするが、結果として警官を押し倒してしまい、殺人罪と暴動を指導した罪で逮捕される。ハロルドは落選する。同じ頃、エステル (Esther) が自分の所領の法律上の正当な所有者であることを知り、求婚を考えて彼女を屋敷に招いて滞在させる。しかし、やがて自分がジャーミンの子でトランサム家の血を引いていないことを知り、求婚を止める。フィーリクスの裁判では、エステルが彼の無実を訴えた結果、有力者の嘆願により彼の刑期が軽減される。エステルはトランサム・コート of the 相続権を放棄して養父のルーファス・ライオン (Rufus Lion) の元に帰る。ハロルドは今や法律上正当な所有者となったが、不名誉を恥じて暫くトランサム・コートを離れる。フィーリクスは出獄の後、エステルと結婚する。

本論文は、シンパシーに乏しい人物としてトランサム夫人 (Mrs. Transome) に注目する。物語に登場する頻度はエステルやハロルド、更にはトランサム家の顧問弁護士ジャーミンにも劣る。しかしエステルは、物語の最初こそフィーリクスに「クジャク」(“A peacock!”) (72; bk. 1, ch. 5) と評されるほど、絹のストッキングや仔羊の革の室内履きや麻のハンカチに自分の稼ぎを費やして貯金することもなかったが、フィーリクスと会って間もなく、養父のライオン氏にこれまでの親不孝を詫び、トランサム・コートに滞在した折には、トランサム夫人に深く同情し、ハロルドに夫人に優しくするように頼む。ベネットは「エステルとトランサム夫人を並置して対比するのは、ジョージ・エリオットの道徳的考え方のほとんど寓話的な単純化である」と述べている (157)。つまり、シンパセティックなエステル、シンパシーに乏しいトランサム夫人という構図である。ハロルドやジャーミンはなるほどシンパシーに乏しいが、しかし、いずれもトムと同じく強い人間と

---

(Coventry)を大方模した町トレビー・マグナ (Treby Magna) であり (van den Broek, “*Felix Holt*” 113)、第一次選挙法改正直後の1832年9月1日から1833年4月のある日までを描く。

して描かれている。そこでエリオットのこれまでの小説には登場しなかった新しいタイプの人間として、シンパシーに欠けるにも拘らず自分の孤独や疎外感を嘆く弱い人間として描かれたトランサム夫人に注目する。

## ②『急進主義者フィーリクス・ホルト』のリアリズムに関する先行研究

『ロモラ』が15世紀のフィレンツェを描いたのに対し、『フィーリクス・ホルト』の舞台が再び30年ほど前のイギリス中西部の田舎に戻ったことを、批評家は歓迎した。『フィーリクス・ホルト』序章は、1830年代初頭の英国中部地方を馬車で行く旅人の目から見た当時の社会の様子を描く。堂々たる牧師館と灰色の教会が中央に立つ豊かな村もあるが、炭坑の粉塵で黒ずんだ男たちが稼いだ金の多くを酒場で使い、やつれた青白い顔をした職工が期限に間に合わせようと夜なべをして仕事に精出している村、日中はもうもうと煙を上げ夜は赤い炎を地平線に陰鬱に燃やして空気を汚す工場町、といった厳しい現実も描いている。

しかしながら、物語全般について見ると、そのリアリズムに多くの疑問が寄せられている。まずプロットについては、トランサム家とエスターを関連付けるために、様々な偶然と複雑な法律関係を含む、あまりにも手の込んだプロットを使っており (Bennett 255)、このことは多くの批評家が指摘している (van den Broek, “*Felix Holt*” 115)<sup>79</sup>。フィーリ

### <sup>79</sup> (物語の背景にある法律関係)

1729年、トランサム家の当主ジョン・ジャスタス・トランサム (John Justas Transome) が息子のトーマス (Thomas) に限嗣相続させ、トーマスの子孫が絶えた場合はバイクリフ (Bycliffe) 家に相続させる趣旨の遺言を作成したところ、トーマスは父親の生存中に父親に内緒でいこのダーフィー (Durfey) に相続権を譲ってしまった。そのためジョン・トランサムの死後、ダーフィー家が新たにトランサムを名乗るようになった。ダーフィー・トランサム家はトーマスの子孫が活着している間だけ所有者としてトランサム・コートに君臨できる。人物関係を示した上図のモーリス・クリスチャン・バイクリフ (Maurice Christian Bycliffe) は、トランサム・コートの正式の相続人として訴訟を起こすが投獄された。彼はフランスで従軍中にフランス軍の捕虜になり、捕虜収容所を脱出するためにヘンリー・スカドン (Henry Scaddon) なる人物と衣服も所持品も交換したため、弁護士ジャーミンによって偽物と訴えられたのである。モーリス・クリスチャンは獄死する。しかし彼は、フランスで結婚した妻アネット (Annette) を呼び寄せていた。アネットは赤ん坊のエスターとともにイギリスに来て夫の死を知らされるが、家出していた

クスの人物造形がリアリズム本来の詳細な事実の描写によらず抽象的表現に頼っているという指摘もある。フィーリクスの性格描写が事実の積み上げからなる「帰納法的リアリズム」から逸脱していることを指摘するキャサリン・ギャラガー (Catherine Gallagher) は、『フィーリクス・ホルト』は「より洗練され、より自意識的な語り」の先駆けであり、『ミドルマーチ』における「芸術的妥協」(全知の語りからの脱却)と『ダニエル・デロンダ』における「大胆な実験」(リアリズムからの逸脱)に至る先駆けであると見なしている (“Failure of Realism” 384)。また男性と女性の言葉の評価に「ダブル・スタンダード」があるという批評もある (Nestor 120)。例えば、フィーリクスが殺人等の罪で起訴された裁判の法廷で、自分が権力に逆らうこともありうると発言すると、それは自分に不利で不適切な発言であるにもかかわらず、彼の「高貴な性格」(“nobleness of character”) (418; bk. 3, ch. 43) の現れと見なされる。ところがハロルドがトランサム夫人の反対を押し切って急進主義者として下院に立候補して落選した時、夫人が彼に率直な意見を述べると、夫人はハロルドから相談を受ける機会をさらに減らしたにすぎず、「自滅的」(“self-defeating”) (328; bk. 3, ch. 34)と語り手に評価される。

シンパシーに乏しいトランサム夫人に注目すると、その描写に対する評価は分かれている。トランサム夫人の孤独と疎外感の心理描写は「偉大な作家の心理学的洞察と優れた人間評価」の産物 (Leavis 71) という批評がある一方で、トランサム夫人は「不自然で……無用な人物」で「無価値である」と言う批評もある (James, “*Felix Holt*” 276)。

### ③本章の立場

トランサム夫人に注目した理由でも述べたように、トランサム夫人はトムと異なり弱い人間として描かれている点が異色である。そこでトムやヘティと比べて、1)シンパセテ

---

ため実家に帰れず、行き倒れの形で非国教会牧師のルーファス・ライアンに救われる。アネットは牧師と結婚後まもなく亡くなり、エスターは牧師の養女として育つ。選挙の最中にトーマスの最後の子孫が亡くなったため、エスターのトランサム・コート of the 相続権が確定する。この頃、スキヤドンは偶然にもトランサム・コートの近隣の荘園領主サー・マキシム・デバリー (Sir Maximus Debarry) の使用人となっており、モーリス・クリスチャンとそっくりなエスターを見かける。このことが、ジャーミンがトランサム・コートの正当な相続人が存在する事実をもみ消すことを不可能にする。

ィックな側面がどれだけ描かれているか、2)自分を裏切った人間に対する憤りや孤独や疎外感に苦悩する心がどれほど描かれているかを吟味し、それが何を意味するかを考察する。

#### 1)シンパセティックな側面の描かれ方

ヘティは、生まれたばかりの自分の赤ん坊を、ホール・ファームに帰る邪魔になるからと森に捨てて死なせてしまう。裁判やダイナへの告白の場面でヘティに改悛の情の伺われる場面でも、ヘティの改悛が明瞭に言及されることはない。トランサム夫人は、くる病で愚鈍で醜い長男を嫌い、彼が死んで次男のハロルドが領地を相続することを強く願う (*Felix* 23; bk. 1, ch. 1)。ハロルドが33歳の時に長男が亡くなるまでずっと願い続ける。トランサム夫人は自分で手を下した訳ではないが、邪魔になった自分の子供に対するシンパシーのなさにおいてはヘティと同じである。トムも、マギーがスティーブンと行方不明になった時には、マギーの不名誉よりはマギーの死を望んでいる (*Mill* 502; bk. 7, ch. 1)。

また、ヘティが自室で自分を飾り立てて自己陶醉し、貴婦人になったつもりでふんぞり返って歩く愚かな虚栄心に満ちた場面が詳細に描かれている (*Adam* 135-37; bk. 1, ch. 15)。他方、トランサム夫人については、ハロルドが中東で財産を築いて戻って来るまで、自分に残されたささやかな権力をすべて行使することを好んだことが具体的に描かれている。

She liked that a tenant should stand bareheaded below her as she sat on horseback. She liked to insist that work done without her orders should be undone from beginning to end. She liked to be curtsied and bowed to by all the congregation as she walked up the little barn of a church. She liked to change a labourer's medicine fetched from the doctor, and substitute a prescription of her own." (*Felix* 30; bk. 1, ch. 1)

夫人は、自分が馬に乗って通る時には、小作人は脱帽して起立すべきだと考えた。夫人は自分の命令によらずになされた仕事は、最初から最後までやり直すように主張した。納屋のように小さな教会の中を歩くときも、会衆全員から膝を曲げて丁寧にお辞儀されることを好んだ。夫人は、労働者が医者から貰って来た薬を取り上げて、自分の処方した薬に変えるのが好きだった。

トムはと言うと、彼にはヘティのような虚飾は見られない。トムは父親の破産後、不幸に対して野心的に抵抗することに集中する(*Mill* 288; bk. 4, ch. 2)。トムはマギーが「レディ」(“a lady”)になることを望んでいるが(*Mill* 408; bk. 6, ch. 4)、そのための手段として、父親の死後自分が家を持つまで、マギーを預かると言うピュレット伯母の申し出をマギーが受けることを望み(*Mill* 408; bk. 6, ch. 4)、慣れ親しんだドルコート・ミルを取り戻す堅実な計画を立て(*Mill* 414–15; bk. 6, ch. 5)、それに向けて集中して努力するのである。しかしトムの努力の目標は「誰からも立派な人と言われること」(“make every one say that he was a man of high character”) (*Mill* 237; bk. 3, ch. 5)、「好きなだけ犬や馬を飼えること」(“he could keep as many horses and dogs as he liked”) (*Mill* 237; bk. 3, ch. 5)であり、ヘティの虚飾とは異なるが、権力を誇示したがるトランサム夫人とはさほど違わない。

ヘティは世話になっているおじの農園ホール・ファームの人間を愛することができない。トランサム夫人はどうか。夫人はジャーミンとの不倫によりハロルドを生んで後、ジャーミンが荘園の利益を横領することに黙って耐えてきた。しかし夫人自身も、言葉で意思表示のできない人間に対してシンパシーを持たない人間として描かれている。トランサム夫人は幼い孫のハリーと精神薄弱で脚の不自由な夫を邪険に扱う。トランサム氏の服装や身体には世話が行き届いているが、夫人の夫に対する眼差しは冷たい(*Felix* 14–15; bk. 1, ch. 1)。夫人の非難の目を見ただけで、トランサム氏はそれまで意図していた昆虫の標本の再整理を諦めてしまう(*Felix* 15; bk. 1, ch. 1)。トランサム氏は、ハロルドが連れ帰った3歳の息子ハリーと召使ドミニク(Dominic)の存在により初めて「勇気と力」(“new courage and strength”)を得て(*Felix* 327; bk. 3, ch. 34)、「大層幸せに見えた……」(“The old man seemed so happy now . . .”) (*Felix* 378, bk. 3, ch. 40)。ハロルドは夫人がハリーを可愛がらないのを嘆いており(*Felix* 327; bk. 3, ch. 34)、ハリーは夫人を「がみがみ」(“Bite”)と呼んでいる(*Felix* 378; bk. 3, ch. 40)。夫人は自分の「癩癩と専横」(“her temper and her tyranny”)のせいで夫が自分を愛さないのを自覚しつつ、召使のデナー(Denner)以外に自分を愛してくれる人間がないことを嘆く身勝手な人間である(*Felix* 336; bk. 3, ch. 35)。

その一方で、夫人は次男のハロルドには深い愛情を抱き、これに献身してきた。夫人はハロルドの出生の秘密につき、「神の怒りあるいは慈悲ではなく、息子の怒りや慈悲を考え」ながら(“She was not thinking of God’s anger or mercy, but of her son’s”) (*Felix*

329; bk. 3, ch. 34)、沈黙を強いられてきた。「ハロルドは頭の切れる、率直で、善良なエゴイストであり……」(“Harold Transome was a clever, frank, good-natured egoist . . .”)、「優しい息子」(“a kind son”) (110–11; bk. 1, ch. 8) である。彼は母親の額にキスし、腕を差し伸べ、家の物でも庭の物でも選択は母親に任せる (*Felix* 111; bk. 1, ch. 8)。夫人はそれでは不満で、自分と一緒に部屋で過ごすことを望んでいて (*Felix* 112; bk. 1, ch. 8)、夫人は「男性は心に思い出を持たないのね」(“Men have no memories in their hearts”) と苦々しく思う (*Felix* 335; bk. 3, ch. 35)。しかし、トランサム夫人とハロルドと一緒に懐旧の情に浸るべき懐かしい思い出は全く描かれていない。中東に行く前のハロルドに対して、夫人は「人並み以上に愛を注いできた」(“who had given him more than the usual share of mother’s love”) (*Felix* 32; bk. 1, ch. 2) とあるが、その具体的な行為には全く触れられていないのである。脇役のトランサム夫人に関して多くの描写を期待することはできないが、外形事実を積み上げてメトニミーにより登場人物の性格を示す手法がリアリズムであるとすれば (Gallagher, “Failure of Realism” 383–84)、夫人の描写は十全なリアリズムとはなっていない。トランサム夫人はヘティと異なり、少なくともハロルドと娘時代からの付き人のデナーに優しい気持ちを持っていることが明示されているが、そのシンパセティックな側面が十分に描かれているとは言えないのである。

他方、トムは男性優位思想を背景にマギーを家政婦として使うが、マギーを愛している面倒も見ると。トムの愛情へのマギーの執着の裏には、トムのマギーに対するシンパセティックな態度とそれに対するマギーの依存がある。トムは両親に対してもシンパセティックで忠実な態度を示す。またトムは子供の頃、寄宿して勉強を教わっていた牧師の幼い娘の散歩を嫌がらないだけの優しさを持っており、語り手は弱いものに対するトムのこの優しさを、「真の男らしさ」(“true manliness”) と呼んで賞賛していた (*Mill* 151; bk. 2, ch. 1)。さらにルーシーへの恋心も、ルーシーのためにじっと黙って耐える優しい人間として描かれている。このように見てくると、トランサム夫人のシンパセティックな側面の描写は、脇役とはいえトムよりはるかに少ないと言える。

## 2) シンパシーに欠ける人間の憤りと孤独や疎外感に苦悩する心

次にヘティ、トム、トランサム夫人が、自分を裏切った人間に憤り、また自己の境遇を嘆く場面を見たい。自分を誘惑したアーサーに対するヘティの憤りは語り手による間接話法たった2行で済まされ、しかも語り手は、ヘティには憤る資格はないと見なしていた。

またヘティがアーサーに会いに出たまま放浪する際に初めてホームシックを感じたことも自由間接話法 4 行だけで済まされ、語り手は「絶望の旅」と題された章の最後で、ヘティを「我々の仲間」でなく、読者や語り手とは異なる異分子として憐れんでいる。

他方トムは、自分との絆を大切にしてステーブンの駆け落ちを断念して 1 人で帰ってきたマギーに、「うちにはお前の居場所はないよ」 (“You will find no home with me.”) (*Mill* 503; bk. 7, ch. 1) という言葉で始まる全部で 31 行に及ぶ非難の言葉を投げつけてマギーを勘当するが、直接話法ですべて描かれている。非難の中でトムは世間と自分を同一視しており、ここには父親の破産後、名誉回復に専心した結果、マギーへのシンパシーを失ったトムの性格の変化も表れている。しかし反面、トムが働きながら感じたに違いない孤独や疎外感は一切描かれていない。ルーシーへの恋心も、暗示的にしか示されない。

これに対してトランサム夫人の孤独や自分の運命に対する嘆きは、息子のハロルドと弁護士ジャーミンに対する不満や憤りとともに詳細に描かれている。例えば次の引用は、ハロルドが自分の出生の秘密を知って自室に閉じこもった時のトランサム夫人の心境であるが、自由間接話法で詳細に描かれる。

Then her heart cried out within her against the cruelty of this son. When he turned from her in the first moment, he had not had time to feel anything but the blow that had fallen on himself. But afterwards—was it possible that he should not have been visited by some thought of the long years through which she had suffered? The memory of those years came back to her now with a protest against the cruelty that had all fallen on *her*. She started up with a new restlessness from this spirit of resistance. She was not penitent. She had borne too hard a punishment. Always the edge of calamity had fallen on *her*. Who had felt for her? She was desolate. God had no pity, else her son would not have been so hard. What dreary future was there after this dreary past? She, too, looked out into the dim night, but the black boundary of trees and the long line of the river seemed only part of the loneliness and monotony of her life.” (*Felix* 468; bk. 3, ch. 50; Eliot’s emphasis)

それから夫人の心は、この息子の冷酷さを非難して叫んだ。彼がさっき私に背を向けたのは、彼自身に降りかかった痛手以外は何も感じられなかったからでしょう。でも

その後——息子として母親に同情しないなんて、母親が苦しんだ長い年月に思いが及ばないなんて、そんなことがあり得るかしら？ 自分に浴びせられた息子のこの冷酷な仕打ちに対する抗議とともに、苦しかった歳月の思い出が蘇った。夫人は反抗的な気持ちになると、またじっとしてられなくて椅子から立ち上がった。私は後悔なんてしていないわ。私は辛すぎる罰を受けてきたもの。災難の刃はいつもこの私に落ちてきたわ。誰が私に同情してくれたというの？ 私は見捨てられた。神様も憐れんでくださらない。さもないとハロルドがあんなにつれないはずがないもの。この侘しい過去の後、どんな侘しい未来があるのかしら？ 夫人もまた、薄暗い夜の景色を眺めた。しかし荘園の境界線をなしている黒い木々と川の長く伸びた線は、夫人の人生の孤独と単調さの一部にすぎないように思われた。

この引用から分かるように、トランスサム夫人の憤りは、世論を背景にした強い人間のそれではなく、少なくとも夫人の意識においては世の中に見捨てられた弱い人間としての怒りであり嘆きである。この引用の後、トランスサム夫人はエステーの部屋へ行き、「20年以上の間私には1時間の幸せもなかった。ハロルドはそれを知っていながら私に辛く当たるのよ」(“For more than twenty years I have not had an hour’s happiness. Harold knows it, and yet he is hard to me.”) (*Felix* 470; bk. 3, ch. 50)とエステーに訴える。エステーが「明日は違いますよ」(“To-morrow he will not be.”)と宥めても、「私は年を取って今ではほとんど何も期待しない——とても小さなことでも大きく見えるわ。なぜ私がこれ以上罰を受けなければならないの？」(“I am old, and expect so little now—a very little thing would seem great. Why should I be punished any more?”) (*Felix* 470; bk. 3, ch. 50)と夫人は納得しない。エステーはトランスサム夫人の部屋へ付き添って夫人を寝かしつける。エリオットの初期と中期の長編小説において、シンパシーに乏しい人間が自分の境遇を嘆き苦悩する心が詳しく描かれているのはトランスサム夫人のみである。トランスサム夫人は全部で51章ある物語の中の16章中に登場するが<sup>80</sup>、そのうちハロルドとともにエステーをトランスサム・コートに招くために馬車で迎えに行った第38章以外は、自分の運命を嘆くか、少なくとも不機嫌であり、「気の毒なトランスサム夫人」(“poor Mrs. Transome”)という語が、

---

<sup>80</sup> 1章、2章、7章、8章、9章、34章、35章、36章、38章、39章、40章、42章、45章、46章、48章、50章。

過去は変えられないという文脈で2度使われている。これは『ミドルマーチ』のシンパシーに欠けるカゾボンを、語り手が7回「かわいそうなカゾボン氏」(“poor Mr. Casaubon”)と呼び、「カゾボン氏も彼自身の世界の中心である……この傾向は我々に全く縁のないものではなく、他の虫のいい望みのように我々の同情をいくらか引くのである」(“Mr Casaubon, too, was the centre of his own world . . . this trait is not quite alien to us, and like the other mendicant hopes of mortals, claims some of our pity.”) (*Middlemarch* 78; bk. 1, ch. 10) と述べて彼を同情を持って描くことの先駆けとなっている。

エリオットの小説のリアリズムを通時的に見る時、1) ヘティはそのシンパシーに欠ける性格のみが強調されるのに対し、トムはシンパセティックな側面も十全に描かれ、トランサム夫人はハロルドへの強い愛情を持つことが、具体例なしに提示されている。2) 他者への憤りや孤独や疎外感は、ヘティでは過小評価され、トムの憤りは直接話法で詳細に描かれるが、トムの孤独や疎外感は暗示的にしか描かれない。これに対してトランサム夫人の憤りや孤独や疎外感は、人間的弱さの訴えとともに、ヘンリー・ジェイムズに「不自然な人物」と評されるほど「強烈に」描かれている (“*Felix Holt*” 276)。これは『ミドルマーチ』において、後述するようにカゾボンやロザモンドの身勝手な憤りや嘆きを語り手が同情をもって描くことを彷彿させる。またトランサム夫人がヘティのように追放されず、トムのように溺死もせず、亡くなるまでトランサム・コートに住み続け、またエスターがハロルドに夫人に優しくするように頼んだことで、事態が改善するかもしれないという明るい未来の希望が与えられていることも、ヘティやトムと異なる。このように考えると、『フィーリクス・ホルト』はシンパシーに乏しい人間の悲しみが「我々の仲間」として同情を持って描かれ、シンパシーに乏しい人間にも望む未来の姿が与えられる『ミドルマーチ』の先駆けと位置付けられる。

## 2. 『ミドルマーチ』のリアリズムに関する先行研究と本章の立場

### (1) 『ミドルマーチ』の概要

物語の舞台は執筆時期より40年前の1829年から1831年の、おそらくはイングランド中西部の小都市である。主人公は社会貢献の高い理想を持つドロシア・ブルック(Dorothea Brooke)と、同じく高い医学的野心を持つ医師ターシャス・リドゲイト(Tertius Lydgate)で、物語の初めにおいて前者は19歳、後者は27歳である。ドロシアは27歳も年上の牧師であり学者であるエドワード・カゾボン(Edward Casaubon)を、

偉大な魂の持ち主で偉大な学問的業績を達成しようとしていると勘違いし、彼を助けて世の中に貢献しようと思って彼と結婚する。しかし、カゾボンは研究に行き詰っているのみならず、その高慢と狭量ゆえに同情されることを嫌い、両者にとって不幸な結婚となる。結婚後1年半でカゾボンが心臓発作を起こして亡くなった後、ドロシアはカゾボンの親戚にあたる若いウィル・ラディズロー (Will Ladislaw) と結婚してロンドンに去る。やがてラディズローは国会議員となり、ドロシアの伯父ブルック氏の荘園はドロシアの息子が相続する。

リドゲイトはミドルマーチの医療を改善し、同時に医学上の偉大な発見をすることを目論んでミドルマーチにやってきた。ロザモンドは、準男爵の親類というリドゲイトの階級と将来の裕福な暮らしを期待して、リドゲイトと結婚する。彼女は夫の医学上の偉大な発見という野心を軽んじた上、夫の借金による家計縮小にも協力せず、夫の意図に反する策を次々に講じる。銀行家で町の有力者であるニコラス・ブルストロード (Nicholus Bulstrode) は、リドゲイトから借金を申し込まれて断るが、自分の過去の悪行を強請る人間ジョン・ラッフルズ (John Raffles) の往診を頼んだ時、一転して 1,000 ポンドを貸す。その結果リドゲイトは、ブルストロードからラッフルズの死を早めるための賄賂を受け取ったのではないかと町の人々から疑われ、遂にロザモンドの望み通り町を出て、金持ち相手の医者になる。

## (2) 『ミドルマーチ』のリアリズムに関する先行研究

『ミドルマーチ』のリアリズムの評価については第1章でも述べたが、出版当初から20世紀半ばまで、この小説を道徳的寓話と呼ぶ批評が主流を占めていた。ヴァージニア・ウルフが1919年に「大人のために書かれた数少ない小説のひとつ」(Woolf, “George Eliot” 187) と賞賛した後も、評価と人気は低迷していた。しかし、1948年にF・R・リーヴィスが『ミドルマーチ』の登場人物の「奥深い分析」(77)を賞賛して以来、19世紀イギリスを代表するリアリズム小説とみなされるようになった。また、20世紀後半のポスト構造主義批評家から、『ミドルマーチ』の全知の語り手や、言葉と現実の一对一对応(比喩表現の曖昧さを含む)の信奉に対する批判と疑いを受けたことを機に、そのリアリズムは全知の語り手や言葉と事実の一对一对応という考え方から解放され、より自由な解釈を許す洗練された性質が見出されるようになったことにも言及した。本項では、『ミドルマーチ』に顕著に表れたエリオットの小説のリアリズムのこの洗練された性質について説

明する。

まず、『ミドルマーチ』では出来事は複数の視点から紹介される。例えば第34章のピーター・フェザーストーン (Peter Featherstone) の葬列を、カゾボンの屋敷の窓からドロシアや妹のシーリア (Ceilia)、シーリアの夫のサー・ジェイムズ・チェッタム (Sir James Chettam) らが眺める場面でも、窓辺に立つ人々は各々が異なった感想を持っており、葬列に加わっている人々もまたこの葬式に対して異なったことを考えている (Ermarth, *Realism and Consensus* 240)。これは、物語の終盤のリドゲイトの行為の解釈にも当てはまる。リドゲイトが出席していた町の委員会の席で、銀行家ブルストロードは、ミドルマーチに来る前の違法行為や道徳に反する行為、さらにはそのことで自分を強請っていた男ラッフルズが自宅で亡くなったことにより、退場を要請される。医師のリドゲイトは、ブルストロードがゆっくり立ち上がったまま椅子の端につかまっているのを見て、1人で歩く力がないことを見て取り、馬車に乗せて家まで送る。リドゲイトの心中にあるのは「優しい義務感と純粋な同情」 (“gentle duty and pure compassion”) (685; bk. 7, ch. 71) であるが、町の人々はリドゲイトの態度をブルストロードへの忠誠心と見なしている。

『ミドルマーチ』では、登場人物の性格も「自身の自覚の観点と他の人々の見解の両方向で」描かれる (Wright, “*Middlemarch*” 40)。例えばドロシアは、「非常に頭がいい女性だと噂されていたが、『妹のシーリアの方が常識がある』という但し書きが付いた」 (“She was usually spoken of as being remarkably clever, but with the addition that her sister Celia had more common-sense.”) (7; bk. 1, ch. 1)。また、リドゲイトがミドルマーチにやってきた時、読者は第15章で彼の科学と女性への情熱や過去の経験について詳しく知らされるが、「近所の人にとって彼は事実上未知であり——記号の集まりとしてののみ知られている」 (“and yet remain virtually unknown—known merely as a cluster of signs for his neighbours”) (133; bk. 1, ch. 15)。つまり、近所の人びとにとっては彼は不可解な存在なのである。

その他、『ミドルマーチ』のリアリズムは、例えば次の点に認められている。スケールの大きな方から紹介すると、『ミドルマーチ』は社会を「網」 (“web”) (132; bk. 2, ch. 15) のように関連した人々の集合として描く。『フィーリクス・ホルト』の語り手は、「およそ個人の生活がより広い公の生活によって決定されなかったという試しはない」 (“there is no private life which has not been determined by a wider public life”) (50; bk. 1, ch. 3)

と述べているが、登場人物を大きな社会的・歴史的リアリティに埋め込むことは、『ミドルマーチ』において顕著である (Rignall, “Realism” 325)。例えば、『アダム・ビード』の「結果は容赦ない」 (“Consequences are unpitying.”) (156; bk. 1, ch, 16) というアダムの言葉は、ヘティとアーサーの人生だけでなく、『ミドルマーチ』のブルストロードとリドゲイトの人生にも当てはまる。しかし、ブルストロードとリドゲイトの人生が困難なものになる理由として、ヘティとアーサーの場合よりも多くのプロットと様々な人々の視点が導入され、社会がより重層的に描かれている。『ミドルマーチ』の副題『地方生活の研究』 (*Study of Provincial Life*) は、偉大なリアリズム作家とされるオノーレ・バルザック (Honoré de Balzac, 1799–1850) の膨大な小説群『人間喜劇』 (*Comédie humaine*) の中の「風俗研究」に含まれる 6 つの「情景」の 1 つ、「地方生活の情景」を思い起こさせる<sup>81</sup>。『ミドルマーチ』は、社会全体の包括的な描写を試みることにエリオットの小説の中で抜きん出ていると言える。

他方、ダニエル・カーリン (Daniel Karlin) は、些細な物や出来事の描写が豊富にあることがリアリズムに貢献しているとして、例を挙げて説明している。例えば鞭がロザモンドとリドゲイトの力関係を暗示する場面がある。次の一節はロザモンドとリドゲイトの初対面の場面である。ロザモンドがおじのフェザーストーン (Featherstone) を見舞いに行き、所望されて歌を歌っていたところにリドゲイトが往診でやって来る。フェザーストーンは、ロザモンドはミドルマーチで 1 番の歌い手だと誉める。

“Middlemarch has not a very high standard, uncle,” said Rosamond, with a pretty lightness, going towards her whip, which lay at a distance.

Lydgate was quick in anticipating her. He reached the whip before she did, and turned to present it to her. She bowed and looked at him: he of course was looking at her, and their eyes met with that peculiar meeting which is never arrived at by effort, but seems like a sudden divine clearance of haze. (109; bk. 1, ch. 12)

---

<sup>81</sup> エリオットは生涯を通じてバルザックを読んでいたが、とくに 1870 年には集中的に読んでいる (Rignall, “George Eliot” 233)。他方エリオットは 1869 年に『ミドルマーチ』の執筆を始め、1872 年 9 月に最終稿を編集者に送っている (Cross, *Life* 3: 94, 97; Rignall, “*Middlemarch*” 280)。

「ミドルマーチのレベルはあんまり高くないのよ、おじさん」とロザモンドは、可愛らしい軽やかな調子で言って、少し離れたところにある自分の鞭を取りに向かった。

リドゲイトは素早く先手を打った。彼は彼女より先に鞭を取ると、彼女に渡そうと向きを変えた。ロザモンドは会釈をしてリドゲイトを見た。彼はもちろん彼女を見ていた。2人の目が合った。突然神の意思で霧が晴れたような、努力では決して起こらない出会いだった。

2人がフェザーストーンの屋敷で出会うことは、ロザモンドがあらかじめ計画していた事である。鞭は2人間の力関係を暗示し、リドゲイトがロザモンドに鞭を渡したことは、ロザモンドが将来彼を支配することを示している。したがって、「素早く先手を打った」とあるが、彼は自分を将来支配しようとするロザモンドの意図までは理解していない。ロザモンドの「可愛らしい軽やかな調子」は、実は彼女の妥協しない性格を隠していて、リドゲイトは将来ロザモンドの強情さに苦勞する。このように、鞭という些細な物の描写が人生の思い違いという抽象的概念を即物的に分かりやすく伝えているのである。このことは、比喩はリアリズムを無効にするという、第1章第4節(2)で言及したJ・ヒリス・ミラー(J. Hillis Miller)によるエリオットのリアリズム批判に対する反証となっている。

### (3)本章の立場

ここまで『ミドルマーチ』のリアリズムが現代の批評においてどのように論じられているかを見てきた。次に、本論文の主眼であるシンパシーに欠けた人物がいかにか描かれているかにつき、ロザモンドとカゾボンに注目し、その心理描写、性格の多面性、および各々の結婚生活におけるシンパセティックな人間とシンパシーに欠ける人間の互いの幸・不幸への影響の3つの観点から検証して、『ミドルマーチ』のリアリズムを論じる。

論述の順序としては、まずカゾボンについて述べ、次にロザモンドについて述べる。カゾボンには良き莊園領主で領民は豊かであり、執事にも慕われているという側面もあるが、シンパシーに乏しい人間であるがゆえに、シンパセティックで高潔なドロシアの彼に対する献身に傷つき、また自分の死後も彼女を独占しようとする悪しき欲望が生じる。このカゾボンの道徳的墮落はドロシアを人生の危機に陥らせる。一方、ロザモンドはシンパシーに乏しい人間であるが、彼女の性格には先天的要素だけでなく後天的要素(環境)が影響していることが強調されているのみならず、ロザモンドがシンパセティックになる有

名な場面がある。さらに、リドゲイトの研究の挫折はロザモンドとの結婚に拘わらない必然的なものであり、研究者から金持ち相手の実務医への転身は、社会貢献を目指す彼の人生にとって実はプラスである。しかもこの転身は、ロザモンドがリドゲイトの研究に無関心なシンパシーに乏しい人間であったからこそ容易であった。このように『ミドルマーチ』では、シンパシーに富む人間の他者の人生へのネガティブな影響と、シンパシーに欠ける人間がもたらすポジティブな効果が描かれているのである。この2組の夫婦が交差的に配置され、それが『ミドルマーチ』において重層的に描かれる人間関係の「網」の中核にあたることは、これまでの研究においては論じられてこなかった点である。以上を図示すると、以下のようなになる。

### 『ミドルマーチ』におけるシンパシーとシンパシーの欠如の交差

(それぞれの女性の男性に対する影響を読み直す)

カゾボン (シンパシー欠如)  
研究 (完成の見込みなし)

リドゲイト (シンパセティック)  
研究 (完成の見込みなし)

↑結果的にカゾボンに悪影響 × 結果的にリドゲイトに安寧をもたらす↑

ドロシア (シンパセティック)

ロザモンド (シンパシー欠如)

左図：ドロシアはカゾボンの学問を助けて世の中に貢献しようと思って彼と結婚する。しかしカゾボンは研究に行き詰っているのみならず、その高慢と狭量ゆえにドロシアの同情 (pity) に傷つく。さらにカゾボンは自分の死後もドロシアを自分に縛り付けようとして、ドロシアとラディズローの結婚を妨げるために卑劣な手段を使う。

右図：リドゲイトは、ミドルマーチの医療の改善と医学上の偉大な発見を目論んでミドルマーチにやってきた。ロザモンドは、彼女は夫の医学上の偉大な発見という野心を軽んじ、夫の儉約の要請にも協力せず、夫の意図に反する策を次々に講じる。リドゲイトは町の銀行家から借金をするが、町の人々から、その借金が銀行家を強請る人間の死を早めるための賄賂だったと疑われ、遂にロザモンドの望み通り町を出て、金持ち相手の医者になる。しかしリドゲイトの研究に成功の見込みがないならば、その転身はリドゲイトの別の形の社会貢献と良き家庭人としての自負につながる。

### 3. カゾボンの道徳的墮落

カゾボンは、シンパセティックで高潔なドロシアとの結婚を機に道徳的に墮落し、その道徳的墮落に至るカゾボンの心理状況が詳細に描かれている。これまでドロシアの献身とカゾボンの道徳的墮落の関係、およびそこにおけるドロシア自身の人生の危機に関しては十分には論じられなかった。本節はまず、ドロシアのカゾボンに対するシンパセティックな態度と、その背後に彼女の軽蔑を感じるカゾボンのシンパシーに乏しい態度がかみ合わない様子について説明する。次に、自分の突然死の可能性を悟ったカゾボンが、ドロシアを自分の死後も支配しようとして道徳的に墮落していく様子を明らかにし、最後にこの結婚でドロシアの陥った危機と危機からの解放について述べる<sup>82</sup>。

#### (1) シンパシーに乏しいカゾボンと高潔で優しいドロシア

カゾボンは強靱な肉体 (“a strong bodily frame”) も強靱な精神 (“a powerful mind”) も持たない。彼は感じやすいが情熱的にはなれないので (“sensitive without being enthusiastic”) (262; bk. 3, ch. 29)、我を忘れて熱烈な喜びに浸るという幸せを味わったことがない。その「高慢で狭量な感受性」 (“proud narrow sensitiveness”) (262; bk. 3, ch. 29) がシンパシーに変わることもなかった。結婚前の 10 代のドロシアは、カゾボンが「偉大な魂」 (“a great soul”) (19; bk. 1, ch. 2) の持ち主であり、その寡黙は「見栄を張る努力に魂を使い切るというわざとらしさを信仰により自制すること」 (“religious abstinence from that artificiality which uses up the soul in the efforts of pretence”) (31; bk. 1, ch. 3) であると勘違いする。しかし実のところ、カゾボンは自分の興味のあることについてのみ喋り、さもなければ黙っているのである。

彼は同情されるよりも孤独を好む。「[彼の孤独]は、同情されることを恐れて縮こまるという最悪のものだった」 (“And his was that worst loneliness which would shrink from sympathy.”) (79; bk. 1, ch. 10)。カゾボンのこの性格は、ジリアン・ビア (Gillian Beer) が論じるように、エリオットの短編小説「持ち上げられた帳」 (“The Lifted Veil,” 1859) の主人公、ラティマー (Latimer) を想起させる (“Myth” 98)。ラティマーは誰に対しても完全には心を開かない。彼の「孤独を最も感じない時間」 (“least solitary moments”) (“The Lifted Veil” 7) は、夕方湖の真ん中に 1 人である時である。「[ドロシア]は常に夫

---

<sup>82</sup> 本節は、拙稿 “Limits of Sympathy: The Case of Dorothea in *Middlemarch*,” 『ジョージ・エリオット研究』, 第 18 号, 2016 年, pp. 35–48 に大幅に加筆したものである。

を喜ばそうとしているが、彼女のあるがままの姿では彼を喜ばせることはできない」  
 (“She was always trying to be what her husband wished, and never able to repose on his delight in what she [i]s.”) (446; bk. 5, ch. 4)。カゾボンは、自分が心臓発作で突然死ぬ可能性のあることを知った時、彼を慰めに来たドロシアに一言も声をかけず、彼女が腕を組もうとするのも拒否して、書齋に「自分の悲しみとともに 1 人で」 (“alone with his sorrow”) 「閉じこもる」 (“shut[s] himself”) (399; bk. 4, ch. 42)。ドロシアは彼をシンパシーに富む偉大な魂を持つ偉大な学者であると信じて結婚したのだが、彼は実際には才能がないだけでなく、U・C・クノエプフルマッヘル (U. C. Knoepfelmacher) の言葉を借りると「鈍感で、自分の卑小さが明らかにならないようにするために他人に痛みを与えることを厭わない」人間である (“*Middlemarch*” 68)。しかしドロシアには、同情を拒否されたその夜、2 人の寝室の前で彼が書齋から階段を上がって来るのを待ち受ける優しさがある。カゾボンが「おいで。お前さんは若い。寝ずの番をして人生を長くする必要はないんだよ」 (“Come, my dear, come. You are young, and need not to extend your life by watching.”) (401; bk. 4, ch. 42) と言って幾分の優しさを見せた時、ドロシアは、「体の不自由な生き物を、危うく傷つけるところだった」 (“had narrowly escaped hurting a lamed creature”) (401; bk. 4, ch. 42) のを避けることができたことを神に感謝する。

結婚前のドロシアはカゾボンの研究の卓越性を信じ、彼が偉大な本を出版する手伝いをするので、イングランドで深い尊敬を受ける生活を送ることを目指していた (27; bk. 1, ch. 3)。しかし、カゾボンの『全神話要諦』 (*The Key to All Mythologies*) (58; bk. 1, ch. 7) という学問的著作の完成のための研究は行き詰っている。彼はすべての神話に共通の言語的特徴を見つけ出そうとしているのだが、彼はその頑固さゆえに自分の研究方法を改良することができない。彼はドイツにおける神話学を知らず、キリスト教の図像学の重要性にも気づいていない (195; bk. 2, ch. 21; 200; bk. 2, ch. 22)。彼はドイツ人によって書かれたラテン語の論文を読むことを拒絶しているが (195; bk. 2, ch. 21)、グリム兄弟に代表される当時のドイツの言語学者による民間神話の研究は、イングランドの言語学者よりはるかに進んでいた (Eliot, *Writer's Notebook* xxxiii)。この誤った研究方法は、彼の態度が非科学的であることを表しており (Welsh 228)、「カゾボン氏の理論は……気づかないうちに発見にぶつかって打ち身傷ができる」という類のものでもなかった (“Mr Casaubon's theory . . . was not likely to bruise itself unawares [sic] against discoveries . . .”) (450; bk. 5, ch. 48)。さらに、カゾボンは自分が収集している神話を理解し受容するだけ

の想像力にも欠けている。彼はローマでの新婚旅行でドロシアに、キューピッドとプシケの話「純粋な神話的産物として」(“as a genuine mythical product”) 見るのが自分には出来ず、「ある文芸時代のロマンティックな発明」(“the romantic invention of a literary period”) (185; bk. 2, ch. 20) と考えているとドロシアに言う。カゾボンは、「学問を志しながらインスピレーションに乏しく、野心はあるが臆病で、几帳面だが洞察力に欠ける」(“scholarly and uninspired, ambitious and timid, scrupulous and dim-sighted”) (263; bk. 3, ch. 24) のである<sup>83</sup>。彼は「太陽の神性についての他人の意見に、辛口の批評を書き込んでいるうち、日光そのものへの関心をなくしてしまった」(“[In his] bitter manuscript remarks on other men’s notions about the solar deities, he had become indifferent to the sunlight.”) (185; bk. 2, ch. 20)。彼は、そもそも神話の研究を始めた目的を見失って (185; bk. 2, ch. 20)、自分を日光の下に連れ出してくれるアリアドネ的人物に気づかないのである (Beer, *Darwin’s Plots* 167) <sup>84</sup>。

ドロシアは早くも新婚旅行先のローマで、カゾボンには偉大な本を書く能力がないことに気づき始める。ドロシアが無邪気に、偉大な著作を今書き始めないのか尋ねると、カゾボンは彼女を「無知な傍観者」(“ignorant onlookers”) の 1 人として激しく拒絶する (188; bk. 2, ch. 20)。またこの新婚旅行でドロシアは、ラディズローから前述したカゾボンの研究方法の瑕疵についても知らされる。その後の結婚生活で、次第にドロシアはカゾボンの理論が役に立たない「粉々になったミイラ」(“shattered mummies”) (449; bk. 5,

---

<sup>83</sup> エリオットはハリエット・エリザベス・ビーチャー・ストウ (Harriet Elizabeth Beecher Stowe) に宛てた 1872 年の手紙の中で、「カゾボンの色合いは、私自身の精神的特色に全く縁がないというわけではないと懸念しています」(“I fear that the Casaubon-tints are not quite foreign to my own mental complexion”) と述べている (*Letters* 5: 322)。またある若い友人から「でも先生は、カゾボンを描くヒントを誰から得たのですか？」と聞かれたエリオットは、ユーモアを込めて、しかしながら非常に真剣に、自分の心臓を差し示した (Haight, *Biography* 450)。

<sup>84</sup> ドロシアが新婚旅行でローマにいた間に訪れたヴァチカン美術館で、豊かな巻き毛を持つラディズローはアポロ神の胸像に背を向けて立ち、ドロシアはアリアドネ臥像の傍らに、「アリアドネにも引けを取らない姿で」(“not shamed by Ariadne”) 立っていた (176-77; bk. 2, ch. 19)。アリアドネは、ギリシア神話に登場するクレタ島の王女で、アテナイの英雄テセウスに恋し、テセウスが牛頭人身の怪獣ミノタウロス退治のため迷宮に入るときに道案内の糸玉を与えて助けた。(<https://www.britannica.com/topic/Ariadne-Greek-mythology>, accessed January 23, 2024)

ch. 48)であることを学ぶ。ドロシアはカゾボンの研究を手伝いながら、「疲労といら立ち」(“weariness and impatience”) (450; bk. 5, ch. 48)を抑えねばならなかった。しかし、ドロシアは夫に対する尊敬を失った後でさえ、夫を1人きりで研究させることは決してしない。カゾボンは心臓発作を起こして後、ドロシアに研究内容を知られまいとする態度を捨て、ドロシアを秘書として多くの仕事をさせるようになる。カゾボンの作成したノートを読み上げて、言われた箇所に印を付ける作業を2時間した後、さらに本と鉛筆を寝室に持って上がって仕事を続けようとカゾボンが言うと、ドロシアは「あなたが一番聞きたいものを読むのが私にはいつでも嬉しいんです」(“I prefer always reading what you like best to hear.”)と答えるが、この時ドロシアは「本当の事」(“the simple truth”)、本心を言っているのである(447; bk. 5, ch. 48)。ドロシアは、「夫が生きている間、夫を手伝うことをほとんど確信している」(“almost sure to do [it] for him living”) (450; bk. 5, ch. 48)。こうしてカゾボンとドロシアは、シンパシーの多寡を基準にすると、高潔さにおいて対照的な人物であることが分かる。

## (2)カゾボンの道徳的墮落とドロシアの危機

ところがシンパシーの中でも同情は、高慢で狭量なカゾボンが最も忌み嫌うものである。カゾボンは、彼の研究を常に「おっとりとした優雅な心のカナリアのようにただただ恐れ入って」(“with the uncritical awe of an elegant-minded canary-bird”) (188; bk. 2, ch. 20) 尊敬し、研究の手伝いをしてくれる「協力者」(“a helpmate”) (262; bk. 3, ch. 29) の役割を果たしてくれる妻を持ちたかった。控えめで、自分を純粋に尊敬してくれ、野心のない(“a modest young lady, with the purely appreciative, unambitious abilities of her sex”) (262; bk. 3, ch. 24)、自分を盲信してくれる秘書が欲しかったのである。カゾボンは婚約中、ドロシアに向かって「あなたが一緒にいてくれるのでなければ、どんな小道も歩いて行けません」(“How should I be able now to persevere in any path without your companionship?”) (47; bk. 1, ch. 6) と言っているが、その前に「女性の大きな魅力は、自己犠牲を伴う熱烈な愛情を捧げることができることです。だからこそ女性は私たち男性の人生を膨らませ完全なものにするのに相応しいのです」(“the great charm of your sex is its capability of an ardent self-sacrificing affection, and herein we see its fitness to round and complete the existence of our own.”) (46; bk. 1, ch. 6) と言っており、女性一般を男

性の補助役と見なしている<sup>85</sup>。ところが、その意に反してカゾボンは、「すべてを見張り」 (“watching everything”) 研究の不毛さを「最も辛辣な言葉」 (“the most cutting words”) で批判する「スパイ」 (“a spy”) (188; bk. 2, ch. 20) を手に入れてしまった。

カゾボンの最初の心臓発作は、自分が妻としての義務を果たしていないと疑われたことに腹を立てたドロシアが、軽蔑と憤りを露にしながらカゾボンに食ってかかった時に起きる。新婚旅行からローウィック荘園に戻って数週間経った頃である。「どうしてあなたは、私があなたが嫌がることを望むとお思いになるの？」 (“Why do you attribute to me a wish for anything that would annoy you?”) (265; bk. 3, ch. 29)。彼に全幅の信頼を置いて尊敬していた若い女性が、今や彼を裁いている。高慢で体の弱いカゾボンは、この妻から示された「軽蔑と憤慨」 (“scorn and indignation”) (266; bk. 3, ch. 29) に耐え切れず、心臓発作を起こして倒れてしまう。その後の結婚生活においてカゾボンは、常にドロシアが優越感を感じているのではないかと疑うようになる。

To his suspicious interpretation Dorothea's silence now was a suppressed rebellion; a remark from her which he had not in any way anticipated was an assertion of conscious superiority; her gentle answers had an irritating cautiousness in them; and when she acquiesced it was a self-approved effort of forbearance. (392; bk. 4, ch. 42).

彼の疑い深い解釈にとって、ドロシアの沈黙は今や内に秘められた反抗であった。彼が全く予期していなかった言葉を彼女が口にすると、それは優越性の意識の表明であった。彼女の穏やかな返答には、用心深さが感じられてイライラさせられた。彼女が黙って従う時は、我慢という努力をして自己満足していると思われた。

ドロシアは常に夫に献身している。夫に従い、夫のために本を読み、夫の望むことを推測する。しかしながら、今やカゾボンは、妻が自分を裁いており妻の献身は自分に対する軽蔑と憐れみを伴っていると信じているので、妻の献身が「裏切り」 (“a betrayal”) (392;

---

<sup>85</sup> カゾボンのこの発言の後で、語り手は次のようなユーモラスで辛辣なコメントを述べている。「その意図においてこれほど正直な言葉もなかったであろう」 (“no speech could have been more thoroughly honest in its intension”) (51; bk. 1, ch. 5)。

bk. 4, ch. 42) にしか見えない。

カゾボンは「倫理規範に従った名誉ある人間であることを決意している」(“he was resolute in being a man of honour, according to the code.”) (262; bk. 3, ch. 29)。カゾボンの荘園の領民は皆、ドロシアの伯父のブルック氏の荘園と異なり裕福である (71; bk. 1, ch. 9)。カゾボンは、執事からの愛情も勝ち得ている (452; bk. 5, ch. 48)。さらに祖母の姉の孫であるラディズローとその母親に財政援助をしてきた。ラディズローの祖母はポーランド人の亡命者と駆け落ちして勘当されたが、カゾボンは貧困の状態にあった幼いラディズローと母親を探し出して年金を与え、彼をラグビー・スクールに入れ、彼が望むドイツの大学を出してやった上、大学卒業後も就職しようとせずヨーロッパで遊んでいるラディズローに財政援助をしている (74-75; bk. 1, ch. 8; 343-44; bk. 4, ch. 37)。

結婚前のカゾボンは、ラディズローをその低い生まれとディレッタントな暮らしぶりから軽蔑していたし、また彼の後援者という特権的地位にあった。ところがドロシアは、彼女がすべて受け継ぐことになっているカゾボンの財産の半分をラディズローに残すように、カゾボンに進言する (351-52; bk. 4, ch. 37)。カゾボンは一蹴するが<sup>86</sup>、ラディズローはカゾボンの経済的援助を断わり自立する。カゾボンに冷たくあしらわれ続けるドロシアにとって<sup>87</sup>、ラディズローの「微笑みながら応じてくれる親近感」(“the nearness of an

---

<sup>86</sup> ラディズローの生まれを軽蔑し、ラディズローへの遺産分与をあり得ないことと考えるのはカゾボンに限らない。サー・ジェイムズ・チェッタムも同様に考えている (454-56; bk. 5, ch. 49)。

<sup>87</sup> ドロシアは、結婚前には自分一番言いたいことを打ち明ける相手がいなかったのがカゾボンに期待したのだが、結果は以下の通りだった。

If she spoke with any keenness of interest to Mr. Casaubon, he heard her with an air of patience as if she had given a quotation from the *Delectus familiar* to him from his tender years, and sometimes mentioned curtly what ancient sects or personages had held similar ideas, as if there were too much of that sort in stock already; at other times he would inform her that she was mistaken, and reassert what her remark had questioned. (339; bk. 4, ch. 37)

彼女が何かに夢中になってカゾボン氏に話しかけても、彼はあたかも若い頃読んだ『デレクトゥス』(ラテン語とギリシア語の作家からの抜粋書)からの引用を示され

answering smile”）、「ワクワクする対話の絆」（“the vibrating bond of mutual speech”）は、「彼女が人生に疲れ切った花嫁として座っている薄暗い地下の納体堂を訪れてくれる朝の妖精」（“the spirit of morning visiting the dim vault where she sat as the bride of a worn-out life”）のように彼女を慰めてくれた（739; bk. 8, ch. 80）。カゾボンとラディズローに対するドロシアの好意に嫉妬する（393; bk. 4, ch. 42）。「豊かな巻き毛」（“abundant and curly [hair]”）（176; bk. 2, ch. 14）を持つラディズローは、間違いなくアポロ神の輝くイメージを呼び起こし、寒々とした「冬枯れた夫」（“a winter-worn husband”）（338, bk. 4, ch. 37）と対照的である。

ブルック氏が下院議員選挙に出るために買い取った新聞社の編集者としてラディズローを呼び寄せると、カゾボンはラディズローに、ミドルマーチを出ていくように促す手紙を出す。しかし、ラディズローは相手にしない（353; bk. 4, ch. 37）。この時カゾボンは誰にも相談できない。自分が嫉妬していると知られば自分の結婚に反対していた大方の人々に馬鹿にされるからである。それは『全神話要諦』の著作が進んでいないことを、知り合いの学者たちに告白するようなものである。「カゾボン氏は生涯、自己不信や嫉妬という心の痛みを自分自身にさえ認めずに来た」（“All through his life Mr. Casaubon had been trying not to admit even to himself the inward sores of self-doubt and jealousy.”）（354; bk. 4, ch. 37）。カゾボンはラディズローを追い払う別の手段を考え始める（355; bk. 4, ch. 37）。

カゾボンは、ラディズローが自分が死ぬのを待っていて、死んだらドロシアに結婚を迫り、自分の荘園も屋敷もドロシアも我が物とするだろうと考え、それはドロシアにとって「大惨事」（“a calamity”）であり、「ドロシアにとって致命的」（“fatal for Dorothea”）であると信じる（395; bk. 4, ch. 42）。カゾボンは次のように考える。

“In marrying Dorothea Brooke I had to care for her wellbeing in case of my death. But wellbeing is not to be secured by ample, independent possession of property; on the contrary, occasions might arise in which such possession might expose her to the more

---

たかのように、我慢した様子で聞いていた。その類のことはすでに言い尽くされていると言わんばかりに、ある宗派や個人が大昔に似たような事を言っているとそっけなく言う時もあった。また別の機会には、カゾボン氏は彼女が疑問に思っていることが正しくて、彼女の方が間違っていると断言したものだ。

danger. She is ready prey to any man who knows how to play adroitly either on her affectionate ardour or her Quixotic enthusiasm; and a man stands by with that very intention in his mind—a man with no other principle than transient caprice, and who has a personal animosity towards me—I am sure of it—an animosity which is fed by the consciousness of his ingratitude, and which he has constantly vented in ridicule of which I am as well assured as if I had heard it. . . .” (394-95; bk. 4, ch. 42)

ドロシア・ブルックと結婚する時、私は自分が死んだ場合の妻の幸福を考えねばならなかった。しかし幸福というものは、財産を豊富に独立して所有していることで確保できるものではない。それどころか、そのような財産所有がドロシアをより大きな危険に晒すかもしれない。ドロシアは、その愛情深い熱意やドン・キホーテ的な熱狂に上手に付け込むやり方を心得ている男なら、誰の餌食にもなり得る。しかも、まさしくこの意図を持った男が1人、近くにいる——一時の気まぐれ以上の信念のない、私に個人的な敵意を持っている男だ——敵意を持っているのは確実だ——敵意はその男の恩知らずから来ていて、その男はあざ笑うことで絶えずガス抜きをしてきた。それは、まるで私の耳に聞こえたかのように確実だ。

こうしてカゾボン 自分の遺言書を書き換え、ドロシアがもしラディズローと結婚したならば、彼女はローウィック荘園を相続する権利を失うという但し書きを遺言書に付け加える。しかしカゾボンは、ドロシアが荘園を所有することに付随する義務から逃れられるのであれば、彼女はローウィック荘園を失っても後悔しないであろうことをよく知っていた (464; bk. 5, ch. 50)。前述のようにドロシアは、自分が全部を相続することになっているカゾボンの財産の半分をラディズローに相続させるように遺言を書き換えることを、カゾボンに進言していたからである。こうしてカゾボンは最も卑劣な手段を考案する。彼はドロシアに内容を知らせずに約束をさせ、彼女の正直を悪用することを試みるのである。カゾボンはある夜、寝る前にドロシアに尋ねる。

“It is that you will let me know, deliberately, whether in case of my death, you will carry out my wishes: whether you will avoid doing what I should deprecate and apply yourself to do what I should desire. (448-49; bk. 5, ch. 48)

「私が死んだ場合、お前が私の願いを実行してくれるかどうか、慎重に考えて知らせてほしい。私の嫌がることをせず、私が願うことの遂行に専念してくれるかどうかどうか。」

ドロシアは翌朝まで返答を待ってくれるように頼み、寝ずに考える。夫は自分に何を約束させようとしているのだろうか？ ドロシアは、カゾボンがすべての神話に通じるカギについての研究を受け継ぐことを約束させようとしているのだと推測する。というのは、夫が自身の突然死の可能性を悟って以来、その研究を手伝っている彼女に縋りつくようになったと感じているからである(450; bk. 5, ch. 48)。大方の批評家もドロシアの考えに倣っている。彼女は自分の将来を考えて、カゾボンの「この疑わしい謎の当て推量」(“this questionable riddle-guessing”) (450; bk. 5, ch. 48) を彼の死後も続けることを躊躇する。

「でも、生きている人に奉仕することと死んだ人に無期限の奉仕を約束することとは全然違うわ」(“Still, there [i]s a deep difference between that devotion to the living and that indefinite promise of devotion to the dead.”) (451; bk. 5, ch. 48)。しかし、やがてドロシアの思いは自分の将来から夫の過去へと向かう。カゾボンの過去を埋める「孤独な労働、自己不信というプレッシャーの下での息絶え絶えの野心」(“lonely labour, the ambition breathing hardly under the pressure of self-distrust”)、「遠ざかるゴール」(“the goal receding”)が見え、そして「とうとう彼の上に揺れている刀が見える！」(“at last the sword visibly trembling above him!”) (450; bk. 5, ch. 48)。

しかし、カゾボンの意図する約束は、ドロシアが考えているよりはるかに彼女にとって破滅的であるかもしれないのである。「私の嫌がることをせず、私の願うことをしてくれるかどうか」とカゾボンはドロシアに言っている。「嫌がること」とはラディズローとの結婚であり、「願うこと」とは彼の学問の継続と解釈できる。早期に自分が死を迎えると予期している心は「その生涯の偏見を変えないことなく、想像の中で、死というあちらの世界へまでその偏見を運ぶ」(“does not change *its lifelong bias*, but carries it onward in imagination to the other side of death.”) (398; bk. 4, ch. 42, my emphasis)と語り手は述べている。カゾボンの偏見はすべての神話に通じるカギに関する彼の理論の完成だけに限られない。彼はラディズローに対する憎悪と軽蔑に満ちた心で、遺言書但し書きの効力を疑っている。したがって、カゾボンは自分の死後ドロシアに研究という重荷を負わせるだ

けでなく、ラディズローとの結婚を禁じてドロシアを独り占めする意図も持っている可能性が高い。カゾボンがドロシアとラディズローとの結婚を、彼女の正直に乗じて、卑怯にも彼女に具体的な内容を伏せて約束させることにより妨害しようとしているかもしれないのである。実はドロシアの脳裏にも、1度ならず漠然とこの疑いが浮かぶ。「夫は私が想像できる以上のことを要求するつもりではないかしら？内容を知らせずに自分の願いを実行することを誓うことを私に望むなんて？」（“. . . might he not mean to demand something more from her than she had been able to imagine, since he wanted her pledge to carry out his wishes without telling her exactly what they were?”）（451; bk. 5, ch. 48）。しかし結局、誠実なドロシアには、夫の心がそこまで不誠実だとは思えなかった。彼女はこの白紙の約束を誓うために、翌朝、庭で待っている夫のもとに行く。しかし、彼は心臓発作を起こしてすでに亡くなっていた。

シンパセティックで高潔なドロシアの陥った人生の危機について、『ミドルマーチ』の語り手は次のように述べている。

If we had a keen vision and feeling of all ordinary human life, it would be like hearing the grass grow and the squirrel's heart beat, and we should die of that roar which lies on the other side of silence. (182; bk. 2, ch. 20)

もしわれわれに、普通の人生のすべての側面を鋭く見極め、感じ取る力があったならば、それは草が成長する音やリスの心臓が鼓動する音が聞こえるようなものであろう。我々は沈黙の向こう側にある轟音のせいで死んでしまうであろう。

『ミドルマーチ』以前のエリオットの小説においては、シンパシーに乏しい人間がシンパセティックな人間の人生を破壊しつくす可能性が示唆されることはなかった。例えば『アダム・ビード』のヘティが監獄でダイナに罪を告白して流刑で追放された後、ダイナとアダムは幸せな結婚をする。『フロス河畔の水車場』のマギーはトムに勘当されたが、洪水の中で危険を冒して彼を救いに行き彼の愛情を取り戻す。『ロモラ』のティートは自らの悪行への復讐として養父に殺され、ロモラは心優しいテッサとその子供たちと暮らす。『フィーリクス・ホルト』のトランサム夫人は、自分に優しくしてくれるシンパセティックなエスターがハロルドと結婚してくれることを望むが、エスターは自分の愛する高潔な

フィーリクスを選ぶ。『ミドルマーチ』で初めて、シンパセティックな人間がシンパシーに乏しい人間に誠実を尽くすことにより、人生の破滅の危機にさらされる場合が描かれるのである。

### (3) ドロシアの変貌とその評価

こうして、ドロシアはカゾボンの死により辛うじて「彼の冷酷な支配」(“his cold grasp”) (463; bk. 5, ch. 50) から逃れることができた。しかし、彼女がカゾボンの研究への忠誠というくび木を完全に外したのは、さらに後の事で、ドロシアがラディズローと結婚すれば自分の遺産を相続させないという趣旨のカゾボンの遺言状但し書きについて知った時である。この時ドロシアは、「夫の考えていたことは自分が信じていたよりも下劣であること、そんな夫に服従して苦しんでいたのだという思いだけが残り……」(“there remained only the retrospect of painful subjection to a husband whose thoughts had been lower than she had believed . . .”)、「夫への忠実な献身」(“duteous devotion”) から解放され、自分の判断力を取り戻す (464; bk. 5, ch. 50)。

また、キャサリン・ギャラガー (Catherine Gallagher) が指摘するように、このカゾボンの遺言の但し書きにより、ドロシアは性的欲望を持つ女性への「大変貌」(“metamorphosis”) (461; bk. 5, ch. 50) を経験する (“Immanent Victorian” 71)。

She might have compared her experience at that moment to the vague, alarmed consciousness that her life was taking on a new form, that she was undergoing a metamorphosis in which memory would not adjust itself to the stirring of new organs. Everything was changing its aspect. . . . Her world was in a state of violent convulsion. . . . One change terrified her as if it had been a sin; it was a violent shock of repulsion from her departed husband. . . . Then again she was conscious of another change which also made her tremulous: it was a sudden strange yearning of heart towards Will Ladislav. (461; bk. 5, ch. 50)

彼女はその時の経験を、自分の命が新しい形を取り始め、今変身を遂げつつあり、新しい器官の動きに記憶がついてゆけないという漠たる不安な意識に例えることができたかもしれない。すべてが様相を変えつつあった……彼女の世界は激動状態にあった

……ある変化は、まるで罪であるかのように彼女には恐かった。自分が亡き夫を嫌って反発していることに大きなショックを受けたのである……それから再び、別の変化が起きて彼女は震えた。それはウィル・ラディズローに対する突然の奇妙な思慕の念であった。

それまで、偉大な学者であると自分が誤解した夫に仕えるだけの修道女のような存在であったドロシアが、性的欲望と 1 人の男性への思慕を備えた存在に変化する。「悲劇的に失敗したテレサから『平凡な女性』へと『種』が驚くべき拡大」を見せることは、「単に意識が再編成されるだけでなく、性欲のある体が付け加わる」ことである (Gallagher, “Immanent Victorian” 71)。ドロシアはラディズローを初めて恋人として意識する。

このドロシアの変化を悲観的もしくは否定的に評価する批評がある。まず『ミドルマーチ』の発表当時の初期の書評に多い悲観的捉え方から紹介する。「序章」(“Prelude”)は、厳しい戒律の修道院を設立したセント・テレサ (Saint Theresa, 1515–82)<sup>88</sup>を社会に大きな功績を残した女性の例として掲げ、しかしそれは稀なことであると述べている。

「ここかしこで何も創立することのないセント・テレサが生まれ……その愛に溢れた鼓動は、長く記憶に残る行為に結実することなく、障害物の中に拡散してしまう」(“Here and there is born a Saint Theresa, foundress of nothing, whose loving heart-beats . . . are dispersed among hindrances instead of centring in some long-recognizable deed!”) (4; “Prelude”)。「序章」は 1 つには、女性が自分の理想を実現するには結婚以外に方法がなかったという 19 世紀の女性の地位について述べている (Beer, *George Eliot* 170)。「序章」によれば、ドロシアが「女性の平凡な憧れ」(the common yearning of womanhood) (3; “Prelude”)に従い、ラディズローと結婚して妻と母親の地位に甘んじたことは人生の失敗のように聞こえる。しかし「終章」(“finale”)のドロシアの平凡な生涯に対する評価は分かれる。

Her finely-touched spirit had still its fine issues, though they were not widely visible.

---

<sup>88</sup> スペイン人の聖人、神秘主義者。17 のカルメル女子修道院の設立者。自伝『人生、完全への道』(*Life, Way of Perfection*)と『精神の城』(*The Interior Castle*)の著者。宗教的瞑想と熱烈な実践を結び付けた (*Middlemarch*, “Explanatory Note 3”)。

Her full nature, like that river of which Cyrus broke the strength, spent itself in channels which had no great name on earth. But the effect of her being on those around her was incalculably diffusive: for the growing good of the world is partly dependent on unhistoric acts; and that things are not so ill with you and me as they might have been, is half owing to the number who lived faithfully a hidden life, and rest in unvisited tombs. (785; bk. 8, “finale”)

彼女の繊細な精神は、世間で広く知られているわけではないが、それでも立派な成果を生んだ。彼女の大きな心は、キュロス王[ペルシャ帝国の創設者]がその勢いを削いだあの川のように、この世に偉大な名前を残すことのない細流になってしまった。しかし彼女が周囲の人間に与えた影響は計り知れない。というのは、世界が段々良くなっていくのは、ひとつには歴史に残らない行為によるものだからである。そして物事があなたや私に関して思ったほど悪い状態でないのは、人知れぬ人生を誠実に送り、訪れる人もない墓に眠っている数多くの人々のおかげでもあるのだ。

ローズマリー・アッシュトン (Rosemary Ashton) は、“Her finely-touched”で始まる上の引用を、ネガティブな言葉 (“not widely visible,” “no great name,” “unhistoric acts,” etc.)、ポジティブな言葉 (“finely-touched spirit,” “fine tissues,” “the growing good of the world,” etc.)、半ばネガティブで半ばポジティブな言葉 (“had still,” “incalculably diffusive,” “partly dependent,” etc.) に分類し、語り手を通じたエリオットの、ドロシアの人類に対する貢献の評価に対する中立的な態度を示していると考えている (“Coming to Conclusions” 18)。

他方『ミドルマーチ』の初期の批評の多くは、ドロシアの人生について悲観的である。ある無署名の書評は「『ミドルマーチ』がメランコリーであるとすれば、それはその宗教がすべて義務であり、希望がないからである」と述べ (D. Carroll, *Critical Heritage* 317)、シドニー・コルヴィン (Sydney Colvin) は「[ドロシア]はアンティゴネでもテレサでもない」、彼女の選んだ夫はいずれも彼女に値せず、「そこには勝利の感覚はない。挫折した運命とは言わなくても、不活発で不自由な運命には悲しみがある」と述べている (337)。R・H・ハットン (R. H. Hutton) は、「この本のメランコリーの最も深刻な兆候は、最も内省的で最もスピリチュアルな登場人物を最も不幸に描くという際立った傾向

である」(299)と考え、「完全に善なるものを望むことによって、私たちが善が何かを知らなくても私たちがやりたいことを出来なくでも、私たちは悪と戦う崇高な力の一部であり——光の裾野を広げ暗黒を狭めているのです」(*Middlemarch* 367; bk. 7, ch. 39)というドロシアの信念を、「それは強烈なる真実であり強烈なるメランコリーである」と見なしている(300)。そしてハットンはこのドロシアの信念の背後に作者エリオットの同様の信念を読み取っている。「彼女[エリオット]は、悪に対抗する側に、勇敢に気高く味方する。悪に対抗する立場で自分にも何かが出来るという希望を、自分の人生の一部としている。彼女はそれを見つけ出し、それと別れることはないが、この問題に対して抱く希望はごくわずかである」(301)と述べ、エリオットは「メランコリーな教師である——なぜメランコリーかと言えば、懐疑的だからである」(302)と結論付けている。

この悲観的な解釈の背後には普仏戦争がある<sup>89</sup>。普仏戦争は、エリオットが『ミドルマーチ』を執筆している最中に起きた。ルイスの保養のため1870年6月15日に家を出て、北ノーフォーク海岸(the North Norfolk Coast)のクローマー(Cromer)とハロゲイト(Harrogate)の温泉に2週間ずつ滞在した後、北海に面したホイットビー(Whitby)に向けて出発したところで、エリオットはフランスとプロイセンの開戦のニュースを聞いた(Haight, *Biography* 428–29)。1870年7月19日のルイスの日記には「フランスとドイツ

---

<sup>89</sup> 1870–71年プロシアとフランスの間で行なわれた戦争。1870年7月19日フランスがプロシアに宣戦布告し、1871年5月10日フランクフルト条約の調印で終結した。ドイツ統一を目指すオットー・ビスマルクは、プロシア＝オーストリア戦争後、北ドイツ連邦に加わっていない南ドイツ4国の合併を望んだが、ナポレオン3世はマイン川以南の諸国を集めてマイン同盟を結び、プロシアに対抗した。1868年スペインで女王イサベル2世が廃位を余儀なくされて以来空位となっていたスペイン国王に、プロシア王家の遠縁にあたるホーエンツォレルン家のレオポルトが迎えられようとしたとき、ナポレオン3世がこれに反対、ビスマルクはこの機会をとらえ、有名なエムス電報事件など巧みな外交手段によってフランス側からの宣戦布告を誘導した。戦争が始まると軍備にまさるプロシアは連戦連勝の戦果を収め、1870年9月2日ナポレオン3世はスダン(セダン)で降伏。ナポレオン3世は廃位となり、パリでは共和政体の国防政府が樹立した。新政府はフランス領の譲渡を拒否する決意を示し、戦争を続行したが、1871年1月28日ついにパリを開城、2月ベルサイユで仮講和条約が結ばれ、5月正式にフランクフルト講和条約が締結された。フランスはドイツに賠償金50億フランを支払い、アルザス＝ロレーヌの大部分を割譲。この結果、ドイツ統一は完成をみた。(ブリタニカ大百科事典小項目辞典, accessed Dec. 23, 2023)

の間で戦争が宣言された」 (“War declared between France and Prussia.”) とある (Rignall, “Franco-Prussian War” 38)。エリオットにとってもルイスにとっても深く慣れ親しんだ文学と文化の国が分かれて戦うことはショックで、エリオットは友人カーラ・ブレイ (Carla Bray) に宛てた 1870 年 9 月 22 日付の手紙の中で、「私たちは戦争のこと以外ほとんど何も考えられず、戦争について読むことに 1 日の大部分を過ごしています」 (“We think of hardly anything but the War, and spend a great portion of our day reading about it”) (*Letters* 5: 114) と述べている。また同年 9 月初めのスダン (Sedan) におけるフランス軍の陥落後、エリオットはフランス政府軍によるパリ・コミューンの殺戮を予見したかのように、「そして今や毎日、パリで次に何が起きるかを予期するとぞっとします。人々がお互いの喉に向けて飛び掛かることは、敵の砲弾よりもひどいことでしょう」 (“And every day now one shudders in expectation of what may happen in Paris: the people flying at each other's throats will be worse than the enemy's shells.”) (*Letters* 5: 114) と述べている。またエリオットは 1870 年 12 月 31 日の日記の中で、ライド (Ryde) にいる友人のバーバラ・ボディション (Barbara Bodichon, 1827–91) を訪れた時に普仏戦争さなかのパリの人々の悲惨を軽減するために自分が何も出来ないことを恥じている。

We found the cold here more severe than at Ryde, and the papers tell of still harder weather about Paris where our fellow-men are suffering and inflicting horrors. Am I doing anything that will add anything that will add the weight of a sandgrain against the persistence of such evil? (*Journals* 141)

[この町]の寒さはライド (Ryde) よりもっと厳しい。新聞ではパリのもっと厳しい天気について報じている。そこでは私たちの仲間が苦しみ、恐怖を投げつけている。私はそのような悪がはびこっていることに反対してわずかでも重みを加えることを何かしているだろうか？

普仏戦争がエリオットの「世界の進歩」 (“the growing good of the world”) (*Middlemarch* 785; bk. 8, “finale”) に対する信頼と「知識は道徳的である」 (“[knowledge] is moral”) (*Essays* 45) という信念に対する信頼を傷つけたのは確かである。しかしジョン・リグナルによれば、「ここで——今——イングランドで偉大な人生を送ること」 (“to lead a

grand life here—now—in England”) (27; bk. 1, ch. 3) を夢見るドロシアには実在のモデルが存在した。小説家トーマス・ヒューズ (Thomas Hughes, 1822–96) の妹、ジェイン (ジーニー) ・ナッソウ・シニア (Jane [Jeanie] Nassau Senior, 1828–77) である。ジーニーの伝記『ジーニー、「1人の軍隊」』 (*Jeanie, an “Army of One,”* 1960) を書いたシビル・オールドフィールド (Sybil Oldfield) は、その中で、ジーニーがドロシアの人物像の造形にとって重要であること、普仏戦争というコンテクストがその可能性を高めることを主張している (Rignall, “Franco-Prussian War” 42)。ジーニーはエリオットと 1866 年 10 月に初めて出会い、後に『ミドルマーチ』に組み入れられる「ミス・ブルック」をエリオットが書き始めたとされる 1870 年 11 月には親しい友人となっており、エリオットはジーニーを自宅に招待している (Rignall, “Franco-Prussian War” 42)。ジーニー・シニアは、普仏戦争に際し、「戦争における病人と負傷者のための国家組織の女性委員会」 (“the Ladies Committee of the National society for the Sick and Wounded in War”) (間もなくイギリス赤十字 [the British Red Cross] になる) を統括し、外科手術用、医療用、救援用物資を集めてフランスに送る責任者であった (Rignall, “Franco-Prussian War” 42)。戦争前の 1870 年 3 月 13 日付の手紙の中でエリオットは、ジーニーのドロシアのような「拡散する人生」 (“a diffusive life”) と「より広い存在への憧れ」 (“a longing for an extensive life”) について言及しているが (*Letters* 5: 83)、戦争が始まるとジーニーは、実際に「拡散する人生」と「より広い存在」を達成したのである。本章はリグナルが主張する通り、エリオットを「メランコリーな教師」と捉えるべきではなく、エリオットは、普仏戦争への最も重要な反応として『ミドルマーチ』を書き、戦場やフランスの包囲された町で示された悲惨さの対極にある人間性の可能性を示すヒロインを作り出したと考える (“Franco-Prussian War” 44)。

ドロシアの人生の描き方を否定的に捉えるもう 1 つの批評は、1960 年代と 1970 年代のフェミニズム批評家によるものである。彼らは、エリオットが、自分は作家として成功し、妻子ある男性との内縁関係が続けたにもかかわらず、ドロシアを妻と母親の地位に甘んじさせていることを非難した (Dolin 140)。たとえばケイト・ミレット (Kate Millett) は次のように述べている。

“Living in sin,” George Eliot lived the revolution as well perhaps, but she did not write of it. She is stuck with the Ruskinian service ethic and the pervasive Victorian fantasy

of the good woman who goes down into Samaria and rescues the fallen man—nurse, guide, mother, adjunct of the race. Dorothea's predicament in *Middlemarch* is an eloquent plea that a fine mind be allowed an occupation; but it goes no further than petition. She marries Will Ladislaw and can expect no more of life than the discovery of a good companion whom she can serve as secretary. (139)

ジョージ・エリオットは、『「[妻子ある男性と同棲するという当時の]罪を犯しながら生きることで」、多分革命的と言える人生も送ったが、それについて書くことはなかった。エリオットはラスキン流の奉仕精神と、サマリアで行き倒れになっている男性を救う善き女性——看護婦、ガイド、母親、男性の付属品というヴィクトリア朝に浸透していた空想に囚われていた。『ミドルマーチ』におけるドロシアの苦境は、高潔な心に職業が与えられるべきであるという雄弁な訴えであるが、それは嘆願以上のものではない。彼女はウィル・ラディズローと結婚することで、自分が秘書として役立つ良い伴侶を発見したという以上の人生は期待できない。

またエレン・モアーズ (Ellen Moers) は、エリオットは「フェミニストではない。すなわち[エリオットの]小説家としての目的は、社会的制約を減らすことを主張することではない」(194) と述べている。

これらフェミニズム批評家たちは、ゼルダ・オースティン (Zelda Austen) が分析する通り、「文体や構成やミメシスの見地から文学を批評することにこぞって抵抗している」(554) のであり、文学の解釈方法としての妥当性に疑問がある。しかもフェミニズム批評家は「文学における女性の解放を、知的・経済的独立、言い換えれば自己実現という見地から定義した」(Z. Austen 561)。つまり1960年代と70年代のフェミニズム批評家は、当時の女性をありのままに書くのではなく、知的・経済的に独立したお手本としての女性を書くべきだと主張したのである。しかし、女性の立場が現実において妻と母親でしかなかった時代に、女性を妻と母親以上の存在として描くことはリアリズムに反する (Z. Austen 551-52)。エリオットが「ドイツ人の生活の博物誌」(1856) において、「私たちは、英雄的な職人や感傷的な小作人でなく、粗野で無関心な小作人、疑い深い利己主義に凝り固まった職人に同情することを教わりたい」(*Essays* 271) と述べ、平凡な人間の描写への志向を示していることは本論文の序論第1節で述べた。エリオットは、知的・経済

的に独立した特別の存在ではないが、「人知れぬ人生を誠実に生き、訪れる人もない墓に眠っている」ドロシアのような女性に対して、読者がシンパシーを抱くことを望んでいるのである<sup>90</sup>。

#### 4. ロザモンドのリドゲイトの幸福への貢献

ここまで、カゾボンとドロシアの関係について検討してきた。次にもう1組の夫婦の関係を見たい<sup>91</sup>。リドゲイトの妻であるロザモンドもカゾボン同様、シンパセティックな面もあるが、生涯を通じてシンパシーに乏しい人間である。ロザモンドは夫の研究を嫌い、贅沢な暮らしを止めず、夫を苦しめる。しかし、ロザモンドのシンパシーの乏しさの一因として、父権制社会における女子教育が後天的要素として説明されている。また、彼女のシンパシーに乏しい性格は、結果的にはあるが、夫を成功の見込みのない研究から平凡

---

<sup>90</sup> エリオットには、有名なフェミニズム活動家の友人がいた。例えばバーバラ・リー・スマイス（後のボディション）（Barbara Leigh Smith, later Bodichon, 1827–91）、ベッシー・レイナー・パークス（Bessie Rayner Parks, 1829–1924）、エミリー・デイヴィーズ（Emily Davies, 1830–1921）らと親しかった。しかし、エリオットは社会生活をゆっくりと成長し変化する有機体と見なしていたので、新しい法律により直ちに男女の「別々の領域」という慣習を廃止することには消極的であった（Chase, “Woman Question” 445）。エリオットは、ボディションによる既婚女性の財産法の改革の請願に署名したが、同時に妻の借金から夫を守る必要性を主張する但し書きを書き加えている（*Letters* 2: 227）。しかし、エリオットは女子教育の改革には熱心で、ケンブリッジ大学に女子のためのデイヴィーズらが推し進めたガートン・カレッジ（Girton College）を創設するための寄付に応じている。だがエリオットは、教育によって女性が解放されても男女は同一の役割を持つのではなく、お互いに補い合うものがあると考えていた。エリオットは、「私たちは、人間の愛情や男女間の互いの従属を、これもすべての歴史以前に始まっている成長と啓示ですが、手放すことが出来ないのと同じく、私たちが女性的性格と呼んでいるものを構成する、女性のあの繊細なタイプの穏やかさ、優しさ、女性の存在を愛情深さで満たしている潜在的な母性を手放すことはできないのです」（“We can no more afford to part with that exquisite type of gentleness, tenderness, possible maternity suffusing a woman’s being with affectionateness, which makes what we mean by the feminine character, than we can afford to part with the human love, the mutual subjection between a man and a woman, which is also a growth and revelation beginning before all history.”）（*Letters* 4: 468）と述べている。

<sup>91</sup> 本節は、拙稿 “Development of Realism in *Middlemarch*: Reinterpreting Rosamond,” *The George Eliot Review Online*, no. 55, 2024, forthcoming に加筆したものである。

だが尊敬され人気のある裕福な開業医へと早期に方向転換させることに役立った。シンパシーに乏しいロザモンドにポジティブな役割が与えられ、自身も望み通りミドルマーチを出て、夫を通して地位と金を手に入れる。これまでの批評においては、リドゲイトの偉大な野心を打ち砕いて彼を不幸にしたと見なされてきたロザモンドに、これまでとは違った角度から光を当て、ロザモンドがリドゲイトをより大きな絶望から救うことに貢献していることを示すことによって、彼女の人間像に新たな解釈を施すことが本節の目的である。

### (1) シンパシーに欠けるロザモンド

ロザモンドとはどのような人物であろうか。「ロザモンドは、世界を自分の欲望というフィルターを通して読み、常にリアリスティックな結果より自分に都合の良い結果を期待している」(Nestor 135)。夫であるターシャス・リドゲイトとの関係では、ロザモンドは彼の生まれの良さと高収入とミドルマーチの「閉塞と退屈」から抜け出せるという誤った期待に基づいて、結婚を決意した (Gilbert and Gubar 515)。彼女は、夫の外科医という職業と科学実験に対する情熱を理解できない (622; bk. 7, ch. 641)。リドゲイトがロザモンドに、自分たちの贅沢な暮らし方のせいで多額の負債を追っていることを告白し、妻としての協力を求めると、彼女はそっけなく言う。「この私に何が出来るというの、ターシャス？」 (“What can I do, Tertius?”) (558; bk. 6, ch. 58; Eliot’s emphasis)。この言葉は妻を思いやるリドゲイトにはあまりにも冷たい言葉であったから、リドゲイトは憤る代わりに「心が悲しみに沈み込むのを感じる」 (“fe[els] too sad a sinking of the heart”) (558; bk. 6, ch. 58)。さらに、「最近、私の暮らしをあまり快適なものにしてくれていないわね」 (“You have not made my life pleasant to me of late.”)とか、「私たちの結婚が私にもたらした苦勞」 (“the hardships which our marriage has brought on me” (627; bk. 7, ch. 65) といったロザモンドの辛辣な言葉は、シンパセティックなリドゲイトを「エイに刺された」 (“torpedo-contact”) ように動けなくした (621; bk. 7, ch. 64)。しかし、ロザモンドは「自分ほど非難の余地なく行動している女はいない」 (“no woman could behave more irreproachable than she [is]s behaving”) (561; bk. 6, ch. 58) と確信している。彼女はしばしば夫の意図に反する計画を立て、内緒で実行する。それでも彼女は「夫の非難の正当性は感じる事が出来ないが、自分の結婚生活が現在、否定できないほど困窮していることははっきりと感じられるので、彼よりも二重に優位に立っている」 (“Rosamond ha[s] the double purchase over him of insensibility to the point of justice in his reproach, and of

sensibility to the undeniable hardships now present in her married life”) (627; bk. 7, ch. 65)。

ほとんどの批評家はこのようなロザモンドを有害な人間と見なしている。T・S・エリオット (T. S. Eliot) は、「そして私は確信しているのだが、『ミドルマーチ』のロザモンド・ヴィンシーは、ゴネリルやリーガンよりはるかに恐ろしい」と述べている (11)<sup>92</sup>。筆者の知る限り、ロザモンドに同情を示したのはジョーン・ベネット (Joan Bennet) が最初である。ベネットによれば、エリオットは、「読者がロザモンドの夫に同情するだけでなく、ロザモンド自身の視野の狭さに対しても、ぞっとしつつも同情せざるを得ないように描いている」(168)。しかしながら、ベネットもまた、2人の結婚の「悲劇的な結果」の原因はロザモンドにあると考えている (166)。批評家はロザモンドのポジティブな役割を評価しようとしたことがない。フェミニズム批評も、ドロシアの理想主義、高貴な心、「自己を抑制した友情」(“a self-subduing act of fellowship”) (754; bk. 8, ch. 82) と、ロザモンドの利己主義、狭量、自己中心の「甘やかされた幻想」(“flattering illusion”) (248; bk. 3, ch. 27) の間にはっきりとした区別をしている。ドロシア・バレット (Dorothea Barrett) は、ロザモンドとリドゲイトの結婚をリドゲイトにとって「煉獄」であると見なし (149)、サンドラ・M・ギルバートとスーザン・グーバー (Sandra M. Gilbert and Susan Gubar) は、リドゲイトは、ロザモンドと結婚していなければ、「自分の研究を追及するのに必要な時間と信念を見つけることができたかもしれない」と言っている (519)。

## (2) ロザモンドのシンパシーの欠如に対する環境の影響

しかし、ロザモンドの頑固な利己主義と地位と富に対する強い欲望には後天的要素 (外

---

<sup>92</sup> 最近の批評においても、ロザモンドに対する厳しく否定的な見解が示されている。例えば海老根宏は、ロザモンドが「医学研究に没頭して家庭を顧みない夫を、『吸血鬼みたいに悪趣味な人』(64章)と蔑むようになるし、「リドゲイトもまた妻を『死んだ男の脳みそを栄養にして繁るバジル草』に喩えて(終章)、夫婦が互いに相手を怪物扱いするという、救いのない結婚生活を送るようになる」と述べている(269-70)。廣野由美子も「リドゲイトは、いわば妻ロザモンドという花を咲かせるために、生命力を吸い取られる形になってしまった。直接の死因は伝染病ではあったが、少なくともリドゲイト自身の意識によれば、彼は妻によって間接的に死に追いやられたのも同然だった」と断言している(218)。

的環境) が原因しているとテキストに説明されている。それは彼女の受けた教育と「子供の頃から慣れ親しんだ」(“accustomed [to] from her childhood”)「贅沢な家庭」(“an extravagant household”) (552; bk. 6, ch. 58) である。ロザモンドは「ホメロスとスラングを区別できず」(“[Neither] know[s] Homer from slang”) (92; bk. 1, ch. 11)、「女性に似つかわしくない知識はひけらかさない」(“[Neither] show[s] any unbecoming knowledge”) (252; bk. 3, ch. 27)。ロザモンドは「その地方で一番名高い寄宿学校であるレモン夫人の学校の花」(“the flower of Mrs. Lemon’s boarding school, the chief school in the county” (89; bk. 1, ch. 11) と呼ばれ、「ミドルマーチのほとんどの男性は、彼女の兄を除いて、ミス・ヴィンシーは世界で最も素晴らしい女性だと評価している」(“most men in Middlemarch, except her brother, h[old] that Miss Vincy [i]s the best girl in the world”) (104; bk. 1, ch. 12)。レモン夫人の寄宿学校は金持ちの男性と結婚するために「完璧な女性に必要な全て」(“all that [i]s demanded in the accomplished female”) を教えており、それには馬車の乗り降りの仕方まで含まれる (89; bk. 1, ch. 11)。その当時の女子には、金を稼ぐための教育は施されなかったし、既婚女性は自分の稼いだお金を自分の所有物として主張できなかった。持参金も、結婚時の契約で夫の財産から区別しておかないと夫の所有に帰した<sup>93</sup>。また、ヴィンシー氏には娘のロザモンドに持参金を与える金銭的余裕はなかった。当時の女性は、「既婚女性の財産法」(“the Married Women’s Property Law”) が 1870 年に成立するまでは夫の「『事実上の奴隷』状態」(Holcombe 36) にあったのである。そのうえ、「女子は妻になるためではなく、夫を獲得するために教育されている。女子は母親になるために教育されているのでもない」(Grey, “The Education of Women” [1871] 20; quoted in Beer, *George Eliot* 178)。このためロザモンドは、「朝から晩まで、自分が自身の基準では完璧なレディであること」(“being from morning till night, her own standard of a perfect lady”) (156; bk. 2, ch. 17) を全く疑わない。アッシュトンの言葉を借りれば、「女性の教育や権利が等閑視されていることに無批判な男性に対する完璧な罰」とも言えるのである (“Introduction” xv)。

また、ロザモンドの夫に対する態度には理解できる点もある。ロザモンドは、リドゲイトの外科医という職業と医学研究を「身の毛のよだつ吸血鬼の趣味」(“a morbid vampire’s taste”) (622; bk. 7, ch. 65) として忌み嫌っている。馬鹿げていると聞こえるか

<sup>93</sup> Cf. 第 4 章第 2 節(1)②.

もしれないが、当時においては珍しいことではない。外科手術はもともと散髪屋の仕事であり、手仕事として外科医は内科医より格下に見なされていた。のみならず当時の外科医には、痛みの軽減や衛生の概念が全く欠けていた。麻酔は使われておらず、また多くの患者は術後感染が原因で亡くなった（Ackerknecht 148–52; フィッツハリス 6–23, 45–67）。リドゲイトの医学実験に関して言えば、テキストにはカエルとウサギを使った生物電気の実験と、おそらくは細胞を分離するためと思われる植物を液体に浸して柔らかくする実験（255; bk. 3, ch. 27）だけが言及されている。しかし、「吸血鬼の趣味」が「流血の趣味」を暗示するとすれば、これはリドゲイトが崇拝していた同時代の外科医で生理学者・解剖学者であるマリー・フランソワ・ビシャ（Marie Francois Xavier Bichat, 1771–1802）<sup>94</sup>が行っていた、生きた動物を使った解剖や実験を指すと思われる（坂井 185）。リドゲイトはまたロザモンドに、自分がアンドレアス・ヴェサリウス（Andreas Vesalius, 1514–64）を尊敬していると説明しているが、ヴェサリウスは解剖のために「深夜に絞首台から犯罪人の白骨化した死体を」取ってきた人間である（430; bk. 5, ch. 45）。リドゲイトと同世代のフランスの作曲家で当初医学を学んでいたエクトル・ベルリオーズ（Hector Berlioz, 1803–69）は、初めて解剖室に入ったとき、「最悪だったのは、血がにじむ椎骨をネズミがかじり、スポンジ状の肺組織の断片をすずめの群れがついばんでいることだった」と振り返っている（フィリッツハリス 47）。今や町中の人々が人間の死体の解剖に反感を抱いているのであるから（415; bk. 5, ch. 45）、ロザモンドもまたリドゲイトの実験や人体解剖への情熱に嫌悪感を抱いても無理はないであろう。さらに、そのような「世間と異なる考え方」（“his peculiar views of things”）（622; bk. 7, ch. 45）についてリドゲイトが結婚前には一言も言わなかったのは不公平だとロザモンドが考えるのももっともである。このようなリドゲイトの態度には、自分の職業のやり方を当然のこととして妻に押し付けるカゾボンと同様の傲慢さが見受けられる。リドゲイトもカゾボンと同様に、自分の妻に「男性の優秀さを、その中身を厳密に知ることなく崇拝すること」（“to adore a man’s preeminence, without too precise a knowledge of what it consisted in”（251; bk. 3, ch. 27）

<sup>94</sup> ビシャは、生理学の究極の単位を器官ではなく膜（組織、“tissue”）に求め、21 の膜に分類した。例えば心臓の炎症ではなく、心膜炎、心内膜炎、もしくは心筋炎なのである（Ackerknecht 117）。ビシャはその『一般解剖学』の序文で、「生きている組織の特性を精密に分析せよ。生理学的現象の1つ1つは究極的にはこれらの特性から出ていることを示せ」と述べている（アッカークネヒト、『パリ』97–98）。

を期待している。リドゲイトは「専制君主のように断固として」(“with a touch of despotic firmness”)、「僕が仕事すべきことは、ロージー、僕が決めるんだ」(“What I am to do in my practice, Rosy, it is for me to judge.” (611; bk. 7, ch. 64) と妻に言うのである。

ロザモンドが頑固で、夫に内緒でその意思に逆らうことに、リドゲイトはひどく当惑する。それは、リドゲイトに感情移入して読者も憤りを覚えるほどである。「私は、すると決めたことは、何であれ決して諦めません」(“I never give up anything that I choose to do”) (329; bk. 4, ch. 36)とロザモンドが結婚前にリドゲイトに言った時、彼は、彼女の固執が「雄の雁の強さと見事に呼応する、雌の雁の生来の従順さ」(“the innate submissiveness of the goose as beautifully corresponding to the strength of the gander”) (335; bk. 4, ch. 36)であることを期待していたが、そうではないことになりがっかりする。しかしながら、これに関しても当時の夫婦間の力の不平等を考慮せねばならない。1881年のジャクソン判決がそれを否定するまで、夫が懲戒のため妻に暴力を振るい、また監禁する権利が公的に認められていた (Doggett 1-33, 142-48)。ロザモンドには、黙って従わないか、内緒で策を講じるよりほかに、自らの意図を実現する方法がなかったのである。こうして彼女は、常に「自分がすべての点で最良の方法で行動したと確信している」(“convinced of her having acted in every way for the best”) (621; bk. 7, ch. 64)。また、リドゲイトは町の人々が夫妻から距離を置くようになってもお町を出ようとしませんが、このことに対してロザモンドの抱く不満について、エリオットも語り手の次の言葉を通して、ある程度の正当性を認めている。「ロザモンドは、彼が自分に残酷に振る舞っていると感じているが、それはある程度真実である」(“Rosamond [is] feeling, *with some justification*, that he [i]s behaving cruelly”) (715; bk. 8, ch. 76; my emphasis)。以上から、エリオットはロザモンドを父権制社会の犠牲者としても提示しているように思われる。

さらに言えば、ロザモンドには高潔な人間のシンパセティックな好意に素直に答える面もあり、その性格は多面的と言える。ドロシアは、リドゲイトがブルストロードから借りた金を返すための小切手を持参し、ロザモンドにリドゲイトの無実への自らの確信を述べて彼女を勇気づけるために彼女の許を訪れるが、ロザモンドとラディズローの親密な様子を垣間見て引き返す。しかし、ラディズローの裏切りを激しく憤った翌朝、自室のカーテンを開けたドロシアは、自分の屋敷の門の外に早朝から人々が働きに出かける様子を見て、自らの狭量を反省し、再度ロザモンドを訪れる。ロザモンドはシンパシーに欠ける人

間であるが、このドロシアの優しさに感動して、ラディズローが愛しているのはドロシア 1人であることをドロシアに打ち明ける (749; bk. 8, ch. 81)。またロザモンドにとって、自分の最も深刻な危機に助けに来てくれたドロシアのこの思い出は神聖なものであり、彼女がドロシアを悪く言うことは生涯に 1度もなかったのである (782; bk. 8, “finale”)。

### (3) リドゲイトの医学上の発見の挫折の不可避

ロザモンドがリドゲイトの医学研究を嫌い、家計の縮小にも協力せず、町を出たがって彼の医学研究の野心を挫いたのは確かである。前述のように、リドゲイトの崇拜するビシャが人体を 21 の組織に分類し、臓器は異なる組織の集合体であり疾病はある特定の組織の異常から始まると考えたのに対し (Ackerknecht 117; アッカークネヒト, 『パリ』 94)、リドゲイトは体の最小単位となる組織 (“the primitive tissue”) (139; bk. 2, ch. 15) を見つけることを目指していた。しかし、もし彼の研究の挫折がロザモンドとの結婚に原因があるのではなく、本人の資質や当時の学界の状況に照らし、そもそも本来的に不可避なものだったとすれば、夫の研究に対するロザモンドの無関心は、かえって彼を研究以外の社会貢献と家族の幸せにつながる道へと早期に転身させる役割を果たしたというポジティブな評価を得るのではないか。そこで本項では、リドゲイトの医学上の発見の挫折の原因をロザモンド以外のところに探ることとする。

#### ① 「序章」とリドゲイト

『ミドルマーチ』の「序章」(“Prelude”)は、ドロシアに限らず、野心を持ちながら平凡な人生に終わる「人間の歴史」(“the history of man”) (3; “Prelude”)を示しているとも考えられる。そこにおいては、リドゲイトの偉大な医学上の発見の野心が、様々な理由によって挫折することも予告されているのである。

『ミドルマーチ』は、もともとリドゲイトが中心人物である「ミドルマーチ」(“Middlemarch”)とドロシアを中心とする「ミス・ブルック」(“Miss Brooke”)という 2つの物語を結び付けてできたものである。2つの物語が結びつけられたのは類似したテーマと歴史的背景のためである可能性がある (Beaty 9)。エリオットは「ミドルマーチ」を 1869 年 7 月 19 日に書き始めた。そして 1870 年 11 月の初め頃、彼女は後に「ミス・ブルック」と呼ばれる別の話を書き始めた。まもなく 1871 年の初め頃、彼女はこの 2つの物語を結合させ始めたのである (Beaty 3-8)。序章は、「ミス・ブルック」の一部とし

て「ミドルマーチ」と合体させる前に書かれた。他方、「ミドルマーチ」の旧序章は現在の第15章で、ミドルマーチに来たばかりのリドゲイトを紹介している (Beaty 39)。現在の第15章では、邪魔になった夫を殺した美しいフランス人女優ロール (Laure) に対する彼の浅はかでのぼせ上った恋愛が紹介されるだけでなく、彼の医学研究の目標の妥当性に対する語り手の (そして作者の) 疑いが示されている (これらについては後に述べる)。この2つの物語を合体している間に、現在の第11章の、ロザモンドが刺繍をしている横で兄のフレッド (Fred) が遅い朝食を取っている場面が書かれたのだが、そこでは「ロザモンドの傲慢さとリドゲイトに意図的に会う計画」が示されている (Beaty 40)。また、この結合期に書かれた現在の第18章では、リドゲイトが自分が赴任する新しい病院付きの牧師を選ぶ選挙で決定票を投じることになった時の様子が描かれている。彼は自分が信頼する友人のフェアブラザー (Farebrother) でなく、病院経営の中心人物ブルストロードの推すタイク (Tyke) にとっさの勢いで投票してしまう。この道徳的逸脱は、結局リドゲイトの没落に一役買うが、それは彼のこの投票が人々に、彼がブルストロードの側に付いているという印象を与えてしまうからである。後に町の人びとは、ブルストロードを脅迫していたラッフルズの死にリドゲイトが関わっていたと信じることになる。こうして序章はドロシアの挫折だけでなく、リドゲイトの偉大な医学上の発見の野心が「平凡さ」という彼自身の欠点によって挫折することも予告しているのである。

## ② リドゲイトの医学的発見の挫折の原因

リドゲイトの研究の挫折は4つの理由から生じている。彼の「凡庸な点」 (“spots of commonness”) (141; bk. 2, ch. 15)、研究の方向性の誤り、研究の時期尚早さ、そして利己的なロザモンドに対する彼のシンパシーである。

まず、リドゲイトは十分な「無私」を備えていない (G. Levine 270-71)。「リドゲイトの本質的な道徳的欠陥、生来の偉大さの欠如」が積み重なって彼の失脚を招いた (Shuttleworth, *George Eliot* 153)。彼の「凡庸な点」には、自分の研究に非協力的な女性との早まった結婚、物質主義もしくは贅沢の習慣、その結果としての多大の負債が含まれる。またリドゲイトの横柄な態度と家柄にこだわる俗物根性は、ミドルマーチの人々との軋轢を生む。リドゲイトのロザモンドへの求婚は、ロザモンドの性的魅力に加えて、彼女の性格に対する彼の無理解と優しさから生じた (282-83; bk. 3, ch. 31)。これは、フランスの女優ロールの場合と同じパターンである。パリで医学を勉強していたリドゲイトは、

性格も分からないこの肉感的で美しい女優に惚れ込んだ。彼女が舞台上で過ちを装って夫を刺殺したにも拘わらず、彼女の無実を信じてアビニョンまで追いかけて行って求婚したのである (141-44; bk. 2, ch. 15)。

リドゲイトは不用意にミドルマーチの医者や町の人々の敵意をかき立てる。このミドルマーチの人々との軋轢も、彼を研究から遠ざける一因である。医者たちは彼の「治療を改善しようという気質」(“disposition to improve treatment”)を嫌っているのであるが、表向きは彼の「横柄な態度」(“arrogance”)を問題視している (426; bk. 5, ch. 45)。そして医者たちは、リドゲイトの監督の下で熱病専門病院で働くことを拒否し、リドゲイトの負担を増す。他方、町の人々は、リドゲイトの薬に対する否定的な態度に反感を抱いている。町の人々が薬の効果を信じているにも拘わらず、彼は無思慮にも医者や薬剤師について「パンを稼ぐために、国王の家臣を薬漬けにしなくちゃならないんですよ……」(“To get their own bread they must overdose the king’s lieges . . .”) (417; bk. 5, ch. 45) と言ってのける。さらに町の人々は、リドゲイトの解剖趣味を嫌う。彼が病院で亡くなった人の遺体の解剖をリクエストすると、町の人々の拒絶だけでなく敵意も引き起こしてしまう (415; bk. 5, ch. 45)。したがってリドゲイトには、彼の崇拜するビシャが、「いくつかの屍体を開けよ、そうすれば観察だけでは散逸しない暗闇が、直ちに散逸するであろう」(Foucault 180) と言っているにも拘らず、解剖の機会がないのである<sup>95</sup>。

次に、彼の研究の方向が間違っている。『ミドルマーチ』の語り手は、「リドゲイトが問いかけるやり方」(“that way Lydgate put[s] the question”)は、必ずしも「待っている答えが要求するやり方」ではない(“the way required by the awaiting answer”)と述べている (139; bk. 2, ch. 15)。このことの意味するところは、ピアによれば次の通りである。「ジョージ・エリオットの知的な登場人物は、『基本となる組織』(“the primitive tissue”)、『すべての神話に通じる手がかり』(“the key to all mythologies”)という起源を探ることに囚われている。しかしテキストは、流動性という観点から組織されている」(*Darwin’s Plots* 154)。ピアが論じるように、エリオットにとっては「関係こそがすべての生物の構成原理となる」(“Relationships become the organizing principle of all life”)のであって、

---

<sup>95</sup> ビシャは所属する病院で手術後亡くなる患者の遺体を利用することができ、1801年から1802年にかけての冬の間、600体を解剖したと言われている(アッカークネヒト、『パリ』89)。

『ミドルマーチ』は「起源の模索は何であれ」(“any search for origins”) 拒否しているのである (*Darwin's Plots* 154) <sup>96</sup>。

リドゲイトの挫折の理由に関する第3の見解は、当時の医学と生物学の現実に関係する。W・J・ハーヴェイ (W. J. Harvey) は、リドゲイトの研究は細胞でなく基本的な組織を探している点で誤っていると述べている (36)。ローレンス・ロスフィールド (Laurence Rothfield) は、「細胞説を医学と結びつける努力」に注目し、それは「19世紀後半にフィルヒョウ (Virchow)、クロード・ベルナール (Claude Bernard)、パストゥール (Pasteur) らの生理学者の努力によってついに完成された」と述べている (97)。臨床観察と検死というビシャが頼っていた手段には (ビシャは顕微鏡も使っていなかった)、医学において更なる進歩をもたらすことを期待できなかった。医学の進歩は、「19世紀前半における基礎科学——顕微鏡を使った解剖学、生理学、病理学、薬学——における長足の進歩を必要としたのである」(Ackerknecht 125)。1858年、ルドルフ・ルートヴィヒ・カール・フィルヒョウ (Rudolf Ludwig Karl Virchow, 1821–1902) が発表した『細胞病理学』(*Cellular Pathology*) が細胞理論を完成し、この細胞理論が現代の全ての生物学と医学の思考の基礎となった (Ackerknecht 132; H. Harris 135–36) <sup>97</sup>。リドゲイトは1852年、彼の研究を成功に導く状況が整う前に、50歳でジフテリアで亡くなる (781; bk. 8, “finale”) <sup>98</sup>。

リドゲイトの研究の挫折の4番目の理由は、医学上の重大な発見に対する彼の野心を妨げ、自分の利己的で非協力的態度に彼を従わせようとするロザモンドに対する、彼のシンパシーである。彼女が彼の多額の負債に無関心で、「この私」に何が出来るというの、ター

<sup>96</sup> DNAも塩基の組み合わせである。

<sup>97</sup> エリオットの内縁の夫、ジョージ・ヘンリー・ルイスは、遅くとも1853年から細胞に興味を持っていた。彼は1869年と1870年に、細胞理論で有名なマックス・シュルツ (Max Schultze, 1825–75) と、フィルヒョウの後継者であるニコラウス・フリートリッヒ (Nikolaus Friedrich, 1825–82) を訪れている。ちょうどエリオットが『ミドルマーチ』を書いていた頃である (McCarthy 812–13)。

<sup>98</sup> リドゲイトはまた、ドロシアとの会話でフランソワ・ラスパイユ François Raspail (1794–1878) に言及し、彼と「同じ道を」進んでいる (“on the same track”) (428; Bk. 5, Ch. 45) と言っている。しかしラスパイユは、「デンプン分子が新しい細胞の元であり」、「神経索は細胞が伸びて生じ、筋肉は細胞が巨大化して生じる」と誤ったことを述べているのである (H. Harris 32–33)

シャス？」と言う時、彼の「生来の愛情深さ」(“[h]is native warm-heartedness”) (561; bk. 6, ch. 58) と責任感、甘やかされた若い女性が彼と結婚したがゆえに負債という難儀に巻き込まれてしまったという事実を痛切に感じる。彼女が辛辣な言葉を発するとき、彼は「家庭内の憎しみという忌まわしい束縛」(“hideous fettering of domestic hate”) (627; bk. 7, ch. 65) を恐れる。ドロシアと異なり、リドゲイトは自分の伴侶を、「光と影が常にある程度違って差している、自分と異なる自我の中心」(“an equivalent centre of self, whence the lights and shadows must always fall with a certain difference”) (198; bk. 2, ch. 22) として受け入れることができる。彼は、ロザモンドが「自分の格別の望みにも一般的な目的にも無関心であること」(“disregard both of his specific wishes and of his general aims”) に気づいているが、自分の彼女への愛情が「強いままである」(“should remain strong”) ことを熱望している (613; bk. 7, ch. 64)。2人の結婚を支えているのは、リドゲイトのロザモンドに対するシンパシーと性的欲望である。この意味において「彼女は彼を支配していた」(“she ha[s] mastered him.”) (628; bk. 7, ch. 66)。そしてミドルマーチを出ようという彼女の執拗な懇願が、遂にリドゲイトに野心を捨てさせるのである (714; bk. 7, ch. 64)。

### ③ リドゲイトがドロシアのような高潔な女性と結婚した場合

ここまで我々は、ロザモンドの利己主義と狭量のせいでシンパセティックなりドゲイトが苦しんでいることを見てきた。またジェントリ階級の人間同士で結婚したシンパセティックなドロシアとシンパシーに乏しいカゾボンの結婚が、ドロシアの誠実な献身にも拘わらず不幸であったことも見てきた。本項ではリドゲイトがドロシアのような気高い心を持ち、身分はロザモンドと同じ庶民である女性と結婚した場合、果たして彼はロザモンドとの結婚よりも幸せになれるかどうかを検討する。

ドロシアがリドゲイトに与えた第一印象は、彼女は「いつも理由を知りたがる」(“always wanting reasons”) が、「無知なのでどの質問の意義も理解していない」(“too ignorant to understand the merits of any question”) (86; bk. 1, ch. 11) ことである。しかし彼の印象は変わる。カゾボンが心臓発作で倒れた時、ドロシアが口にした次の言葉を、リドゲイトは敬慕の念をもって何年も思い出すのである。「アドバイスを教えてください。私に出来ることをお教えてください。夫は生涯、[本を出版するための] 努力をしまし、それを期待してきました。夫には他に望みはありません。私も他の事は何も望

みません——」 (“Advise me. Think of what I can do. He has been labouring and looking forward. He minds about nothing else. And I mind about nothing else——”) (272; bk. 3, ch. 30)。

『ミドルマーチ』出版当時の批評家の多くは、ドロシアとリドゲイトの結婚を望ましいと考えていた。例えばヘンリー・ジェイムズは、1873年3月に雑誌『ギャラクシー』(the *Galaxy*) に載せた『ミドルマーチ』の書評で以下のように述べている。

Lydgate is so richly successful a figure that we have regretted strongly at moments, for immediate interest's sake, that the current of his fortunes should not mingle more freely with the occasionally thin-flowing stream of Dorothea's. Toward the close, these two fine characters are brought into momentary contact so effectively as to suggest a wealth of dramatic possibility between them; but if this train had been followed we should have lost Rosamond Vincy—a rare psychological study. (“*Middlemarch*” 356)

リドゲイトは造形に素晴らしく成功した人物であるから、我々読者は時々残念に思う。というのは、彼の運命の流れがドロシアの細い流れと、もっと自由に交錯すればよいのにと一瞬思うことがあるからだ。終局に近い頃、この2人の高潔な人物は、その関係のドラマチックな可能性を暗示するほど親密な関わり方を一瞬だけ経験する。しかし、この関係が深まっていたら、ロザモンド・ヴィンシーという希少価値のある心理学的研究対象を私たちは失ってしまっただろう。

ジェイムズは、ドロシアとリドゲイトがともに伴侶を亡くして結婚したかもしれない場合を想像している。ギルバートとグーバーはそのような組み合わせの結婚を「完全に相性が良い」と見なしている(519)。反対にバレットは「ドロシアとリドゲイトの関係には、成熟と平等の感覚、正直と基本的シンパシーの感覚という、ドロシアとウィル[彼女の再婚相手]の関係には全く欠けているものが存在する」と認めつつも、ドロシアとリドゲイトの組み合わせに疑問を呈する(151)。すなわちバレットは、リドゲイトはドロシアに彼女が必要としている仕事を与えることができないし、リドゲイトとドロシアが結ばれ「登場人物たちが[最初の結婚という]煉獄から、純化され、天国往きの切符を持って現

れるというエンディング」は「本当らしさを仮借なく追及している」『ミドルマーチ』に相応しくないと考えるのである（152）。

本項では以上の批評に対して、ドロシアのように高潔な女性がジェントリ階級の人間ではなく工場主の娘であって、ロザモンドの代わりにリドゲイトと結婚していたならば、リドゲイトは幸せであったかどうかを吟味することを試みる。リドゲイトの研究は成功が見込めないことを前提にすれば、高潔な妻の彼の研究への献身は、彼にロザモンドとの結婚よりはるかに大きな悲慘をもたらすかもしれない。

リドゲイトは父権制社会を代表し、カゾボンと同じく女性を見下していることはすでに述べた。ロザモンドが妊娠中にリドゲイトの伯父の準男爵の息子と一緒に馬に乗ったことを非難する時、「君のために判断する人間は僕だ」（“surely I am the person to judge for you.”）（548; bk. 6, ch. 58）と言い、カゾボンと同じ専制的態度を示している。前述のようにカゾボンは、ドロシアが自分で「判断」して彼を非難すると、心臓発作を起こして倒れてしまった。「愛情深い」（“loving-hearted”）（627; bk. 7, ch. 65）リドゲイトは、ロザモンドが自分に内緒で行動したり、自分の命令に強情を張って従わないときは、彼女が「あたかも人類とは別の知能の低い種の動物であるかのよう」（“as if she were an animal of another and feebler species”）想像しようと努める（628; bk. 7, ch. 65）。

しかし、ブルストロードから借金をして危機的状況に陥ったリドゲイトは、ドロシアは自分がこれまで出会ったどの女性とも異なること、「彼女は男性と友人になれる」（“a man can make a friend of her”）ことを理解する（723; bk. 8, ch. 76）。ラッフルズがブルストロードの邸宅で亡くなった時、町の人々も上流階級の人々も、ドロシア以外は皆、リドゲイトと距離を置く。彼らは皆、リドゲイトはブルストロードから賄賂を受け取ったという疑惑を晴らさねばならないと信じている。リドゲイトは、ロザモンドに真実を話して無実を証明することを躊躇する。ロザモンドは彼の苦境には常に無関心だからである。ドロシアには請われるとすべてを話す（718; bk. 8, ch. 76）。

しかし、リドゲイトとドロシアが結婚した場合、リドゲイトは自身のプライドと高潔さのせいで、ロザモンドと結婚した場合よりも惨めになるのではなかろうか。彼はロザモンドとの口論において無力である。彼の声の調子は、時には「ロザモンドの華奢な腕を力強い手で掴むに等しい」（“equivalent to the clutch of his strong hand on Rosamond's delicate arm”）荒々しさが含まれるが、彼にはそれ以上に暴力的にはなれない。するとロザモンドは、「リドゲイトのやりたいことを妨げる」（“to hinder what Lydgate like[s]”）

to do”) を固く決意して、直ちに部屋を出る (612-13; bk. 7, ch. 64)。「彼が少なくともロザモンドに自分が主人であると印象を与えるために物を叩き壊したり粉々にしたりしたい時、あるいは彼女に自分が主人だとあからさまに言いたい時」 (“[when] he want[s] to smash and grind some object on which he could at least produce an impression, or else to tell her brutally that he was master”) (621; bk. 7, ch. 64)、彼は結婚生活にひびが入ることを恐れるだけでなく、財政的苦境のせいで彼女に負い目を感じる。債権者の代理人が担保物件の一覧表を作りに来た後、ロザモンドが「真っ青になり黙ってベッドに横たわっている」 (“stretched on the bed pale and silent”) のを見つけた時には、自身の情けなさにむせび泣いたほどである。

“Forgive me for this misery, my poor Rosamond! Let us only love one another.”

She looked at him silently, still with the blank despair on her face; but then the tears began to fill her blue eyes, and her lip trembled. This strong man had had too much to bear that day. He let his head fall beside hers and sobbed. (659; bk. 7, ch. 69)

「こんな惨めな状況をもたらした僕を許してくれ、かわいそうなロザモンド！ お互いを愛することだけしよう」

彼女は黙って彼を見上げた。その顔にはまだ虚ろな絶望があった。しかし、それから彼女の青い目に涙が溢れ、唇が震えた。この強い男はその日、あまりに多くを耐えてきた。彼は彼女の頭の横に突っ伏してむせび泣いた。

この場面はリドゲイトが、その「強烈なプライド」 (“intense pride”) (553; bk. 6, ch. 58) と「愛情深い」魂のせいで、自分が妻にもたらした絶望の光景に耐えることができないことを示している。リドゲイトが普段、女性は家や家具に夢中になるものだと軽蔑して一応自分を慰めているにも拘らずである。(617; bk. 7, ch. 64)。

それでは、もしこの悲惨な状況が、彼が医学上の意味のある発見が望めないにも拘わらず、妻に苦労を強いたことで引き起こされたのであれば何が起きただろうか。リドゲイトには「生き生きとした思考」 (“the vividness of a thought”)、「情熱」 (“ardour of a passion”)、「行動のエネルギー」 (“the energy of an action”) が備わっている(263; bk.

3, ch. 24)。これらはカゾボンには欠けているものである。ロールとロザモンドに対する[性的]情熱は、リドゲイトの熱意とエネルギーを証明している。熱意とエネルギーは「情熱」を表すヴィクトリア朝の婉曲表現である (Gilbert and Gubar 505)。「この作品においては、性的愛情と共同体への貢献は同じエネルギーを共有している」 (Beer, *George Eliot* 198)。リドゲイトは自分の天職に対する十分なエネルギーを有している。それゆえリドゲイトは、ラッフルズの死後、町中の人びとが自分に敵意と反感を向けた時、「誹謗から逃げてはならない。立ち向かわねばならない」 (“here [i]s a slander which must be met and not run away from”) と闘志を燃やすのである (713; Bk. 8, Ch. 75)。リドゲイトがこの賞賛に値する決意をする時、もしドロシアが彼の妻であったならば、彼女は彼をサポートしたであろう。というのは、ドロシアがカゾボンの研究への献身というくび木から解放されたと思ったのは、その研究の不毛さを悟った時ではなく、カゾボンの死後、その遺言書の卑劣な但し書きについて知った時だからである。意味のある医学上の発見が不可能であることをリドゲイトが知った時、彼の「高い矜持」と「愛情に溢れた」魂は、妻を貧困などの苦勞に耐えさせ、妻が絶えず支えてくれたにも拘わらず妻を失望させてしまったことを後悔し、むせび泣いたであろう。そしてリドゲイトが医学上の発見に挫折する日は、本章第4節(3)②で述べた理由により必ず来るのである。

物語中でリドゲイトは、ドロシアの財政的援助を受けて病院での仕事を続けて欲しいという彼女の要請を断る。彼はロザモンドがミドルマーチを出たがっていること、彼女は借金にあえぎ町の人々に相手にされなくなる運命を知らずに (“without knowing what she was going into”) (721; bk. 8, ch. 74) 彼と結婚したのだとドロシアに説明する。つまり「彼は、彼女の人生という重荷を自らの両腕に引き受けたのであった」 (“He ha[s] taken the burthen of her life upon his arms”) (752; bk. 8, ch. 81)。彼は偉大な医学研究者になるという野心を諦めた。しかしながら、自分の妻に対するシンパシーと自分が偉大な医学上の発見を成し遂げたかもしれないという可能性 (実際にはその可能性はないのだが) に対する自負は失っていない。彼はある時、ロザモンドを「メボウキ」 (“his basil plant”) と呼び、「死んだ男の脳みそに繁茂する植物」 (“a plant which ha[s] flourished wonderfully on a murdered man’s brains”) だと彼女に説明する (782; bk. 8, “finale”)。この言葉には、ロザモンドと結婚したことへの彼の後悔が表れているが、彼の男性としての自信も吐露している。彼は自分自身を所期の職業的野心を諦めた「失敗者」 (“a failure”) と考えているが、妻を泣かせる不甲斐ない男性としての「失敗者」とは考えていない (781; bk. 8.

“finale”)。もしリドゲイトがドロシアのような気高い心を持つ女性と結婚し支えられ続けていれば、研究者としての挫折だけでなく、彼がシンパセティックな人間で妻を気遣うがゆえに妻にも負い目を持ち、彼の人生はロザモンドに相手にされない人生より悲惨なものになっていたであろう。

#### (4) ロザモンドの視点の価値

『ミドルマーチ』の語り手が1つの視点を示すに過ぎない存在になっていることがリアリズムの進展につながることは、本章第2節で述べた。『ミドルマーチ』の序章で、「人間の歴史」(“the history of man”)が「時の様々な実験」(“the varying experiments of Time”)と言い換えられていることは(3; “Prelude”)、19世紀後半の小説が全知全能の語り手に替わり得る権威ある構成の根拠を求めていたことを示している(Beer, *Darwin's Plots* 149)。ここでは語り手が全知全能の存在から単なる1つの視点に代わっていることを、語り手の視点とロザモンドの視点と同じ光の比喩で描写されていることを指摘して確認したい。

『ミドルマーチ』の語り手は(そしてその背後にいる作者は)自分の仕事を、「自称偉大なる歴史家」(“A great historian, as he insisted on calling himself”) (132; bk. 2, ch. 15)のヘンリー・フィールディング(Henry Fielding, 1707–54)の仕事に比べつつ、人間関係を「網」(“web”)、視点を「光」(“light”)に喩えている。

We belated historians must not linger after his example . . . I at least have so much to do in unravelling certain human lots, and seeing how they were woven and interwoven, that all the light I can command must be concentrated on this particular web, and not dispersed over that tempting range of relevancies called the universe. (132; bk. 2, ch. 15)

我々、遅れて来た歴史家は、彼[フィールディング]の例に倣ってのんびりなどしてられない……少なくとも私には、何人かの人間の運命を解きほぐしたり、それがどのように織られたり織り交ぜられたりしたかを見たり、することがあまりにたくさんあるので、自分が使える光はみな、この網にのみ集中せねばならず、宇宙と呼ばれるあの魅惑的な関連性の広がりには拡散されてはならないのである。

語り手は、宇宙のごく一部である人間関係という観察の対象を織物と呼び、その観察は集中した光を必要とすると述べている。他方、ロザモンドの視点も光に喩えられている。

Your pier-glass or extensive surface of polished steel made to be rubbed by a housemaid, will be minutely and multitudinously scratched in all directions; but place now against it a lighted candle as a centre of illumination, and lo! the scratches will seem to arrange themselves in a fine series of concentric circles round that little sun. It is demonstrable that the scratches are going everywhere impartially, and it is only your candle which produces the flattering illusion of a concentric arrangement, its light falling with an exclusive optical selection. These things are a parable. (248; bk. 3, ch. 27)

女中に磨かせた、あなたの姿見や磨き上げられた鉄の広い表面には、あらゆる方向に無数の細かい引っかき傷がついている。でも、灯したろうソクを、反射の真ん中になるように置いてごらんください。ほら、[鏡や鉄の]傷が小さい太陽のまわりで、1組の細かい同心円になって並んでいるように見えるでしょう。傷が均等についていることは明らかで、ただろうソクのせいで、光がある特別な光学的選択をして当たるために、実物とは違う同心円構造の幻ができるだけです。こういったことは1つの喩えです。

このような光の喩の類似性からすれば、語り手の視点も一つの光の当て方なら、ロザモンドの視点も別の光の当て方ということになり、視点の優劣は別として、『ミドルマーチ』では複数の視点の存在、すなわち考え方の多様性が許容されていると考えることができる。このような多様性の存在は『フロス河畔の水車場』において、マギーがトムのシンパシーの乏しい視点を一方的に糾弾していたことと対極にある。

“It is a sin to be hard—it is not fitting for a mortal—not for a Christian. You are nothing but a Pharisee. You thank God for nothing but your own virtues—you think they are great enough to win you everything else. You have not even a vision of feelings by the side of which your shining virtues are mere darkness!” (*Mill*, 361; bk. 5, ch. 5)

「辛く当たるのは罪よ——命に限りある人間には——クリスチャンには似つかわしくないわ。兄さんはパリサイ人に過ぎないわ。自分の徳を神様に感謝して——自分の徳は他のすべてに打ち勝つほど偉大だと考えているのね。兄さんの徳なんてただの暗闇に過ぎなくなるような感情があることすら分かってないんだわ」

『フロス河畔の水車場』はエリオットの自伝的小説であり、マギーの考え方およびその背後にある作者の考え方が唯一の真理であった。マギーに冷たく接するトムは間違っているのであって、マギーを勘当したトムは改悛せねばならない。しかしながら『ミドルマーチ』では、語り手（その背後にいる作者）もロザモンドも、それぞれの光を当てて（それぞれの視点から）物事を眺める存在として尊重されている。また、語り手（作者）は人間関係の網を解きほぐすのに忙しいが、ロザモンドはそれを紡ぐのに忙しい。ロザモンドは常に、文字通りもしくは比喩的に裁縫をしている。レース編みをしたり、ハンカチにレースを付けたたり、靴下を作ったり、自分のペティコートに縫いひだを入れたり、髪を三つ編みにしたりする（253; bk. 3, ch. 27; 330; bk. 4, ch. 36; 548; bk. 6, ch. 58）。彼女は絶えず策を練り、自分の未来を画策し、時には実現に成功する。「手短かに言うと、エリオットと同じく、彼女は糸を紡ぐ人であり、小説の織り手なのである」（Gilbert and Gubar 520）。このように『ミドルマーチ』では語り手とロザモンドには共通性が見られる。言い換えれば、ロザモンドの視点も「我々の仲間」の視点として語り手（作者）のそれとともに有効に存在し、ロザモンドもその存在価値を認められている。この点に、『ミドルマーチ』における作者の道德観の成熟とそれに伴うリアリズムの進展が明白に現れているのである。

## 結論

エリオットにとってシンパシーは理想的な人間関係を築く礎である。しかし『ミドルマーチ』においては、この法則からの逸脱が生じている。それはカゾボンとドロシア、ロザモンドとリドゲイトという2組の夫婦におけるシンパシーに乏しい人間とシンパセティックで高潔な人間の関係の交差に現れている。まず前者の夫婦関係においては、高潔な人間のシンパシーと献身をもってしても、シンパシーに乏しい人間を道德的に墮落させてしまう。カゾボンは名誉を重んじる人間であり、領主としてまた牧師としての責任を果たしているというポジティブな面もあるが、そのシンパシーに欠ける狭量で高慢な心が、ドロ

シアの献身を死後も独占しようとする。しかし、語り手は次のように述べている。

Mr. Casaubon, too, was the centre of his own world; if he was liable to think that others were providentially made for him, and especially to consider them in the light of their fitness for the author of a Key to all Mythologies, this trait is not quite alien to us. (78; bk. 1, ch. 10)。

カゾボン氏も彼自身の世界の中心なのである。もし彼が、他の人々は神が自分のために、とくに『神話体系要諦』の著者にとって役に立つという観点から作られたと考えたとしても、この傾向は私たちにとって身に覚えのないことではない。

シンパシーに乏しく、ドロシアの献身により却って道徳的に墮落してゆくカゾボンも、「我々の仲間」として認められている。ここにエリオット自身のシンパシーの対象の広がりという意味での道徳の寛容度の高まりがみられる。同時に、シンパシーの道徳規範としての限界を認めるという現実主義的な観点、およびドロシアの同情に怯え、ラディズローに嫉妬し、身勝手な理屈をつけてドロシアの人生を破壊しようとするカゾボンの心理が同情をもって詳細に描かれている点で、リアリズムが進展している。

ロザモンドに関しては、ロザモンドとリドゲイトの双方を苦しめる「あの炉端の痛ましい場面」(“those painful fireside scenes”)について、ジェイムズは「イギリス小説においてこれほど迫力のあるリアルな場面はない」(“There is nothing more powerfully real than these scenes in all English fiction.”)と述べている(“*Middlemarch*” 357)。「あの炉端の痛ましい場面」には、ロザモンドが「この私に何が出来るというの、ターシャス？」とあまりにもそっけなく冷たい言葉を放ち、リドゲイトを落胆させた前述の場面も含まれる。また、リドゲイトは家計の節約方法をロザモンドに相談し、家具を売ってもっと小さな借家に引っ越すことを提案するが、それはロザモンドにとって「痛恨の極みの瞬間」(“a moment of more intense bitterness than she had ever felt before”) (612; bk. 7, ch. 64)であった。彼女は「あなたがそんなことをしたい人だとは思ってもみななかったわ」(“I never could have believed that you would like to act in that way.”) (612; bk. 7, ch. 64)と彼女は応じる。ロザモンドからリドゲイトの伯父のサー・ゴドウィン(Sir Godwin)に借金をすることや、ミドルマーチを出ることを提案されたリドゲイトは、激しい怒りを目に浮かべ

る。ロザモンドは、小さな家に移る夫の意図を挫折させ、サー・ゴドウィンに借金の手紙を書く決意をして、無言のまま部屋を出て行くが、リドゲイトは彼女の計画に全く気が付いていない。この夫婦の間では「相手の心の道筋をまったく捉えそこなうこと」(“that total missing of each other’s mental track”) (550–51, bk. 6, ch. 58) が起きている。こうして夫婦間に意思疎通がなく、シンパシーに欠けるロザモンドの言葉にシンパセティックなリドゲイトが絶望するという状況は、痛々しいまでのリアリティをもって描かれているのである。

『ミドルマーチ』は、1871年12月から72年12月にかけて2か月ごとに（最後の2分冊は1か月おきに）続きが出版された。読者は、1873年3月の書評でジェームズが提案したのと同じく、リドゲイトとドロシアがお互いに再婚して幸せを得ることを望んだ (Ashton, “Coming to Conclusions”17)。しかし前述した通り、リドゲイトがもしドロシアのような高潔で協力的な女性と結婚していたら、彼は研究の失敗だけでなく自分の人間性にも絶望していたであろう。夫の研究に対する熱情を理解しないロザモンドの態度こそがリドゲイトを救い、研究も仕事も袋小路にある医学研究者から、平凡で俗物的ではあるが人気があり尊敬される開業医に転身することを助けたのである。リドゲイトは痛風の専門家として社会に貢献し、「ロンドンと大陸の温泉場」(“London and a Continental bathing-place”) (781; bk.8, “finale”) を行き来して財を成す。リドゲイト自身は、自分が医学研究を放棄して金持ち相手の開業医に転向したことを、ロザモンドの犠牲になったのであると考えているが、それは違う。自身が目指した医学上の発見は、自らの生存中には不可能であるという状況下では、早い段階で開業医に転じることがリドゲイトの人生を社会にとって最も有意義なものにする道であった。またそのことによりリドゲイトは、経済的に潤い、妻を満足させ、自らの矜持を維持することができたのである。

18世紀および19世紀の小説家は、物語の最後で善人の登場人物に褒美を与え、悪人には罰を与える傾向があったが (Ashton, “Coming to Conclusion” 11)、それは読者の好みに従ったものであった。例えば、ジェイン・オースティンは第1章で言及したようにリアリズム小説家に分類されるが、『マンズフィールド・パーク』(Mansfield Park, 1814) の最終章の初めで、以下のように勧善懲悪の宣言をしている。

Let other pens dwell on guilt and misery. I quit such odious subjects as soon as I can, impatient to restore every body, not greatly in fault themselves, to tolerable comfort,

and to have done with all the rest. (759; ch. 48)

罪や悲惨については別の人に記述を任せよう。私はそのような不愉快な話題とはできるだけ早く手を切る。それほど過ちを犯していない人たちにほどほどの安楽さを取り戻し、それ以外の人たちをさっさと片づけてしまいたくて、うずうずしているからだ。

このような勧善懲悪主義からすれば、悪妻であるロザモンドも結末で何らかの罰を受けてしかるべきとしてもおかしくはない。しかし、エリオットはそうはしなかった。ロザモンドは、リドゲイトが亡くなった後、自分の4人の連れ子に優しくしてくれる裕福な内科医との結婚を与えられている（前述のように外科医より内科医の方が社会的地位は上である）。ロザモンドはこの結婚を幸せと感じるだけでなく、自分自身への「ご褒美」（“a reward”）と見なしている（782; bk. 8, “finale”）。彼女は最終的に、自分の望んだ幸福を手に入れているのである。ここには勧善懲悪を避けるというエリオットの志向が反映されている。エリオットは、小説の執筆を始める前に書いた書評『『ヴィルヘルム・マイスター』の道徳』（“The Morality of *Wilhelm Meister*,” 1855）において、「高潔な人間と不道徳な人間との間の境界線は、道徳に必要な防御手段であるどころか、それ自身1つの不道徳な作り話である」（“the line between the virtuous and vicious, so far from being a necessary safeguard to morality, is itself an immoral fiction”）（147）と述べ、勧善懲悪の結末（“moral denouement”）（145）を退けていたが、それは『ミドルマーチ』において実行されたのである。

ギャラガーはエリオットを、「イギリスで最大のリアリズム作家」と評し、その理由について、エリオットは我々をして平凡な人びとに興味を持たせ、平凡な人びとに興味を持つことが我々の道徳的義務であると感じさせるだけでなく、「普通の人びとに興味を持ちたい」と思わせるからだと述べている（73）。ギャラガーが「平凡な人々」として考察しているのはドロシアである。しかし、自分の利益にしか考えの及ばないロザモンドもまた、そのような興味深い「平凡な人びと」の1人として描かれているところに、『ミドルマーチ』がリアリズム小説の傑作である所以がある。確かに、ロザモンドの「哀れなほど狭い自分自身の基準を超えて眺めることのできない道徳的愚かさ」は、「恐ろしいほどにリアルである」（Bennett 167）。さらに彼女は、生涯、利己的でリドゲイトの意向に無関心である。リドゲイトがロザモンドの忠告や策略に反対することを次第に諦めるよう

になると、彼女は彼がやっと「自分の意見の価値」(“the value of her opinion”) (782; bk. 8, “finale”) を悟ったのだと考える。しかし、彼女は「故意に意地悪であるとは決して描かれておらず、自分の利益にならない利他的価値の存在を理解できないだけである」(Bennett 18)。それは、彼女が自分の人生最大の危機にあった時に助けに来てくれたドロシアへの感謝を忘れず、その悪口を言うことは一切なかったことにも現れている。ロザモンドは常に自分自身の利益を最大限に重んじながらも、夫のリドゲイトがシンパセティックであり、かつ夫の研究に成功の望みがないという偶然が重なって、夫を夫自身の気づかない幸せに導き、自らも望んだ金と地位という繁栄を手に入れる。ロザモンドのように生涯シンパシーに乏しい人間が、現実的に何某かの善を成し、何某かの繁栄を手に入れることが描かれていることを認める時、我々は、『ミドルマーチ』においてエリオットの道徳観が成熟してシンパシーを抱く対象が広がり、その小説の手法としてのリアリズムがひとつの頂点に達したことを知るのである。

## 結論

18 世紀に小説が誕生して以来、小説が読者のシンパシーを呼び起こす効果に関する議論がなされてきた。19 世紀の小説に関して言えば、チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-71) の『オリバー・トゥイスト』(*Oliver Twist*, 1837-38) が新救貧法や救貧院制度への人々の批判を呼び起こし、アメリカの作家ハリエット・エリザベス・ビーチャー・ストウ (Harriet Elizabeth Beecher Stowe, 1811-96) の『アンクル・トムの小屋』(*Uncle Tom's Cabin*, 1852) が奴隷制の廃止に向けた推進力の 1 つになったことが知られている。エリオットの小説と読者のシンパシーの関係に関しては、出版当時、シンパシーの多寡により登場人物を分類し、シンパシーの効用を説く道徳教書として優れていると考えられ (Keen 38)、この傾向は 21 世紀の今日においても変わらない。エリオットの初期作品から後期作品にかけて小説の背後にある作者自身のシンパシーの対象が拡大し、後期作品『ミドルマーチ』においてはシンパシーに乏しい人間もシンパセティックな人間同様に他者の役に立ち、また苦悩する「我々の仲間」として描かれるように変化すること、エリオットが読者にシンパシーを感じさせたい対象が、シンパシーに乏しい人物にも広がってゆくことは見逃されてきたのである。

本論文「ジョージ・エリオットのリアリズムと道徳観——シンパシーに乏しい人間の描写からの考察——」の目的は、語り手による詳細な心理と外部事情の描写、及び出来事の蓋然性を分析することにより、エリオット作品のリアリズムの進展を検証し、その背後にある作者の道徳観の成熟、すなわち作者自身のシンパシーの対象の拡大を推測することにあつた。方法としては、物語中のシンパシーに欠ける人間の描き方に焦点を当てた。なぜならシンパシーに乏しい人間の苦悩やポジティブな側面が描かれるようになれば、作者のシンパシーの対象が彼らにも広がったことが分かるからである。エリオットの小説における作者の道徳観とリアリズムの関係については、エリオット作品のリアリズムは彼女が若い頃に慣れ親しんだ静かなイギリスの田舎の生活を描くことに最もよく表れており、それは初期作品に限定されると考えるのが、エリオットの時代から 20 世紀半ばまでの定説であった。現在ではエリオットのリアリズム小説の最大傑作は後期作品『ミドルマーチ』であると考えられているが、その理由は主に網のように関連した人間関係のスケールの大きさにあり、『ミドルマーチ』においては、初期作品『アダム・ビード』や『フロス河畔の水車場』に比べてシンパシーに乏しい人間の性格の多面性、苦悩、周囲の人間への貢献

がリアリズムの手法で描かれていることは注目されてこなかった。

第1章では、まず前提として、第1節から第3節で文学におけるリアリズムとは何か、とくに19世紀イギリス小説のリアリズムについて説明し、第4節で19世紀イギリスのリアリズム小説、とくに『ミドルマーチ』のリアリズムを否定するポスト構造主義批評を紹介した。ポスト構造主義によるエリオットのリアリズム批判は20世紀後半に主張され、全知の語り手の言葉がメタ言語として働くこと、また比喩においては言葉と現実が一一対応をしないことからリアリズムを否定した。しかし『ミドルマーチ』の語り手は1つの視点を提供しているに過ぎないと考えられるようになり、ポスト構造主義批評が根拠とする「全知の語り手」の概念が克服されるとともに、『ミドルマーチ』のリアリズムの理解が深まったのである。

第2章では、第1節でエリオットのシンパシーを基礎に据えた道徳観について説明するとともに、第2節でシンパシーと道徳の一般的な関係について説明した。道徳においてシンパシーを重視することは珍しい事ではなく、18世紀にすでにアダム・スミスがシンパシーがなぜ道徳の基礎として働き得るかを論じている。シンパシーは、自立したアイデンティティを持つ人間が対象の状況に自らを置いた状態を想像し、その時の自分の感情を考えるという複雑な精神的仕組みであるから、道徳的判断が可能になるのである。またシンパシーの持ち方は、シンパシーを感じる側のアイデンティティとその背後にある文化に影響される（たとえば、ヴィクトリア朝の小説であれば、中流階級であることの多い作者や登場人物の資本主義的思考方や福音主義の名残が影響する）。その結果、シンパシーに欠ける人物も「我々の仲間」と見なすというエリオットの理想とする道徳観が未だ達成されていないときは、彼らの描き方に偏りが生じてリアリズムも未熟な状態になる可能性が生じるのである。また第2章第3節では、比喩を用いたリアリズムによりいかに効果的に登場人物の苦難とシンパシーが描かれているかを、エリオットの最初の短編集所収の「ジャネットの悔悟」(1858)を取り上げて論じた。この第3節は、比喩表現は言葉と現実が一一対応をしていないからリアリズムを不可能にするという、第1章で示したJ・ヒリス・ミラーの批評への反証にもなっている。また、この短編小説には、第3章で論じるエリオットの最初の長編小説『アダム・ビード』(1859)におけるシンパシーの多寡による登場人物の固定的で博物学的な分類が見られた。

第3章では、『アダム・ビード』(1859)の主役の1人でシンパシーに乏しいヘティの心理と性格の描き方を吟味した。そこでは語り手は、ヘティの利己的な側面は詳細に描く

が、彼女の人間や動物に対するシンパシーの芽生えというポジティブな側面の描写には消極的である。自分を裏切った人間に対するヘティの憤りは語り手のヘティに対する軽蔑とともにごく簡単に示され、放浪により芽生えた家や動物へのシンパシーは評価されず、法廷の場面や監獄でのダイナへの告白の場面で暗示される赤ん坊を遺棄したことに対する後悔も明示されないので読者は察するしかない。ヘティに対して与えられる刑罰も、裁判の時期を3年ずらせばはるかに軽いもので済んだ。これらのことがテキストの詳細な分析と背景事実の調査から新たに明らかになった。リアリズムがヘティのシンパシーに欠けるネガティブな側面の描写にのみ実現されているという不完全さは、シンパセティックな人物とそうでない人物を固定的、博物学的に色分けして後者を村から追放する作者の道徳的狭量さの結果である。

第4章では、エリオットの2番目の長編小説『フロス河畔の水車場』(1860)の主人公マギーの兄トムの描き方を取り上げた。まず先行研究の一部がリアリズムからの逸脱があるとみなす、物語の最後の洪水の場面に着目した。これまで疑問視されてこなかったマギーの辿った航跡を具体的に検証し、かつ救出された後のトムの行動を検討したところ、ともに可能性の極めて低いプロットが用いられていることが分かった。その理由は、主人公マギーを勘当した兄トムのマギーへの信頼と愛情を取り戻すことが道徳上の至上命題と考えられたためである。換言すれば、トムは改悛しなければ「我々の仲間」として見なされないのである。シンパセティックなマギーの命がけの行動はトムを改悛させることができるというオプティミズムと合わさった作者の道徳観がリアリズムを妨げている。また自伝的要素も影響している。次いでトムの人物描写を、①父権制社会を背景に持つ抑圧的でシンパシーに乏しい“masculine”なトムの態度、シンパセティックで“manly”なトムの態度という2つの態度の観点から、また②マギーのトムの愛情への執着の裏返しとして分析した。①に関しては、通説ではトムはシンパシーに乏しい人間とのみ分類されているが、トムは実は語り手が“manly”と賞賛するシンパセティックな側面を多く持つこと、しかし父親の破産という環境の変化によりトムのシンパセティックな側面が失われてゆくことが分かった。つまりトムのシンパシーに乏しい性格はフラットではなく、多面性と変容を取り入れて描かれているのであって、この点において『フロス河畔の水車小屋』は、『アダム・ビード』よりリアリズムが進展している。また②に関しては、マギーが子供の頃から母親や親戚から異分子扱いされてきたことによりトムを「自分より強い存在」として彼の自分への愛情に自分の価値を見出すようになったこと、スティーブンの逃避行において

もマギーは常に受動的であり、その様子は子供の頃マギーがトムに連れられて釣りに行ったときのトムにすべて任せて幸せを感じている様子によく似ていること、トムが怒った様子でマギーの夢に出てきたことが、マギーのスティーブンの駆け落ちを止めることなど、マギーのトムの愛情への執着の裏にはトムのマギーに対する保護者的でシンパセティックな側面が推測されることが分かった。

しかし反面、トムの弱音の多くは暗示的にしか描かれていない。牧師館でジェントルマン教育を受けながら、父親の破産により労働者に立ち混じって働かねばならなくなったトムの、またルーシーへの恋を抑えているトムの感じているに違いない孤独や疎外感を表す心理描写は全くない。暗示されているのみである。自伝的色彩の濃いこの物語において、自分を勘当した兄アイザックを摸したトムが弱音を吐く場面を作者は描くことができない。ここにも本論文の主張する作者の道德観とリアリズムの相関関係がある。またこのことは、トムのシンパシーの乏しさが批評家に糾弾される一因にもなっている。

第5章では『ミドルマーチ』(1871-72)のリアリズムを検討した。しかしその分析に入る前に、エリオットの中期作品である『ロモラ』(1862-63)と『急進主義者フィーリクス・ホルト』(1866)におけるリアリズムの進展状況に言及した。『ロモラ』の主人公ロモラの夫でシンパシーに乏しいティートは、野心家でありながら意思が弱く、裏切りと嘘を繰り返し、裏切るたびにそれを正当化する。最後は復讐の鬼と化した養父に殺される。ティートの性格と心理の描写が一面的であり、『フロス河畔の水車場』より後退していることに異論はないと思われる。『フィーリクス・ホルト』については、シンパシーに乏しいトランサム夫人に注目すると、その心理と性格の描写は、その虚栄心の強さやシンパシーに欠ける場面が強調されシンパセティックな面の具体的な描写がない点で、脇役として描写が少ないことを考慮しても、『フロス河畔の水車場』のトムよりリアリズムが後退している。しかし、エリオットの初期と中期の長編小説に登場するシンパシーに乏しい人間の中で、孤独や疎外という自分の境遇を嘆き苦悩する心境が、ヘンリー・ジェイムズが「不自然な人物」と評するほど「強烈に」描かれているのはトランサム夫人のみである(“*Felix Holt*” 276)。その精神的苦悩の描写は、『ミドルマーチ』においてシンパシーに乏しい人間が、身勝手な形においてではあるが、人間関係に傷つく胸の内を吐露することの前段階を成している。

『ミドルマーチ』においては、シンパシーに乏しいエドワード・カゾボンとシンパセティックなドロシア、シンパシーに乏しいロザモンドとシンパセティックなターシャス・

リドゲイトの2組の夫婦の交差に注目して、以下のことを示した。ドロシアの夫カゾボンへの誠実な献身は、研究に行き詰っている高慢で狭量なカゾボンを苦しめるだけでなく、自分の死後もドロシアを独占してドロシアが自由に結婚できないように姑息な手段を用いるほどに彼を道徳的に墮落させる。他方ロザモンドは夫リドゲイトの医学上の重大な発見という野心を軽んじて、事あるごとにリドゲイトの意図を邪魔し、遂にリドゲイトは、ロザモンドの望み通りミドルマーチを出て、痛風を専門とする富裕層に人気の高い医者になる。しかし、リドゲイトの研究は成功しないことがテキストで設定されている。もし彼の妻がドロシアのような高潔な女性であったならリドゲイトは不毛な研究から抜け出すことが出来ないであろう。その結果、シンパセティックなリドゲイトは研究の失敗に加えて妻に貧困などの苦勞を味合わせたことで、ロザモンドに相手にされないより大きな絶望に直面していたと思われる。ロザモンドはシンパシーが欠けているせいで、結果的にはあるが夫をより大きな破滅から救ったのである。『ミドルマーチ』においては、この2組の夫婦のあり方において、シンパシーに乏しい人物が他者に対して結果的にポジティブな影響を及ぼしたり、シンパシーに欠ける人物がシンパセティックな人物のいわば被害者となったりするというように、シンパシーは幸福実現のために万能ではないことを描く点で現実らしさが増している。また、シンパシーに乏しい人物の性格が多面的に描かれ、『アダム・ビード』や『フロス河畔の水車場』では軽視されていたシンパシーに欠ける人物が自分の運命を嘆く心理を、語り手が同情を持って詳述している点でもリアリズムの進展が見られた。

以上のように、エリオットのリアリズムをシンパシーに乏しい登場人物の性格や心理状況を偏りなく描写しているかどうか、出来事の蓋然性すなわち本当らしさが高いかの2点から評価する時、そのリアリズムはエリオット自身がシンパシーに乏しい人物に対してシンパシーをどれほど抱いているかということに影響されていることが分かる。作者がシンパシーに乏しい人物を、ヘティのように語り手（及びその背後の作者）や読者とは別種類の人間と捉えている間は、彼らのポジティブな側面の描写は少なくなり、リアリズムは十全には達成されない。トムのように、作者自身の強い性格の兄を模して描いている場合には、シンパセティックでポジティブな側面もある程度詳しく描かれるが、他方トムが弱みを見せる場面は描くことが出来ない。また、トムがマギーを勘当したままで物語を終わらせることができず、不自然で蓋然性の低いプロットを使ってトムを改悛させ、マギーとの和解を永遠にするために2人を溺死させてしまう。他方『ミドルマーチ』では、カゾボ

ンが「他の人々を『全神話の要諦』の作者に相応しいかどうかという視点から (“in the light of”) 眺めること」は「我々にとって全く縁のない傾向ではない」(78; bk. 1, ch. 10) として認められる。ロザモンドも「小説の織り手」(Gilbert and Gubar 520) であり、自分に都合よく人間関係を眺めているが、その視点は「照明の中心として[無数の傷を美しく見せる]火の付いたロウソク」に例えられ、語り手(作者)はこれも否定しない(248; bk. 3, ch. 27)。同時に語り手の視点も「光」に喩えられ、自らの「光」を使って各登場人物が織りあげた織物(人間関係)の網の目を解きほぐす(132; bk. 2, ch. 15)。このことは、語り手(及びその背後の作者)が、シンパシーに乏しい人間の見解を必ずしも否定しないことを意味する。こうして、エリオット自身のシンパシーを感じる人物の範囲が広がり、シンパシーに欠ける人物の視点も「我々の仲間」の視点として重んじられるようになる時、言い換えれば、エリオットの道徳観が平凡な人物を「我々の仲間」として受け入れるという所期の目的を達する時、エリオットのリアリズムは各々の視点から見た事実を描き出してその頂点に達するのである。

本論文はエリオットの作品のシンパシーに乏しい人物の描き方を通時的に分析し、そのリアリズムと道徳観の間に密接な連関があり、両者が相俟って初期作品から『ミドルマーチ』に至るエリオットの小説を支えていたことを明らかにした。本論文が示したように、中期作品において一旦停滞はあったものの、エリオットはその道徳的な寛容度が高まるにつれ、以前の作品に見られたリアリズム上の欠陥を次の作品で克服していった。そこにエリオットの小説の進歩と成熟の過程を見て取ることができるのである。

\* \* \*

エリオットは 1851 年の書評で次のように、人類の進歩について楽観論を述べていた。「人間の発達における過去の前段階は、我々が共有している人類の教育の一部であり、あわれな人間性が陥ってきたあらゆる過ちや愚かな振る舞いは、我々がそこから恩恵を被る 1 つの実験と見なされるだろう」(“Every past phase of human development is part of that education of the race in which we are sharing; every mistake, every absurdity into which poor human nature has fallen, may be looked on as an experiment of which we may reap the benefit.”) (“The Progress of the Intellect” 31)。『ミドルマーチ』にはエリオットのこの初期の論文の楽観的な認識は見られず、その調子は陰鬱である。しかし、『ミドルマー

チ』ではそれぞれの登場人物の将来の姿が確定的に描かれており、「すべては知り得る」世界を創造しているという点で、読者は安心する (Beer, *Darwin's Plots* 154)。「すべては知り得る」世界とは、エリオットの言葉で言い換えれば次のようになる。「あらゆる現象は、すでに確立された法則の範囲内に徐々に顕現され、その結果として、奇跡は拒絶される」 (“the gradual reduction of all phenomena within the sphere of established law, which carries as a consequence the rejection of the miraculous”) (“The Influence of Rationalism” 413)。このような物事の因果的連鎖もしくは因果関係が、『ミドルマーチ』に至るまでエリオットの倫理観と小説家としての実際の活動の両方を構成する原理であった (Beer, *Darwin's Plots* 149)。

しかし、エリオット最後の長編小説『ダニエル・デロンダ』(1876)ではこの因果的連鎖の原理が放擲されているように思われる。この小説はそれまでのエリオット作品と異なり、物語の時代をエリオットと同時代に設定し、主人公ダニエルとグウェンドレン (Gwendolen) の未来の姿は描かれない。シャトルワースによると、『ダニエル・デロンダ』におけるエリオットの目的は、予め定まった起点と終点のある物語の要点を述べて当時の社会を忠実に映し出すことではなく、「イギリス社会の経済的社会的慣行の辛辣な批評」を提供することにある (175)。そのことによる語り的手法への影響は、まず作品の構造に現れる。『ダニエル・デロンダ』のテキストは、空間もしくは時間的継続性という伝統に忠実に従ってはいない。第1章の第1段落ではフラッシュ・バックの手法が取られ、「彼女は美しいのかそれとも美しくないのか？」 (“Was she beautiful or not beautiful?”) (3; bk. 1, ch. 1)という、グウェンドレンを初めて見たダニエルの心中の疑問から始まる。このときダニエルが何者かもまだ特定されていない。登場人物の出自を最初に明らかにするのが19世紀リアリズム小説の特徴の1つであるが (Rignall, “*Daniel Deronda*” 81)、『ダニエル・デロンダ』では年代順に事実描写を積み上げる「帰納法的リアリズム」は顧みられないのである。

さらに重要な語り的手法の変化は、リアリズムの基本的特徴である厳密な因果関係の記述からの離脱である。1876年の『ダニエル・デロンダ』出版以来、グウェンドレンの肖像に関しては心理学的リアリズムが最高度に達成されているが、ユダヤ人の部分は作者が「神秘主義に彷徨いこんでいる」と批判されてきた (Shuttleworth 176)<sup>99</sup>。ダニエル

---

<sup>99</sup> F. R. Leavis, *Great Tradition* (faber and faber, 2008), pp. 97–102 がその代表である。

は、友人であり後に義兄になるモルデカイ (Mordecai) の、ダニエルこそユダヤ人の国家を再建する人間であるという理想主義的ヴィジョンにしたがって、ユダヤ人国家の建設という「旧約聖書の理想的仮説を確認する」(G. Levine, “Hypothesis of Reality” 27–28) ために中東に旅立つ。『ダニエル・デロンダ』は、社会が合理性を認める「直線的な因果関係」から逸脱しているのである(Shuttleworth 176)。

こういったリアリズムからの逸脱の背後には、作者の道德観の変容、即ち人間の善性への信頼の揺らぎがある。グウェンドレンの夫でシンパシーに欠けるヘンリー・グランドコート (Henleigh Grandcourt) の悪行は、悪行のための悪行である。『ダニエル・デロンダ』より以前のエリオットの小説に登場するシンパシーに乏しい人間たちが、「故意に意地悪であるとは決して描かれておらず、自分の利益にならない利他的価値の存在を理解できないだけである」のとは異なる。また、グランドコートが妻を理解することは、妻を虐めることにつながる。「実際彼は、グウェンドレンの誇り高く反抗的な精神が自分の前では声を立てず無力になるようなグウェンドレンの感情の状態を、驚くほど正確に察知した」

(“indeed, he had a surprising acuteness in detecting that situation of feeling in Gwendolen which made her proud and rebellious spirit dumb and helpless before him.”) (*Daniel Deronda*, 363; bk. 5, ch. 35)。このグランドコートの冷酷さは、これまで性的サディズムや当時のイギリスの帝国主義と結びつけて論じられてきたが (Rignall, “*Daniel Deronda*” 83–84)、エリオットの道德観の変化も示しているように思われる。フォイエルバッハは、神と人間の関係は「人間自身の精神的善との関係にほかならない」と述べ、神は人間の善性の投影であるとした (Feuerbach 185)。エリオットはこのようなフォイエルバッハの考えに共鳴しており<sup>100</sup>、エリオットのリアリズムの目的たる芸術による読者のシンパシーの育成は、この性善説を前提としていた。しかし、『ダニエル・デロンダ』では性善説が崩れかけている。それと同時にこの小説はリアリズムから逸脱してゆく。最後の小説に至って、なぜ突如このような事態になったのか。その理由の解明は非常に興味深い問題であるが、本論文の射程を超えるため今後の課題としたい。

---

<sup>100</sup> Cf. 第2章第1節註23.

## 引用文献

- Ablow, Rachel. *The Marriage of Minds: Reading Sympathy in the Victorian Marriage Plot*. Stanford UP, 2007.
- Ackerknecht, Ersin H. *A Short History of Medicine*. Revised and expanded ed. Johns Hopkins UP, 2016.
- Adam, Ian. "The Structure of Realisms in *Adam Bede*." *Nineteenth-Century Fiction*, vol. 30, no. 2, 1975, pp. 127–49.
- Adams, Harriet F. "Rough Justice: Prematurity and Child-Murder in George Eliot's *Adam Bede*." *English Language Notes*, vol. 37, no.4, 2000, pp. 62–68.
- Agathocleous, Tanya. *Urban Realism and the Cosmopolitan Imagination*. Cambridge UP, 2011.
- Allen, Walter. *George Eliot*. Macmillan, 1964.
- Altick, Richard D. *Victorian People and Ideas*. W. W. Norton, 1973.
- Andrews, Neil. *The Three Paths of Justice: Court Proceedings, Arbitration, and Mediation in England*. Springer, 2012.
- Ashton, Rosemary. "Coming to Conclusion in *Middlemarch*." *The George Eliot Review*, no. 54, 2023, pp. 8–20.
- . *George Eliot: A Life*. Oxford UP, 1983.
- . *G. H. Lewes: A Life*. Clarendon P, 1991.
- . "An Introduction." George Eliot, *Middlemarch*, edited by Rosemary Ashton, Penguin, 1994, pp. vii–xxii.
- . *The Mill on the Floss: A Natural History*. G. K. Hall & Co., 1990.
- . "*The Mill on the Floss* and the Difficulties of Relationships." *The George Eliot Review*, no. 42, 2011, pp. 26–37.
- Auerbach, Nina. "The Power of Hunger: Demonism and Maggie Tulliver." *Romantic Imprisonment: Women and Other Glorified Outcasts*. Columbia UP, 1986, pp. 230–49.
- Austen, Jane. "Mansfield Park." *The Complete Novels of Jane Austen*. Wordsworth Editions, 2004.

- Austen, Zelda. "Why Feminist Critics Are Angry with George Eliot." *College English*, vol. 37, no. 6, 1976, pp. 549–61.
- Barbar, Lynn. *The Heyday of Natural History, 1820–1870*. Doubleday and Company, 1980.
- Barrett, Dorothea. *Vocation and Desire: George Eliot's Heroines*. Routledge, 1989.
- Beaty, Jerome. *Middlemarch from Notebook to Novel: A Study of George Eliot's Creative Method*. U of Illinois P, 1960.
- Beer, Gillian. "Beyond Determinism: George Eliot and Virginia Woolf." *Women Writing and Writing about Women*. Edited by Mary Jacobus. Harper and Row Publishers, 1979, pp. 80–99.
- . *Darwin's Plots*. 3<sup>rd</sup> ed. Cambridge UP, 2009.
- . *George Eliot*. Harvester, 1986.
- . "Myth and the Single Consciousness: *Middlemarch* and *The Lifted Veil*." *This Particular Web: Essays on Middlemarch*, edited by Ian Adam. U of Toronto P, 1975, pp. 91–115.
- Bellringer Alan. *George Eliot*. St Martin's Press, 1993.
- Bennett, Joan. *George Eliot: Her Mind and Her Art*. Cambridge UP, 1963.
- Bodenheimer, Rosemarie. *The Real Life of Mary Ann Evans: George Eliot, Her Letters and Fiction*. Cornell UP, 1994.
- Bonaparte, Felicia. *Will and Destiny: Morality and Tragedy in George Eliot's Novels*. New York UP, 1975.
- Boumelha, Penny. "George Eliot and the End of Realism." *Women Reading Women's Writing*, edited by Sue Roe. Harvester, 1987. pp. 13–35.
- Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. Edited by Michael Mason. Penguin, 1995.
- Byatt, A. S. "Introduction." Eliot, *The Mill on the Floss*, xi–xliii.
- Carroll, Alicia. *Dark Smiles: Race and Desire in George Eliot*. Ohio UP, 2003.
- Carroll, David, editor. *George Eliot: The Critical Heritage*. Routledge and K. Paul, 1971.
- . "Introduction." David Carroll, *Critical Heritage*, pp. 1–48.
- Cecil, David. *Early Victorian Novelists: Essays in Revaluation*. Constable, 1934.
- Chase, Karen. "Woman Question." Rignall, *Oxford Reader's Companion*, pp. 443–48.

- Coleridge, Samuel Taylor. *Biographia Literaria*. Edited by Shawcross. London, 1907, vol. 1.
- Colvin, Sidney. "Review of Middlemarch." *Fortnightly Review*, January 19, 1873; reprinted in D. Carroll, *Critical Heritage*, pp. 331-38.
- Connel, R. W. *Masculinities*. U of California P, 2005.
- Dallas, E. S. "Unsigned Review," *The Times*, 19 May 1860, pp. 10-11; reprinted in D. Carroll, *Critical Heritage*, 131-37.
- Davidoff, Leonore and Catherine Hall. *Family Fortunes: Men and Women of the English Middle Class 1780-1850*. Routledge, 2002.
- Defoe, Daniel. *History of the Devil, as Ancient as Modern*. London, 1728.
- . *Robinson Crusoe*. Edited by John Richetti. Penguin, 2001.
- de Bolla, Peter. "The Visibility of Visuality." *Vision in Context*, edited by Teresa Brennan and Martin Jay. Routledge, 1996, pp. 65-81.
- Doggett, Maeve E. *Marriage, Wife-Beating and the Law in Victorian England*. U of South Carolina P, 1993.
- Dolin, Tim. *George Eliot*. Oxford UP, 2005.
- "Edward Titchener." *Stanford Encyclopedia Online*. Accessed December 20, 2022.
- Eliot, George. *Adam Bede*. Edited by Carol A. Martin. Oxford UP, 2008.
- . "Charles Kingsley's *Westward Ho!*" *The Westminster Review*, July 1855; reprinted in *Selected Essays*, pp. 311-19.
- . *Daniel Deronda*. Edited by Graham Handley. Oxford UP, 1988.
- . *Essays of George Eliot*. Edited by Thomas Pinney. Columbia UP, 1963.
- . "Evangelical Teaching: Dr. Cumming." *The Westminster Review*, October 1855; reprinted in *Essays*, pp. 158-89.
- . *Felix Holt: The Radical*. Edited by Lynda Mugglestone. Penguin, 1995.
- . *The George Eliot Letters*. 9 vols. Edited by Gordon S. Haight. Yale UP, 1954-78.
- . *George Eliot: A Writer's Notebook 1854-1879 and Uncollected Writings*. Edited by Joseph Wiesenfarth. UP of Virginia, 1981.
- . *George Eliot's Life: as Related in Her Letters and Journals*. 3 vols. Edited by John Cross. Cambridge, UP, 2010.

- . “The Influence of Rationalism.” *The Fortnight Review*, May 1865; reprinted in *Essays*, pp. 397–414.
- . “Janet’s Repentance.” *Scenes of Clerical Life*, edited by Thomas A. Noble. Oxford UP, 2015. (「ジャネットの悔悟」石井昌子訳『牧師たちの物語』[ジョージ・エリオット全集第1巻]彩流社, 2014年)
- . “John Ruskin’s *Modern Painters*, Vol. III.” *The Westminster Review*, April 1856; reprinted in *Selected Essays*, pp. 367–78.
- . *The Journals of George Eliot*. Edited by Margaret Harris and Judith Johnston. Cambridge UP, 2000.
- . “The Lifted Veil.” *The Lifted Veil and Brother Jacob*, edited by Helen Small, Oxford UP, 1999, pp. 1–43.
- . *Middlemarch: A Study of Provincial Life*. Edited by David Carroll. Oxford UP, 2019.
- . *Middlemarch* (audible version). Narrated by Julie Aubre. Penguin Audio, 2019.
- . *The Mill on the Floss*. Edited by A. S. Byatt. Penguin, 2003.
- . “The Morality of Wilhelm Meister.” *The Leader*, July 1855; reprinted in *Essays*, pp. 143–47.
- . “The Natural History of German Life.” *The Westminster Review*, July 1856; reprinted in *Essays*, pp. 266–99.
- . “The Progress of the Intellect” *The Westminster Review*, January 1851; reprinted in *Essays*, pp. 27–45.
- . “Recollections of Ilfracombe, 1856” and “Recollections of the Scilly Isles and Jersey, 1857.” Harris and Johnston, *Journals*, pp. 262–82.
- . *Romola*. Edited by Andrew Brown. Oxford UP, 1998.
- . *Selected Essays, Poems, and Other Writings*. Edited by A. S. Byatt and Nicholas Warren. Penguin, 1990.
- . “Silly Novels and Lady Novelists.” *The Westminster Review*, October 1856; reprinted in *Essays*, pp. 300–24.
- . “Thomas Carlyle.” *The Leader*, vol. 6, October 1855; reprinted in *Essays*, pp. 212–15.

- . “*Westward Ho!* and Constance Herbert.” *The Westminster Review*, July 1855; reprinted in *Essays*, pp. 123–36.
- . “Woman in France: Madam De Sablé.” *The Westminster Review*, October 1854; reprinted in *Essays*, pp. 52–81.
- . *A Writer’s Notebook, 1854–1879, and Uncollected Writings*. Edited by Joseph Wiesenfarth. UP of Virginia, 1981.
- Eliot, T. S. *The Three Voices of Poetry*. Cambridge UP, 1953.
- Emery, Laura Comer. *George Eliot’s Creative Conflict: The Other Side of Silence*. U of California P, 1976.
- “empathy.” Simpson, *The Oxford English Dictionary*.
- “empathy.” *Stanford Encyclopedia of Philosophy*. <https://plato.stanford.edu/> Accessed October 1, 2022.
- Ermarth, Elizabeth Deeds. “Incarnations: George Eliot’s Conception of ‘Undeviating Law.’” *Nineteenth-Century Fiction*, vol. 29, no. 3, 1974, pp.273–86.
- . *Realism and Consensus in the English Novel: Time, Space and Narrative*. Edinburgh UP, 1998.
- Feuerbach, Ludwig. *The Essence of Christianity*. Translated by George Eliot. Cambridge UP, 2012.
- Fletcher, Angus and John Monterosso. “The Science of Free-Indirect Discourse: An Alternate Cognitive Effect” *Narrative*, vol. 24, no. 1, 2016, pp. 82-103.
- Foucault, Michel. *The Birth of the Clinic: An Archaeology of Medical Perception*. Translated by S. M. Sheridan. Routledge, 2003.
- Freedgood, Elaine. *The Ideas in Things*. U of Chicago P, 2006.
- Gallagher, Catherine. “The Failure of Realism: Felix Holt.” *Nineteenth-Century Fiction*, vol. 35, no.3, 1980, pp. 372–84.
- . “Immanent Victorian.” *Representations*, vol. 90, no. 1, 2005, pp. 61–74.
- Garber Marjorie & Nancy J. Vickers, editors. *The Medusa Reader*. Routledge, 2003.
- Gates, Sarah. “The Sound of the Scythe Being Whetted: Gender, Genre, and Realism in *Adam Bede*.” *Studies in the Novel*, vol. 30, no. 1, 1998, pp. 24–34.
- Gilbert, Sandra M. and Susan Gubar, *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer*

- and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. 2<sup>nd</sup> ed. Yale UP, 2000.
- Gilmour, Robin. *The Idea of the Gentleman in the Victorian Novel*. George Allen and Unwin, 1981.
- Gray, Beryl. "Gainsborough." Rignall, *Oxford Reader's Companion*, p. 130.
- Greiner, D. Rae. "Thinking of Me Thinking of You: Sympathy Versus Empathy in the Realist Novel." *Victorian Studies*, vol. 53, No. 3, 2011, pp. 417–26.
- Gribble, Jennifer. "The Hidden Shame: Telling Hetty Sorrel's Story." *Sydney Studies*, vol. 22, 1996, pp. 102–19.
- Griffith, Jody. "Constructing Ordinary Time in *Adam Bede*: the Architectural Structure of Eliot's Realism." *Studies in the Novel*, vol. 48, no. 1, 2016, pp. 1–18.
- Haight, Gordon S., editor. *A Century of George Eliot Criticism*. Methuen, 1966.
- . *George Eliot: A Biography*. Oxford UP, 1968.
- Hardy, Barbara. "The Mill on the Floss." *Critical Essays on George Eliot*, edited by Barbara Hardy. Routledge & Kegan Paul, 1970, pp. 42–58.
- . *The Novels of George Eliot: A Study in Form*. Athlone P, 1959.
- Hardy, Thomas. *The Life and Work of Thomas Hardy*. Edited by Michael Millgate. Macmillan, 1984.
- Harris, Henry, *The Birth of the Cell*. Yale UP, 1999.
- Harris, Margaret. "Margaret Oliphant." Rignall, *Oxford Reader's Companion*, pp. 293–94.
- . "Romola." Rignall, *Oxford Reader's Companion*, pp. 340–50.
- Harvey, W. J. "The Intellectual Background of the Novel: Casaubon and Lydgate. Middlemarch: *Critical Approaches to the Novel*, edited by Barbara Hardy. Bloomsbury, 2013, pp. 25–37.
- Holcombe, Lee. *Wives & Property: Reform of the Married Women's Property Law in Nineteenth-Century England*. U of Toronto P, 1983.
- Hume, David. *A Treatise of Human Nature*. Edited by David Fate Norton and Mary J. Norton. Oxford UP, 2008.
- Hutton, R. H. "Unsigned Reviews of *Middlemarch*." *The Spectator*, December 1871–December 1872; reprinted in D. Carroll, *Critical Heritage*, pp. 286–314.
- Jackson, Mark. *New-Born Child Murder: Women, Illegitimacy, and the Courts in*

- Eighteenth-Century England*. Manchester UP, 1996.
- Jacobus, Mary. "The Question of Language: Men of Maxims and *The Mill on the Floss*." *Critical Inquiry*, vol. 8, 1981–82, pp. 207–22.
- Jaffe, Audrey. *Scenes of Sympathy: Identity and Representation in Victorian Fiction*. Cornell UP, 2000.
- James, Henry. "Cross's *Life*." *The Atlantic Monthly*, May 1885; reprinted in D. Carroll, *Critical Heritage*, pp. 490–504.
- . "The Novels of George Eliot." *The Atlantic Monthly*, October 18, 1866; reprinted in Height, *Criticism*, pp. 43–54.
- . "Review of *Middlemarch*." *The Galaxy*, March 1873; reprinted in D. Carroll, *Critical Heritage*, pp. 353–59.
- . "Review of *Felix Holt*." *The Nation*, August 16, 1866; reprinted in D. Carroll, *Critical Heritage*, pp. 273–85.
- Jenkyns, Richard. *The Victorians and Ancient Greece*. Basil Blackwell, 1980.
- Johnson, Samuel. "Preface." *Johnson on Shakespeare*, edited by Arthur Sherbo. Yale UP, 1968.
- Johnstone, Peggy Fitzhugh. *Transformation of Rage: Mourning and Creativity in George Eliot's Fiction*. New York UP, 1994
- Karlin, Daniel. "Having the Whip-hand in *Middlemarch*." *The George Eliot Review*, 28 issue, 1997, pp. 34–47.
- Keen, Suzanne. *Empathy and the Novel*. Oxford UP, 2007.
- King, Amy M. "Natural History and the Novel: Dilatoriness and Length and the Nineteenth-Century Novel of Everyday Life." *Novel*, vol. 42, 2009, pp. 460–66.
- Knoepfmacher, U. C. *George Eliot's Early Novels: The Limits of Realism*. U of California P, 1968.
- . "*Middlemarch*: An Avuncular View." *Nineteenth-Century Fiction*, vol. 30, no. 1, 1975. pp. 53–81.
- Leavis, F. R. *The Great Tradition: George Eliot, Henry James, Joseph Conrad*. faber and faber, 2008; first published by Chatto & Windus, 1948.
- Leech, Geoffrey and Mick Short. *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English*

- Fictional Prose*. 2<sup>nd</sup> ed. Pearson Longman, 2007.
- Lerner, Laurence. *The Truth-tellers: Jane Austen, George Eliot, D. H. Lawrence*. Chatto & Windus, 1967.
- Levine, Caroline. "Victorian Realism." *The Cambridge Companion to the Victorian Novel*, edited by Deirdre David, 2<sup>nd</sup> ed., Cambridge UP, 2012, pp. 84–106.
- Levine, George. "George Eliot's Hypothesis of Reality." *Nineteenth-Century Fiction*, vol. 35, no. 1, 1980, pp. 1–28.
- . *The Realistic Imagination: English Fiction from Frankenstein to Lady Chatterley*. U of Chicago P, 1983.
- Lewes, George Henry. *Sea-Side Studies at Ilfracombe, Tenby, the Scilly Isles, and Jersey*, 2<sup>nd</sup> ed. William Blackwood and Sons, 1858.
- Lipps, Theodor. "The Experiences of the Beholder." *A Modern Book of Esthetics: An Anthology*, 5<sup>th</sup> ed., edited by Melvin Rader, Holt, Rinehart and Winston, 1979, pp. 371–78.
- Locke, John. *An Essay Concerning Human Understanding*. Edited by A.D. Woozley. New American Library, 1974.
- Lodge, David. "Middlemarch and the Idea of the Classic Realist." *The Nineteenth-Century Novel: Critical Essays and Documents*, edited by Arnold Kettle, Heinemann, 1981, pp. 218–38; reprinted in K. M. Newton, *George Eliot*, pp. 169–86.
- Loesberg, Jonathan. "Aesthetics, Ethics, and Unreasonable Acts." *Knowing the Past: Victorian Literature and Culture*, edited by Suzy Anger, Cornell UP, 2001, pp. 121–47.
- Lubbock, Percy. *The Craft of Fiction*. Jonathan Cape, 1965.
- MaCarthy, Patrick J. "Lydgate, 'The New Young Surgeon' of Middlemarch." *Studies in English Literature 1500–1900*, vol. 10, no. 4, 1970, pp. 805–16.
- MacCabe, Colin. *James Joyce and the Revolution of the Word*, Macmillan, 1978; partly reprinted as "The End of a Metalanguage: From George Eliot to *Dubliners* (*Middlemarch* and *Daniel Deronda*)" in K. M. Newton, *George Eliot*, pp. 156–68.
- "manly." Simpson, *The Oxford English Dictionary*.
- Marck, Nancy Anne. "Narrative Transference and Female Narcissism: The Social

- Message of *Adam Bede*." *Studies in the Novel*, vol. 35, no. 4, 2003, pp. 447–70.
- "masculine." Simpson, *The Oxford English Dictionary*.
- McKeon, Michael. *The Secret History of Domesticity: Public, Private, and the Division of Knowledge*. Johns Hopkins UP, 2005.
- McDonagh, Josephine. "Child Murder Narratives in George Eliot's *Adam Bede*: Embedded Histories and Fictional Representation." *Nineteenth-Century Literature*, vol. 56, no.2, 2001, pp. 228–59.
- Miller, J. Hillis. "Optic and Semiotic in *Middlemarch*." *The Worlds of Victorian Fiction*, edited by Jerome H. Buckley, Harvard UP, 1975, pp. 125–45.
- . *Reading for Our Time: Adam Bede and Middlemarch Revisited*. Edinburgh UP, 2012.
- Millet, Kate. *Sexual Politics*. U of Illinois P, 2000.
- Moers, Ellen. *Literary Women*. The Women's Press, 1978.
- Morreti, Franco. *Atlas of the European Novel 1800-1900*. Verso, 1998.
- Morris, Pam. *Realism*. Routledge, 2003.
- Mukařovský, Jan. "Aesthetic Function, Norm, and Value as Social Facts." K. M. Newton, *Literary Theory*, pp. 15–18.
- Mulock, Dinah. "Unsigned Review." *Macmillan's Magazine*, April 1862, vol. 3, pp. 441–48; reprinted in D. Carroll, *Critical Heritage*, pp. 54–61.
- Nagai, Yohko. "Revelation through Dissimulation: The Relevance of Pseudonymity in George Eliot's Writings." *The George Eliot Review*, no. 54, 2023, pp. 44–54.
- Newton, K. M., editor. *George Eliot*. Longman, 1991.
- . "Narration." Rignall, *Oxford Reader's Companion*, pp. 280–82.
- , editor. *Twentieth-Century Literary Theory: A Reader*. 2<sup>nd</sup> ed. Palgrave, 1997.
- Nestor, Pauline. *Critical Issues: George Eliot*. Palgrave, 2002.
- Obama, Barack and Marilynne Robinson. "President Obama & Marilynne Robinson: A Conversation–II." *New York Review of Books*. November 19, 2015.
- Oldfield, Sybil. *Jeanie, an "Army of One": Mrs. Nassau Senior, 1828–77, The First Woman in Whitehall*. Sussex Academic Press, 2008.
- Orwell, George. *The Road to Wigan Pier, 1937*. Penguin, 1989.

- Paris, Bernard J. *A Psychological Approach to Fiction: Studies in Thackeray, Stendhal, George Eliot, Dostoevsky, and Conrad*. Indiana UP, 1974.
- Patmore, Coventry. *The Poems of Coventry Patmore*. Edited by Frederic Page. Oxford UP, 1959.
- Purvis, June. *A History of Women's Education in England*. Open UP, 1991.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, Jan Svartvik. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman, 1985.
- Richetti, John. "Introduction." Defoe, *Robinson Crusoe*.
- Rignall, John. "Daniel Deronda." Rignall, *Oxford Reader's Companion*, pp. 78–86.
- . "George Eliot (1819–1880): Reality and Sympathy." *The Cambridge Companion to European Novelists*, edited by Michael Bell. Cambridge UP, 2012, pp. 227–43.
- . "The Higher Criticism." Rignall, *Oxford Reader's Companion*, pp. 155.
- . "Johann Wolfgang Goethe." Rignall, *Oxford Reader's Companion*, pp. 139–43.
- . "Middlemarch." Rignall, *Oxford Reader's Companion*, pp. 250–57.
- . "The Mill on the Floss." Rignall, *Oxford Reader's Companion*, pp. 259–67.
- . "Moral Values." Rignall, *Oxford Reader's Companion*, pp. 269–70.
- , editor. *Oxford Reader's Companion to George Eliot*. Oxford UP, 2000.
- . "Realism." Rignall, *Oxford Reader's Companion*, pp. 324–29.
- "River Trent." <https://www.britannica.com>, accessed December 3, 2022.
- Rothfield, Lawrence. *Vital Signs: Medical Realism in Nineteenth-Century Fiction*. Princeton UP, 1994.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. Columbia UP, 1985.
- Shanley, Mary Lyndon. *Feminism, Marriage and the Law in Victorian England*. Princeton UP, 1989.
- Showalter, Elaine. *A Literature of Their Own: British Women Writers, from Brontë to Lessing*. Vigarò, 2009.
- Shuttleworth, Sally. *George Eliot and Nineteenth-Century Science: The Make-Believe of a Beginning*. Cambridge UP, 1984.

- . “Introduction.” *The Mill on the Floss*, edited by Sally Shuttleworth. Routledge, 1991.
- Silverman, Kaja. *The Threshold of the Visible World*. Routledge, 1995.
- Simpson, John, editor. *The Oxford English Dictionary*. 2<sup>nd</sup> ed. CD-ROM. Vers. 4.0 Oxford UP, 2009.
- Smith, Adam. *The Theory of Moral Sentiments*. Edited by Ryan Patrick Hanley. Penguin, 2009.
- Spilka, Mark, *Eight Lessons in Love: A Domestic Violence Reader*. U of Missouri P., 1997.
- Spivak, Gayatri Chakravorty. “Three Women's Texts and a Critique of Imperialism.” *Critical Inquiry*, vol. 12, no. 1, 1985, pp. 243-261
- Stephen, Leslie. “Unsigned Obituary Article,” *The Cornhill Magazine*, February 1881; reprinted in D. Carroll, *Critical Heritage*, pp. 464–84.
- Stone Lawrence. *Road to Divorce: England 1530–1987*. Oxford UP, 1995.
- Stueber, K. *Rediscovering Empathy: Agency, Folk Psychology, and the Human Sciences*, MIT Press, 2006.
- Swinburne, Algernon Charles. *A Note on Charlotte Brontë*, London, 1877; partly reprinted as “the hideous transformation” in D. Carroll, *Critical Heritage*, pp. 163–65.
- “sympathy.” Simpson, *The Oxford English Dictionary*.
- Szirotny, June Skye. “*The Mill on the Floss*: A Tragic Story,” *The George Eliot Review*, no. 52, 2021, pp. 73–85.
- Thackeray, William Makepeace. *Vanity Fair*. Penguin, 2001.
- Thomas, Keith. *Religion and the Decline of Magic*. Charles Scribner's Sons, 1971.
- Tosh, John. *A Man's Place: Masculinity and the Middle-Class Home in Victorian England*. Yale UP, 1999.
- “tragedy.” Simpson, *The Oxford English Dictionary*.
- Turner, Mark. “Westminster Review.” Rignall, *Oxford Reader's Companion*, p. 438.
- van den Broek, A. G. “*Felix Holt, the Radical*.” Rignall, *Oxford Reader's Companion*, pp. 112–18.
- . “Reform Acts (1832 and 1867).” Rignall, *Oxford Reader's Companion*, pp. 328–29.
- Van Ghent, Dorothy. *The English Novel: Form and Function*. Rinehart & Company Inc., 1953.
- Vischer, Robert. “The Aesthetic Act and Pure Form.” *Art in Theory, 1815–1900: An*

- Anthology of Changing Ideas*, edited by Charles Harrison, Paul Wood, and Jason Gaiger. Blackwell, 1998, pp. 690–704.
- Wall, Cynthia. *The Prose of Things: Transformation of Description in the Eighteenth Century*. U of Chicago P, 2006.
- Watt, Ian. *The Rise of the Novel*. The Bodley Head, 2015; first published by Chatto & Windus, 1957.
- Welsh, Alexander. *George Eliot and Blackmail*. Harvard UP, 1985.
- Witemeyer, Hugh. *George Eliot and the Visual Arts*. Yale UP, 1979.
- Woolf, Virginia. “George Eliot.” *The Times Literary Supplement*. 20 November, 1919; reprinted in Haight, *Criticism*, pp. 183–89.
- . “Mr. Bennett and Mrs. Brown.” *The Captain’s Death Bed and Other Essays*, edited by Leonard Woolf, Harvest/HBJ Book, 1950, pp. 94–126.
- Wright, Terence R. *George Eliot’s Middlemarch*. Harvester Wheatsheaf, 1991.
- . *The Religion of Humanity: The Impact of Comtean Positivism on Victorian Britain*. Cambridge UP, 1986.
- アッカークネヒト, E・H. 『パリ、病院医学の誕生——革命歴第三年から二月革命へ』. 館野之男訳. みすず書房, 2012.
- 石井昌子. “Development of Realism in *Middlemarch*: Reinterpreting Rosamond.” *The George Eliot Review Online*, no. 55, 2024, forthcoming.
- . 「『フロス河畔の水車場』におけるリアリズムと道徳観の相克——トムとマギーの兄妹愛の描き方からの再考」. 『日本英文学会第95回大会 Proceedings』, 2023年.
- . 「語り手の心に映らないヘティ——『アダム・ビード』のリアリズム再考」. 『ジョージ・エリオット研究』, 第24号, 2022年, pp. 65–81.
- . “Sympathy, Morality and Metaphor: ‘Janet’s Repentance’ and the ‘Recollections.’” *The George Eliot Review Online*, no. 52, 2021, pp. 85–92.
- . 「『ワイルドフェル館の住人』に描かれた『事実』」. 『ブロンテ・スタディーズ』, 第6巻第5号, 2018年, pp. 23–35.
- . “Limits of Sympathy: The Case of Dorothea in *Middlemarch*.” 『ジョージ・エリオット研究』, 第18号, 2016年, pp. 35–48.

- . 「Tom Tulliver の悲劇 —— *The Mill on the Floss* における名誉欲と家族愛」. 『ジョージ・エリオット研究』 第 16 号, 2014 年, pp.1-14.
- 海老根宏. 「ジョージ・エリオットにおける現実と非現実——『これらは一つの比喩である』」. 『19 世紀「英国」小説の展開』. 海老根宏・高橋和久編著. 松柏社, 2014, pp. 255-77.
- 川北稔編. 『イギリス史 下』. 山川出版社, 2020.
- ギリー, シェリダン&ウィリアム・J・シールズ編. 『イギリス宗教史前ローマ時代から現代まで』. 指昭博・並河葉子監訳. 法政大学出版局, 2014 年.
- サイクス, ノーマン. 『イングランド文化と宗教伝統：近代文化形成の原動力となったキリスト教』. 野谷啓二訳. 開文社, 2000 年.
- 坂井建雄. 『図説 医学の歴史』. 医学書院, 2019.
- 田中英夫他編. 『英米法辞典』. 東京大学出版会, 1991 年.
- 中川ゆきこ. 『自由間接話法：英語の小説にみる形態と機能』. あぼろん社, 1983 年.
- 馬場一憲編. 『目でみる妊娠と出産』. 文光堂, 2013 年.
- 廣野由美子. 『小説読解入門——「ミドルマーチ」教養講義』. 中公新書, 2021.
- フィッツハリス, リンジー. 『ヴィクトリア朝医療の歴史——外科医ジョゼフ・リスターと歴史を変えた治療法』. 田中恵理香訳. 原書房, 2021.
- 矢野奈々. 『ダーク・ヒロイン——ジョージ・エリオットと新しい女性像』. 彩流社, 2017 年.